瓜生堂遺跡第52次発掘調査報告

2006. 3

東大阪市教育委員会

瓜生堂遺跡第52次発掘調査報告

2006. 3

東大阪市教育委員会

例　　言

1.　本書は大阪府送水管布設工事（枚岡布施連絡線）に伴う瓜生堂遺跡第52次発掘調査の報告書である。

2.　調査は大阪府水道部東部水道事業所の依頼を受けて、東大阪市教育委員会文化財課が実施した。

3.　調査にかかる費用は全額大阪府東部水道事業所が負担・用意した。

4.　発掘調査は平成16年８月２日～17年５月２日まで行なった。遺物整理及び報告書作成作業は平成18年３月31日まで実施した。

5.　現場調査及び遺物整理は才原金弘・小川紀子（旧姓川本）・釜田有理絵が担当して行なった。

6.　基準杭・調査杭設置は株式会社アスカ、写真測量は株式会社アコード、遺物写真撮影は株式会社毎日映画社に委託して実施した。

7.　本書はⅠを才原、Ⅱ～Ⅴを小川が執筆し、編集を才原が行なった。

8.　土層断面図の土色は農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人色彩研究所色票監修香『新版　標準土色帳』（2000年版）に準拠し、記号表記もこれに従った。

9.　調査の実施にあたっては、大阪府水道部東部水道事業所のご協力のもと、施工業者ならびに近隣市民の方々のご協力を賜った他、現場作業および整理作業には阪口英治・山尾史勇人・渡辺美貴子・山上憲一が従事した。これらの方々に記して感謝いたします。

目　　次

Ⅰ．調査に至る経過……1
Ⅱ．位置と環境……2
Ⅲ．調査の概要……4
１．調査の方法と地区割……4
２．Ⅱ工区の調査……4
１）層位……4
２）遺構……6
３．Ⅳ工区の調査……10
１）層位……10
２）遺構……11
Ⅳ．出土遺物……13
１．土器……13
１）Ⅱ工区の出土土器……14
２）Ⅳ工区の出土土器……35
３）Ⅴ工区採集遺物……47
２．石器……49
３．土製品……49
４．木製品……49
Ⅴ．まとめ……50

挿　図　目　次

第１図　調査地位置図……1
第２図　周辺遺跡分布図……3
第３図　調査地区割図……4
第４図　Ⅱ工区断面実測図……5
第５図　Ⅱ工区第４・14層上面遺構平面実測図……8
第６図　ピット６・溝14断面実測図……9
第７図　Ⅳ工区断面実測図……10
第８図　Ⅳ工区第４層上面遺構平面実測図……11
第９図　井戸１断面実測図……12
第10図　溝14出土土器実測図……15
第11図　溝14出土土器実測図……16
第12図　溝14・15・18出土土器実測図……17
第13図　土坑11・13～15・18出土土器実測図……19
第14図　土坑17出土土器実測図……20
第15図　第11～13層出土土器実測図……21
第16図　第13層出土土器実測図……22
第17図　第13層出土土器実測図……24

第18図　ピット６・15、土坑２、溝７～11出土土器実測図 ……26
第19図　第２・３層出土土器実測図 ……28
第20図　第３層出土土器実測図 ……30
第21図　第３・４層出土土器実測図 ……31
第22図　第３層出土土器・瓦実測図 ……32
第23図　第３層出土埴輪実測図 ……33
第24図　第５・８層出土土器実側図 ……34
第25図　ピット２・７・10、溝１、土坑２、井戸１出土土器実側図 ……36
第26図　井戸１出土土器実測図 ……38
第27図　井戸１出土土器実測図 ……39
第28図　第２・３層出土土器実測図 ……41
第29図　第３層出土土器実測図 ……42
第30図　第３層出土土器・埴輪実測図 ……43
第31図　層位不明土器実測図 ……45
第32図　Ｖ工区採集土器実測図 ……46
第33図　石器・土製品実測図 ……47
第34図　木製品実測図 ……48
第35図　木製品実測図 ……49

図　版　目　次

図版１　遺構　1. Ⅱ工区調査地近景（北より）
　　2. Ⅳ工区調査地近景（北より）
図版２　遺構　1. Ⅱ工区南壁断面（南端）
　　2. Ⅱ工区西壁断面（中央部）
図版３　遺構　1. Ⅱ工区西壁断面（中央部）
　　2. Ⅱ工区西壁断面（中央部）
図版４　遺構　1. Ⅱ工区南部第４層上面遺構（北より）
　　2. Ⅱ工区南部第４層上面遺構（南より）
図版５　遺構　1. Ⅱ工区中央部第４層上面遺構（北より）
　　2. Ⅱ工区中央部第４層上面遺構（北より）
図版６　遺構　1. Ⅱ工区中央部第14層上面遺構（北より）
　　2. Ⅱ工区中央部第14層上面遺構（南より）
図版７　遺構　1. Ⅱ工区中央部第14層上面遺構（北より）
　　2. Ⅱ工区溝14断面（東より）
図版８　遺構　1. Ⅱ工区ピット６断面（北より）
　　2. Ⅱ工区ピット６内検出柱の細部（北より）
図版９　遺構　1. Ⅱ工区南部第８層内木製品出土状況（北より）
　　2. Ⅱ工区中央部第９層内木製品出土状況（西より）
図版10　遺構　1. Ⅱ工区溝14内弥生土器出土状況
　　2. Ⅱ工区土坑11内弥生土器出土状況

図版11　遺構　1. Ⅳ工区北壁断面（北端）
　　2. Ⅳ工区東壁断面（北部）
図版12　遺構　1. Ⅳ工区第４層上面遺構（北より）
　　2. Ⅳ工区中央部第４層上面遺構（北より）
図版13　遺構　1. Ⅳ工区北部第４層上面遺構（北より）
　　2. Ⅳ工区井戸１断面（南より）
図版14　遺構　1. Ⅳ工区井戸１内土師器出土状況
　　2. Ⅳ工区井戸１完掘状況
図版15　遺物　Ⅱ工区溝14出土弥生土器　水差形土器・高杯・甕
図版16　遺物　Ⅱ工区溝14・15、土坑15・17出土弥生土器　甕・高杯・台付鉢・壷、ピット15出土土師器　杯
図版17　遺物　Ⅳ工区井戸１・第３層出土土師器　杯・椀・坩、須恵器　横瓶、石器、土製品
図版18　遺物　木製品
図版19　遺物　木製品
図版20　遺物　1. Ⅱ工区溝14出土弥生土器　壷
　　2. Ⅱ工区溝14出土弥生土器　壷・鉢・高杯・脚部
図版21　遺物　1. Ⅱ工区溝14出土弥生土器　甕
　　2. Ⅱ工区溝14出土弥生土器　甕
図版22　遺物　1. Ⅱ工区溝14出土弥生土器　甕
　　2. Ⅱ工区溝14出土弥生土器　甕
図版23　遺物　1. Ⅱ工区溝15・18出土弥生土器　壷・甕・高杯・底部
　　2. Ⅱ工区溝14出土弥生土器　底部
図版24　遺物　1. Ⅱ工区土坑11・13・14出土弥生土器　甕・底部
　　2. Ⅱ工区土坑15出土弥生土器　壷・甕・高杯・脚部・底部
図版25　遺物　1. Ⅱ工区土坑17・18出土弥生土器　壷・甕・水差形土器・底部
　　2. Ⅱ工区第11・12層出土弥生土器　壷・甕・脚部・底部
図版26　遺物　1. Ⅱ工区第13層出土弥生土器　水差形土器・鉢
　　2. Ⅱ工区第13層出土弥生土器　水差形土器・壷蓋・高杯・脚部
図版27　遺物　1. Ⅱ工区第13層出土弥生土器　高杯・脚部
　　2. Ⅱ工区第13層出土弥生土器　甕
図版28　遺物　1. Ⅱ工区第13層出土弥生土器　甕
　　2. Ⅱ工区第13層出土弥生土器　壷
図版29　遺物　1. Ⅱ工区第13層出土弥生土器　壷・台付壷
　　2. Ⅱ工区第13層出土弥生土器　底部
図版30　遺物　1. Ⅱ工区第13層出土弥生土器　底部
　　2. Ⅱ工区ピット６・15、土坑２出土須恵器　杯・蓋杯、製塩土器
図版31　遺物　1. Ⅱ工区溝７～11出土土師器　甕・杯・皿、須恵器　底部、製塩土器
　　2. Ⅱ工区第２層出土須恵器　甕・底部、白磁　皿、陶器　底部
図版32　遺物　1. Ⅱ工区第３層出土青磁　椀、白磁　椀、瓦器　椀・羽釜
　　2. Ⅱ工区第３層出土須恵器　蓋杯・短頸壷・杯・壷・高杯

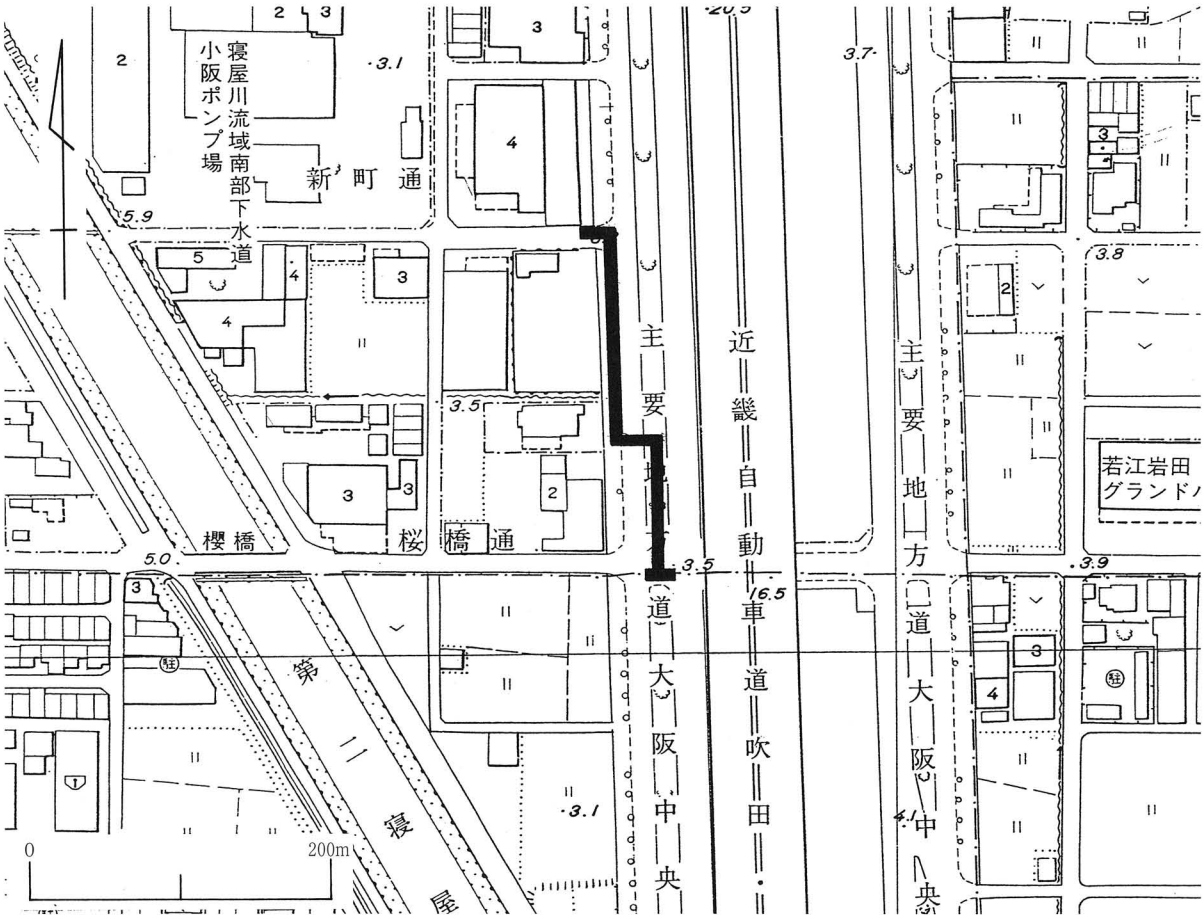
図版33　遺物　1. Ⅱ工区第３層出土須恵器　底部
　　2. Ⅱ工区第３層出土土師器　皿・杯
図版34　遺物　1. Ⅱ工区第３層出土土師器　皿・杯・甕・高杯・底部
　　2. Ⅱ工区第３層出土土師器　鍋・羽釜・竈・甑、須恵器　甕・捏鉢、瓦器　鉢
図版35　遺物　1. Ⅱ工区第４層出土土師器　甕・鉢・高杯
　　2. Ⅱ工区第３層出土円筒埴輪
図版36　遺物　1. Ⅱ工区第３層出土製塩土器（表）
　　2. 同上（裏）
図版37　遺物　1. Ⅱ工区第３層出土製塩土器、丸瓦・平瓦（表）
　　2. 同上（裏）
図版38　遺物　1. Ⅱ工区第５・８層出土土師器　鉢・高杯・壷・器台・甕・底部
　　2. Ⅱ工区第５層出土土師器　甕
図版39　遺物　1. Ⅱ工区第５層出土土師器　甕
　　2. Ⅳ工区ピット２・７・10、溝１、土坑２出土土師器　杯・底部、須恵器　杯・底部、製塩土器
図版40　遺物　1. Ⅳ工区井戸１出土須恵器　杯・短頸壷・底部
　　2. Ⅳ工区井戸１出土土師器　杯・皿
図版41　遺物　1. Ⅳ工区井戸１出土土師器　甕
　　2. Ⅳ工区井戸１出土土師器　羽釜・竈
図版42　遺物　1. Ⅳ工区井戸１出土製塩土器（表）
　　2. 同上（裏）
図版43　遺物　1. Ⅳ工区井戸１出土製塩土器（表）
　　2. 同上（裏）
図版44　遺物　1. Ⅳ工区井戸１出土製塩土器（表）
　　2. 同上（裏）
図版45　遺物　1. Ⅳ工区第２層出土土師器　皿、瓦器　椀
　　2. Ⅳ工区第３層出土須恵器　鉢・杯・壷・甕・底部
図版46　遺物　1. Ⅳ工区第３層出土製塩土器（表）
　　2. 同上（裏）
図版47　遺物　1. Ⅳ工区第３層出土製塩土器（表）
　　2. 同上（裏）
図版48　遺物　1. Ⅳ工区第３層出土土師器　皿・杯・椀
　　2. Ⅳ工区第３層出土土師器　皿・杯・底部、黒色土器　底部
図版49　遺物　1. Ⅳ工区第３層出土土師器　甕
　　2. Ⅳ工区第３層出土土師器　甕・羽釜・高杯、形象埴輪
図版50　遺物　1. Ⅳ工区層位不明出土須恵器　蓋杯・底部
　　2. Ⅳ工区層位不明出土土師器　皿・杯・鉢、製塩土器
図版51　遺物　1. Ⅴ工区採集土師器　甕・羽釜・坩・底部、須恵器　底部
　　2. Ⅴ工区採集弥生土器　壷・鉢・甕・高杯、土師器　甕

Ⅰ．調査に至る経過

瓜生堂遺跡は弥生時代の遺跡として学史的にも著名である。当遺跡は工業用水道管埋設工事に伴って昭和40年に発見された。工事では多量の弥生土器と青銅利器が採集され、当遺跡は広く周知されるようになった。

昭和46年より本格的な発掘調査が実施され、盛土の残る方形周溝墓が全国に先がけて確認された。その後、発掘調査が進み墓域や集落域が明らかになりつつある。当遺跡では多量の遺物が出土し、深い位置に存在することから、木製品や骨製品など有機質のものも良好な保存状態で残っている。弥生時代の生活などを復原する上でも重要な遺跡となっている。遺跡の範囲も広く、弥生時代においては拠点的な集落と位置づけられている。また、上層では古墳時代～中世期の遺構も見つかっており、複合遺跡であることが判っている。現在、51次にも及ぶ発掘調査が実施されており、大きな成果が得られている。

今回、東大阪市若江西新町１丁目で大阪府水道部東部水道事業所によって送水管布設工事が計画された。当地点は中央環状線の西側歩道と北向き車道に位置し、瓜生堂遺跡内に当たるので、大阪府水道企業管理者より埋蔵文化財発掘の通知が提出された。大阪府水道部東部水道事業所と東大阪市教育委員会文化財課が協議を実施することになった。協議の結果、工事による掘削は深い場所で約４ｍに至り、発掘調査の必要がでてきた。発掘調査は工事の都合により、２期に分けて実施することになった。また、工事の条件で夜間しかできない場所があり、その部分は掘削残土を仮置きし、昼間に遺物を採集することになった。



第１図　調査地位置図

Ⅱ．位置と環境

瓜生堂遺跡は大阪平野中央部に位置し、標高が５ｍ前後を測る。東側には生駒山麓が広がる。近鉄奈良線八戸ノ里駅の南東にあたる。遺跡の中心を南北に中央環状線及び近畿自動車道が伸び、北端付近を東西に近鉄奈良線が通る。東大阪市若江西新町、瓜生堂一丁目、若江北町一丁目の一帯に広がる遺跡である。

当遺跡は旧大和川によって形成された自然堤防や三角州の微高地に立地する弥生～歴史時代の複合遺跡である。周辺には北に新家・岩田遺跡、南に若江・巨摩廃寺・山賀遺跡があり、弥生～古墳時代の遺跡が集中する地域である。

当遺跡が出現する前は現在の河内平野北半分が縄文時代前期頃まで海であり、生駒山麓付近まで海進により河内湾が形成されていた。その後、海水の流入が減り河内潟になる。さらに土砂などの堆積が進み淡水化して河内湖に変化する。旧大和川の流れで運ばれた土砂によって三角州が広がり、湿地帯となっていく。当遺跡は河内湖の南側に位置する。

弥生時代前期に当遺跡や周辺の遺跡では稲作に適する後背湿地を利用して農耕が始まり、集落が営なまれるようになる。当遺跡や南側に位置する若江北・山賀遺跡から集落や水田が確認されている。若江北遺跡では掘立柱建物や竪穴住居などが検出されているが集落は短期間で終わる。山賀遺跡は当時期では集落の規模は大きく遺物の出土量も多いが、中期になると次第に衰退していく。

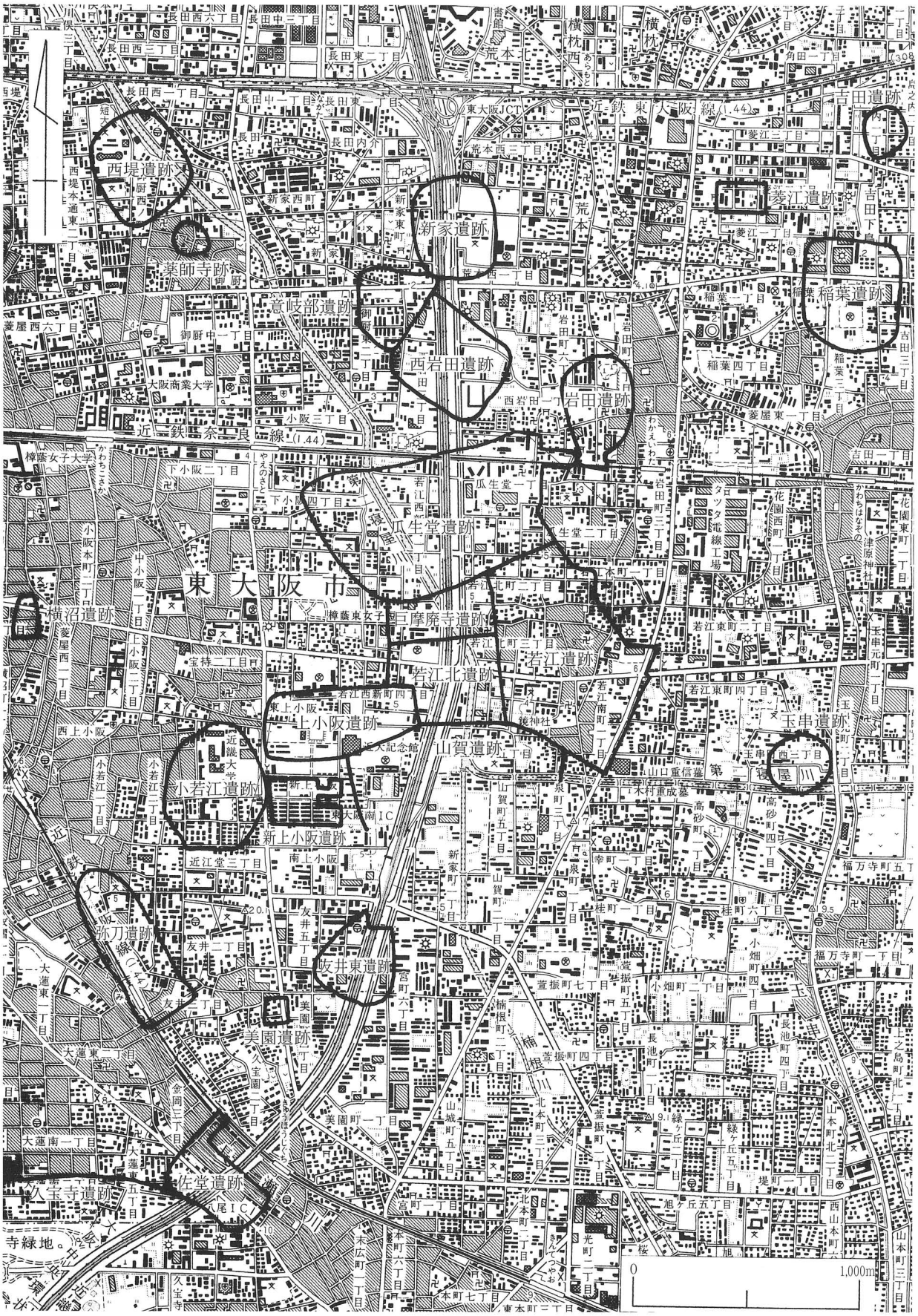
中期になると前期から続く当遺跡は最盛期をむかえる。遺跡の範囲は東西1.1km、南北0.7kmを占める大規模な集落と発展する。複数の墓域で遺存状態の良い数多くの方形周溝墓や木棺墓、土器棺墓、土壙墓などが発見されている。集落域では掘立柱建物群などの遺構が確認されている。遺物では多量の土器、木製品、石器、土製品等が出土している。また、銅戈などの金属製品も発見されている。当遺跡と南側に位置する遺跡群以外には、ほぼ同じ頃に東側の山麓に鬼虎川・西ノ辻遺跡などが存在する。鬼虎川遺跡は当遺跡と同様に大集落を形成していたことが判っている。その後、当遺跡周辺では広い範囲で河川の氾濫による土砂が堆積し、地点によっては１ｍ前後まで及ぶ。この氾濫により住居などが埋没して衰退する。また、この頃から生駒山西麓の標高約100m前後の高所に山畑・岩滝山遺跡などの高地性集落が出現する。

後期は中期に見られた大集落は縮小している。当遺跡内や南側の若江・若江北・上小阪・山賀遺跡などに分かれて小集落が形成されていると考えられる。また、遺物量も減少する。墓域では方形周溝墓が巨摩廃寺遺跡と若江北遺跡で見つかっている。

古墳時代は明確な古墳は確認されていないが中期～後期にかけて小型低方墳が巨摩廃寺遺跡と山賀遺跡から検出されている。当遺跡と周辺の遺跡からも円筒埴輪や形象埴輪などが多量に出土していることから近くに削平された古墳の存在が想定できる。

飛鳥・奈良時代以降は、当遺跡では掘立柱建物群や井戸などが見つかっている。遺物は墨書土器、黒色土器、施釉陶器、製塩土器などが出土している。集落域かもしくは、付近にあると想定されている若江郡衙の可能性も考えられる。また、東に位置する若江寺跡では白鳳時代以降の多量の瓦や破片ではあるが唐三彩が出土している。平安時代に記載されている若江寺の存在が想定されるが、若江城の築城などによって大規模な整地がおこなわれ削平されたと思われる。多量の遺物は出土するが寺関係の明確な遺構は確認されていない。

以上のように当遺跡は弥生時代以降、各時代を通して人々が集落を営み、現在まで継続している地域である。


西堤遺跡
新家遺跡
薬師寺跡
意岐部遺跡
西岩田遺跡
岩田遺跡
稲葉遺跡
菱江遺跡
吉田遺跡
東大阪市
瓜生堂遺跡
三摩廃寺遺跡
若江遺跡
若江北遺跡
上小阪遺跡
山賀遺跡
小若江遺跡
新上小阪遺跡
玉串遺跡
弥刀遺跡
友井東遺跡
美園遺跡
佐堂遺跡
久宝寺遺跡
横沼遺跡
近鉄東大阪線
近鉄奈良線
0
1,000m

第２図　周辺遺跡分布図

Ⅲ. 調査の概要

1. 調査の方法と地区割（第３図）

今回の調査は大阪府送水管布設工事に伴う工事であり、調査区は細長い。中央環状線沿いの自転車道の東半分と車道分離帯であり、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ工区と５つに分割した。また、Ⅰ・Ⅲ・Ⅴ工区は夜間工事になるため、機械掘削の残土より遺物採集を行った。Ⅱ・Ⅳ工区は細長い長方形の調査範囲を設定した。Ⅱ工区の国土座標は（Y=－36855）（X＝－148250～－148575）、Ⅳ工区は（Y＝－36840）（X＝－148585～－148605）である。Ⅱ工区は中央環状線沿いの自転車道の東半分であり、短辺は2.0m（一部3.42m）、長辺は約58.0mの範囲である。調査面積は130.78㎡である。Ⅳ工区は中央環状線の分離帯間であり、短辺は2.0m、長辺は33.2mの範囲である。調査面積は69.9㎡である。Ⅰ・Ⅲ・Ⅴ工区の面積は91.0㎡である。総合計は291.68㎡である。

調査は土留め矢板を打設した後、盛土及び耕土を地表下1.2mまで機械掘削を行った。以下を調査対象とされた工事掘削深度まで人力で掘り下げた。

2. Ⅱ工区の調査

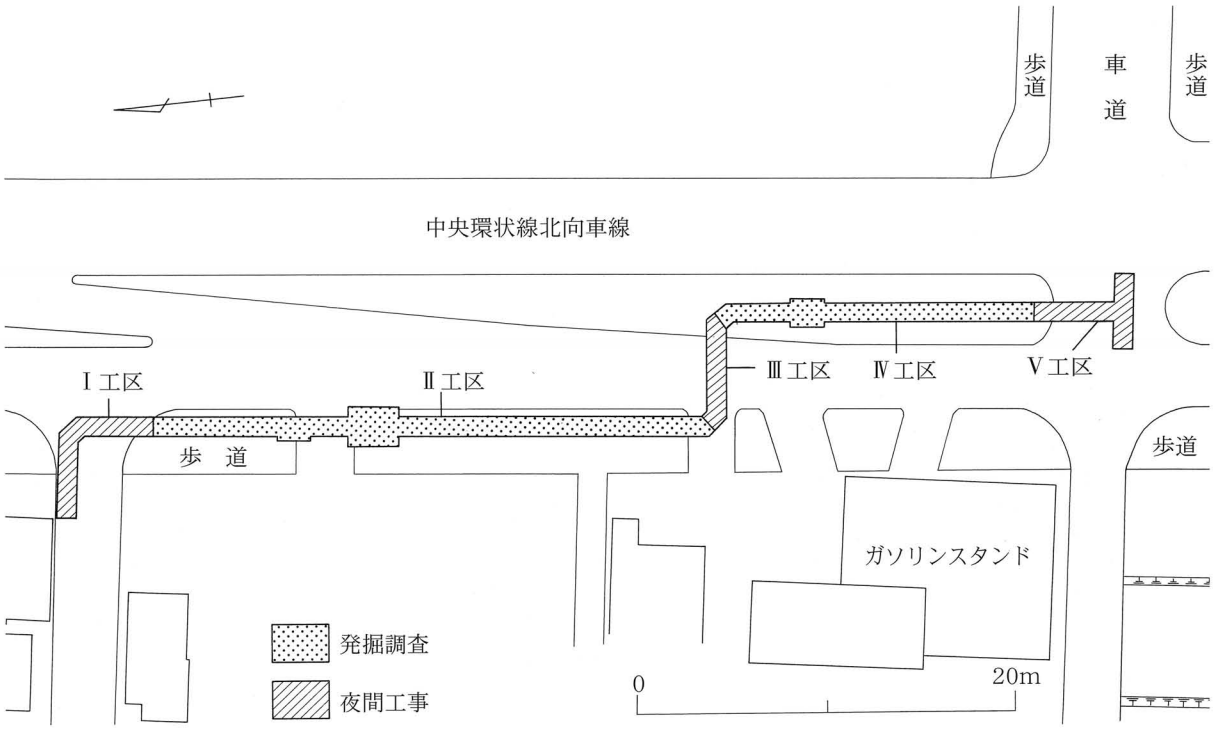
1）層位（第４図）

Ⅱ工区の発掘調査は工事掘削深度により、南北側はGL－3.0m前後、中央部はGL－3.5m前後まで行った。調査地内の層位は沖積作用や人為的な作用も加わっているため地点により違いが認められるが、基本的には以下のとおりである。

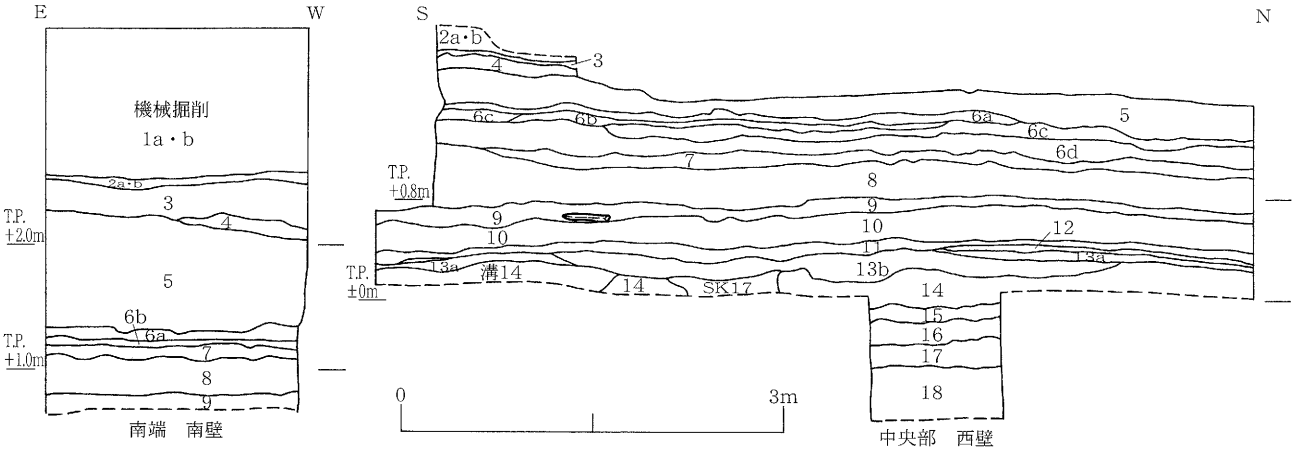
第１ａ層　盛土。層厚1.2～1.4mを測る。

第１ｂ層　青灰色（5B６/1）粘土。旧耕土。中央部より北側に堆積する。層厚10～20cmを測る。

第２ａ層　暗灰色（N3/0）中粒砂混じり粘質シルト～シルト。中世期の土器を少量含む。中央部より南側に堆積する。層厚は10～20cmを測る。



第３図　調査地区割図



第４図　Ⅱ工区断面実測図

第２b層　灰オリーブ色（7.5Y6/2）細粒砂混じり粘質シルト。中世期のベース面と思われる。中央部より南側に堆積する。層厚10～20cmを測る。

第３層　褐色（10YR4/4）粗粒砂混じり粘質シルト～シルト。古墳～平安時代の遺物包含層である。中央部より南側に堆積する。層厚10～30cmを測る。

第４a層　褐色（10YR4/4）粘質シルト。鉄分が沈着し、堅く締まっている。中央部に堆積する。層厚４cmを測る。

第４b層　暗灰黄色（2.5Y4/2）シルト。鉄分を多く含む。全域に堆積する。この層の上面で奈良～平安時代の遺構を検出した。層厚10～20cmを測る。

第５層　褐色・青灰色（7.5YR4/4・5B5/1）粗粒砂混じり砂。古墳時代前期の土器を含むがほとんどの土器が磨滅している。洪水の時に二次堆積したものと考えられる。全域に堆積する。層厚40～90cmを測る。

第６a層　オリーブ黒色（7.5Y3/1）粘土。全域に堆積する。層厚10～20cmを測る。

第６b層　オリーブ黒色（7.5Y3/1）粘土。葦等の植物遺体を含む。全域に堆積する。層厚10cmを測る。

第６c層　オリーブ黒色（7.5Y3/1）粘土。筋状に黒色の粘土層が堆積する。中央部から北側に堆積する。層厚20～30cmを測る。

第６d層　オリーブ黒色（7.5Y3/1）粘土。砂を多く含む。中央部より北側に堆積する。層厚20cmを測る。

第７層　オリーブ黒色（7.5Y3/1）粘土。葦等の植物遺体や炭化物を含む。全域に堆積する。層厚20cmを測る。

第８層　オリーブ黒色（10Y3/1）粘土。粒状のマンガンを全体的に含む。全域に堆積する。木製品が出土した。層厚30～40cmを測る。

第９層　灰色（7.5Y4/1）粘土。砂を多く含む。木製品が出土した。全域に堆積する。層厚10～30cmを測る。

第10層　オリーブ黒色(7.5Y3/1)粘土。一部に葦等の植物遺体を含む。全域に堆積する。層厚30cmを測る。

第11層　黒色（5Y2/1）粘土。全体的に葦等の植物遺体を含む。弥生時代中期の土器を少量含む。層厚10～20cmを測る。

第12層　オリーブ黒色（7.5Y3/1）粘土。弥生時代中期の遺物包含層である。層厚10cmを測る。

第13a層　黒色（N2/0）粗粒砂混じり粘質シルト～シルト。全体的にヨシ等の植物遺体を含む。弥生時代中期の遺物包含層である。層厚10cmを測る。

第13b層　黒色(7.5Y2/1)シルト～粘質シルト。弥生時代中期の遺物包含層である。層厚20～30cmを測る。

第14層　オリーブ黒色（10Y3/1）粘質シルト。部分的に粘土が混じる。この層の上面で弥生時代中期の遺構を検出した。層厚30cmを測る。

第15層　オリーブ灰色（5GY6/1）粗粒砂混じり粘質シルト～粘土。層厚10cmを測る。

第16層　オリーブ灰色（5GY6/1）粘土。層厚20cmを測る。

第17層　黒色（N2/）粘土。層厚20cmを測る。

第18層　オリーブ黒色（7.5Y3/1）粘土。層厚40cm以上を測る。

2）遺構

第４層上面遺構（第５・６図）

調査地区で奈良～平安時代の遺構を検出した。ピット22基、土坑５基、溝13条を検出した。遺構の埋土はほとんど黒褐色（2.5Y3/1）粗粒砂混じり粘質シルトとオリーブ黒色（5Y3/1）粘質シルト～シルトが堆積する。

ピット１　平面形は円形を呈する。径30cm、深さ12cmを測る。遺構内より少量の須恵器が出土した。

ピット２　平面形は円形を呈する。径10cm、深さ10cmを測る。

ピット３　平面形は円形を呈する。径10cm、深さ10cmを測る。

ピット４　平面形は円形を呈する。径10cm、深さ10cmを測る。

ピット５　平面形は円形を呈する。径40cm、深さ８cmを測る。

ピット６　平面形は円形を呈する。掘立柱建物の柱穴である。径70cm、深さ70cmを測る掘り方の中央に径12cm前後の柱を据えて埋める。①～④は埋土である。柱は62cmが残存しており、上部が腐食して細くなる。遺構内より少量の土師器・須恵器が出土した。

ピット７　平面形は円形を呈する。径50cm、深さ５cmを測る。

ピット８　平面形は円形を呈する。径60cm、深さ10cmを測る。遺構内より少量の土師器が出土した。

ピット９　平面形は円形を呈する。径10cm、深さ５cmを測る。

ピット10　平面形は楕円形を呈する。長径50cm、短径40cm、深さ12cmを測る。遺構内より少量の土師器が出土した。

ピット11　平面形は楕円形を呈する。長径60cm、短径40cm、深さ10cmを測る。

ピット12　平面形は楕円形を呈する。径20cm、深さ10～15cmを測る。

ピット13　調査区外に伸びるため全形は不明であるが平面形は円形を呈すると考えられる。長径40cm、短径30cm、深さ10cmを測る。遺構内より少量の土師器が出土した。

ピット14　調査区外に伸びるため全形は不明であるが平面形は円形を呈すると考えられる。長径60cm、短径50cm、深さ10cmを測る。遺構内より少量の土師器が出土した。

ピット15　調査区外に伸びるため全形は不明であるが平面形は円形を呈すると考えられる。長径60cm、短径50cm、深さ10cmを測る。遺構内からはほぼ完形の土師器の杯（158）と少量の須恵器・製塩土器が出土した。

ピット16　平面形は楕円形を呈する。長径50cm、短径40cm、深さ10cmを測る。

ピット17　平面形は円形を呈する。径30cm、深さ10cmを測る。遺構内より少量の土師器が出土した。

ピット18　平面形は円形を呈する。径30cm、深さ10cmを測る。遺構内より土師器の細片が出土した。

ピット19　平面形は円形を呈する。径20cm、深さ10～15cmを測る。遺構内より土師器が出土した。

ピット20　平面形は円形を呈する。径20cm、深さ10～15cmを測る。

ピット21　平面形は円形を呈する。径20cm、深さ10～15cmを測る。

ピット22　平面形は円形を呈する。径20cm、深さ10～15cmを測る。

土坑１　平面形は楕円形を呈する。長径１m、短径70cm、深さ10cmを測る。遺構内より少量の土師器・須恵器が出土した。

土坑２　西端は調査区外に伸びるため全形は不明であるが平面形は円形か楕円形を呈すると考えられる。長径１m、短径50cm、深さ32cmを測る。遺構内より須恵器と製塩土器が出土した。

土坑３　西端は調査区外に伸びるため全形は不明であるが平面形は円形か楕円形を呈すると考えられる。長径50cm、短径40cm、深さ10cmを測る。遺構内より少量の土師器・須恵器が出土した。

土坑４　溝12に切られており、全形は不明であるが平面形は円形か楕円形を呈すると考えられる。残存長径１m、短径70cm、深さ10cmを測る。遺構内より少量の土師器が出土した。

土坑５　平面形は楕円形を呈する。長径80cm、短径50cm、深さ10cmを測る。遺構内より少量の土師器・須恵器が出土した。

溝１　東西方向に伸びる溝である。東端は調査区外に伸びる。幅60cm、深さ５cmを測る。

溝２　南北方向に伸びる溝である。幅50cm、深さ８cmを測る。溝１に切られる。

溝３　東西方向に伸びる溝である。東端は調査区外に伸びる。幅60cm、深さ５cmを測る。土坑１に切られている。遺構内より少量の土師器が出土した。

溝４　東西方向に伸びる溝である。西端は調査区外に伸びる。幅30cm、深さ４cmを測る。遺構内より少量の土師器が出土した。

溝５　南北方向に伸びる溝である。北端は調査区外に伸びる。幅50cm、深さ10cmを測る。遺構内より少量の土師器・須恵器が出土した。

溝６　東西方向に伸びる溝である。西端は調査区外に伸びる。幅40cm、深さ10cmを測る。遺構内より少量の土師器・須恵器が出土した。

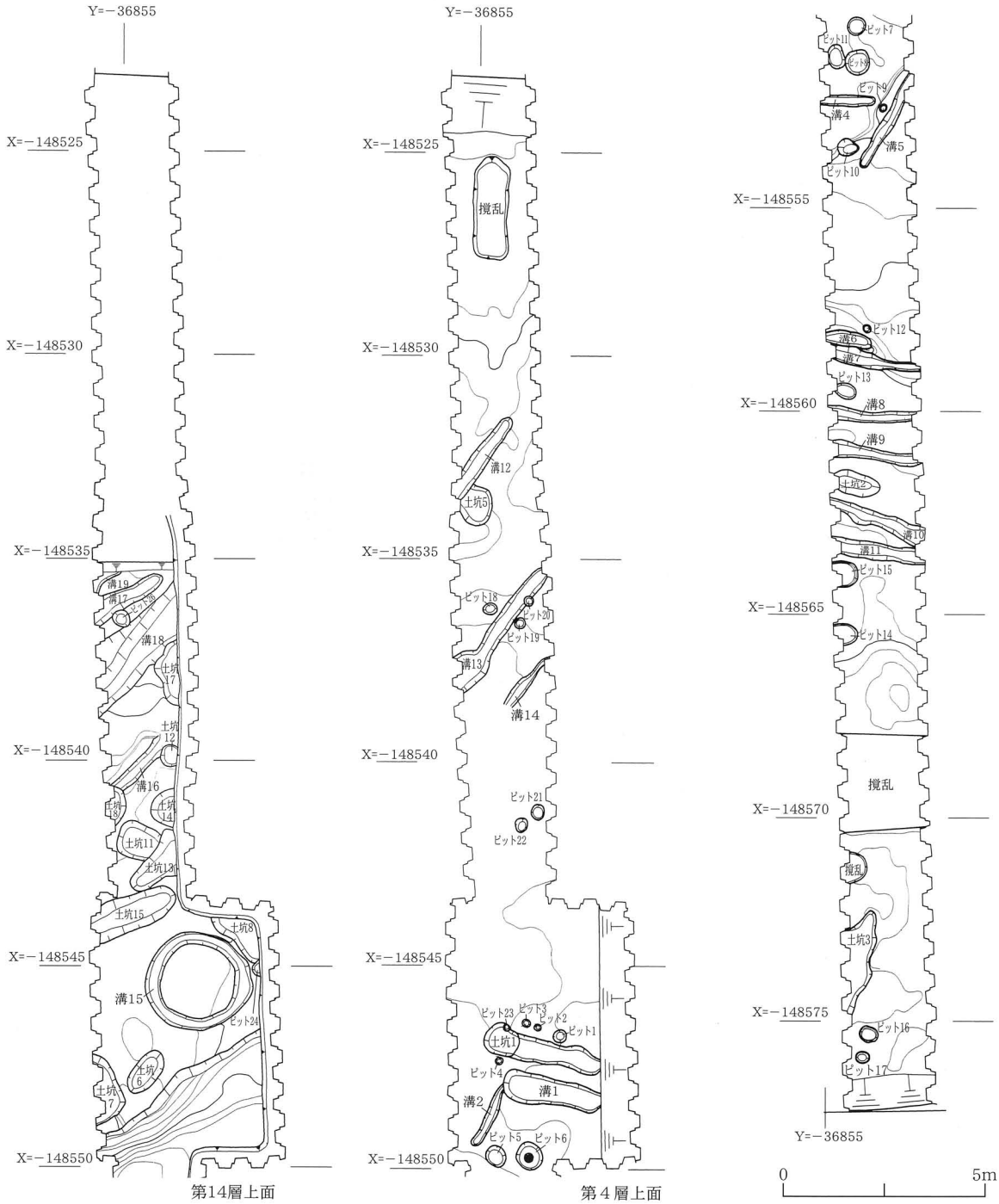
溝７　東西方向に伸びる溝である。両端は調査区外に伸びる。幅20cm、深さ10cmを測る。溝６に切られる。遺構内より多量の土師器・須恵器・製塩土器が出土した。

溝8　東西方向に伸びる溝である。両端は調査区外に伸びる。幅30cm、深さ５cmを測る。遺構内より多量の土師器・須恵器・製塩土器が出土した。

溝９　東西方向に伸びる溝である。両端は調査区外に伸びる。幅30cm、深さ５cmを測る。遺構内より少量の土師器・須恵器・黒色土器が出土した。

溝10　東西方向に伸びる溝である。両端は調査区外に伸びる。幅40cm、深さ10cmを測る。遺構内より多量の土師器・須恵器・製塩土器が出土した。

溝11　東西方向に伸びる溝である。両端は調査区外に伸びる。幅40cm、深さ10cmを測る。遺構内より多量の土師器・須恵器・製塩土器が出土した。



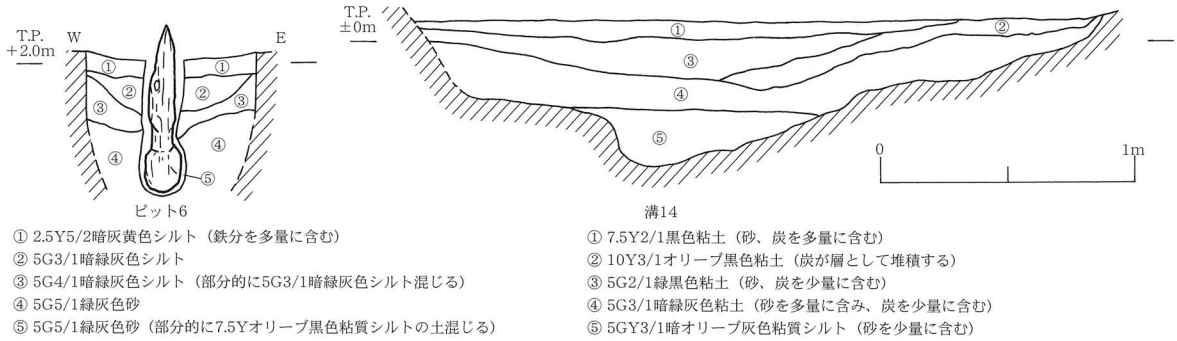
第５図　Ⅱ工区第４・14層上面遺構平面実測図

溝12　南北方向に伸びる溝である。南端は調査区外に伸びる。幅40cm、深さ10cmを測る。遺構内より土師器・須恵器が出土した。

溝13　南北方向に伸びる溝である。南端は調査区外に伸びる。幅40cm、深さ10cmを測る。遺構内より少量の土師器・須恵器が出土した。土坑５に切られる。

第14層上面遺構（第５・６図）

工事予定地の中央部が調査範囲であり、弥生時代中期の遺構を検出した。ピット３基、土坑10基、溝５条である。遺構の埋土はほとんど黒色（7.5Y2/1）粘土とオリーブ黒色（5GY2/1）中粒砂混じ



第６図　ピット６・溝14断面実測図

り粘質シルトが堆積する。

ピット24　東端は調査区外に伸びるため全形は不明であるが平面形は円形か楕円形を呈すると考えられる。長径50cm、短径20cm、深さ10cmを測る。

ピット25　東端は調査区外に伸びるため全形は不明であるが平面形は円形か楕円形を呈すると考えられる。長径60cm、短径50cm、深さ10cmを測る。

ピット26　平面形は楕円形を呈する。長径50cm、短径40cm、深さ10cmを測る。

土坑6　平面形は楕円形を呈する。長径1.2m、短径80cm、深さ10cmを測る。

土坑７　西端は調査区外に伸びるため全形は不明であるが平面形は円形か楕円形を呈すると考えられる。長径1.7m、短径70cm、深さ15cmを測る。

土坑８　東端は調査区外に伸びるため全形は不明であるが平面形は円形か楕円形を呈すると考えられる。短径70cm、長径１m、深さ15cmを測る。

土坑11　土坑13に切られており、全形は不明であるが平面形は円形か楕円形を呈すると考えられる。長径１m、短径90cm、深さ20cmを測る。下層に炭を多く含む。遺構内より台付鉢（54）・高杯（55）・甕（56）が出土した。

土坑12　西端は調査区外に伸びるため全形は不明であるが平面形は円形か楕円形を呈すると考えられる。長径70cm、短径20cm、深さ10cmを測る。

土坑13　西端は調査区外に伸びるため全形は不明であるが平面形は円形か楕円形を呈すると考えられる。長径1.5m、短径50cm、深さ60cmを測る。全体に炭を多く含む。遺構内より甕（57～59）・底部（60）が出土した。

土坑14　西端は調査区外に伸びるため全形は不明であるが円形か楕円形を呈すると考えられる。長径90cm、短径60cm、深さ60cmを測る。全体に炭を多く含む。遺構内より甕（61）・底部（62）が出土した。

土坑15　東端は調査区外に伸びるため全形は不明であるが平面形は円形か楕円形を呈すると考えられる。長径1.8m、短径90cm、深さ35cmを測る。遺構内より甕（63～66）・底部（67・68）・壷（69）・高杯（70・71）・脚部（72・73）が出土した。

土坑17　西端は調査区外に伸びるため全形は不明であるが平面形は円形か楕円形を呈すると考えられる。長径90cm、短径50cm、深さ70cmを測る。下層に炭を多く含む。遺構内より壷（78～81）・甕（82）・底部（83・84）・壷蓋（85）が出土した。

土坑18　西端は調査区外に伸びるため全形は不明であるが平面形は円形か楕円形を呈すると考えられる。長径50cm、短径25cm、深さ20cmを測る。遺構内より壷（74）・甕（75・76）・水差形土器（77）が出土した。

溝14　東西方向に伸びる溝である。両端は調査区外に伸びる。幅3.0m、深さ50～60cmを測る。遺構内より壷（1～8）・水差形土器（9）・鉢（10）・高杯（11・12）・脚部（13～16）・甕（17～41）・底部（48～53）が出土した。

溝15　環状に廻らす溝である。外径2.2m、内径1.9m、深さ10～20cmを測る。遺構内より壷（42）・甕（43）・高杯（44・45）が出土した。

溝16　東西方向に伸びる溝である。西端は調査区外に伸びる。幅30cm、深さ10cmを測る。

溝17　東西方向に伸びる溝である。西端は調査区外に伸びる。幅40cm、深さ10cmを測る。

溝18　東西方向に伸びる溝である。両端は調査区外に伸びる。幅1.5m、深さ40cmを測る。遺構内より甕（46）・壷（47）が出土した。

3. Ⅳ工区の調査

1）層位（第7図）

Ⅳ工区の発掘調査もⅡ工区同様、工事掘削深度により、南北側はGL－3.0m前後、中央部はGL－3.2m前後まで行った。北断面の西側で約20cmを測る落ち込み状の段差を確認した。すべての層が下がっており、西側に埋設されている既設管布設工事の際にできた地滑りと考えられる。また、西壁中央部で下層の確認トレンチを設定した。第13層まで確認したが、図化はしなかった。

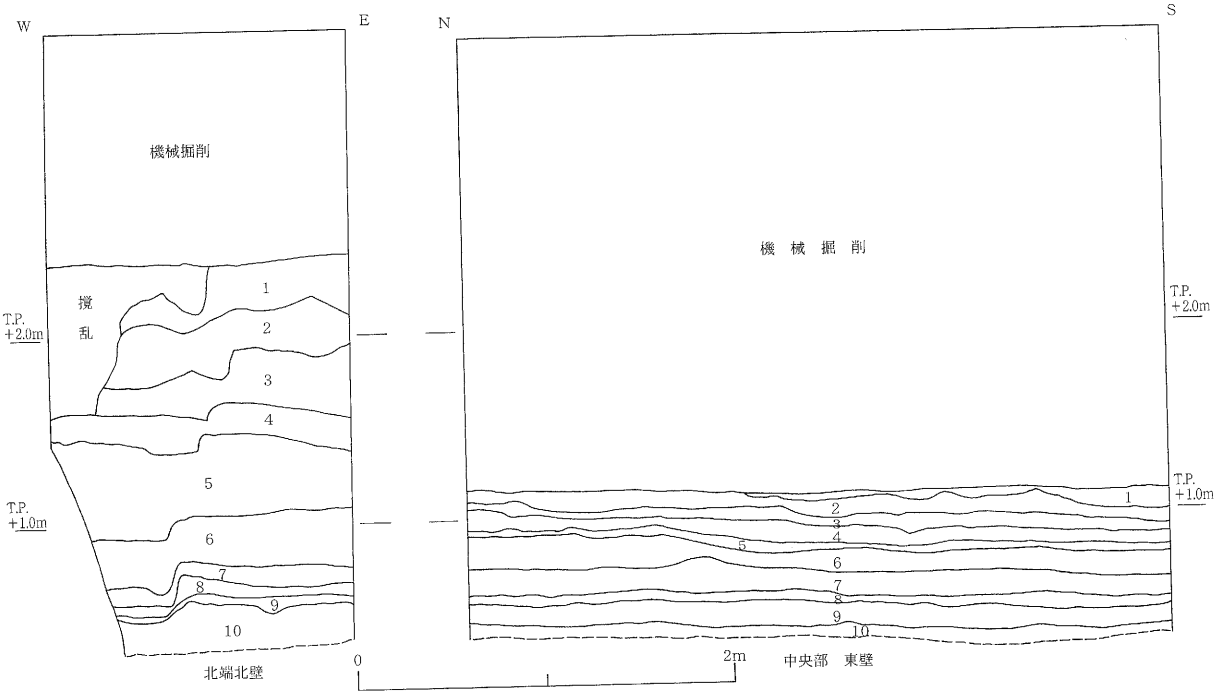
第1層　盛土。層厚1.2～1.5cmを測る。

第2層　オリーブ褐色（2.5Y4/4）粘質シルト～シルト。中世期の土器を少量含む。全域に堆積する。層厚10～30cmを測る。

第3層　黒褐色（2.5Y3/1）粗粒砂混じり粘質シルト。古墳～平安時代の遺物包含層である。全域に堆積する。層厚30～40cmを測る。

第4層　暗灰黄色（2.5Y4/2）シルト。この層の上面で奈良～平安時代の遺構を検出した。全域に堆積する。層厚20～40cmを測る。

第5層　暗オリーブ灰色（2.5GY3/1）粘質シルト～シルト。部分的に粘土が混じる。全域に堆積



第7図　Ⅳ工区断面実測図

する。層厚10～20cmを測る。

第６層　灰黄褐色・褐色（10YR4/2・10YR4/4）砂。洪水の時に二次堆積したものと考えられる。全域に堆積する。層厚40～50cmを測る。

第７ａ層　暗オリーブ灰色（2.5GY3/1）粘土。全域に堆積する。層厚10～40cmを測る。

第７ｂ層　暗緑灰色（5G3/1）シルト。部分的に粘土が混じる。中央部に堆積する。層厚10cmを測る。

第８ａ層　暗オリーブ灰色（2.5GY3/1）粘土。全域に堆積する。層厚10～20cmを測る。

第８b層　暗オリーブ灰色（2.5GY3/1）粘土。葦等の植物遺体が層として堆積する。中央部から南側に堆積する。層厚10cmを測る。

第９層　暗オリーブ灰色（2.5GY3/1）粘土。粒状のマンガンを全体的に含む。全域に堆積する。層厚10cmを測る。

第10ａ層　オリーブ黒色（7.5Y3/1）粘土。粒状のマンガンを部分的に含む。北側に堆積する。層厚10cmを測る。

第10ｂ層　オリーブ黒色（7.5Y3/1）粘土。全域に堆積する。層厚20cmを測る。

第11層　黒色（2.5GY2/1）粘土。葦等の植物遺体が層として堆積する。層厚10cmを測る。

第12層　黒色（2.5GY2/1）粗粒砂混じり粘質シルト。小礫を多く含む。弥生土器の小破片を含む。層厚20cmを測る。

第13層　暗緑灰色（5GY3/1）粗粒砂混じり粘質シルト～シルト。弥生時代の遺構面と思われるが遺構は検出できなかった。層厚20cm以上を測る。

２）遺構

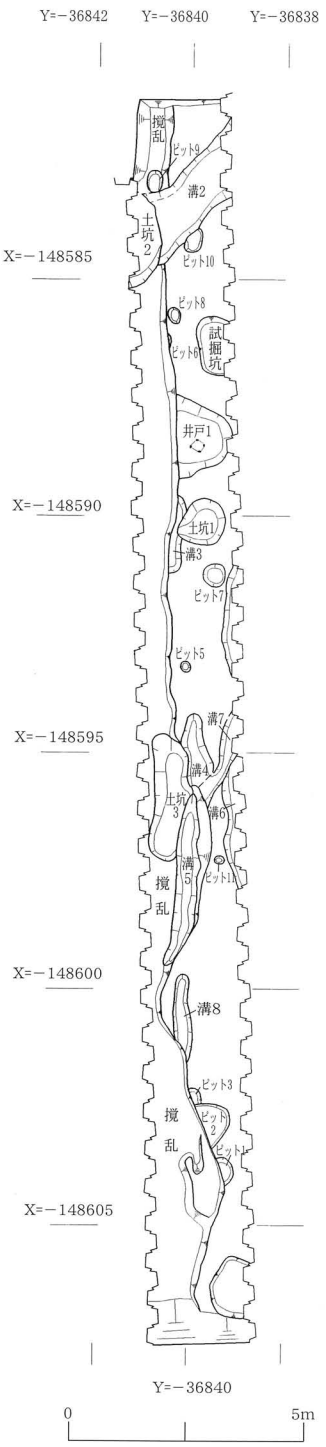
第４層上面（第８・９図）

調査地の西半分はほとんど撹乱を受けており、東半分しか遺構は残っていなかった。奈良～平安時代の遺構を検出した。ピット10基、土坑４基、溝７条、井戸１基がある。ピット、溝、土坑の埋土はほとんどが黒褐色（2.5Y3/1）細粒砂混じり粘質シルトが堆積する。

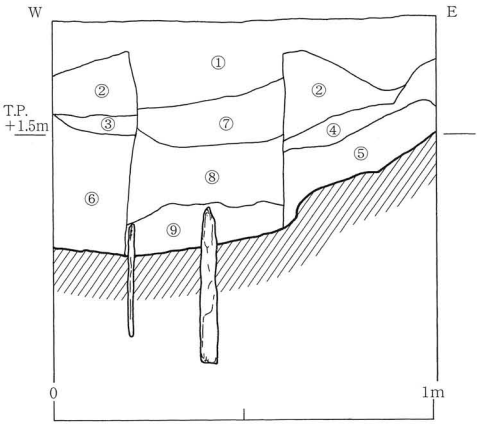
ピット１　西側は撹乱を受けており、全形は不明であるが平面形は円形か楕円形を呈すると考えられる。長径50cm、短径30cm、深さ10cmを測る。

ピット２　西側は撹乱を受けており、全形は不明であるが平面形は円形か楕円形を呈すると考えられる。長径１m、短径50cm、深さ28cmを測る。遺構内より多量の土師器・須恵器・黒色土器・製塩土器が出土した。

ピット3　西側は撹乱を受けており、全形は不明であるが平面形は円形か楕円形を呈すると考えられる。長径40cm、短径20cm、深さ10cmを測る。ピット２に切られる。遺構内より少量の土師器・製塩土器が出



第８図　Ⅳ工区第４層上面遺構平面実測図



① 10YR3/1黒褐色粘土(小礫を含む)
② 2.5YR3/1黒褐色粘土(2.5Y4/2暗灰黄色の粘土部分的に混じる)
③ 7.5Y3/1 オリーブ黒色粘土(2.5Y4/2暗灰黄色の粘土部分的に混じる)
④ 10YR4/4 褐色粘土
⑤ 5G4/1暗緑灰色シルト(N3/ 暗灰色の粘土部分的に混じる)
⑥ N3/0暗灰色粘土(5G4/1暗緑灰シルト部分的に混じる)
⑦ 5Y3/2オリーブ黒色粘土(10YR4/4褐色の粘土一部混じる)
⑧ N3/0 暗灰色粘土(5G4/1暗緑灰色シルト多く混じる)
⑨ 2.5GY2/1黒色粘土(5G4/1 暗緑灰色シルト部分的に混じる)

第９図　井戸１断面実測図

土した。

ピット５　平面形は円形を呈する。径20cm、深さ10cmを測る。

ピット６　平面形は楕円形を呈する。長径30cm、短径10cm、深さ７cmを測る。

ピット７　平面形は円形を呈する。径50cm、深さ10cmを測る。遺構内より少量の土師器・製塩土器が出土した。

ピット８　平面形は楕円形を呈する。長径50cm、短径40cm、深さ９cmを測る。

ピット９　平面形は楕円形を呈する。長径50cm、短径30cm、深さ23cmを測る。溝２に切られる。

ピット10　平面形は楕円形を呈する。長径60cm、短径30cm、深さ７cmを測る。溝２に切られる。遺構内より少量の土師器・須恵器が出土した。

ピット11　平面形は円形を呈する。径20cm、深さ10cmを測る。遺構内より少量の土師器・須恵器が出土した。

土坑1　平面形はほぼ円形を呈する。長径1.1m、短径１m、深さ10cmを測る。遺構内より多量の土師器・須恵器が出土した。

土坑２　平面形は楕円形を呈する。長径2.0m、短径70cm、深さ15cmを測る。西側部は調査区外に伸びる。遺構内より多量の土師器・須恵器・黒色土器・製塩土器が出土した。

土坑３　平面形は楕円形を呈する。長径2.7m、短径70cm、深さ15cmを測る。溝４・５に切られる。遺構内より多量の土師器・須恵器・製塩土器が出土した。

土坑４　溝7に切られており、全形は不明であるが平面形は円形か楕円形を呈すると考えられる。長径1.5m、短径60cm、深さ10cmを測る。

溝１　南北方向に伸びる溝である。幅40cm、深さ10cmを測る。遺構内より多量の土師器・須恵器が出土した。

溝2　東西方向に伸びる溝である。両端は調査区外に伸びる。幅1.3m、深さ11cmを測る。土坑２に切られる。遺構内より多量の土師器・須恵器・製塩土器が出土した。

溝３　南北方向に伸びる溝である。幅20cm、深さ10cmを測る。土坑１に切られる。

溝４　南北に伸びる溝である。幅50cm、深さ20cmを測る。北端は撹乱を受ける。遺構内より多量の土師器・須恵器・製塩土器が出土した。

溝６　南北方向に伸びる溝である。北端は調査区外へ伸びる。幅40cm、深さ10cmを測る。溝７に切られる。遺構内より少量の土師器・製塩土器が出土した。

溝７　東西方向に伸びる溝である。東端は調査区外へ伸びる。幅40cm、深さ15cmを測る。

溝８　南北方向に伸びる溝である。南端は撹乱を受ける。幅30cm、深さ10cmを測る。

井戸１　平面形は楕円形を呈する。長径1.8m、短径1.2mを測る。西端は撹乱を受ける。調査区の北部より検出した。遺構中央部のやや南よりで井戸枠の部材と思われる板を検出した。板は打ち込まれており、東西南北で４本を確認した。一辺の長さが東西40cm、南北30cmである。板は東と西は30cm、南は40cm、北は24cmが残存する。９層上面で確認できた。遺構内より須恵器・土師器・製塩土器等が多量に出土した。第⑧層上面で完形の土師器の椀（326）を検出した。

Ⅳ. 出土遺物

弥生時代～近世期の遺物が出土した。遺物は土器、埴輪、瓦、石器、土製品、木製品などがある。以下、各項目ごとに説明を記す。

1. 土器

土器は弥生時代～近世期のものがある。土器の中で埴輪と瓦も説明を記す。

弥生土器の分類

弥生土器は中期のものである。第Ⅲ～Ⅳ様式に相当する。出土量が多い器種の壷・甕・高杯・鉢はタイプごとに分類する。各タイプの後に代表的なものの図番号を記す。水差形土器・蓋などは遺物量が少ないのでタイプの分類は行なわなかった。

壷はA～Hの８タイプに分類した。

Aタイプ（4）口縁部が大きく外反し、口縁端部を下方へ拡張する壷である。有文と無文がある。有文の壷は櫛描文様を施す。

Bタイプ（42）口縁部が大きく外反し、口縁端部を上方へ摘み上げ気味に拡張する壷である。

Cタイプ（7）口縁部が大きく外反し、口縁端部が面を持つ壷である。

Dタイプ（137）口縁部が大きく外反し、口縁端部を上下へ大きく拡張する壷である。口縁端部は幅広の面を持つ。

Eタイプ（8）口縁部がほぼ直立し、口縁端部を上方へ大きく拡張する壷である。口縁端部は幅広の面を持つ。

Fタイプ（79）体部が内傾し、口縁端部が短く外反する無頸壷である。

Gタイプ（87）体部が内傾し、口縁端部に段を持つ無頸壷である。

Hタイプ（143）口頸部は細長く上方へ伸び、口縁端部が丸く終わる細頸壷である。

甕はA～Fの６タイプに分類した。

Aタイプ（63）体部の張りは大きく、口縁部が外反する。口縁端部が丸く終わる甕である。

Bタイプ（24）体部の張りは大きく、口縁部が外反する。口縁端部が面を持つ甕である。

Cタイプ（37）体部の張りは大きく、口縁部が外折する。口縁端部を上方へ摘み上げ気味に拡張する甕である。

Dタイプ（34）体部の張りは大きく、口縁部が外折する。口縁端部を上方へ摘み上げ気味に拡張し、凹線文を施す甕である。

Eタイプ（40）体部の張りは少なく、口縁部が外反する。口縁端部が面を持つ甕である。

Fタイプ（39）体部の張りは大きく、口縁部が外反する。口縁端部を下方へ大きく拡張する甕である。

高杯はA～Cの３タイプに分類した。

Aタイプ（55）口縁部がやや内湾気味に立ち上がり、浅い椀状を呈する高杯である。口縁端部は面を持つ。有文と無文がある。有文の高杯は凹線文を施す。

Bタイプ（71）口縁部が水平方向に伸び、口縁端部を下方へ大きく拡張する高杯である。口縁端部は幅広の面を持つ。口縁部と体部の内面の境には凸帯を貼り付ける。

Cタイプ（11）口縁部はやや内傾し、浅い椀状を呈する高杯である。口縁端部は段を持つ。有文と無文がある。有文の高杯は凹線文を施す。

鉢はA～Dの４タイプに分類した。

Aタイプ（98）口縁部は直立し、口縁端部は段を持つ有文の鉢である。櫛描文様を施す。

Bタイプ（102）口縁部は短く外反し、口縁端部は面を持つ有文の鉢である。櫛描文様を施す。

Cタイプ（104）口縁部はやや内湾し、椀状を呈する鉢である。口縁端部は面を持つ。有文と無文がある。有文の鉢は凹線文を施す。

Dタイプ（10）口縁部がゆるく外反し、口縁端部は面を持つ無文の鉢である。

1）Ⅱ工区の出土土器

各時代の遺構及び遺物包含層などに分けて記す。

弥生時代の遺構出土土器

溝14（第10～12図１～41・48～53）

壷・水差形土器・鉢・高杯・脚部・甕・底部の器種がある。

１～８は壷である。A・C・Eタイプがある。１～６はAタイプである。有文と無文がある。1～４は有文である。口縁端部と頸部に櫛描簾状文を施す。１は口縁端部に円形刺突文を穿つ。文様帯間は研磨する。内外面はナデ調整するものが多い。２は外面に黒色塗料が付着する。４は頸部に黒斑が認められる。５・６は無文である。５は頸部内外面をハケメの後、ヘラミガキ調整する。６は外面の調整法は風化のため不明である。７はCタイプである。口頸部外面はハケメ調整し、櫛描簾状文を施す。内面はハケメの後、ナデ調整する。８はEタイプである。口縁部内外面をヘラミガキ調整する。口縁部に２条の凹線文を施す。また、黒斑も認められる。１～７は生駒西麓産、８は非河内産である。

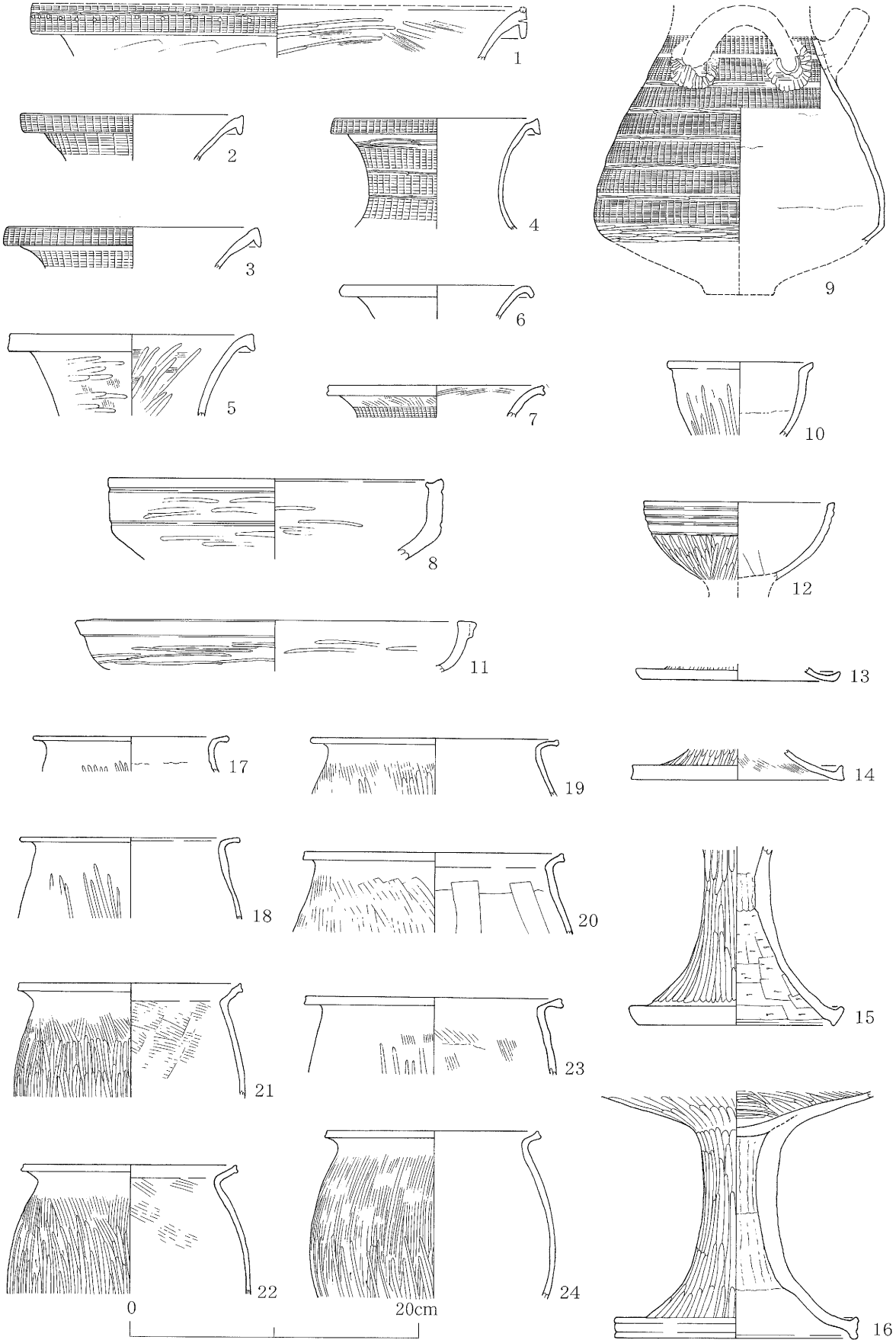
９は水差形土器である。体部は大きく張り、把手の接合痕が残る。外面は櫛描簾状文を施し、文様帯間を研磨する。外面はヘラミガキ調整、内面はナデ調整する。生駒西麓産である。

10はDタイプの鉢である。体部の張りは小さい。外面はヘラケズリの後、ヘラミガキ調整する。内面はナデ調整する。生駒西麓産である。

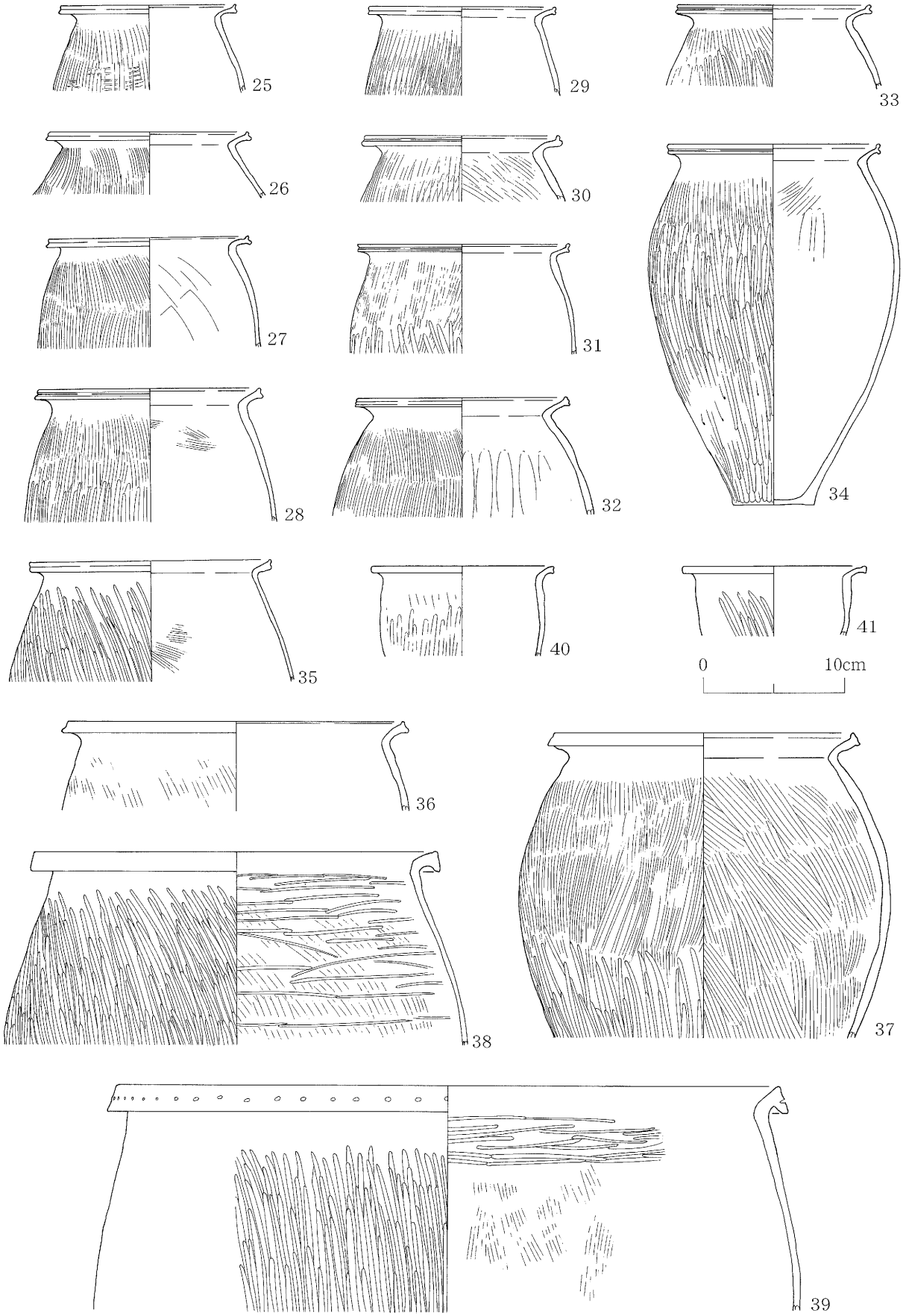
11・12は高杯である。C・Aタイプがある。11はCタイプである。内外面はヘラミガキ調整する。無文である。12はAタイプである。外面下半はヘラミガキ調整する。上半に４条の凹線文を施す。内面は下半をハケメの後、ナデ調整する。上半はヨコナデ調整する。非河内産である。

13～16は脚部である。13・14は裾部がゆるく立ち上がり、裾端部を上方へ拡張する。15・16は裾部がゆるく立ち上がり、裾端部は上下へ拡張する。柱状部は中空であり、内面にしぼり痕が残る。13～16は外面をヘラミガキ調整する。内面はナデ調整やハケメ調整するものが多い。16は非河内産、他は生駒西麓産である。

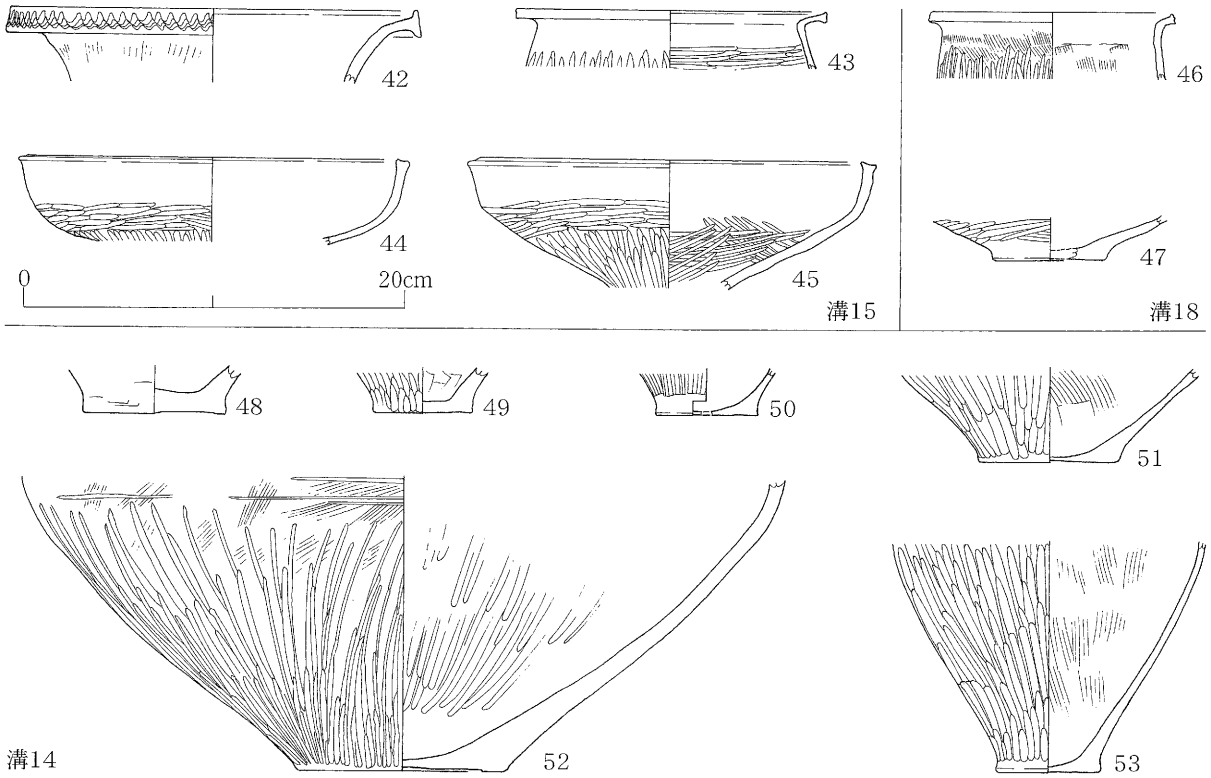
17～41は甕である。A・B・D・C・F・Eタイプがある。17～19はAタイプである。体部内面はナデ調整する。17・18は体部外面をヘラミガキ調整する。19は体部外面をハケメの後、ヘラミガキ調整する。20～24はBタイプである。20は体部外面をハケメ調整、内面をナデ調整する。21～24は体部内外面をハケメの後、ナデ調整するものが多い。25～34はDタイプである。体部外面はハケメ調整、内面はナデ調整するものや体部外面をハケメの後、ヘラミガキ調整するものが多い。25は体部外面をタタキの後、ハケメ調整する。32は口縁端部に２条の凹線文を施す。34は底部が平底である。35～37はCタイプである。35は体部外面をヘラミガキ調整する。内面はハケメの後、ナデ調整する。36は体部外面をハケメの後、ナデ調整する。内面はナデ調整する。37は体部外面の上半をハケメ調整、下半をヘラミガキ調整する。内面はハケメ調整する。38・39はFタイプである。体部外面はヘラミガ



第10図　溝14出土土器実測図



第11図　溝14出土土器実測図



第12図　溝14・15・18出土土器実測図

キ調整する。内面をハケメの後、ヘラミガキ調整する。39は口縁端部に円形刺突文を穿つ。40・41はEタイプである。体部外面をハケメの後、ヘラミガキ調整する。内面をナデ調整する。30・37は非河内産、他は生駒西麓産である。

48～53は底部である。平底を呈する。内外面はハケメ調整やヘラミガキ調整するものが多い。48は底面をヘラケズリ調整する。50は底面に孔を穿つ。52は底面に黒斑が認められる。内面に炭化物が多く付着する。生駒西麓産である。

溝15（第12図42～45）

壷・甕・高杯の器種がある。

42はBタイプの壷である。口頸部外面はハケメ調整する。内面はナデ調整する。口縁端部に櫛描波状文を施す。非河内産である。

43はBタイプの甕である。体部内外面をヘラミガキ調整する。生駒西麓産である。

44・45はAタイプの高杯である。外面をヘラミガキ調整する。44の内面は調整法が風化のため不明である。45は内面をヘラミガキ調整する。45は杯部下半に黒斑が認められる。生駒西麓産である。

溝18（第12図46・47）

甕・底部の器種がある。

46はBタイプの甕である。体部外面はハケメの後、ヘラミガキ調整する。内面はハケメの後、ナデ調整する。生駒西麓産である。

47は底部である。平底を呈する。外面はヘラミガキ調整する。内面の調整法は風化のため不明である。底面はヘラミガキ調整する。生駒西麓産である。

土坑11（第13図54～56）

台付鉢・高杯・甕の器種がある。

54は台付鉢である。脚部はゆるやかに立ち上がる。杯部は外方向に広がり、やや内傾して立ち上が

る。口縁端部は段を持つ。脚部外面に竹管文を施す。杯部上半に櫛描簾状文を施し、文様帯間を研磨する。口縁端部は３条の櫛描波状文を施す。脚部外面はハケメ調整する。杯部内外面はヘラミガキ調整する。杯部内外面に煤が付着する。生駒西麓産である。

55はAタイプの高杯である。外面はヘラミガキ調整する。口縁部に３条の凹線文を施す。内面はヘラミガキ調整する。口縁部に黒斑が認められる。非河内産である。

56はAタイプの甕である。外面はヘラミガキ調整し、内面はナデ調整する。生駒西麓産である。

土坑13（第13図57～60）

甕・底部の器種がある。

57～59は甕である。A・Bタイプがある。57・58はAタイプである。内外面はヘラミガキ調整する。59はBタイプである。体部内外面はハケメ調整する。生駒西麓産である。

60は底部である。平底を呈する。体部外面はヘラミガキ調整、内面はナデ調整する。底面はヘラミガキ調整する。生駒西麓産である。

土坑14（第13図61・62）

甕・底部の器種がある。

61はAタイプの甕である。体部外面はハケメ調整する。内面はハケメの後、ナデ調整する。生駒西麓産である。

62は底部である。平底を呈する。内外面はヘラミガキ調整する。生駒西麓産である。

土坑15（第13図63～73）

甕・底部・壷・高杯・脚部の器種がある。

63～66は甕である。A・Bタイプがある。63・64はAタイプである。63は底部が平底である。体部外面はヘラミガキ調整する。内面はハケメの後、ヘラミガキ調整する。64は体部内外面をヘラミガキ調整する。65・66はBタイプである。体部内外面はヘラミガキ調整する。生駒西麓産である。

67・68は底部である。平底を呈する。外面はヘラミガキ調整、内面はナデ調整する。67は底面をヘラミガキ調整する。生駒西麓産である。

69はAタイプの壷である。口頸部外面はハケメ調整する。口縁端部に櫛描簾状文と刻み目を施す。さらに円形刺突文を穿つ。内面はナデ調整する。また、口縁端部内面に円形浮文を貼り付ける。口頸部に黒斑が認められる。生駒西麓産である。

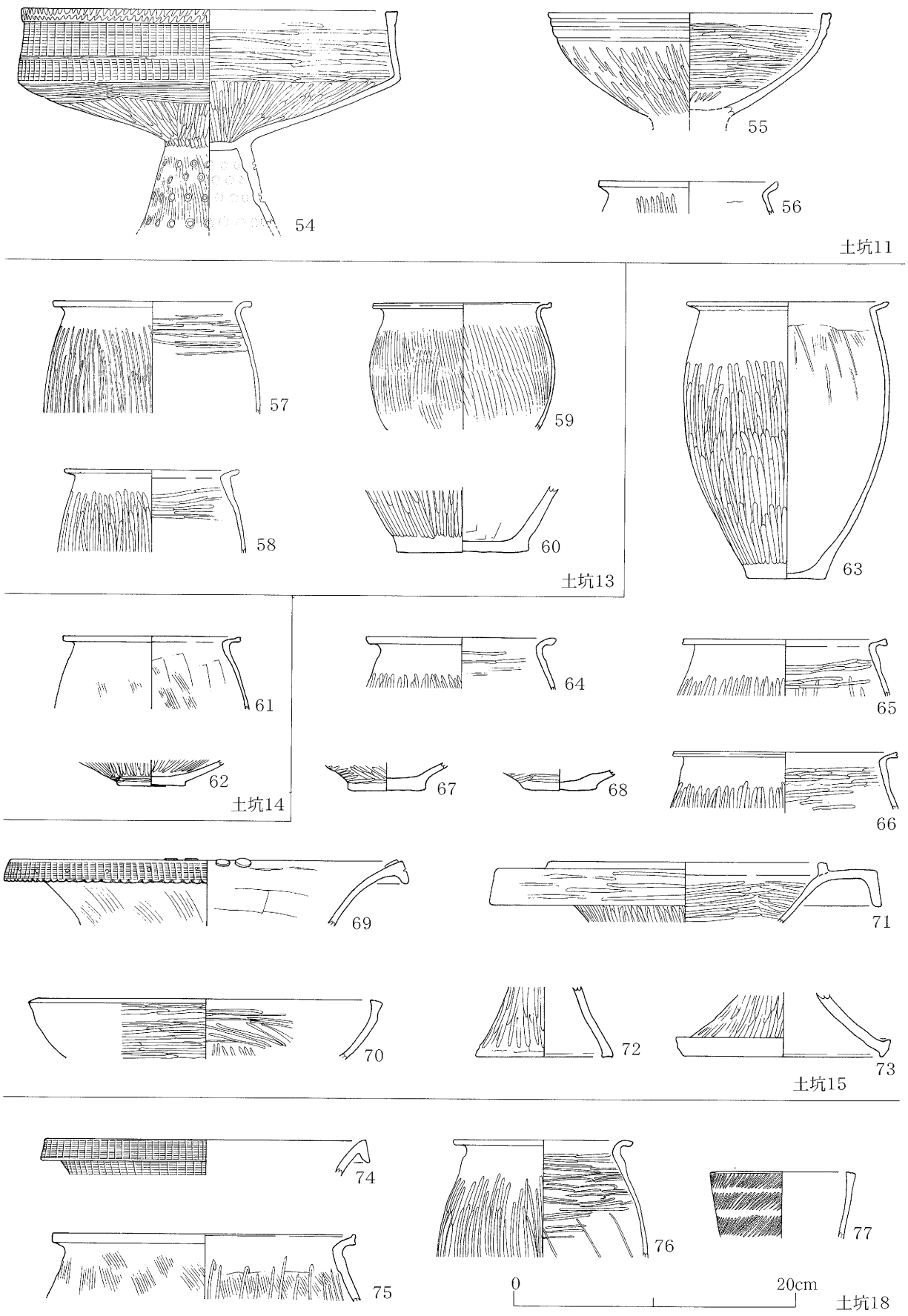
70・71は高杯である。A・Bタイプがある。70はAタイプである。内外面はヘラミガキ調整する。71はBタイプである。内外面をヘラミガキ調整する。口縁部内面に指頭圧痕が残る。70は生駒西麓産、71は非河内産である。

72・73は脚部である。72は裾部がやや強く立ち上がり、裾端部は面を持つ。外面はケズリの後、ヘラミガキ調整する。内面はナデ調整する。73は裾部がゆるやかに立ち上がり、裾端部は上下へ拡張する。外面はヘラミガキ調整、内面はヨコナデ調整する。72は生駒西麓産、73は非河内産である。

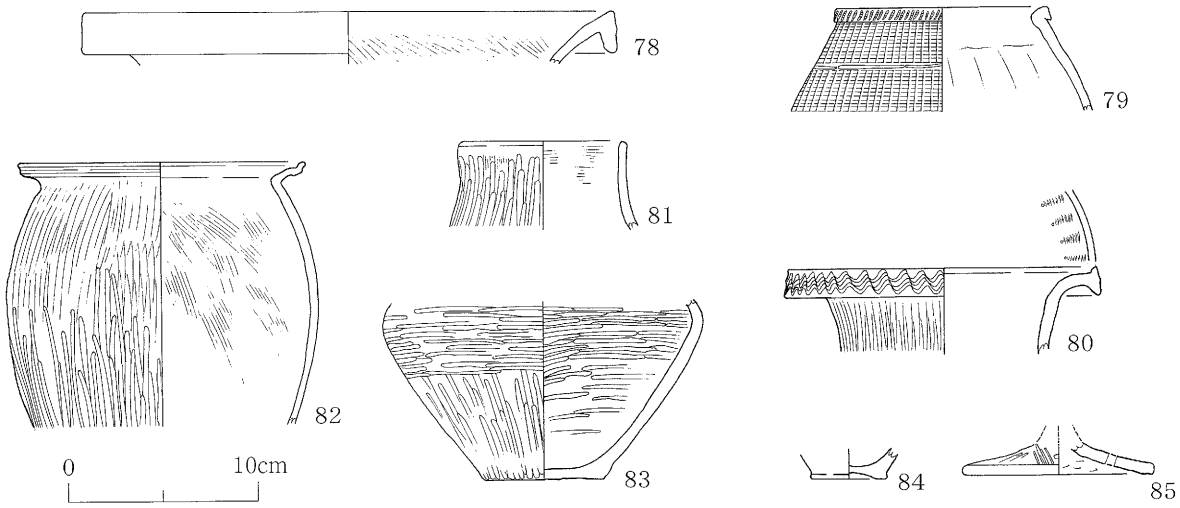
土坑17（第14図78～85）

壷・甕・底部・壷蓋の器種がある。

78～81は壷である。A・F・B・Hタイプがある。78はAタイプである。外面の調整法は風化のため不明である。内面はハケメ調整する。79はFタイプである。体部に櫛描簾状文を施し、文様帯間を研磨する。口縁端部に列点文を施す。内面はナデ調整する。80はBタイプである。口頸部外面はハケメ調整する。口縁端部に櫛描波状文を施す。口頸部内面の調整法は風化のため不明である。口縁端部内面は扇形文を施す。81はHタイプである。外面はヘラミガキ調整する。内面はハケメの後、ナデ調



第13図　土坑11・13～15・18出土土器実測図



第14図　土坑17出土土器実測図

整する。外面に黒色塗料が付着する。水差形土器の可能性もある。81は非河内産、他は生駒西麓産である。

82はDタイプの甕である。体部外面の上半はハケメ調整、下半はヘラミガキ調整する。内面はハケメの後、ナデ調整する。体部下半に黒斑が認められる。生駒西麓産である。

83・84は底部である。平底を呈する。83は内外面をヘラミガキ調整、84はナデ調整する。生駒西麓産である。

85は壷蓋である。体部がゆるく立ち上がり、口縁端部は面を持つ。体部に小円孔を穿つ。外面はヘラミガキ調整、内面はヘラケズリ調整する。非河内産である。

土坑18（第13図74～77）

壷・甕・水差形土器の器種がある。

74はAタイプの壷である。口頸部と口縁端部に櫛描簾状文を施す。内面はナデ調整する。生駒西麓産である。

75・76は甕である。C・Aタイプがある。75はCタイプである。体部外面はハケメ調整する。内面はハケメの後、ヘラミガキ調整する。76はAタイプである。体部内外面はヘラミガキ調整する。体部内面に炭化物が付着する。生駒西麓産である。

77は水差形土器である。口頸部は上方へ伸びる。外面に３帯の櫛描列点文を施す。内面はナデ調整する。生駒西麓産である。

弥生時代の遺物包含層出土土器

第11層（第15図91・92）

甕・脚部の器種がある。

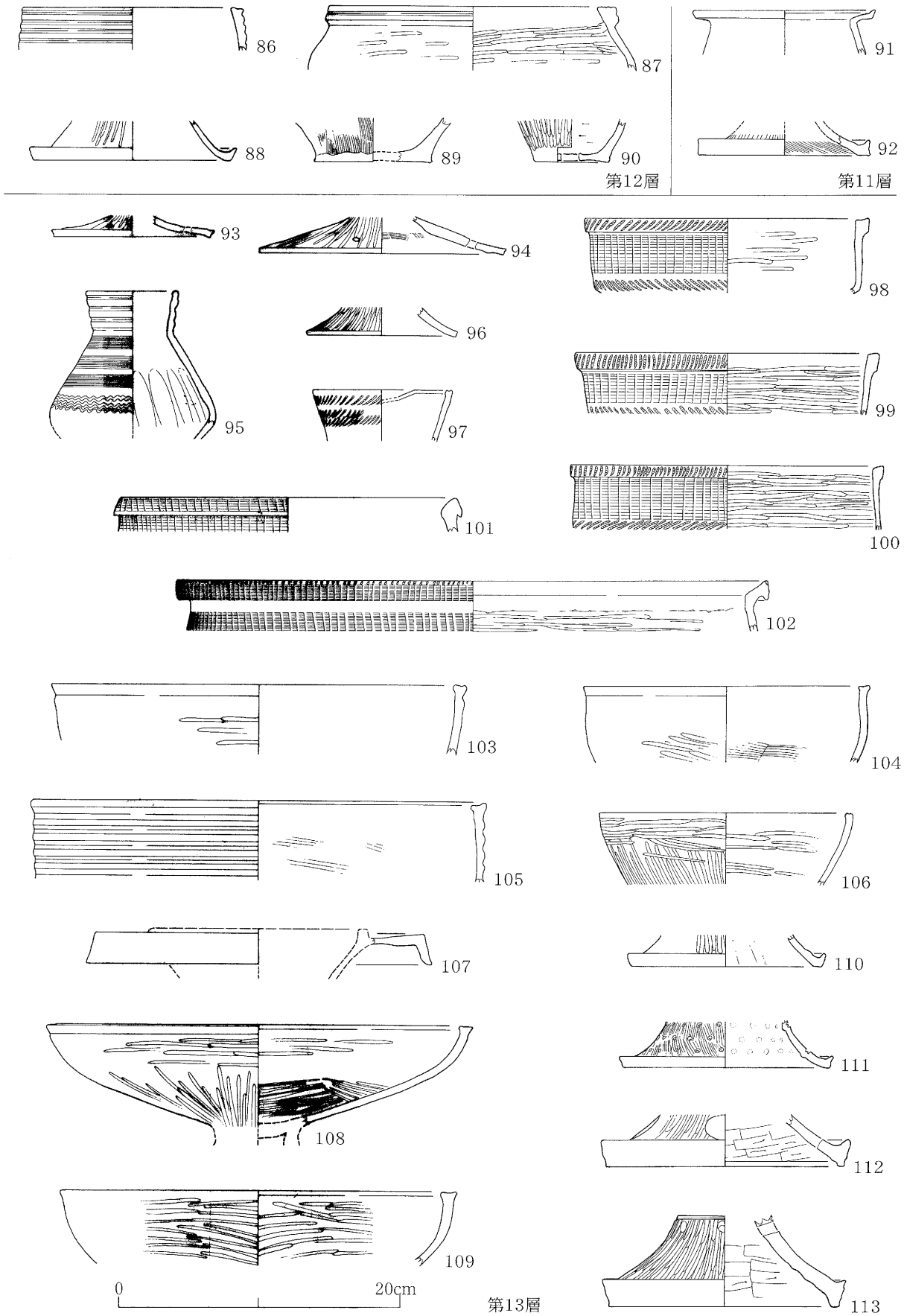
91はCタイプの甕である。体部内外面の調整法は風化のため不明である。非河内産である。

92は脚部である。裾端部は上方へ拡張する。外面はヘラミガキ調整、内面はハケメ調整する。生駒西麓産である。

第12層（第15図86～90）

壷・脚部・底部の器種がある。

86・87は壷である。H・Gタイプがある。86はHタイプである。口頸部に４条の凹線文を施す。



第15図　第11～13層出土土器実測図

内面はヨコナデ調整する。87はGタイプである。体部内外面はヘラミガキ調整する。口縁端部外面に1条の凹線文を施す。86は非河内産、87は生駒西麓産である。

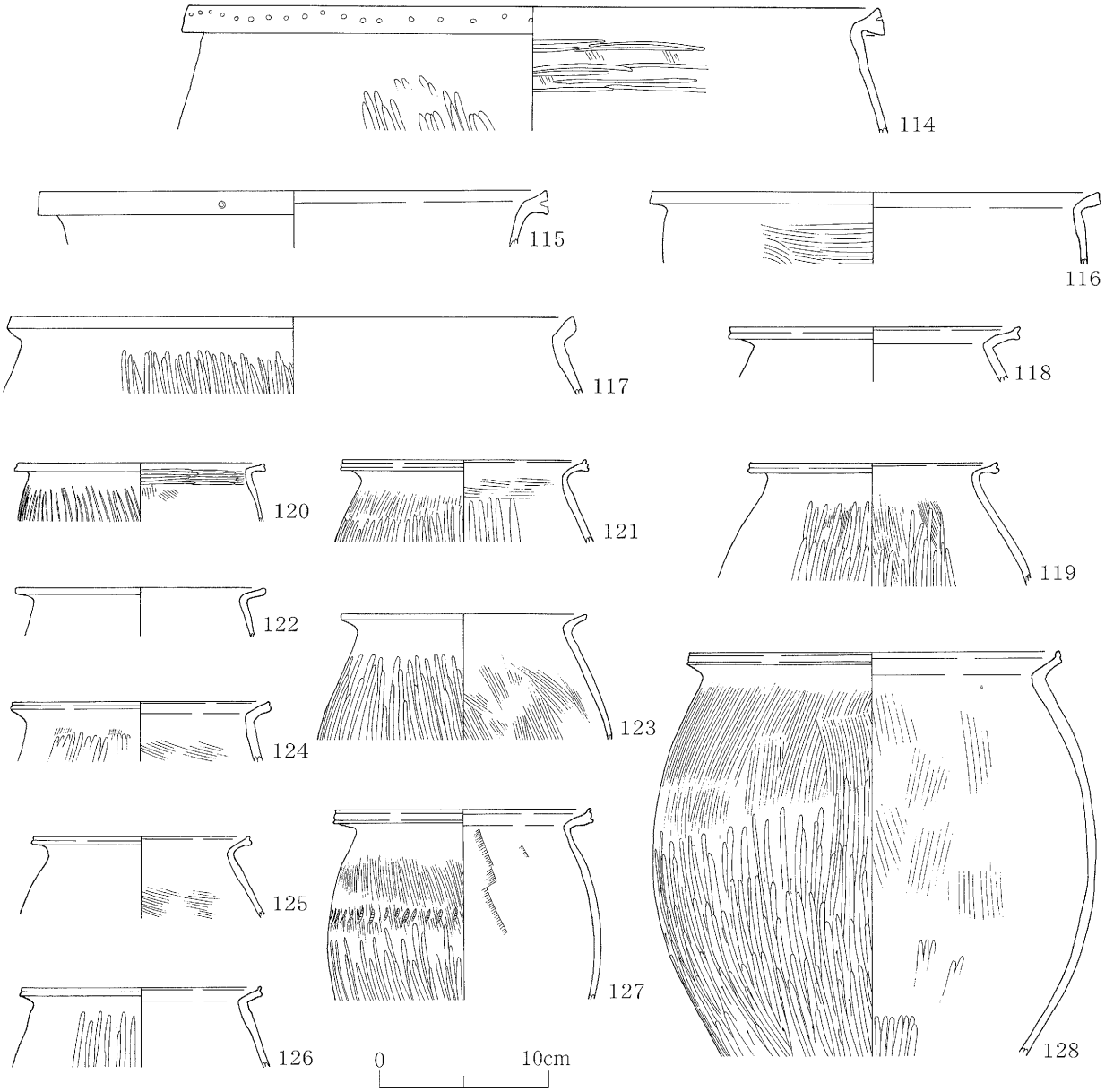
88は脚部である。裾部はゆるやかに立ち上がり、裾端部は上方へ拡張する。外面はヘラミガキ調整、内面はナデ調整する。生駒西麓産である。

89・90は底部である。平底を呈する。89は外面をナデの後、ハケメ調整する。内面の調整法は風化のため不明である。90は外面をヘラミガキ調整、内面をヘラケズリ調整する。底面はヘラミガキ調整する。生駒西麓産である。

第13層（第15～17図93～155）

壷蓋・水差形土器・鉢・高杯・脚部・甕・壷・台付壷・底部の器種がある。

93・94・96は壷蓋である。体部の立ち上がりはゆるく、口縁端部はやや面を持つ。外面はヘラミガキ調整する。内面はナデ調整やハケメ調整する。93・94は体部に小円孔を穿つ。体部に黒斑が認め



第16図　第13層出土土器実測図

られる。93は非河内産、他は生駒西麓産である。

95・97は水差形土器である。口縁部は上方へ伸びる。95は体部の張りが大きい。口縁部と体部に凹線文や櫛描文様を施す。櫛描文様は直線文と波状文がある。口頸部と体部下半に煤が付着する。97は口頸部に櫛描列点文を施す。内面はナデ調整する。生駒西麓産である。

98～105は鉢である。A・Bタイプがある。98～100はAタイプである。外面は体部下半と口縁端部に櫛描列点文、体部上半に櫛描簾状文を施す。内面はヘラミガキ調整する。101・102はBタイプである。外面は口縁部と口縁端部に櫛描簾状文を施す。101は内面をナデ調整する。102はヘラミガキ調整する。 103～105はCタイプである。105は外面に4条の凹線文を施す。103・104は外面をヘラミガキ調整する。103は内面をナデ調整する。104・105は内面をハケメ調整する。103・105は非河内産、他は生駒西麓産である。

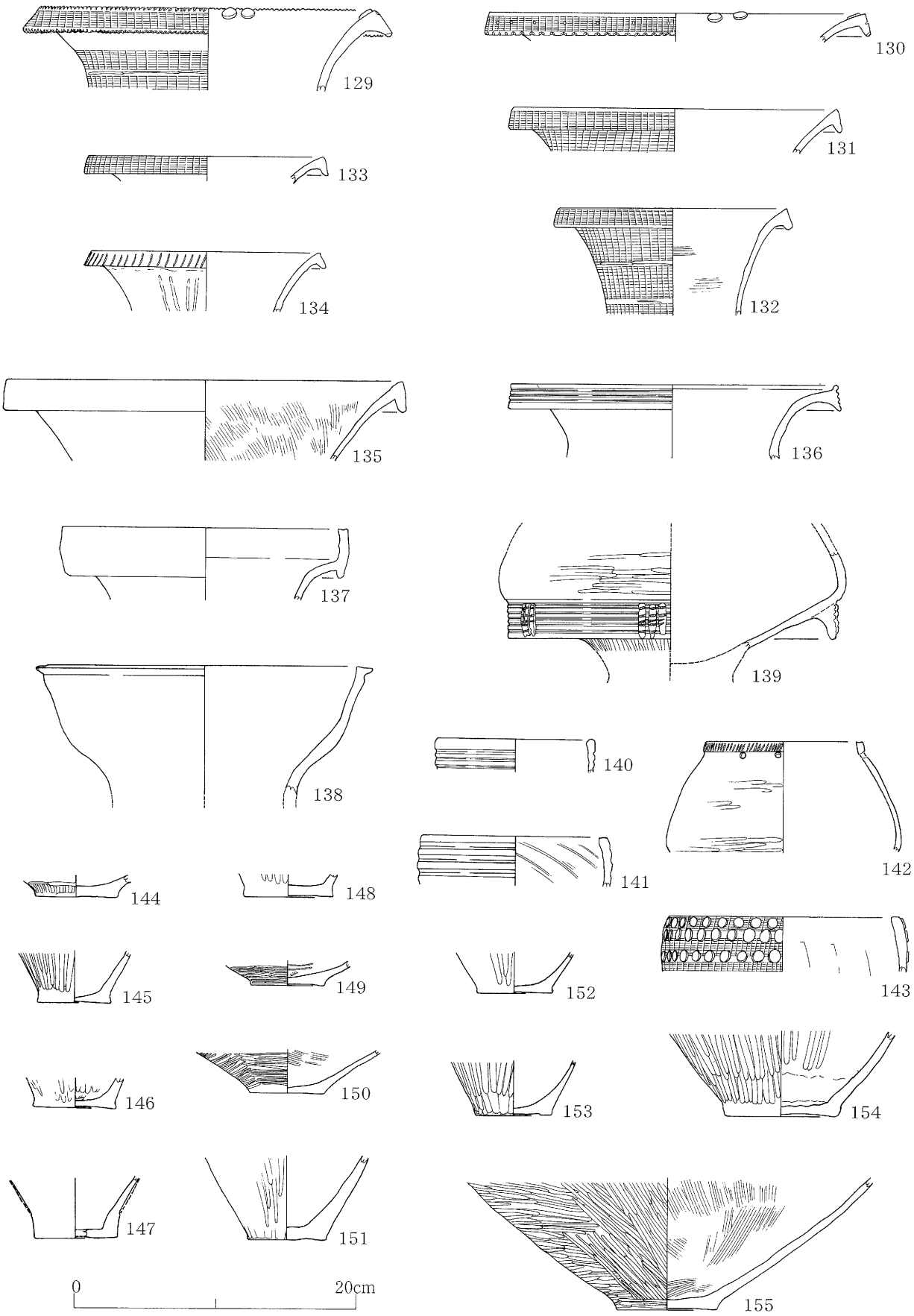
106～109は高杯である。A・Bタイプがある。106・108・109はAタイプである。内外面はヘラミガキ調整する。108はBタイプである。内外面の調整法は風化のため不明である。109は非河内産、他は生駒西麓産である。

110～113は脚部である。裾部はゆるやかに立ち上がる。110・111は裾端部を上方へ拡張する。112・113は裾端部を上下へ拡張する。111は裾部に竹管文を施す。112は円形の透かし孔を穿つ。内外面はヘラミガキ調整やヘラケズリ調整する。112は非河内産、他は生駒西麓産である。

114～128は甕である。F・B・D・A・Cタイプがある。114・115はFタイプである。114は体部内外面をヘラミガキ調整する。口縁端部外面に円形刺突文を穿つ。115は体部内外面の調整法は風化のため不明である。口縁端部の1ヶ所に円形刺突文が残る。116・117・120はBタイプである。116は体部外面をハケメ調整する。内面の調整法は風化のため不明である。117・120は体部外面をヘラミガキ調整する。117は内面をナデ調整する。120は内面をヘラミガキの後、ハケメ調整する。118・119・121・125～128はDタイプである。体部内外面はハケメ調整やヘラミガキ調整するものが多い。118は風化のため調整法が不明である。127は体部中央に櫛描列点文を施す。118・119・125は非河内産、他は生駒西麓産である。

129～143は壷である。A・B・D・E・H・Gタイプがある。129～135はAタイプである。有文と無文がある。129～133は口頸部と口縁端部に櫛描簾状文を施す。また、129・132は文様帯間を研磨する。129・130は口縁端部に刻み目を施し、円形浮文を貼り付ける。134は口縁端部に櫛描列点文を施す。内外面はナデ調整やヘラミガキ調整するものが多い。132・134は口頸部に黒色塗料が付着する。135は無文である。外面をナデ調整、内面をハケメ調整する。136はBタイプである。口頸部外面の調整法は風化のため不明である。口縁端部外面に2条の凹線文を施す。内面はヨコナデ調整する。137はDタイプである。内外面の調整法は風化のため不明である。138はEタイプである。口縁端部外面に1条の凹線文を施す。内外面の調整法は風化のため不明である。140・141・143はHタイプである。140は外面に2条の凹線文を施す。内面はナデ調整する。141は口頸部外面に3条の凹線文を施す。内面はハケメ調整する。143は外面に櫛描簾状文を施し、3段の円形浮文を貼り付ける。内面はナデ調整する。142はGタイプである。体部外面はヘラミガキ調整する。口縁端部に櫛描列点文を施す。内面は風化のため調整法は不明である。136・138・140・141は非河内産、他は生駒西麓産である。

139は台付壷である。体部下半は外方向に立ち上がり、上半は内湾する。中央部に幅広の凸帯を貼り付ける。凸帯に6条の凹線文を施す。さらに、凹線文の上に3帯1組の櫛描列点文を施した棒状浮文を縦方向に貼り付ける。外面はヘラミガキ調整、内面はナデ調整する。体部の一部に煤が付着する。



第17図　第13層出土土器実測図

非河内産である。

143～155は底部である。平底を呈する。内外面はハケメ調整やヘラミガキ調整するものが多い。143は底面に黒斑が認められる。147・152は非河内産、他は生駒西麓産である。

古墳時代以降の遺構出土土器

文章の末尾に時期を記していない資料は奈良～平安時代初めのものである。

第４層上面遺構

ピット６（第18図156）

156は須恵器の杯である。体部は外方向へ立ち上がる。受け部は水平方向へ伸びる。立ち上がり部は短く内傾する。口縁端部は丸く終わる。内外面は回転ナデ調整する。外面に自然釉が付着する。古墳時代。

ピット15（第18図157・158）

須恵器・土師器がある。

157は須恵器の蓋杯である。天井部は内湾して下がる。口縁部が外折し、口縁端部はやや下方へ拡張する。内外面は回転ナデ調整する。

158は土師器の杯である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸く終わる。体部外面はナデ調整する。口縁部内外面はヨコナデ調整する。体部内面は磨滅しているため調整法は不明である。

土坑２（第18図159～163）

須恵器・製塩土器がある。

159は須恵器の杯である。体部は外上方へ立ち上がる。口縁端部はやや尖り気味に終わる。内外面は回転ナデ調整する。

160～163は製塩土器である。160～163は体部である。厚手のものである。160・163は外面の調整は不明である。内面に布目痕が残る。161・162は内外面をナデ調整する。162は内面に指頭圧痕が残る。

溝７（第18図164・165）

須恵器・土師器がある。

164は須恵器の底部である。高台が付く。底部は外上方へ立ち上がる。高台部は低く、断面形が逆台形を呈する。内外面を回転ナデ調整する。体部外面に自然釉が付着する。

165は土師器の甕である。体部はやや内湾する。口縁部は外上方へ立ち上がり、口縁端部は面を持つ。口縁部と体部の境に稜がつく。体部外面はユビオサエ調整による指頭圧痕が残る。内面はナデ調整する。口縁部をヨコナデ調整する。体部外面に煤が付着する。

溝８（第18図166・167）

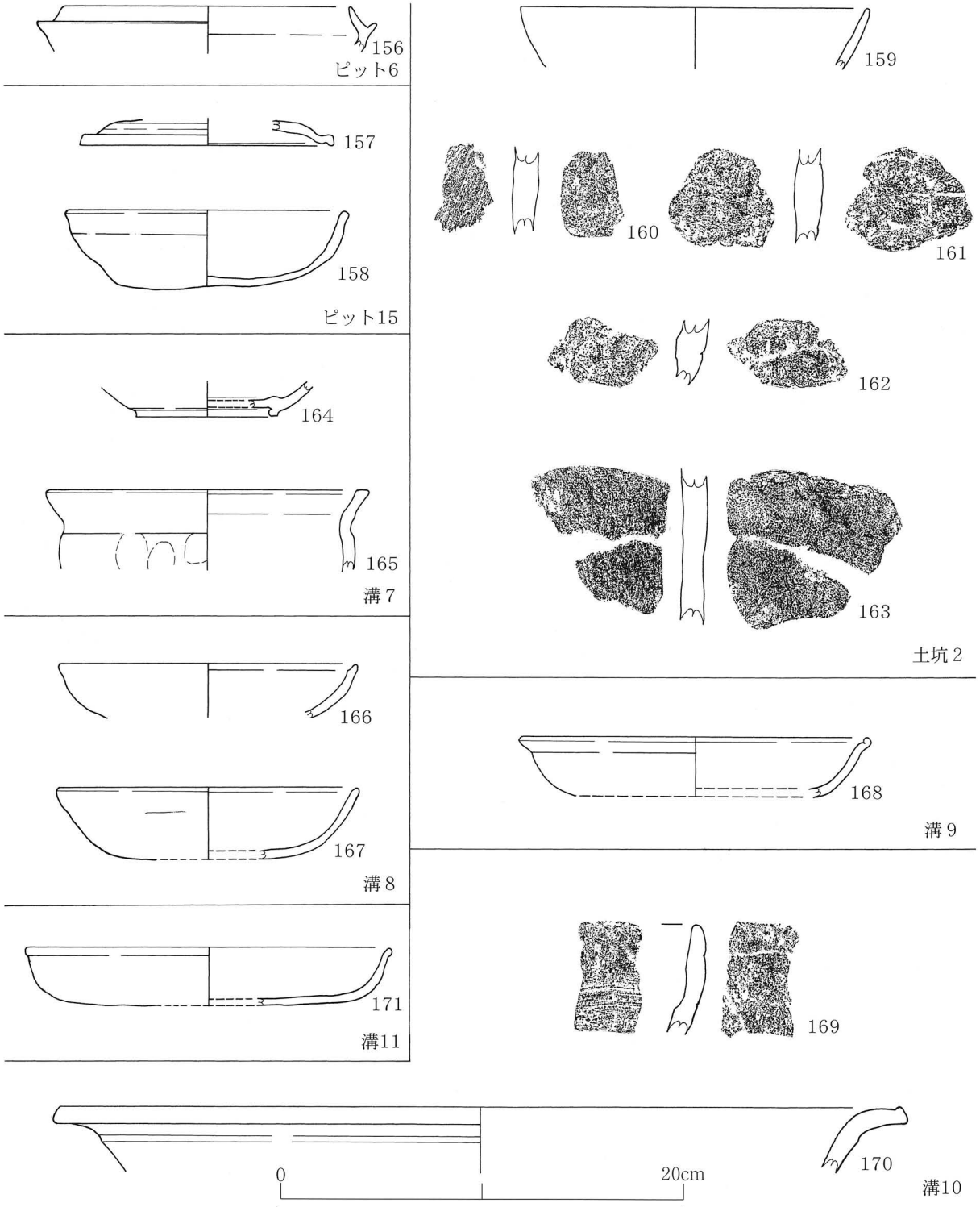
166・167は土師器の杯である。体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸く終わる。166は口縁端部内面に段を持つ。体部内外面をナデ調整、口縁部をヨコナデ調整する。

溝９（第18図168）

168は土師器の杯である。体部は内湾気味に立ち上がる。口縁部はゆるく外反して、口縁端部はやや内側へ巻き込む。外面はヨコナデ調整する。内面は不明である。

溝10（第18図169・170）

製塩土器・土師器がある。



第18図　ピット6・15、土坑2、溝7～11出土土器実測図

169は製塩土器の口縁部である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部はやや尖る。内外面をナデ調整する。外面に粘土接合痕が残る。

170は土師器の甕である。口頸部は大きく外反し、口縁端部は面を持つ。口縁部内外面はヨコナデ調整する。

溝11（第18図171）

171は土師器の皿である。体部はやや内湾気味に立ち上がる。口縁部はやや外反し、口縁端部は外

側へ肥厚する。外面はナデ調整する。内面の調整法は不明である。

古墳時代以降の遺物包含層出土土器

第２層（第19図172～175）

須恵器・磁器・陶器がある。

172・173は須恵器である。甕・底部の器種がある。

172は甕である。口頸部が大きく外反し、口縁端部は上下へやや拡張する。内外面を回転ナデ調整する。

173は底部である。体部は外上方へ立ち上がる。高台部は下方へ摘み上げ気味に拡張する。内面に稜がつく。内外面は回転ナデ調整する。

174は白磁の皿である。体部は大きく外上方へ立ち上がる。口縁部は外反し、口縁端部は丸く終わる。内外面はロクロナデ調整する。内外面に施釉し、釉の色調が灰白色を呈する。中世期。

175は陶器である。唐津焼の底部である。体部は外方向へ立ち上がる。高台部は低い。見込み部に砂目が残る。外面は回転ヘラケズリ調整する。内面は施釉する。釉の色調が灰オリーブ色を呈する。近世期。

第３層（第19～23図176～245・251～286）

磁器・須恵器・土師器・製塩土器・瓦・円筒埴輪がある。

176・178は青磁である。椀・底部の器種がある。

176は椀である。体部は外上方へ立ち上がり、口縁部に至る。口縁端部はやや尖り気味に終わる。外面に鎬蓮弁文を施す。内外面に施釉する。釉の色調が灰緑色を呈する。中世期。

178は底部である。体部は内湾気味に立ち上がる。高台部は低く、断面形が逆台形を呈する。外面は回転ヘラケズリ調整する。内外面に施釉する。釉の色調が黄緑色を呈する。中世期。

177・179は白磁である。椀・底部の器種がある。

177は椀である。体部は外上方へ立ち上がり、口縁部に至る。口縁端部は外側へ肥厚する。所謂、玉縁状の口縁である。内外面に施釉する。釉の色調が灰白色を呈する。中世期。

179は底部である。体部は外上方へ立ち上がる。高台は低い。外面は回転ヘラケズリ調整する。内面は施釉する。釉の色調が灰白色を呈する。中世期。

180～182・239は瓦器である。椀・羽釜・鉢の器種がある。

180・181は椀である。体部は外上方へ立ち上がり、口縁部に至る。口縁端部は丸く終わる。体部外面はナデ調整、内面は粗いヘラミガキ調整する。口縁部はヨコナデ調整する。中世期。

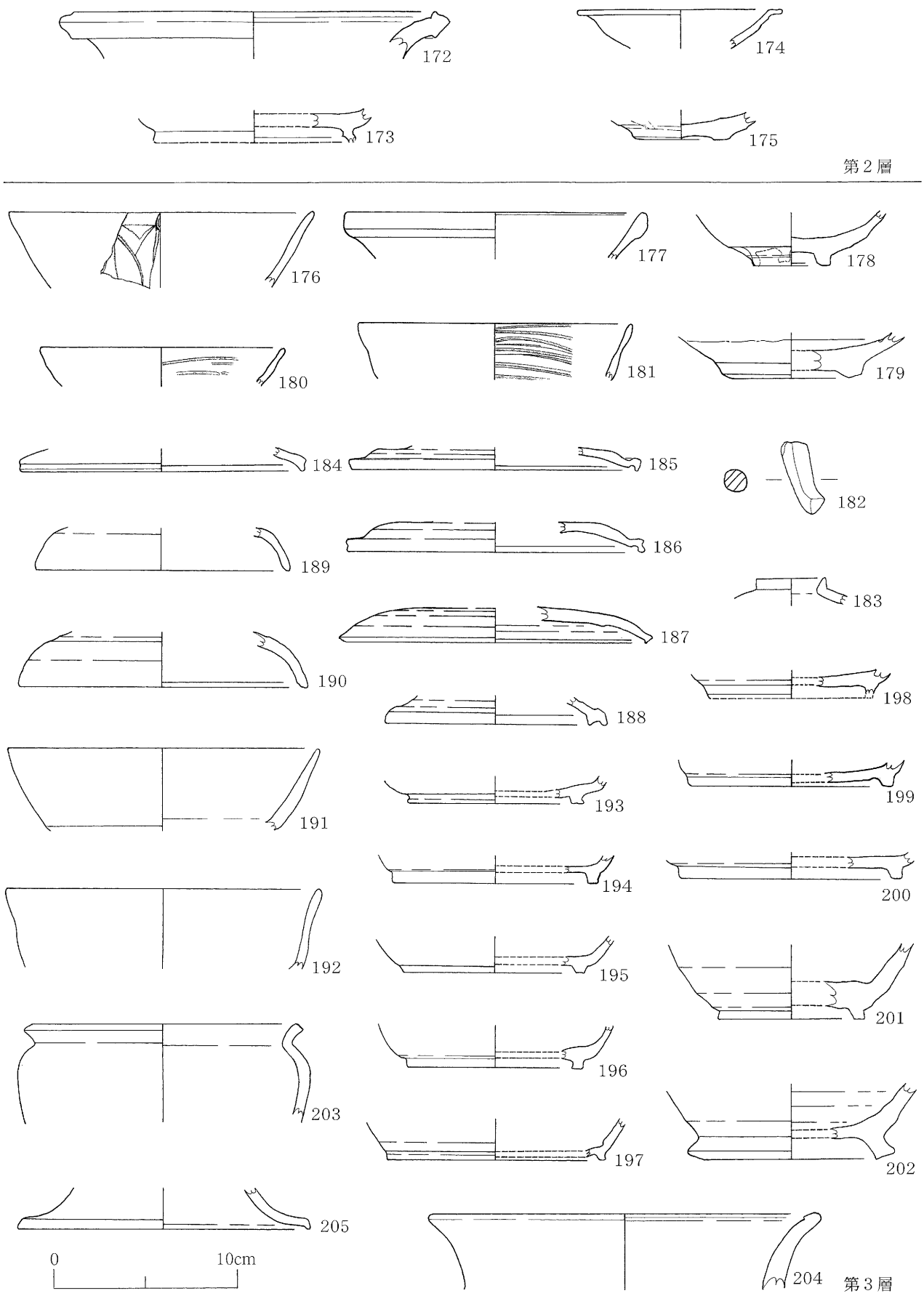
182は三足の脚を持つ羽釜である。下部に向かって細くなる。下部でややＬ字形に折れ曲がる。調整法は磨滅のため不明である。中世期。

239は鉢の底部である。平底を呈する。体部は外上方へ立ち上がる。外面はナデ調整する。内面の調整法は不明である。中世期。

183～205、236～238は須恵器である。短頸壷・蓋杯・杯・底部・甕・壷・高杯・捏鉢の器種がある。

183は短頸壷である。体部は外方向に内傾する。口縁部は直立し、口縁端部は丸く終わる。内外面を回転ナデ調整する。

184～190は蓋杯である。184・187は口縁部が内湾気味に下がる。口縁端部は面を持つ。内外面は



第19図　第２・３層出土土器実測図

回転ナデ調整する。188は口縁部が内湾気味に下がる。口縁端部は丸く終わる。内面に短いかえりが付く。内外面は回転ナデ調整する。185・186は天井部がやや平らな面を持つ。口縁部は外折する。口縁端部は下方へ拡張する。内外面は回転ナデ調整する。189は口縁部が内湾気味に下がる。口縁端部は丸く終わる。内外面を回転ナデ調整する。190は口縁部が内湾気味に下がり、口縁部に至る。口縁端部は丸く終わる。天井部外面はヘラケズリ調整する。口縁部内外面は回転ナデ調整する。外面に自然釉が付着する。189・190は古墳時代。

191・192は杯である。191は体部が外上方へ立ち上がり、口縁部に至る。口縁端部はやや尖り気味に終わる。内外面は回転ナデ調整する。192は体部がやや直立して立ち上がり、口縁部に至る。口縁端部は丸く終わる。内外面を回転ナデ調整する。

193～202は底部である。高台が付く。体部は外上方へ立ち上がる。高台部は低く、やや内傾するものや直立するものがある。193は高台端部に窪みを持つ。内外面は回転ナデ調整する。

203・236は甕である。203は口頸部がゆるく外反する。口縁端部は内側へ肥厚する。内外面は回転ナデ調整する。236は頸部が外反し、口縁部を上方へ拡張する。口縁端部は面を持つ。内外面は回転ナデ調整する。

204は壷である。体部は肩で張り、口縁部が短く外反する。口縁端部は面を持つ。内外面は回転ナデ調整する。

205は高杯の脚部である。裾部はゆるやかに立ち上がる。裾端部は下方へ摘み上げ気味に拡張する。内外面は回転ナデ調整する。古墳時代。

237・238は捏鉢である。体部が外上方へ伸び、口縁端部を上方へ拡張する。口縁端部に片口が付く。内外面は回転ナデ調整する。中世期。

206～235・239～245は土師器である。皿・杯・甕・底部・高杯・鍋・甑・羽釜・竈の器種がある。

206～209は皿である。206は体部が内湾して立ち上がり、口縁部に至る。口縁端部が丸く終わる。体部内外面はナデ調整する。207は体部が内湾して立ち上がり、口縁部がゆるく外反する。口縁端部は内側へやや肥厚する。体部内外面はナデ調整する。208は口縁部がゆるく外反し、口縁端部が丸く終わる。体部外面の下部をヘラケズリ調整し、上部をヨコナデ調整する。内面は放射状の暗文を施す。209は体部が外上方へ大きく立ち上がりラッパ状を呈する。口縁端部は丸く終わる。体部内外面はナデ調整する。206・207・209は中世期。

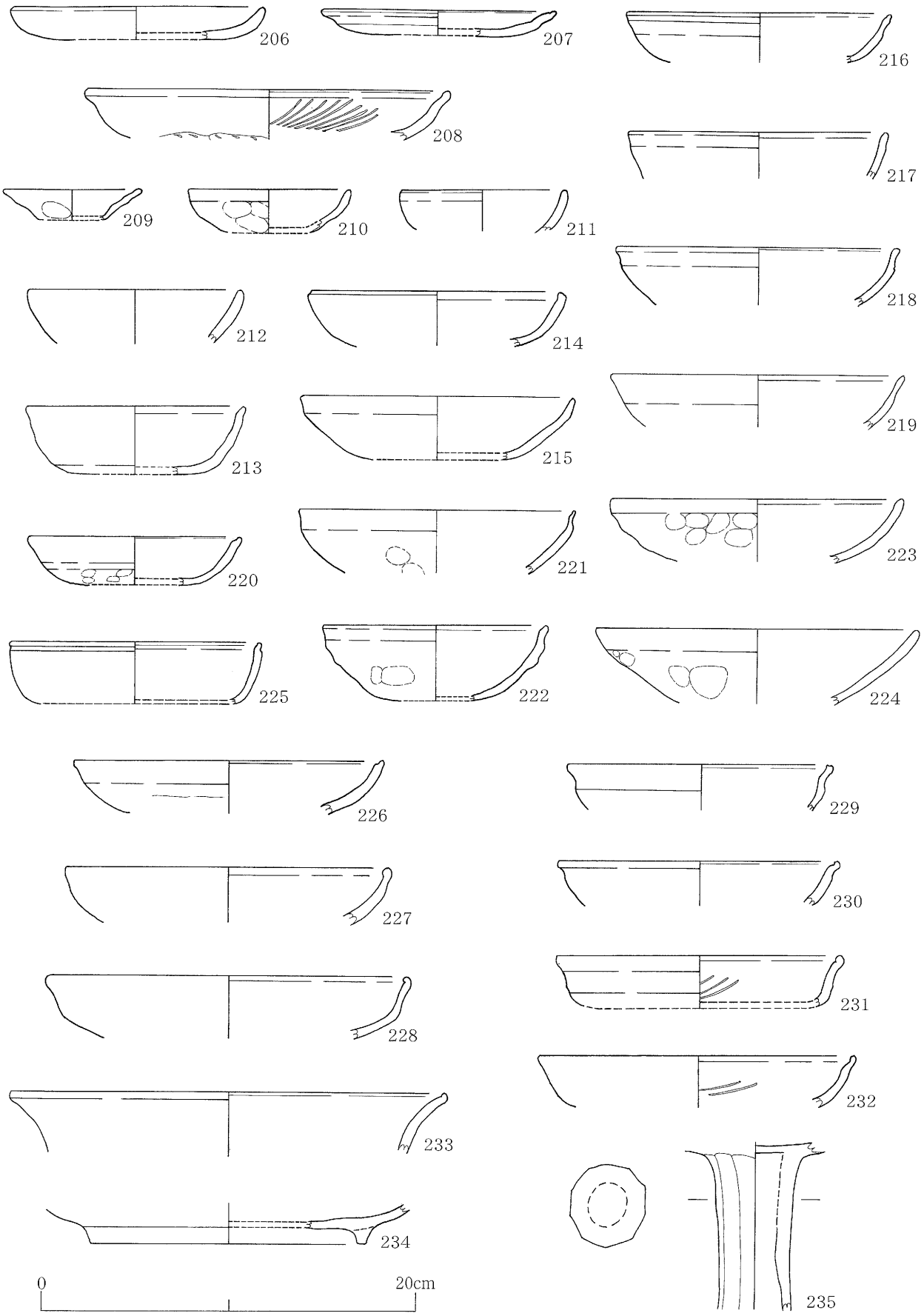
210～232は杯である。口縁端部が丸く終わるものや内側へ巻き込むものが多い。内面に段を持つものがある。210～223は体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部に至る。224は体部が外上方へ立ち上がり、口縁部に至る。225は直立気味に立ち上がり、口縁部に至る。229は体部外面に稜を持ち、口縁部で内湾する。231は体部がやや外方向に立ち上がり、口縁部で内湾する。体部内外面はナデ調整、口縁部内外面はヨコナデ調整するものが多い。231・232は体部内面に放射状の暗文を施す。210・220～224は体部に指頭圧痕が残る。

233は甕である。口縁部は大きく外反し、口縁端部は内側へやや肥厚する。内外面はヨコナデ調整する。

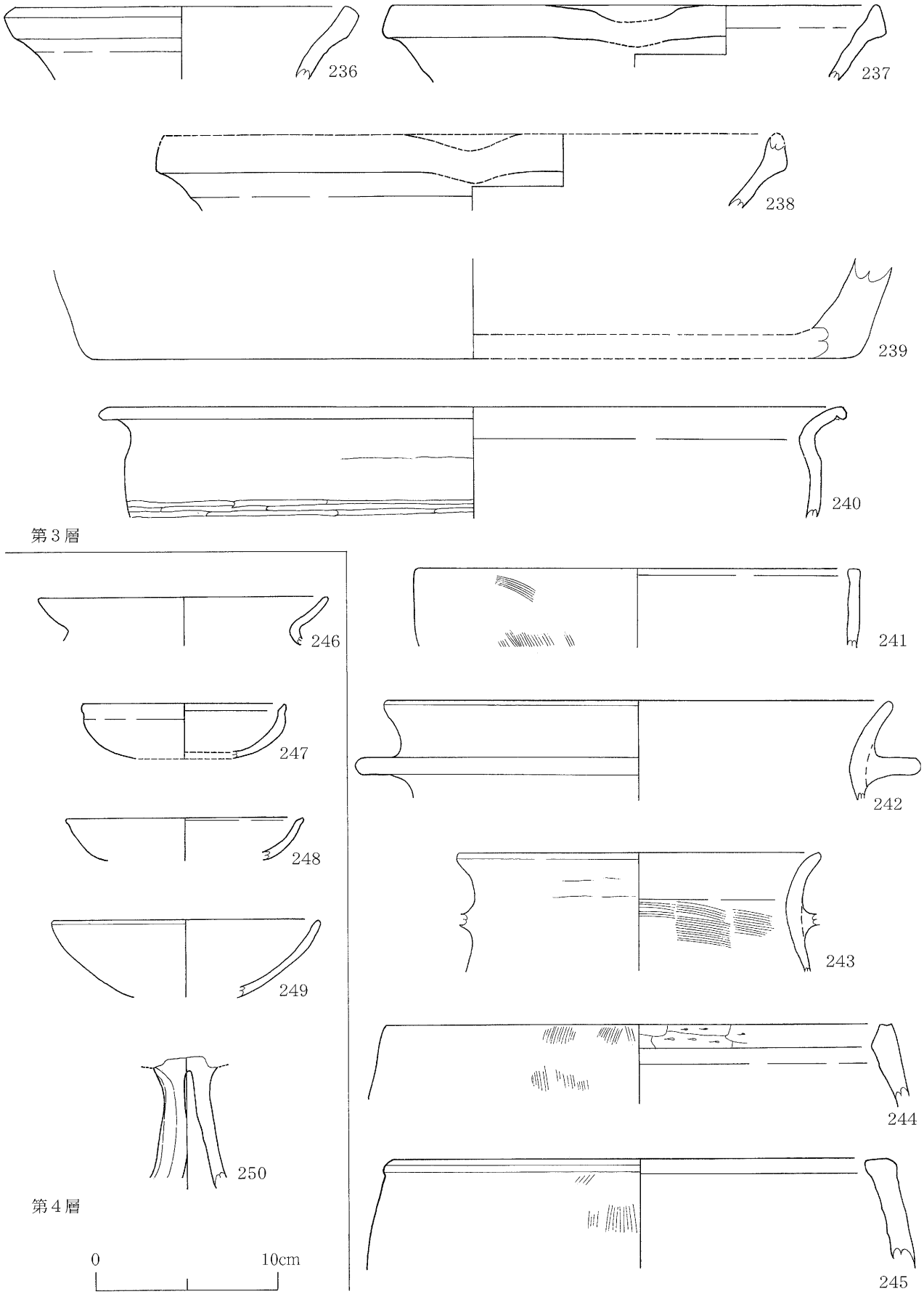
234は底部である。高台が付く。体部は外上方へ立ち上がる。高台部は高く直立する。内外面はナデ調整する。

235は高杯の脚部である。柱状部であり、中空である。外面はヘラ状工具で面取りをする。10面で終わる。

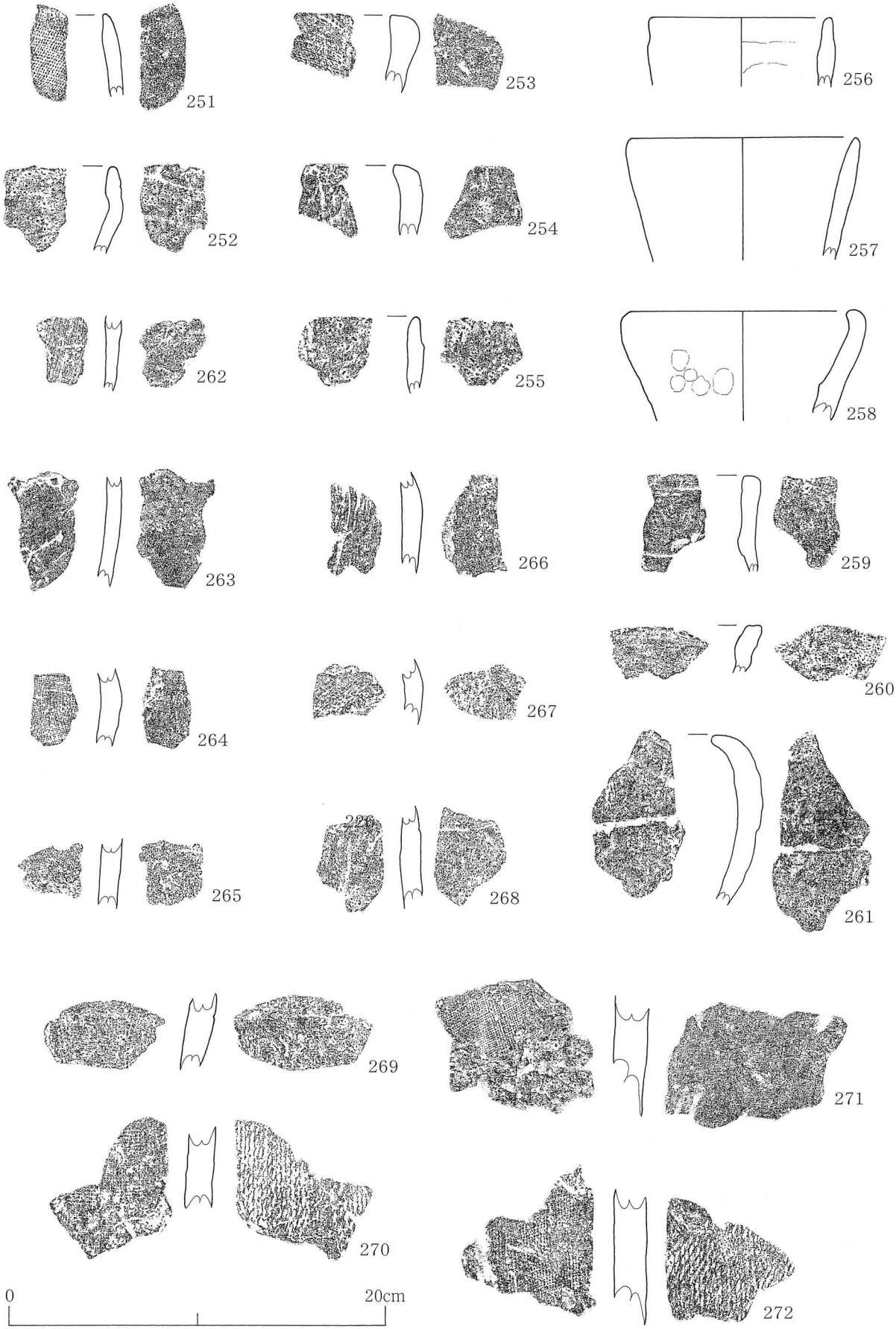
240は鍋である。体部の張りは少なく、口縁部が大きく外反する。口縁端部は外側へ肥厚する。体



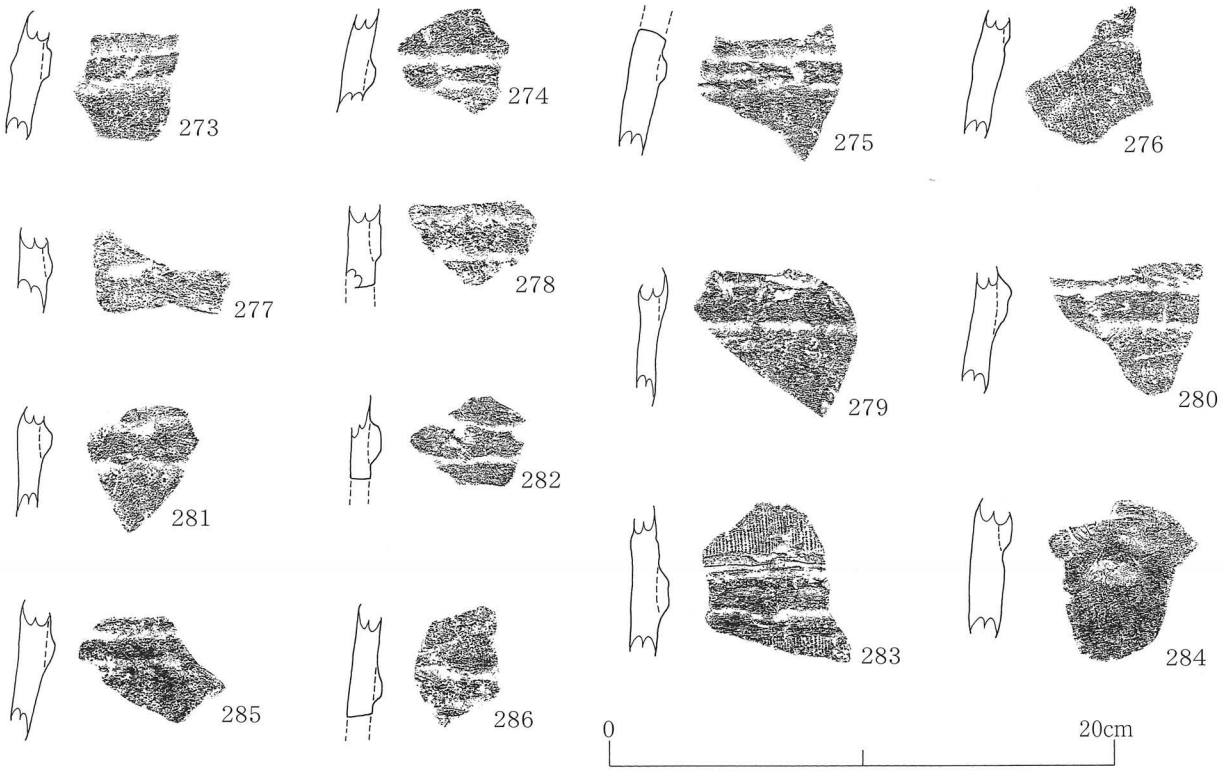
第20図　第３層出土土器実測図



第21図　第３・４層出土土器実測図



第22図　第３層出土土器・瓦実測図



第23図　第３層出土埴輪実測図

部外面はヘラミガキ調整、内面はナデ調整する。

241は甑である。体部は上方へ伸び、口縁部に至る。口縁端部はやや面を持つ。外面はハケメ調整、内面はナデ調整する。

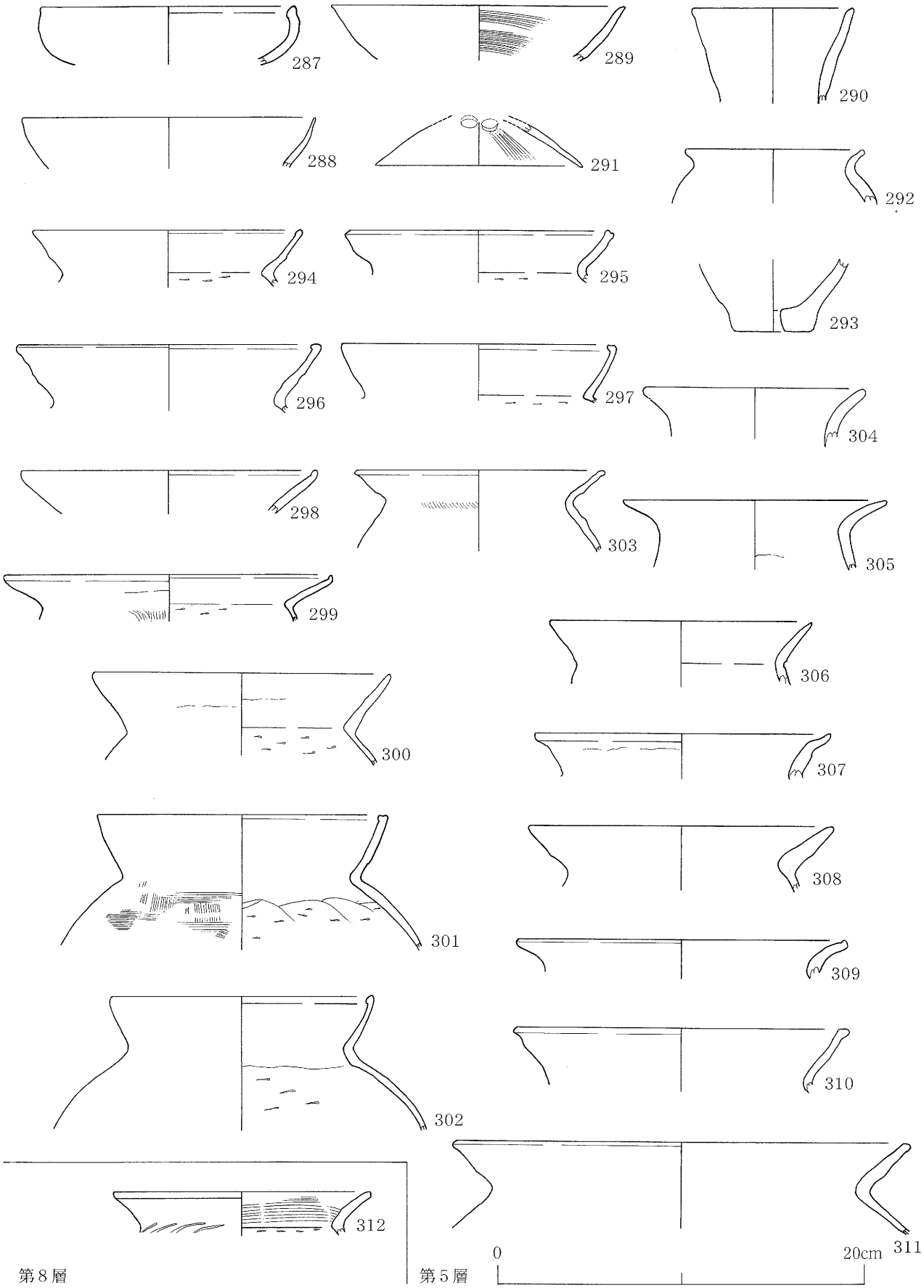
242・243は羽釜である。口縁部が大きく外反し、口縁端部は丸く終わる。鍔は水平方向に伸びる。口縁部内外面はヨコナデ調整する。242は体部内外面をナデ調整する。243は体部外面をナデ調整、内面をハケメ調整する。生駒西麓産である。

244・245は竈である。体部は内傾して立ち上がり、口縁端部内面に段を持つ。体部外面はハケメ調整し、内面はナデ調整する。244は口縁部内面を横方向のヘラケズリ調整、245はヨコナデ調整する。生駒西麓産である。

251～269は製塩土器である。251・252・262・263は薄手のものである。253・254～269は厚手のものである。251～261は口縁部である。内湾するものと直立気味に立ち上がるものが多い。口縁端部は丸く終わるものとやや尖るものがある。251・253・262は外面をナデ調整する。内面は布目痕が残る。252・254・255～261は内外面をナデ調整する。263～268は体部である。263～267は外面をナデ調整する。内面に布目痕が残る。268・269は内外面をナデ調整する。258・262は外面に指頭圧痕が残る。

270～272は瓦である。270・271は丸瓦である。272は平瓦である。凸面は縄目のタタキ調整する。凹面は布目痕（8本/cm×8本/cm）が残る。271は外面の調整法は不明である。

273～286は円筒埴輪である。体部である。タガは高さが低い。断面形が台形を呈し、やや窪みを持つ。M字形が退化したものである。273～282・284～286は内外面ともに磨滅しているため調整法が不明である。283は外面を縦方向のハケメ調整、内面をナデ調整する。古墳時代。



第24図　第５・８層出土土器実測図

第４層（第21図246～250）

246～250は土師器である。甕・鉢・高杯の器種がある。

246は甕である。口縁部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸く終わる。内外面の調整法は磨滅のため不明である。布留式期。

247は鉢である。体部はやや丸く、口縁部が短く外反する。口縁端部は丸く終わる。内外面はナデ調整する。庄内～布留式期。

248～250は高杯である。体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部に至る。口縁端部は丸く終わる。内外面の調整法は不明である。250は脚部である。ゆるやかに立ち上がる。中空である。外面は縦方向にヘラミガキ調整、内面ナデ調整する。絞り痕が残る。庄内～布留式期。

第５層（第24図287～311）

287～311は土師器である。鉢・高杯・壷・器台・甕・底部の器種がある。

287は鉢である。体部は椀状を呈する。口縁端部はやや上方へ摘み上げる。内外面はナデ調整する。庄内～布留式期。

288・289は高杯の杯部である。杯部が大きく外上方へ立ち上がり、口縁部に至る。口縁端部はやや尖り気味に終わる。288は調整法が不明である。289は外面をナデ調整、内面を横方向のハケメ調整する。庄内～布留式期。

290は壷である。頸部はやや外上方へ立ち上がり、口縁部に至る。口縁端部は丸く終わる。調整法は不明である。庄内～布留式期。

291は器台の脚部である。強く内傾して立ち上がる。端部はやや尖り気味に終わる。円形の透かし孔が１ヶ所残る。外面はナデ調整、内面をハケメ調整する。庄内～布留式期。

292・294～311は甕である。292・294～311は口縁部が大きく外上方へ立ち上がるものが多い。294～299・301・302は口縁端部が内側へ肥厚する。300・304・305・306～311は口縁端部が丸く終わるものとやや尖り気味に終わるものがある。300～302は体部が大きく張る。300・302は体部外面をナデ調整、301は外面をハケメ調整する。内面はヘラケズリ調整する。庄内～布留式期。

293は底部である。平底を呈する。底面中央に円孔を穿つ。内外面はナデ調整する。庄内～布留式期。

第８層（第24図312）

312は土師器の甕である。口縁部は大きく外上方へ立ち上がり、口縁端部は面を持つ。体部外面はタタキ調整、内面はヘラケズリ調整する。口縁部内面は横方向のハケメ調整する。庄内～布留式期。

２）Ⅳ工区の出土土器

遺構及び遺物包含層に分けて記す。

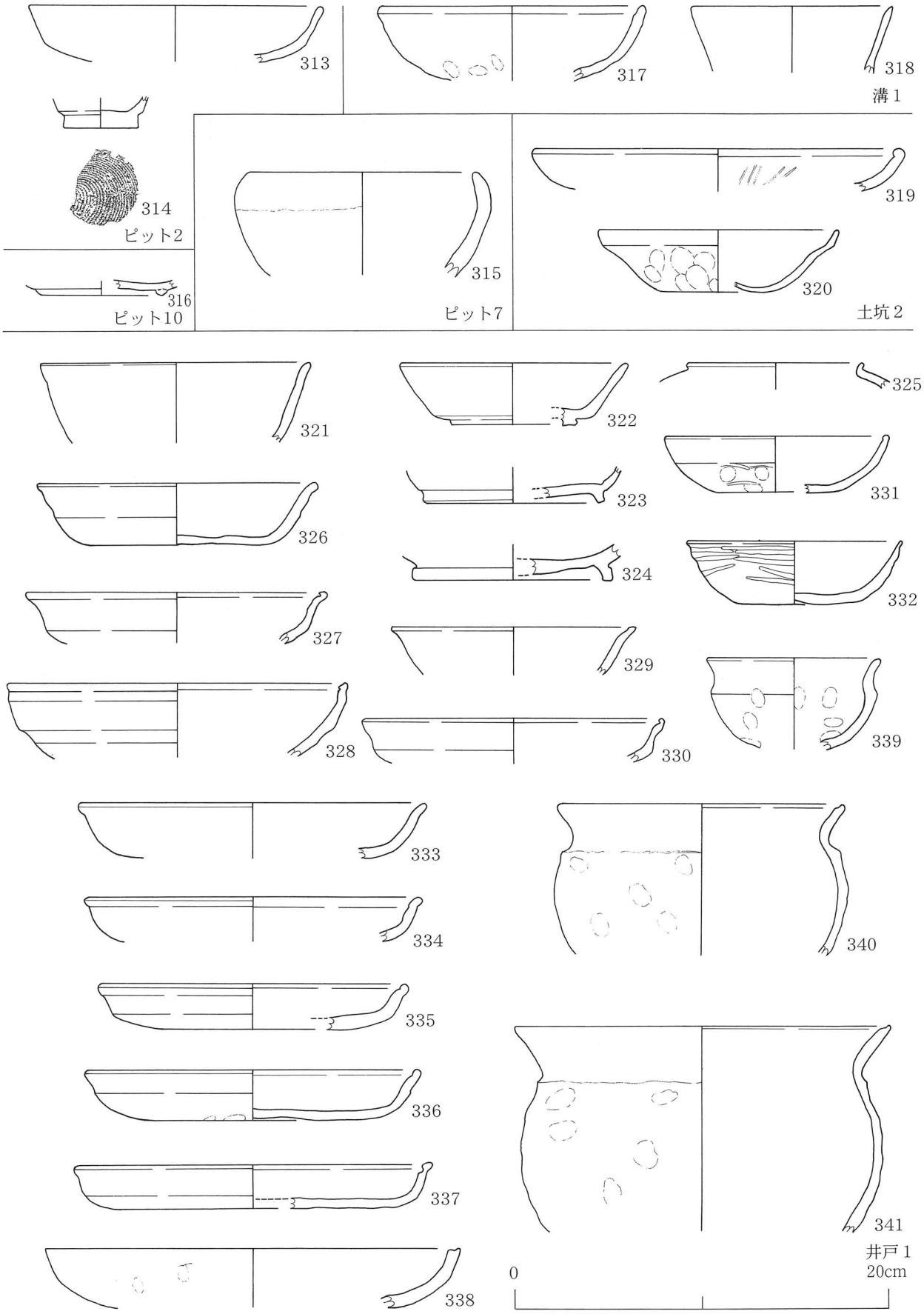
古墳時代以降の遺構出土土器

文章の末尾に時期を記していない資料は奈良～平安時代初めのものである。

ピット２（第25図313・314）

土師器・須恵器がある。

313は土師器の杯である。体部はやや内湾して立ち上がり、口縁部に至る。口縁端部は丸く終わる。



第25図　ピット２・７・10、溝１、土坑２、井戸１出土土器実測図

体部内外面はナデ調整、口縁部はヨコナデ調整する。

314は須恵器の底部である。平底を呈する。底面に糸切り痕が残る。内外面は回転ナデ調整する。

ピット７（第25図315）

315は製塩土器である。厚手のものである。体部は外上方へ立ち上がる。口縁部は内湾し、口縁端部は丸く終わる。内外面はナデ調整する。

ピット10（第25図316）

316は土師器の底部である。高台が付く。高台は低く、断面形が三角形を呈する。内外面はナデ調整する。

土坑２（第25図319・320）

319・320は土師器である。皿・杯の器種がある。

319は皿である。体部は内湾して立ち上がり、口縁部に至る。口縁端部は内側へ肥厚する。口縁部内外面はヨコナデ調整する。内面に放射状の暗文を施す。

320は杯である。体部は外上方へ立ち上がる。口縁部はやや内湾し、口縁端部が丸く終わる。内外面はナデ調整する。体部外面に指頭圧痕が残る。

溝１（第25図317・318）

土師器・須恵器がある。

317は土師器の杯である。体部は内湾して立ち上がり、口縁部に至る。口縁端部は内面に稜を持つ。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部はナデ調整する。体部外面に指頭圧痕が残る。

318は須恵器の杯である。体部はやや外上方へ立ち上がる。口縁端部は尖り気味に終わる。内外面は回転ナデ調整する。

井戸１（第25～27図321～381）

須恵器・土師器・製塩土器がある。

321～325は須恵器である。杯・底部・短頸壷の器種がある。

321・322は杯である。体部は外上方へ立ち上がり、口縁部に至る。口縁端部は丸く終わる。322は高台が付く。高台は低く、直立する。内外面は回転ナデ調整する。

323・324は底部である。高台が付く。体部は外上方へ立ち上がる。323は高台部が低く、内傾する。324は高台部がやや高く、内湾する。内外面は回転ナデ調整する。

325は短頸壷である。体部は大きく張る。口縁部は短く外反し、口縁端部は丸く終わる。内外面は回転ナデ調整する。

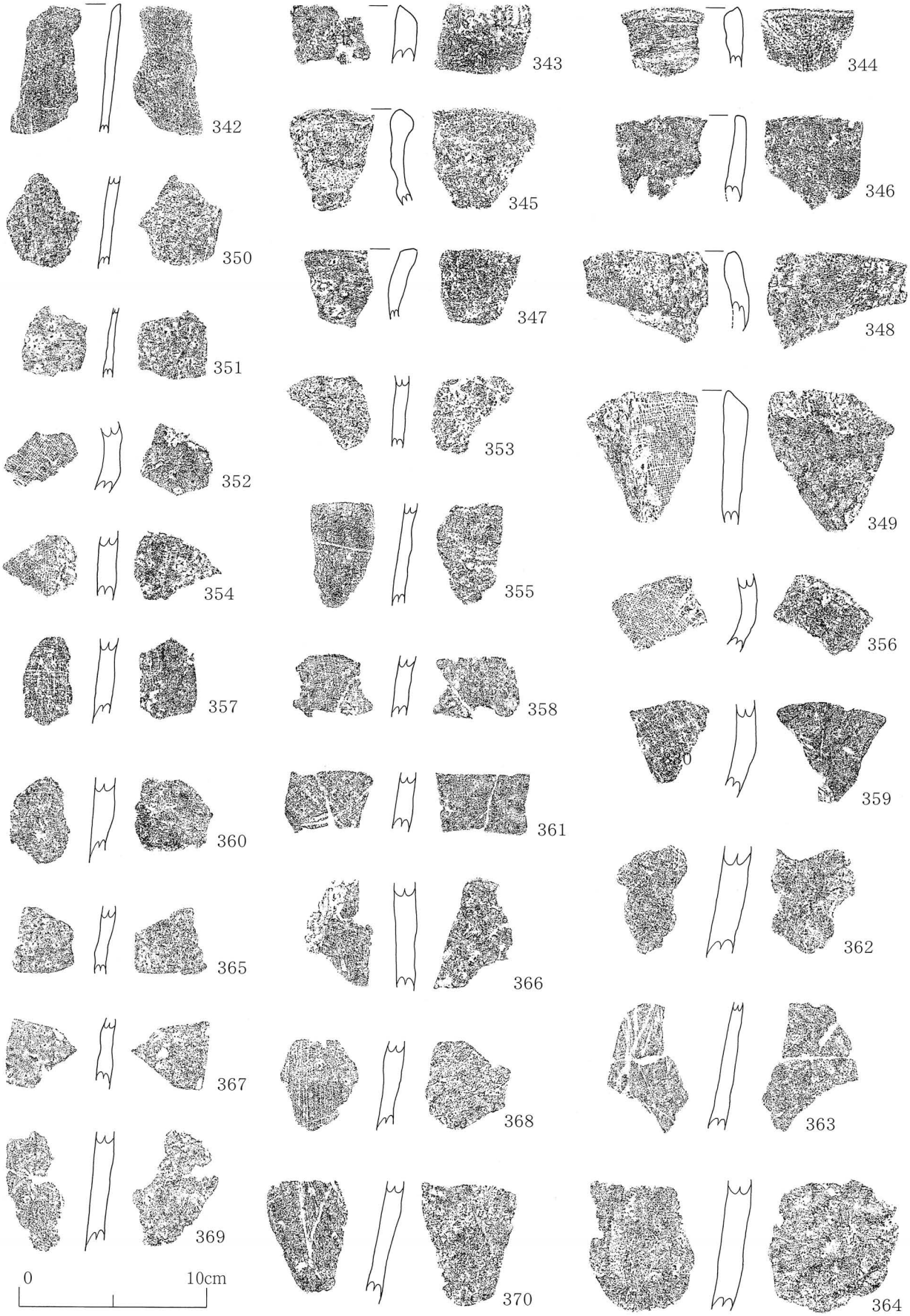
326～341・377～381は土師器である。杯・皿・坩・甕・羽釜・竈の器種がある。

326～332は杯である。体部はやや内湾気味に立ち上がるものが多い。口縁端部は丸く終わるものと内側へ肥厚するものがある。326～330は体部内外面をナデ調整、口縁部をヨコナデ調整する。331・332は体部外面をヘラミガキ調整する。331は体部外面に指頭圧痕が残る。328は外面に煤が付着する。

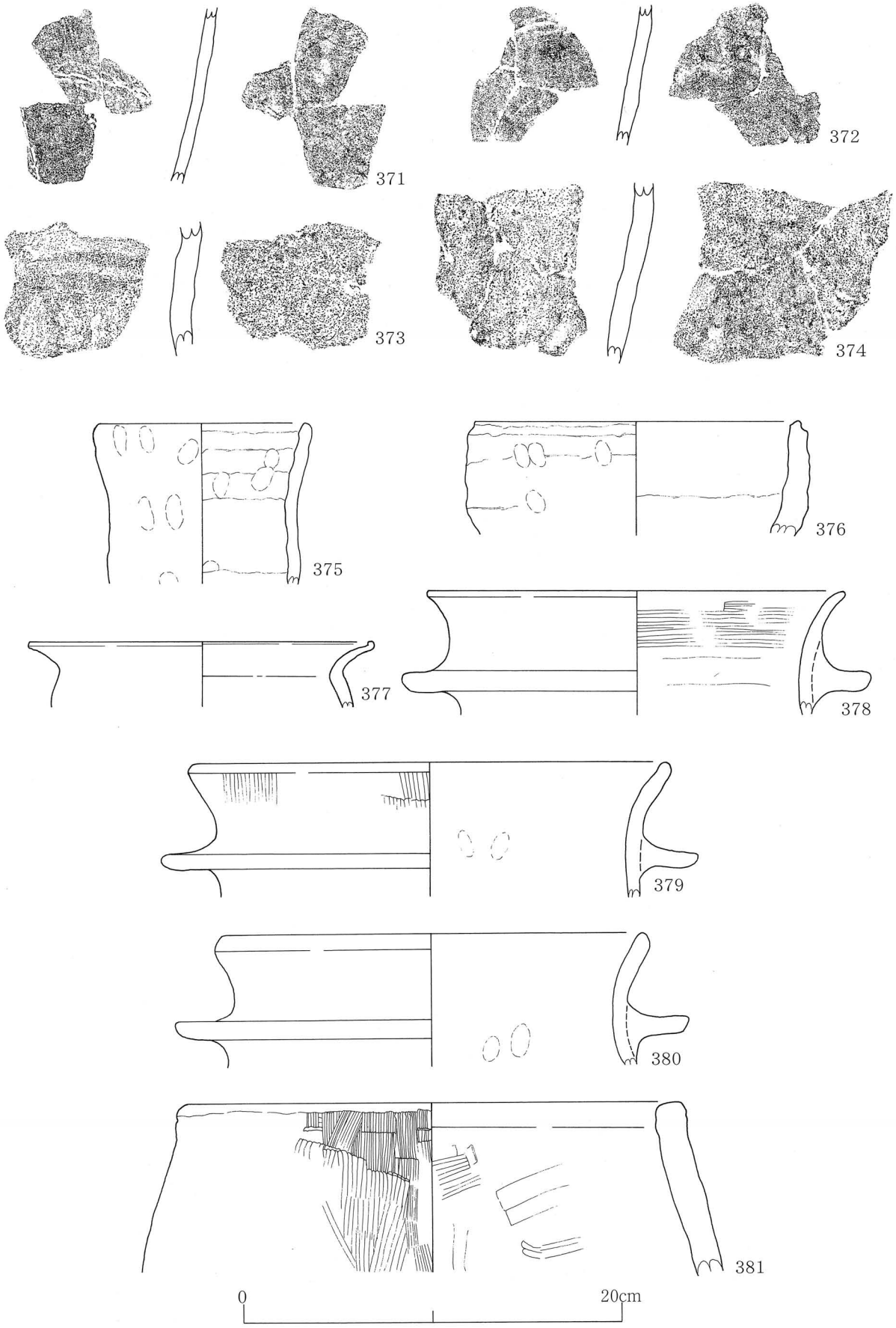
330・333～338は皿である。体部はやや外上方へ立ち上がるものが多い。口縁端部は丸く終わるものと内側に肥厚するものがある。体部内外面をナデ調整、口縁部はヨコナデ調整する。

339は坩である。体部の張りは少なく、口縁部がゆるく外反する。口縁端部は丸く終わる。体部内外面はナデ調整、口縁部はヨコナデ調整する。

340・341・377は甕である。体部は大きく張る。口縁部は外反し、口縁端部はやや窪みを持つ。口縁部と体部の境に稜が付く。体部内外面はナデ調整、口縁部はヨコナデ調整する。体部外面に指頭圧



第26図　井戸１出土土器実測図



第27図　井戸１出土土器実測図

痕が残る。377は長胴の甕である。体部の張りは少ない。口縁部は強く外反し、口縁端部が内側へ肥厚する。体部内外面はナデ調整、口縁部はヨコナデ調整する。

378～380は長胴の羽釜である。口縁部は大きく外反し、口縁端部は丸く終わる。鍔は水平方向へ伸びる。378は体部内外面をナデ調整、口縁部内面を横方向のハケメ調整する。379は口縁部外面を縦方向のハケメ調整、内面をナデ調整する。380は体部内外面をナデ調整する。内面に指頭圧痕が残る。生駒西麓産である。

381は竈である。体部は内傾して立ち上がる。口縁端部は面を持つ。内外面はハケメ調整する。生駒西麓産である。

342～376は製塩土器である。342・350・351・371は薄手のものである。343～349・352～374は厚手のものである。342～349は口縁部である。内湾するものや直立して立ち上がるものが多い。口縁端部は丸く終わるものと尖り気味に終わるものが多い。345は口縁端部が肥厚する。342・349は外面をナデ調整する。内面に布目痕が残る。343～348は内外面をナデ調整する。350～374は体部である。350～364・371は外面をナデ調整する。内面に布目痕が残る。365～374は内外面をナデ調整やヨコナデ調整するものが多い。358・359・371は外面に指頭圧痕が残る。375・376は体部から口縁部まで残る。375は体部が直立気味に立ち上がる。口縁部はやや内湾し、口縁端部は丸く終わる。376は体部がやや内湾して口縁部に至る。口縁端部はやや尖り気味に終わる。内外面に指頭圧痕や粘土接合痕が残る。

古墳時代以降の遺物包含層出土土器

第２層（第28図382～385）

土師器・瓦器がある。

382・383は土師器の皿である。382は体部が外上方へ立ち上がり、口縁部に至る。口縁端部は丸く終わる。体部内外面はナデ調整、口縁部はヨコナデ調整する。383は口縁部が外反する。口縁端部は内側へやや肥厚する。体部内外面はナデ調整、口縁部をヨコナデ調整する。中世期。

384・385は瓦器椀の底部である。384は高台がわずかに付く。見込み部に平行線状の暗文を施す。385は高台が低く、内傾する。断面形は三角形を呈する。見込み部に斜格子状の暗文を施す。中世期。

第３層（第28～30図386～456）

製塩土器・須恵器・土師器・黒色土器・形象埴輪がある。

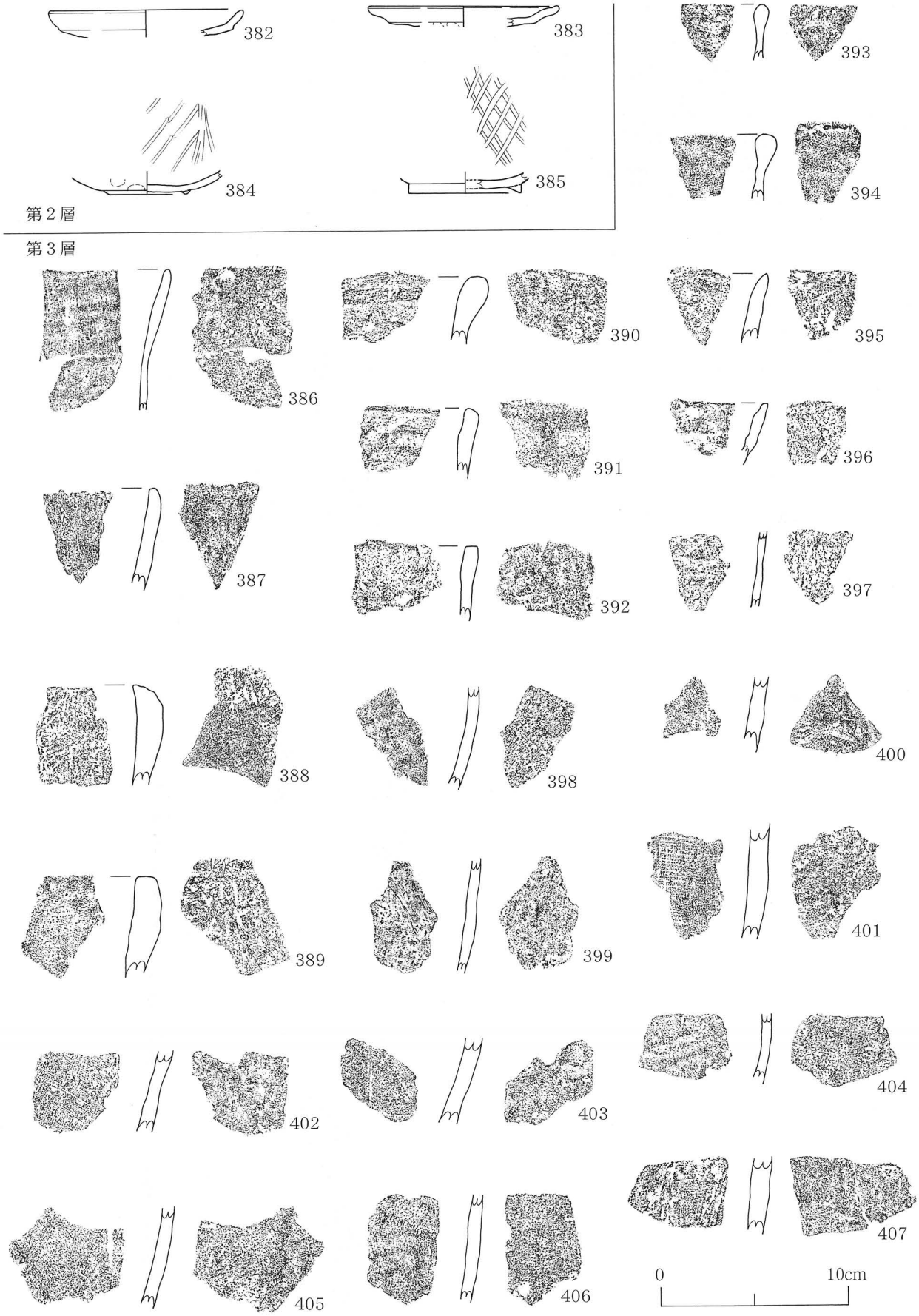
386～407は製塩土器である。386・397・398・399は薄手のものである。387～396・400～407は厚手のものである。386～397は口縁部である。外傾するものややや直立気味に立ち上がるものが多い。口縁端部は丸く終わるものとやや尖るものがある。390・393・394は口縁端部が肥厚する。内外面をナデ調整する。398～407は体部である。400～403は外面をナデ調整する。内面に布目痕が残る。397～399は外面に指頭圧痕が残る。398・399・404～407は内外面をナデ調整する。

408～416・456は須恵器である。鉢・杯・横瓶・壷・底部・甕の器種がある。

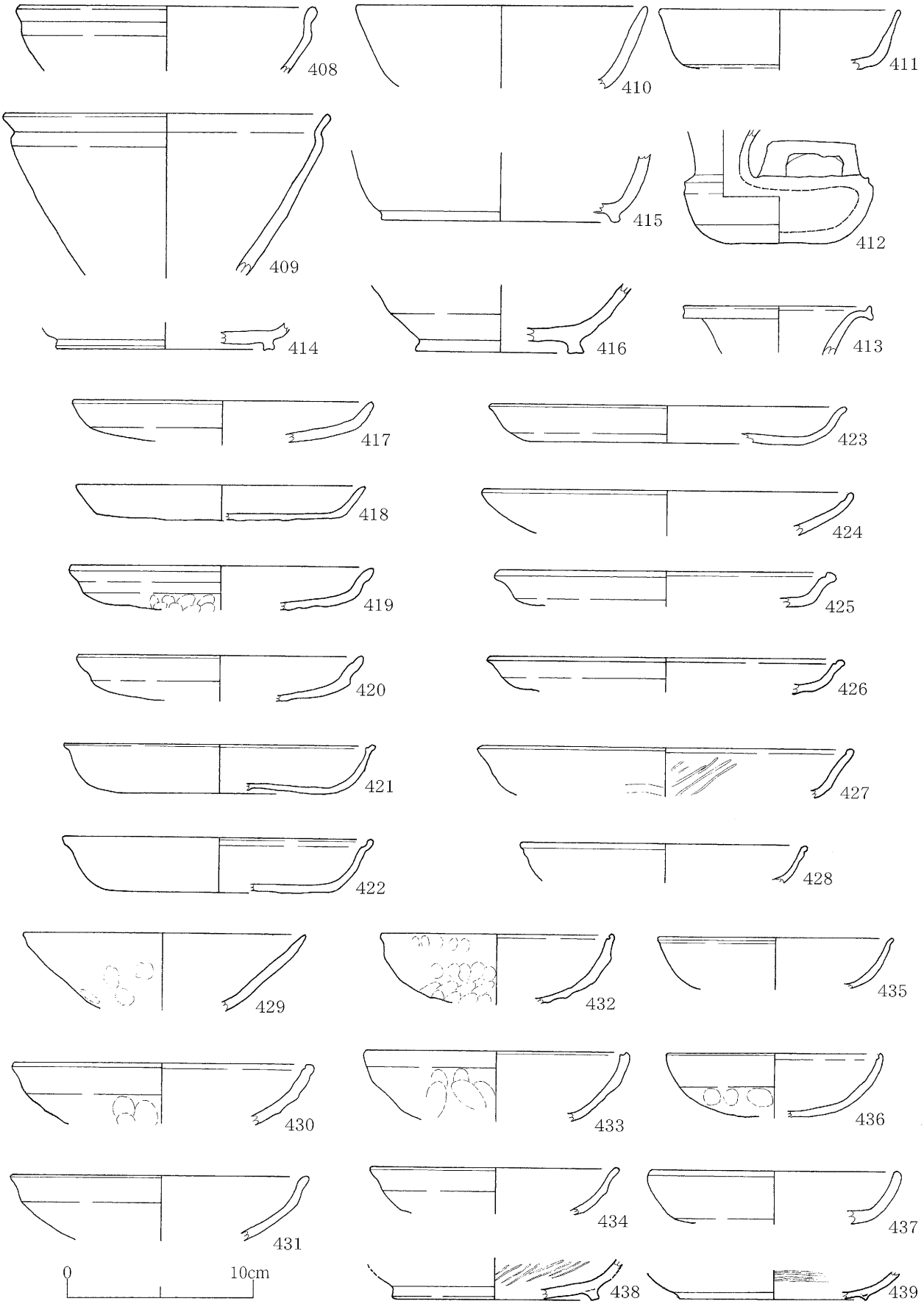
408・409は鉢である。体部は大きく外上方へ立ち上がり、口縁部付近で内湾する。口縁部は強く外反し、口縁端部は丸く終わる。体部内外面は回転ナデ調整する。

410・411・415は杯である。体部は外上方へ立ち上がる。410・411は口縁端部がやや尖り気味に終わる。415は高台が付く。高台部は低く、内傾する。内外面は回転ナデ調整する。

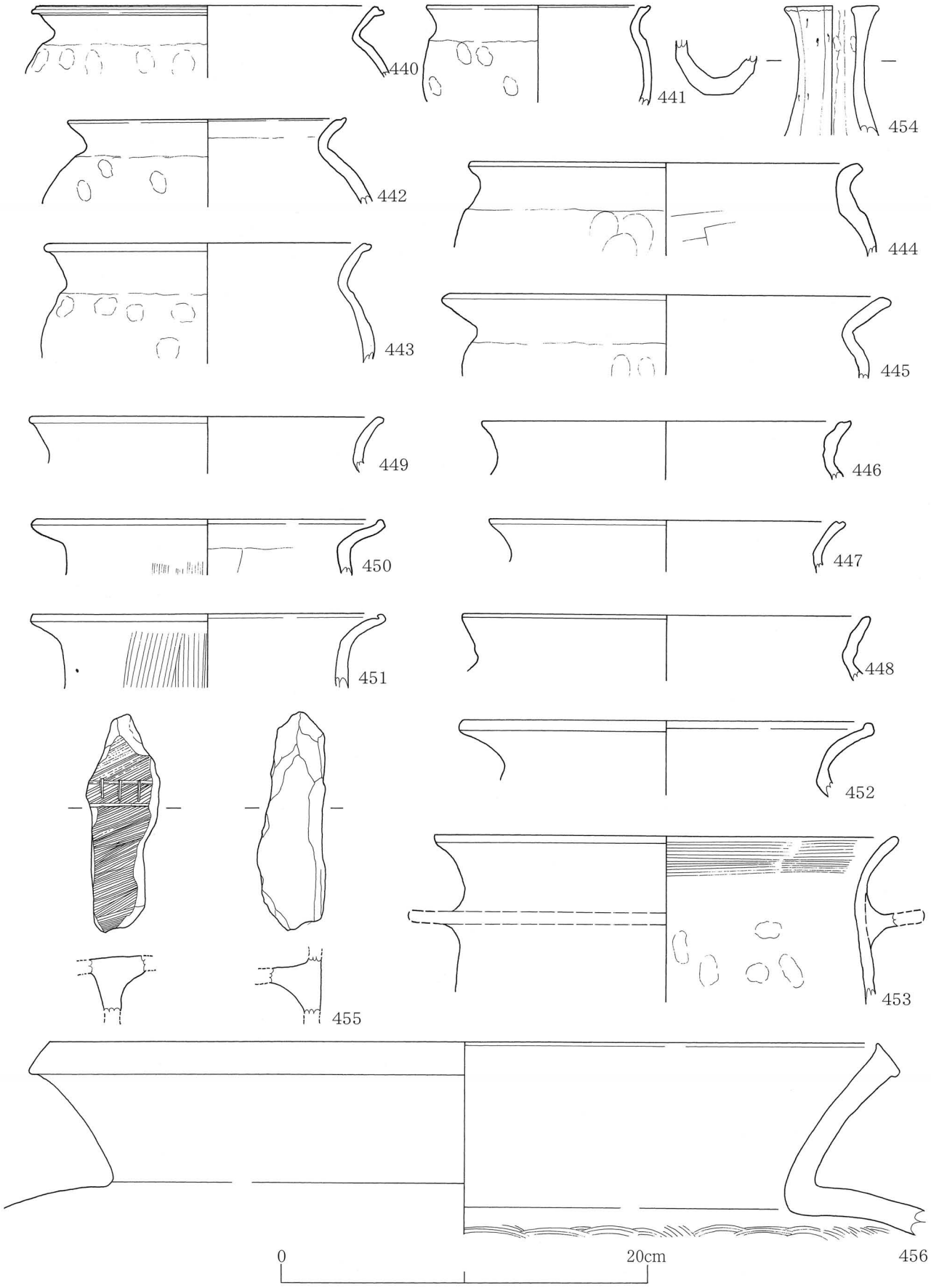
412は横瓶である。体部は内湾し、口頸部に至る。口頸部はやや外反する。体部に方形状の把手が



第28図　第２・３層出土土器実測図



第29図　第３層出土土器実測図



第30図　第３層出土土器・埴輪実測図

付く。底部は平底を呈する。外面は回転ナデ調整する。把手はナデ調整する。内外面に自然釉が付着する。

413は壷である。口頸部は大きく外反する。口縁端部は上方へ拡張する。内外面は回転ナデ調整する。内面に自然釉が付着する。

414・416は底部である。高台が付く。414は高台部が低く、内傾する。416は体部が外上方へ大きく立ち上がる。高台部は高く、やや内傾する。内外面は回転ナデ調整する。

456は甕である。体部は大きく張る。口縁部は大きく外折する。口縁端部は面を持つ。体部外面は回転ナデ調整する。内面に青海波の当て具痕が残る。口縁端部は回転ナデ調整する

417～454は土師器である。皿・杯・椀・底部・甕・底部・甕・羽釜・高杯の器種がある。

417～420・423～426は皿である。体部は外上方へ立ち上がる。口縁端部は丸く終わるものや内側へ肥厚するものが多い。体部内外面はナデ調整、口縁部はヨコナデ調整する。

421・422・427・428は杯である。421・422は体部がやや内湾気味に立ち上がる。口縁部はゆるく外反し、口縁端部が内側へ肥厚する。体部内外面はナデ調整、口縁部はヨコナデ調整する。427・428は体部が外上方へ立ち上がり、口縁部に至る。口縁端部は427が内側へ肥厚する。428は外側へ肥厚する。体部内外面はナデ調整、口縁部はヨコナデ調整する。427は内面に放射状の暗文を施す。

429～437は椀である。体部がやや内湾するものや外上方へ立ち上がるものがある。口縁端部は丸く終わるものや内面に稜を持つものが多い。体部内外面はナデ調整、口縁部はヨコナデ調整する。429・432・433・436は体部外面に指頭圧痕が残る。

438は底部である。高台が付く。高台は低く、内傾する。外面の調整法は剥離しているため不明である。内面は放射状の暗文を施す。

440～452は甕である。440～445は体部が大きく張り、口縁部が強く外反する。口縁端部は丸く終わるものと面を持つものがある。口縁部と体部の境に稜が付く。体部内外面はナデ調整、口縁部はヨコナデ調整する。体部外面に指頭圧痕が残る。449～452は長胴の甕である。体部の張りは少なく、口縁部が大きく外反する。口縁端部は内側へ肥厚するものが多い。体部外面を縦方向のハケメ調整、内面はナデ調整する。口縁部はヨコナデ調整する。

453は羽釜である。体部は張りが少なく、口縁部は大きく外反する。口縁端部は丸く終わる。鍔部がわずかに残る。体部内外面はナデ調整する。口縁部外面はヨコナデ調整、内面を横方向のハケメ調整する。体部内面に指頭圧痕が残る。生駒西麓産である。

454は高杯の脚部である。柱状部はゆるやかに立ち上がる。中空である。外面はヘラ状工具で面取りをする。6面が残存する。内面をナデ調整する。絞り痕が残る。

439は黒色土器の底部である。高台が付く。高台部は低く、断面形は三角形を呈する。内外面はナデ調整する。内面は燻す。内黒である。

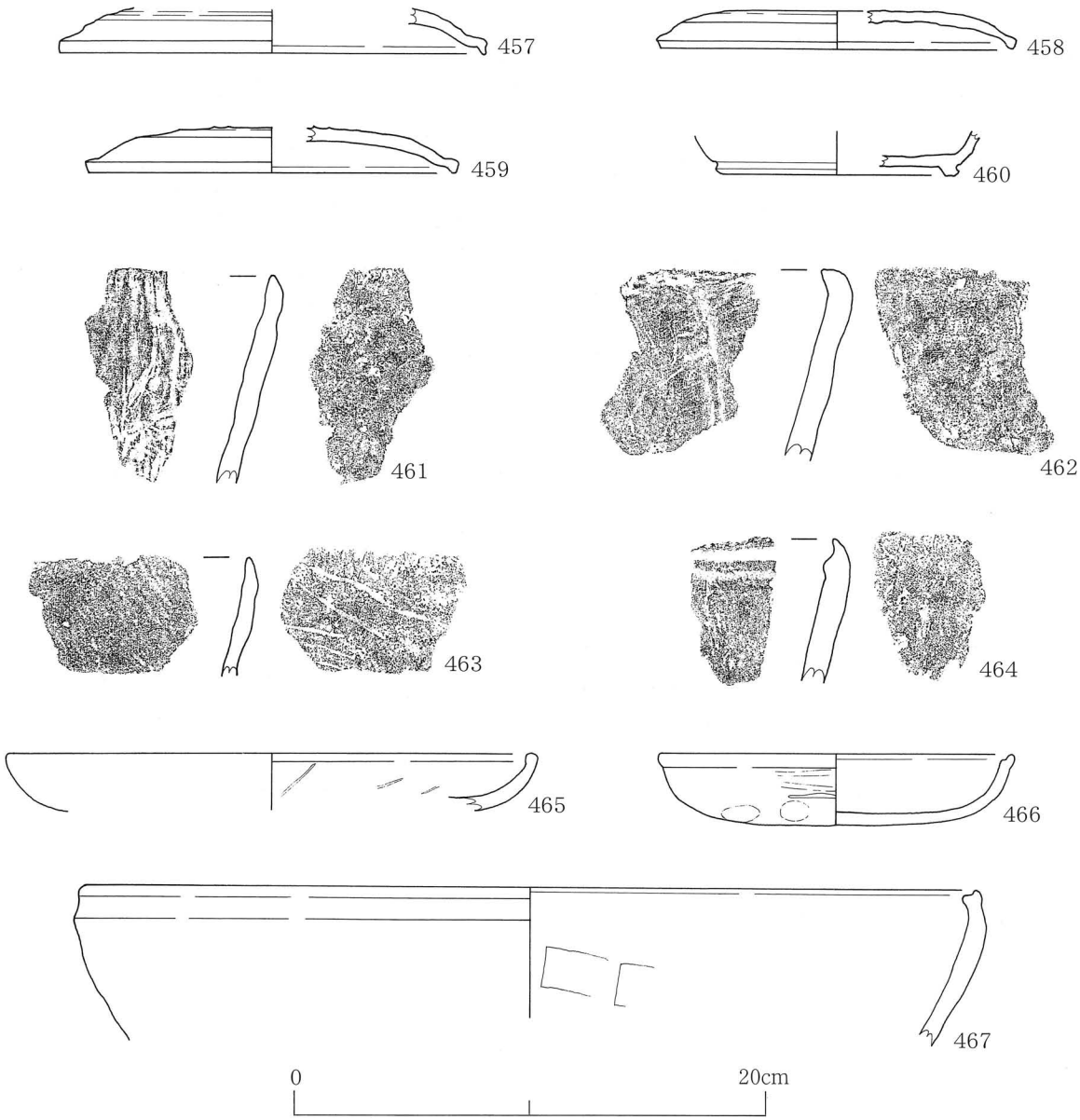
455は形象埴輪である。円筒部と接合する面が残る。横方向に平行する２本の線刻を施す。その上に縦方向の３本の線刻を施す。外面はハケメ調整、内面はナデ調整する。古墳時代。

層位不明土器（第31図457～467）

須恵器・製塩土器・土師器がある。

457～460は須恵器である。蓋杯・底部の器種がある。

457～459は蓋杯である。天井部はやや平らな面を持つ。口縁部はやや内湾気味に下がり、口縁端部を下方へ拡張する。天井部は回転ヘラケズリ調整、口縁部を回転ナデ調整する。



第31図　層位不明土器実測図

460は底部である。高台が付く。体部がやや内湾して立ち上がる。高台部は低く、内傾する。内外面は回転ナデ調整する。

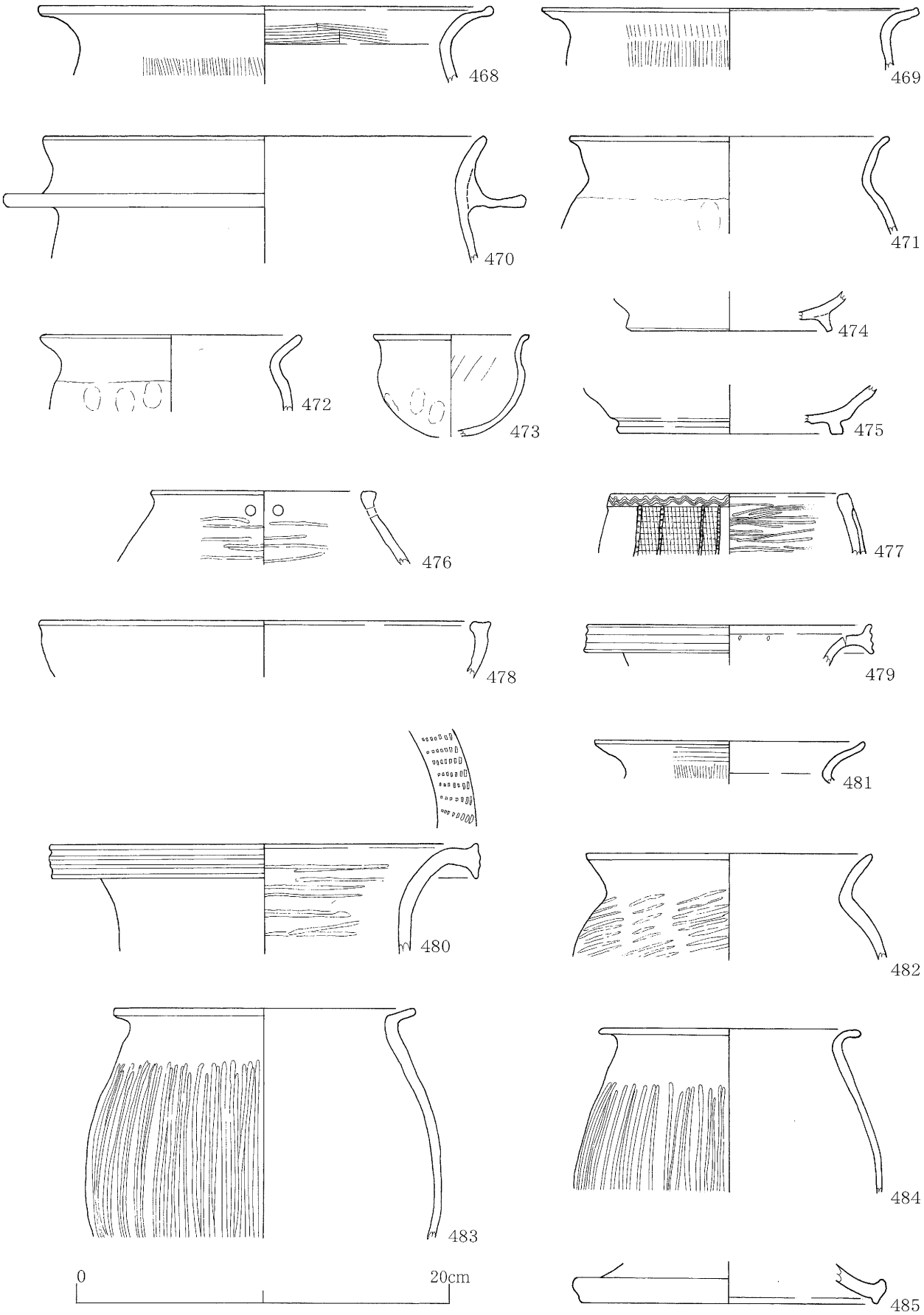
461～464は製塩土器である。461・463は薄手のものである。462・464は厚手のものである。口縁部である。体部は外上方へ立ち上がる。462・464は口縁端部付近で内湾する。464は内面に段を持つ。461・463は口縁端部が尖り気味に終わる。461・462は外面をナデ調整する。内面に布目痕が残る。463・464は内外面をナデ調整する。

465～467は土師器である。皿・杯・鉢の器種がある。

465は皿である。体部は内湾して立ち上がり、口縁部に至る。口縁端部は内側へ肥厚する。内外面はヨコナデ調整する。内面に放射状の暗文を施す。

466は杯である。体部は内湾して立ち上がり、口縁部に至る。口縁端部は内面に段を持つ。体部外面はヘラミガキ調整する。下半に指頭圧痕が残る。口縁部はヨコナデ調整する。

467は鉢である。体部が内湾して立ち上がり、口縁部はゆるく外反する。口縁端部は内面に段を持つ。外面は調整法が不明である。内面はナデ調整する。



第32図　Ⅴ工区採集土器実測図

3）Ⅴ工区採集遺物（第32図468～485）

土師器・須恵器・弥生土器・庄内式土器がある。

468～474は土師器である。甕・羽釜・坩・底部の器種がある。

468・469・471・472は甕である。468・469は長胴の甕である。体部の張りが少なく、口縁部が大きく外反する。口縁端部は内側へ肥厚する。体部外面は縦方向にハケメ調整、内面はナデ調整する。468は口縁部内面を横方向のハケメ調整する。471は体部が大きく張り、口縁部は強く外反する。口縁端部は丸く終わる。口縁部と体部の境に稜が付く。体部内外面はナデ調整、口縁部はヨコナデ調整する。体部外面に指頭圧痕が残る。472は小型の甕である。体部は大きく張り、内湾して口縁部に至る。口縁部はやや外反し、口縁端部は面を持つ。体部内外面はナデ調整する。体部外面に指頭圧痕が残る。口縁部はヨコナデ調整する。

470は羽釜である。体部の張りは少なく、口縁部は大きく外反する。口縁端部は丸く終わる。鍔は水平方向へ伸びる。体部内外面はナデ調整、口縁部はヨコナデ調整する。

473は坩である。体部が大きく張り、口縁部はゆるく外反する。口縁端部は面を持つ。体部内外面はナデ調整する。体部外面に指頭圧痕が残る。口縁部はヨコナデ調整する。

474は底部である。高台が付く。体部は外方向に立ち上がる。高台部は高く、内傾する。断面形は三角形を呈する。内外面をナデ調整する。

475は須恵器の底部である。高台が付く。体部は外上方へ立ち上がる。高台部は低く、内傾する。内外面は回転ナデ調整する。

476～480・482～485は弥生土器である。壷・鉢・甕・高杯の器種がある。

476・477・479・480は壺である。476はFタイプである。体部と口縁部の境に円形の小孔を穿つ。内外面をヘラミガキ調整する。477はGタイプである。体部に櫛描簾状文を施し、縦に２本１対の棒状浮文を貼り付ける。棒状浮文には刻み目を加える。口縁端部には櫛描波状文を施す。内面はヘラミガキ調整する。479・480はBタイプである。479は口縁端部に３条の凹線文を施す。口縁部に２ヶ１対の小円孔を穿つ。内外面はナデ調整する。外面に黒色塗料が付着する。480口縁端部に３条の凹線文、口縁部内面に櫛描列点文を施す。外面はナデ調整、内面はヘラミガキ調整する。480は非河内産、他は生駒西麓産である。

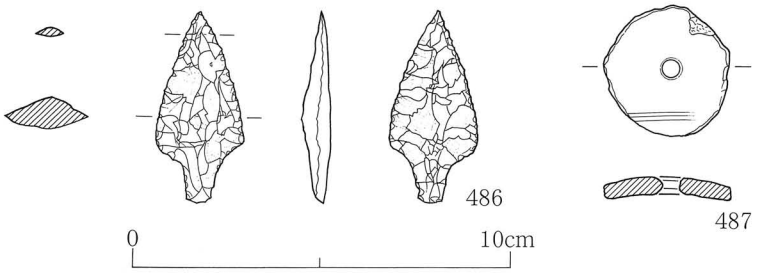
478はCタイプの鉢である。内外面はヨコナデ調整する。非河内産である。

481は甕である。口縁部が大きく外反し、口縁端部は上方へ摘み上げ気味に拡張する。体部外面はハケメ調整する。庄内式期。

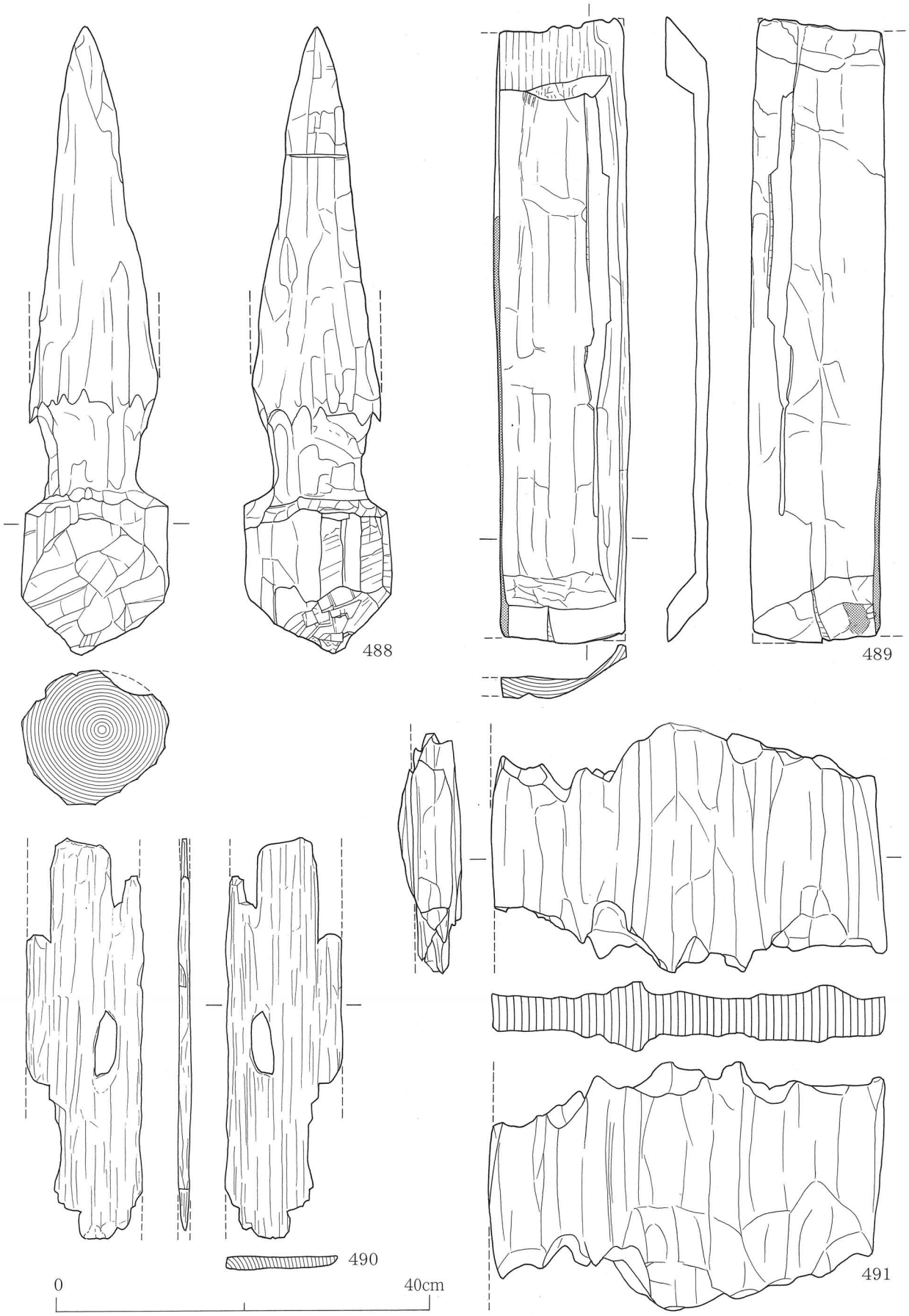
482は甕である。体部が大きく張る。口縁部はゆるく外反し、口縁端部は丸く終わる。体部外面はタタキ調整、内面はナデ調整する。口縁部はヨコナデ調整する。Ⅴ様式。

483・484はAタイプの甕である。外面はヘラミガキ調整、内面をナデ調整する。内面に指頭圧痕が残る。生駒西麓産である。

485は高杯の脚部である。裾部はゆるく立ち上がり、裾端部は上下へ拡張する。裾部はナデ調整、裾端部はヨコナデ調整する。非河内産である。



第33図　石器・土製品実測図



第34図　木製品実測図

2. 石器（第33図486）

486は打製石器である。茎を有する石鏃である。縁辺は押圧剥離によって調整する。先端部は丁寧に仕上げている。Ⅴ工区より出土。弥生時代中期。

3. 土製品（第33図487）

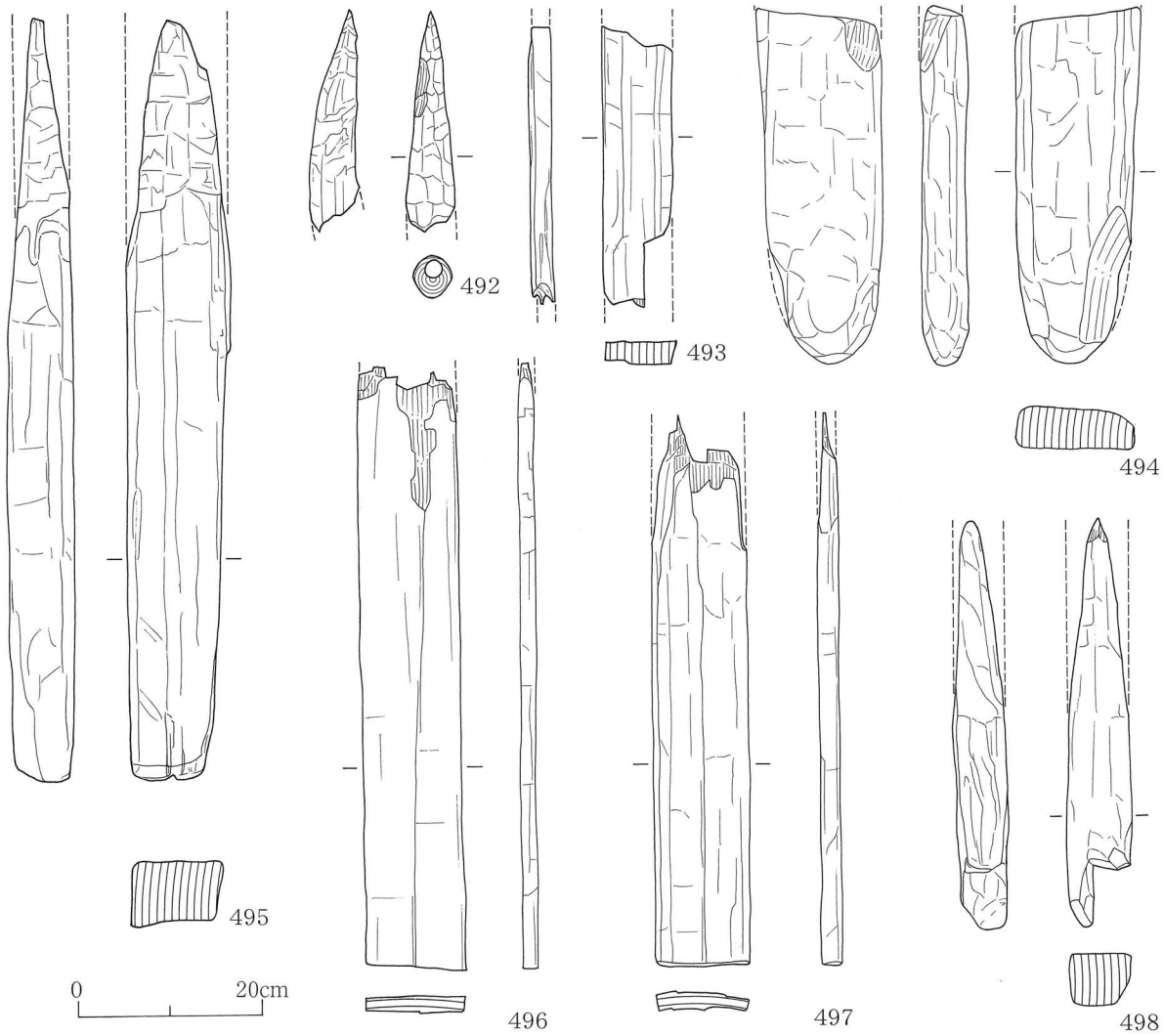
487は紡錘車である。土器を転用する。円形に打ち欠いた後、円周部を研磨する。中央に棒輪の孔を穿つ。Ⅱ工区の土坑15より出土。弥生時代中期。

4. 木製品（第34・35図488～498）

掲載した図の横断面に描かれた弧は木取りを表す。

488は柱である。上部は腐食する。下部を粗く削り出す。太い棒材から下部をやや尖り気味に削る。円周部に溝状のえぐりを入れる。有頭棒状を呈する。削り痕が明瞭に残る。芯持材である。Ⅱ工区のピット6より出土。奈良～平安時代初め。

489は槽である。長方形を呈するが約半分を欠損する。長辺は幅狭く、短辺は幅広く残して縁を作る。中央は刳り抜き、底を薄く仕上げる。横断面形は窪みを持つ台形を呈する。内面に削り痕が明瞭に残る。板目材である。Ⅱ工区の第8層より出土。庄内～布留式期。



第35図　木製品実測図

490は有孔板である。短辺は欠損する。長辺の両端部は削り出し、中央部に楕円形の孔を穿つ。柾目材である。Ⅱ工区の第９層より出土。庄内～布留式期。

491は分厚い長方形を呈する板である。長辺は腐食する。短辺は両側面を削り出す。柾目材である。Ⅱ工区の第８層より出土。庄内～布留式期。

492は尖頭棒である。棒材の円周部は削り出し、小口を尖らせる。削り痕が明瞭に残る。内面は腐食のため空洞である。芯持材である。Ⅱ工区の第８層より出土。庄内～布留式期。

493は薄い長方形の板である。短辺は欠損する。長辺の両側面を削り出す。柾目材である。Ⅱ工区第９層より出土。庄内～布留式期。

494は楕円形の棒である。両側面を削り、小口は丸く削り出す。柾目材である。Ⅱ工区の第５層より出土。庄内～布留式期。

495は角材である。上部は腐食する。両側面を削り出す。柾目材である。井筒の部材である。Ⅳ工区の井戸１より出土。奈良～平安時代初め。

496・497は薄い長方形を呈する板である。上部は腐食する。両側面を削り出す。板目材である。井筒の部材である。Ⅳ工区の井戸１より出土。奈良～平安時代初め。

498は角材である。上部は腐食する。小口はやや丸みを持って粗く削り出す。小口に抉りを入れる。柾目材である。井筒の部材である。Ⅳ工区の井戸１より出土。奈良～平安時代初め。

Ⅴ．まとめ

今回の調査地は面積が狭いことから、調査で判ったことは少ないが、得られた知見を列記してまとめとしたい。

Ⅱ工区では遺構面を２面検出した。第14層上面では弥生時代中期のピット、土坑、溝の遺構を検出した。溝15は外径2.2m、内径1.9m、深さ10～20cmを測る環状を呈する特異な溝である。過去の調査でもほぼ同じ大きさの溝が検出されている[注1]。削平された竪穴住居のようにもみえる。しかし、周りには、柱穴もなく規模も小さいことから竪穴住居とは考えにくい。現時点では性格は不明であり、今後の調査研究に期待したい。

第４層上面では奈良～平安時代のピット、土坑、溝の遺構を検出した。ピット６には径17cmを測る柱が残る。ピット６に対応する柱の並びを確認することができなかったが、掘立柱建物の可能性が高い。

Ⅳ工区では遺構面を１面検出した。第４層上面では奈良～平安時代のピット、土坑、溝、井戸の遺構を検出した。井戸1は井筒の部材がほぼ東西南北に１本ずつ残存していた。規模は明確ではないが50cm前後のものである。井戸としては小さく側板が抜き取られたか、もしくは側板をもたない構造の可能性も考えられる。井戸の底面と思われる層より完形の土師器の杯が１点出土した。杯は供献されたと考えられる。

今回の調査では、弥生時代中期の遺構が密であり、土器の出土量も多い。当遺跡の集落中心部と思われる。奈良～平安時代の遺構は散発的であるが、掘立柱建物や規模は小さいが井戸も検出した。また、遺物は須恵器・土師器・製塩土器等が多く出土した。過去の調査では、この周辺に集落が広がっていることが確認されており、今回は追認することができた。

注1『瓜生堂』1980年　大阪府文化財センター

図　　版

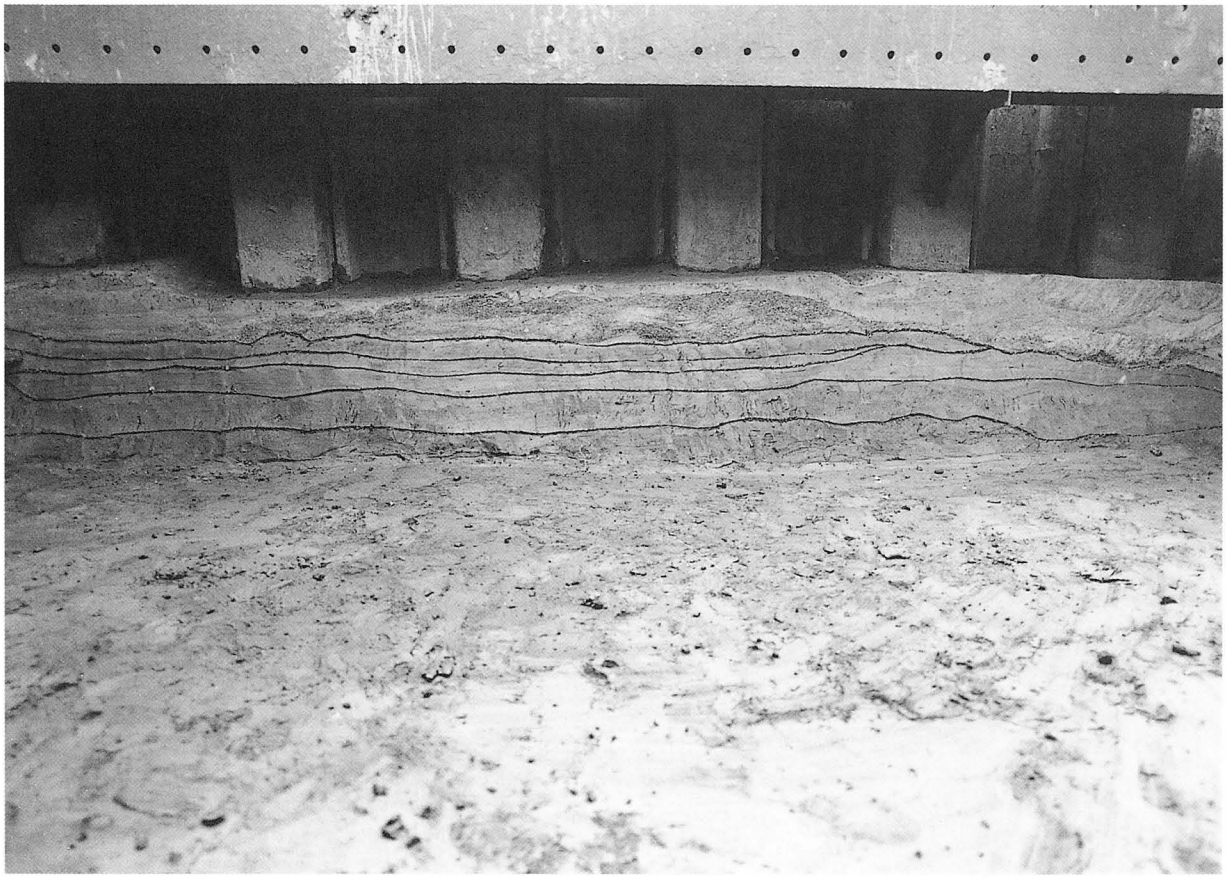
図版1　遺構

1.　Ⅱ工区調査地近景（北より）

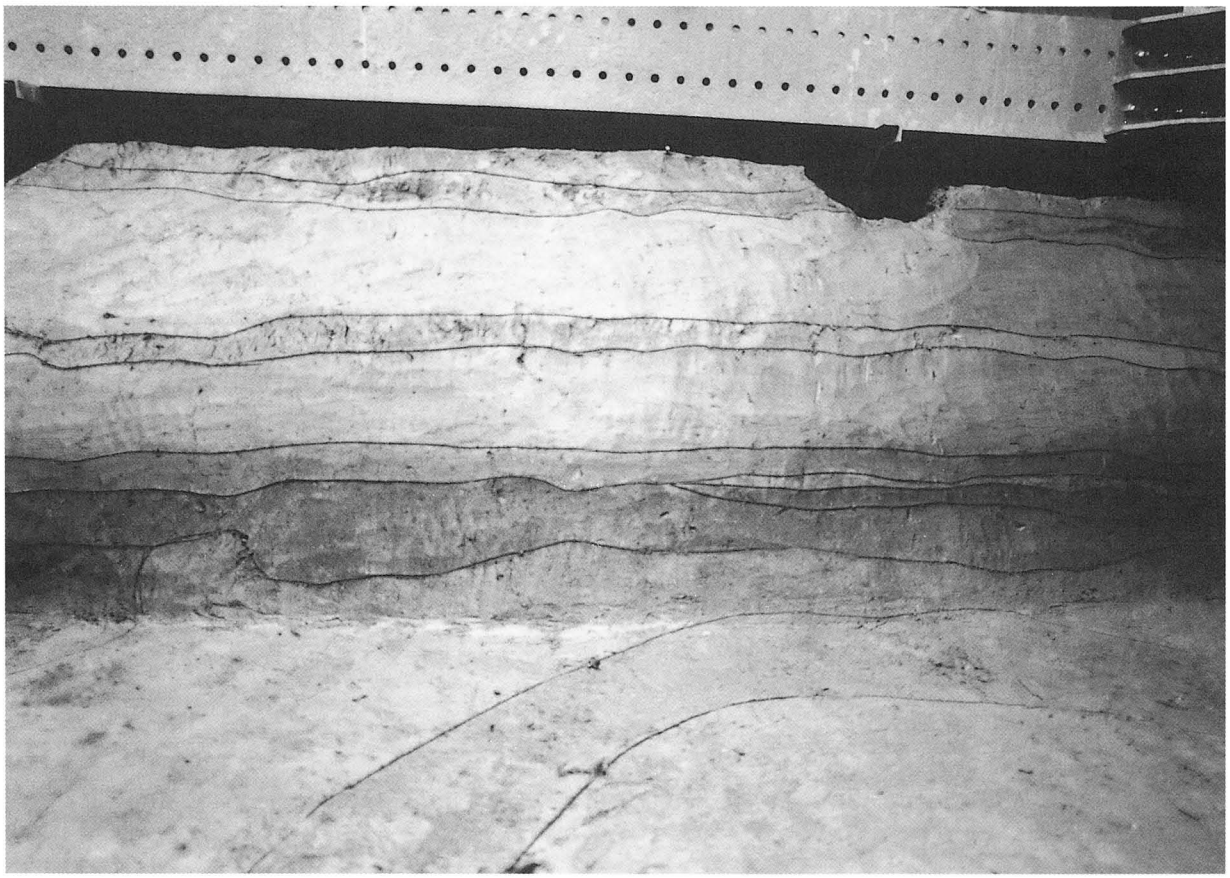
2.　Ⅳ工区調査地近景（北より）

図版2　遺構

1. Ⅱ工区南壁断面（南端）



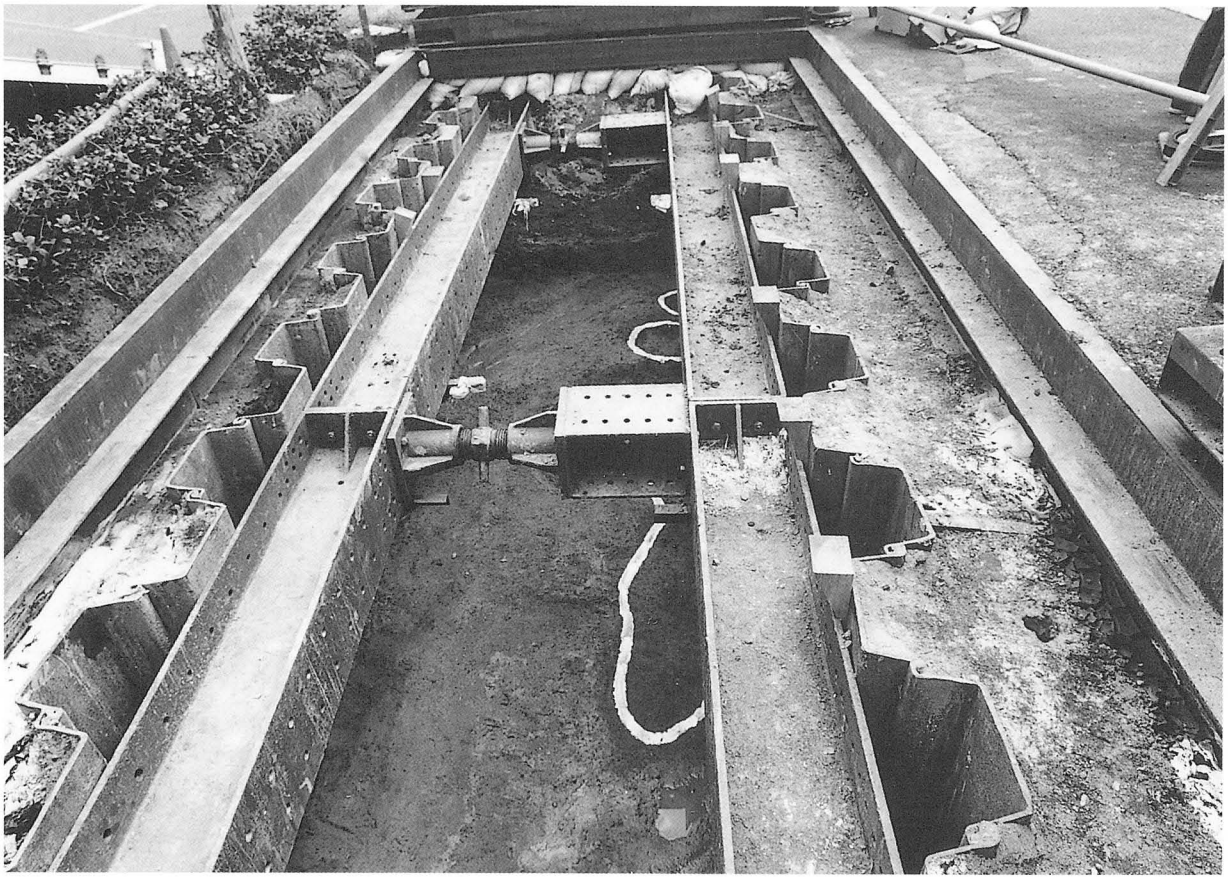
2. Ⅱ工区西壁断面（中央部）



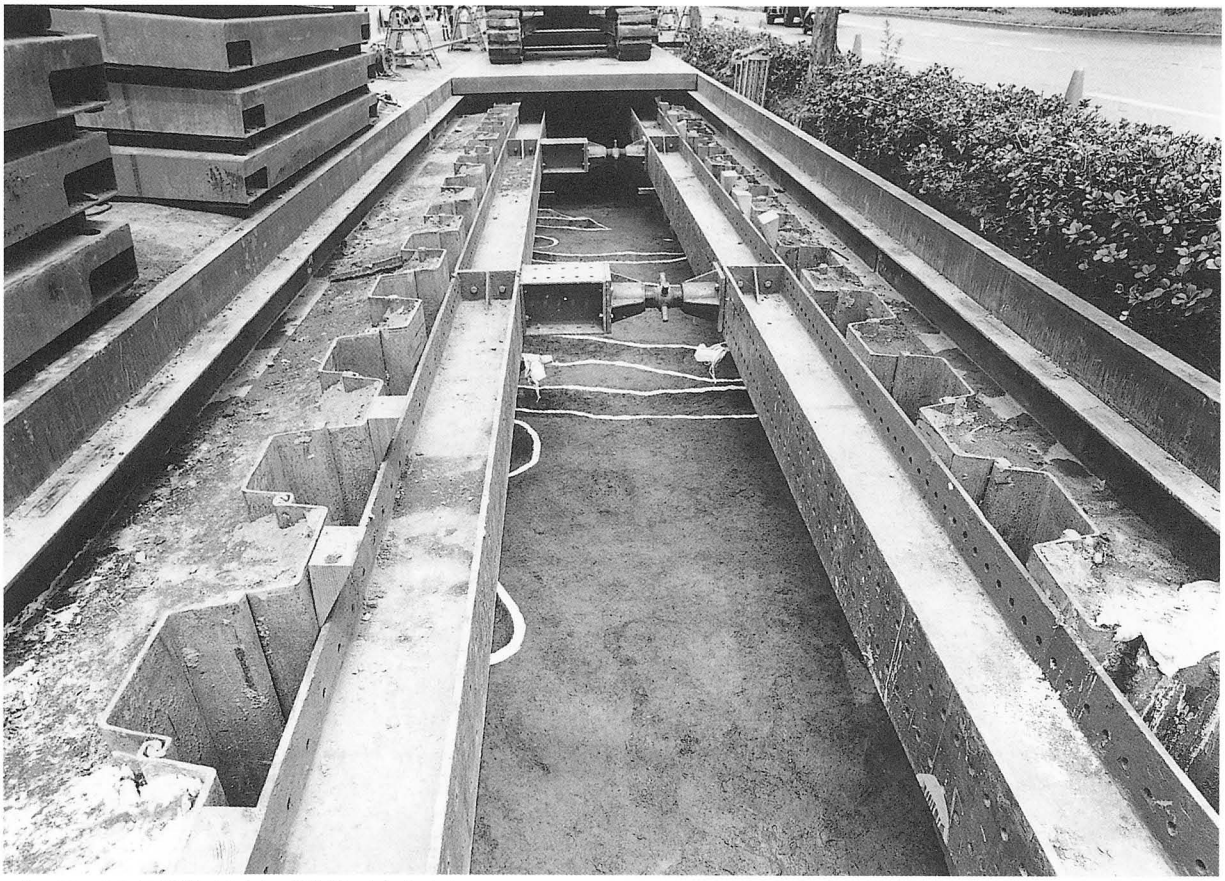
1.　Ⅱ工区西壁断面（中央部）

2.　Ⅱ工区西壁断面（中央部）

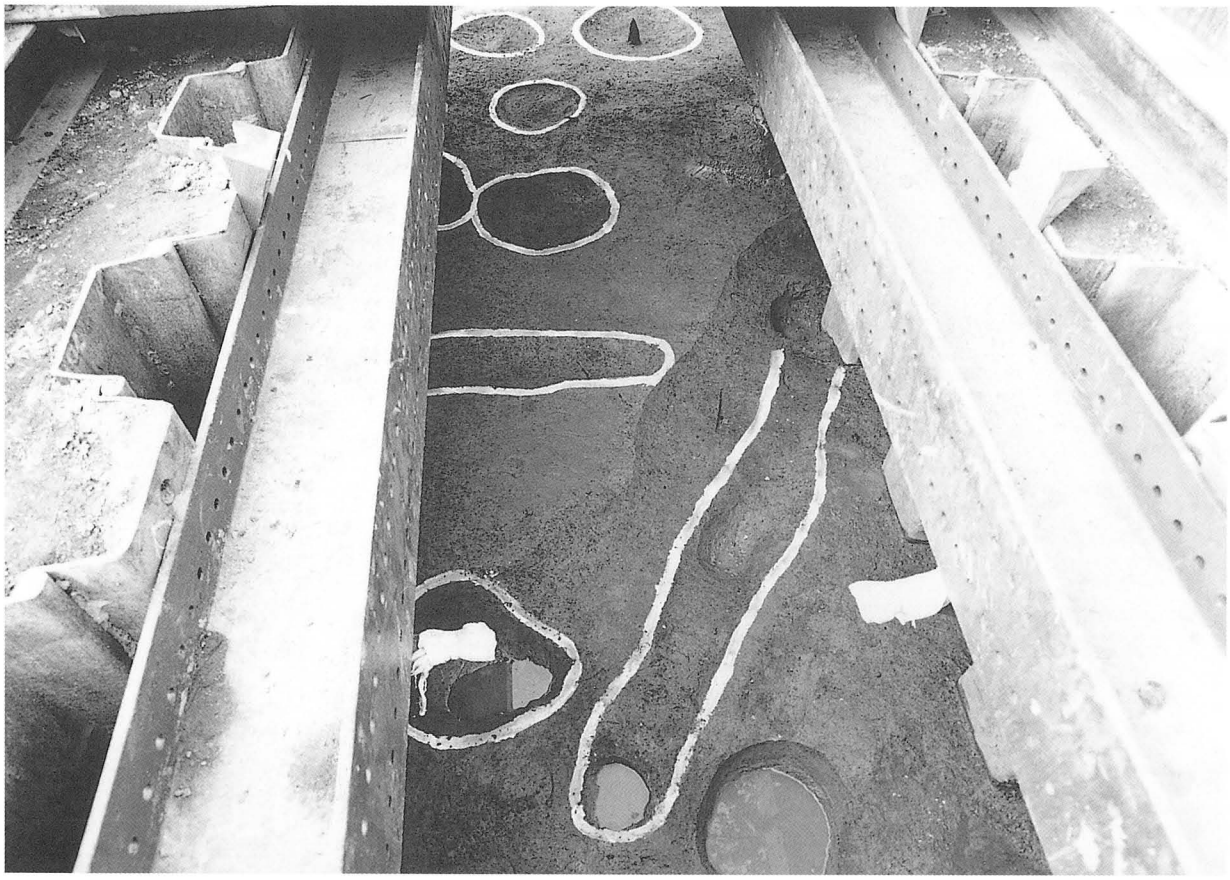
図版4　遺構



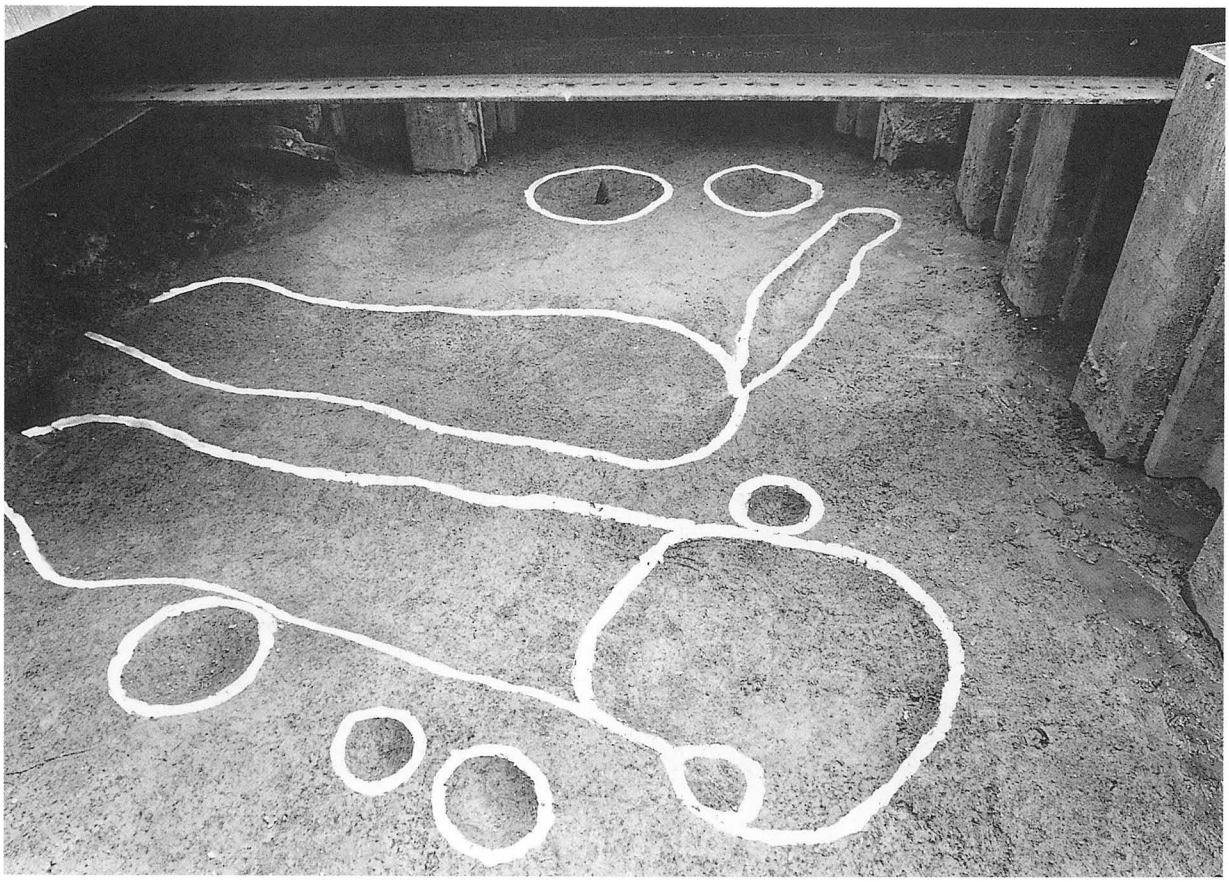
1. Ⅱ工区南部第４層上面遺構（北より）



2. Ⅱ工区南部第４層上面遺構（南より）

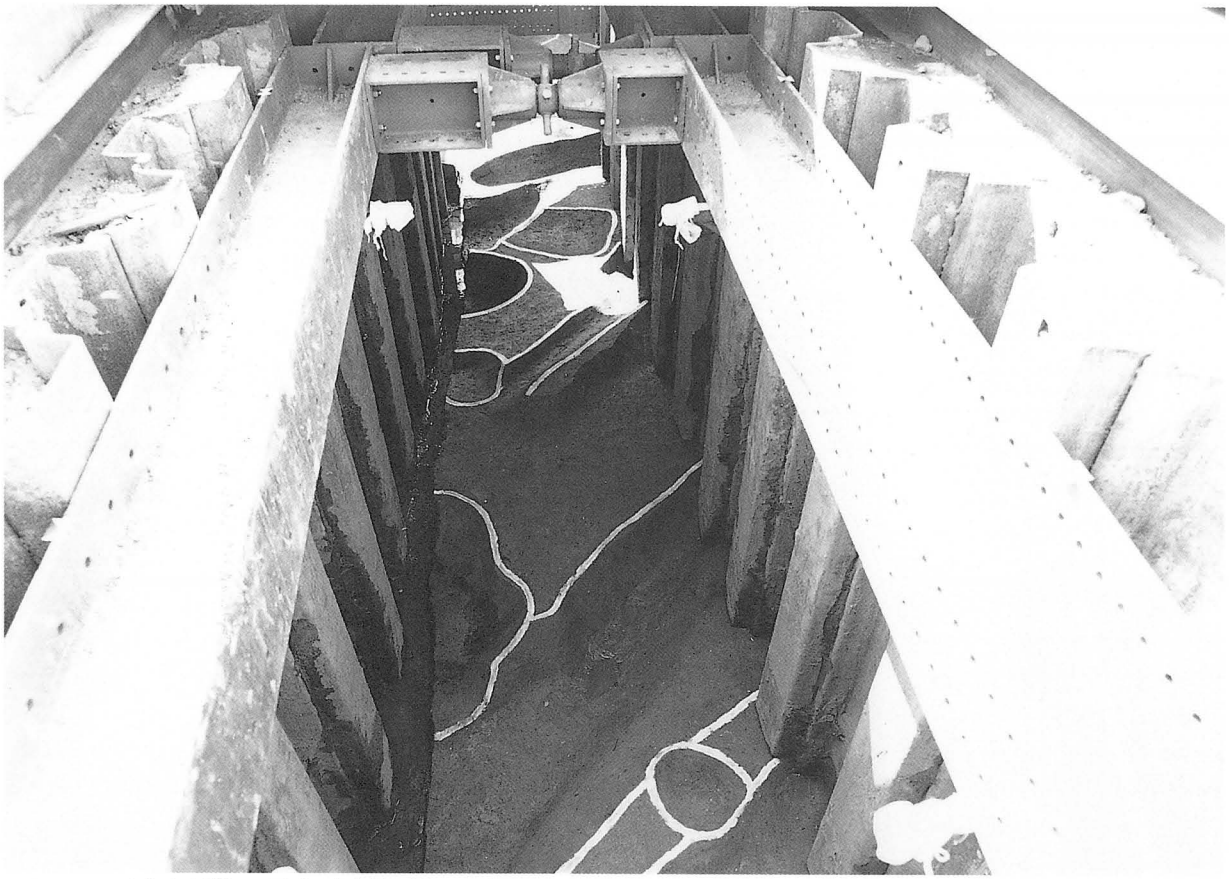


1.　Ⅱ工区中央部第４層上面遺構（北より）

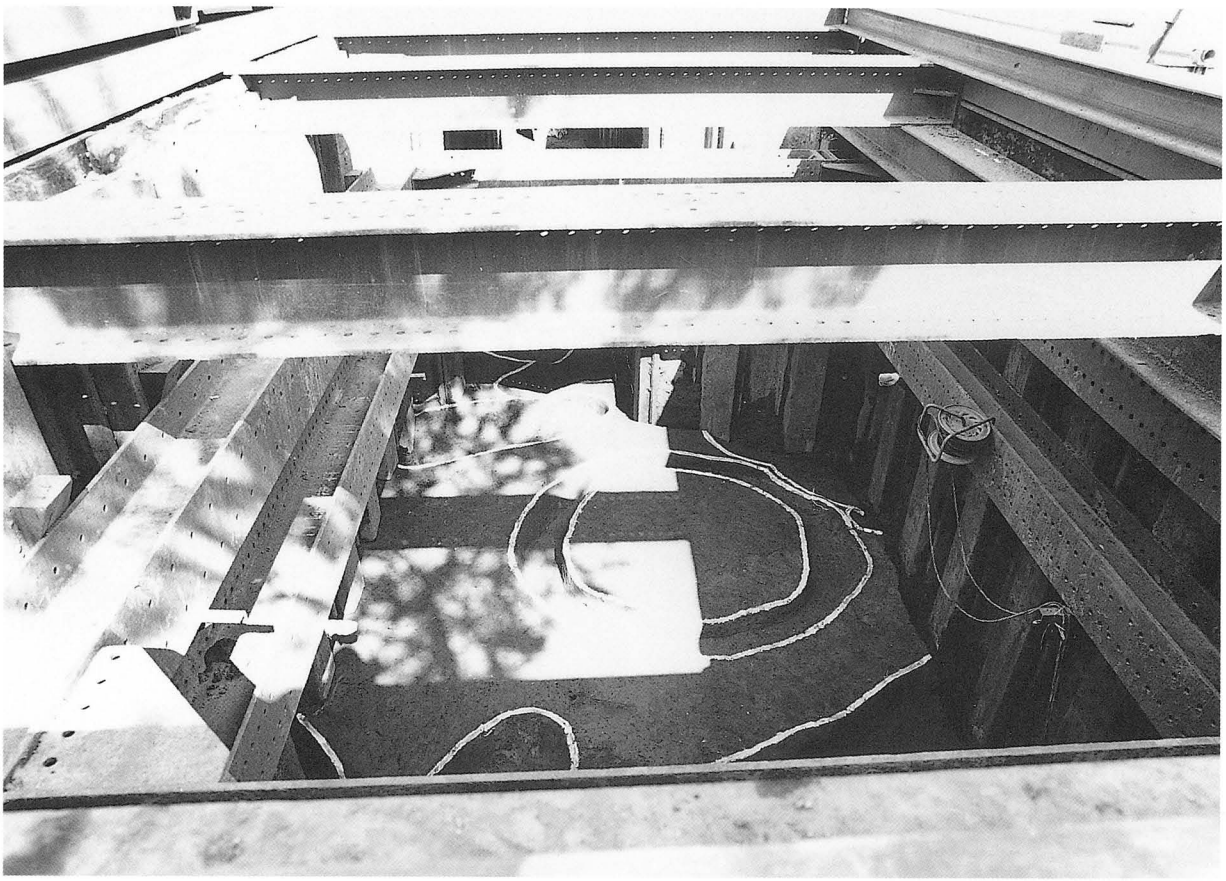


2.　Ⅱ工区中央部第４層上面遺構（北より）

図版6　遺構

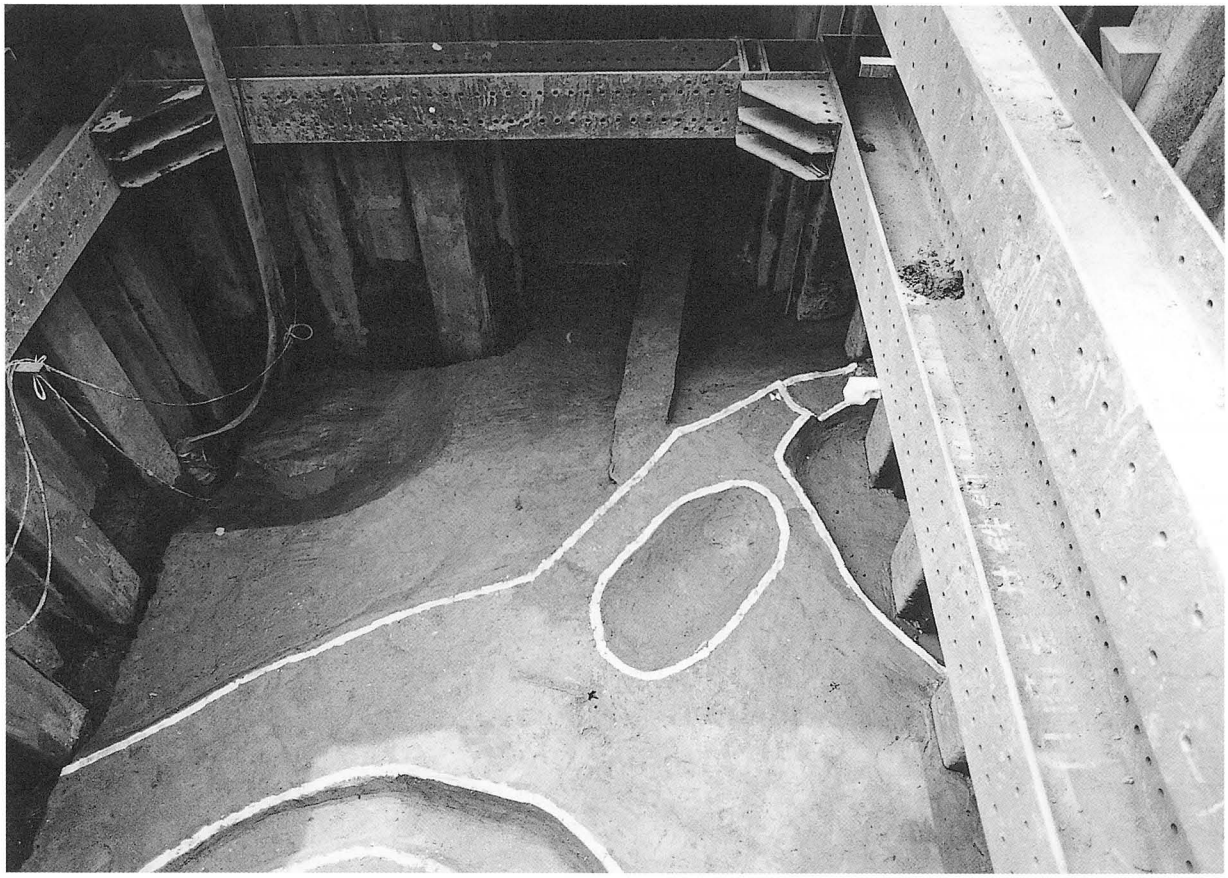


1.　Ⅱ工区中央部第14層上面遺構（北より）



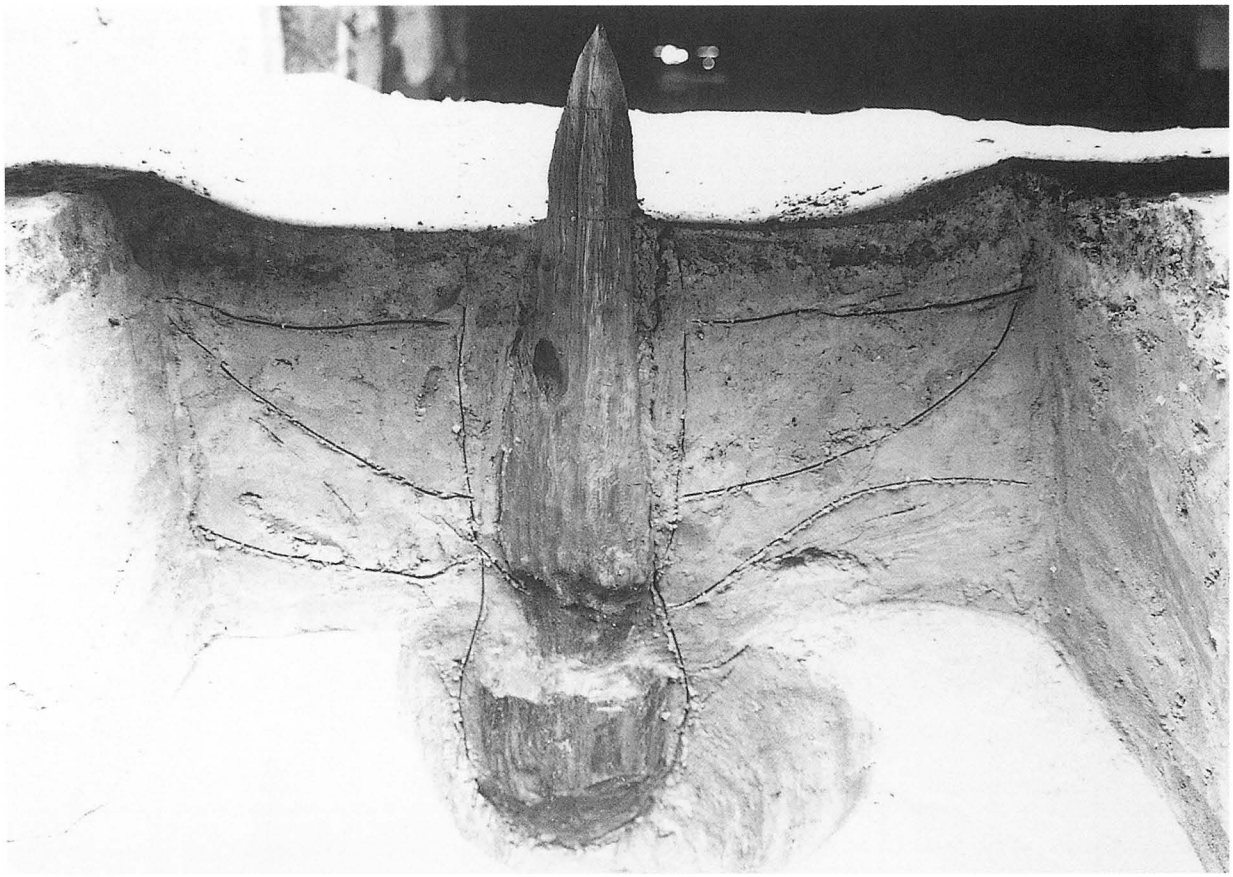
2.　Ⅱ工区中央部第14層上面遺構（南より）

図版7　遺構



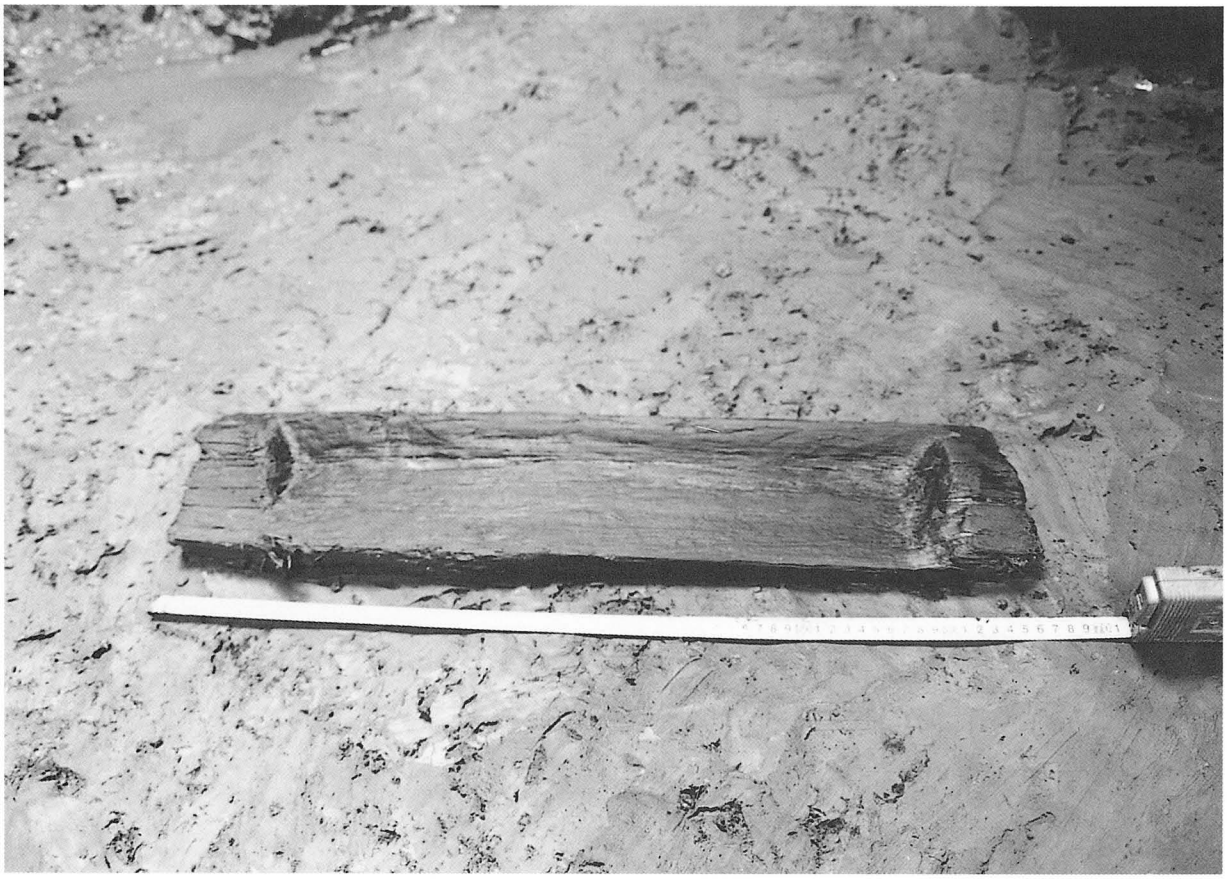
1.　Ⅱ工区中央部第14層上面遺構（北より）

2.　Ⅱ工区溝14断面（東より）

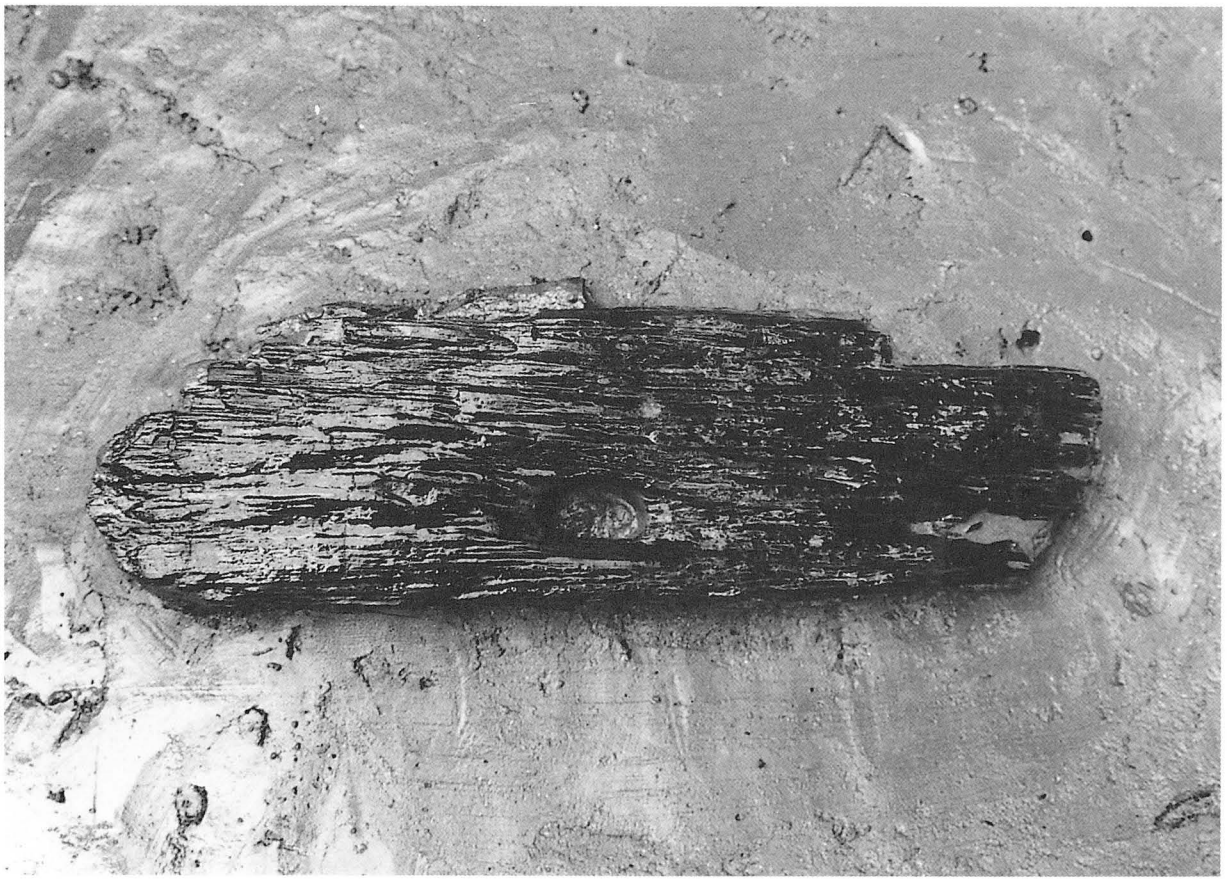


1. Ⅱ工区ピット6断面（北より）

2. Ⅱ工区ピット6内検出柱の細部（北より）



1.　Ⅱ工区南部第８層内木製品出土状況（北より）



2.　Ⅱ工区中央部第９層内木製品出土状況（西より）

図版10　遺構

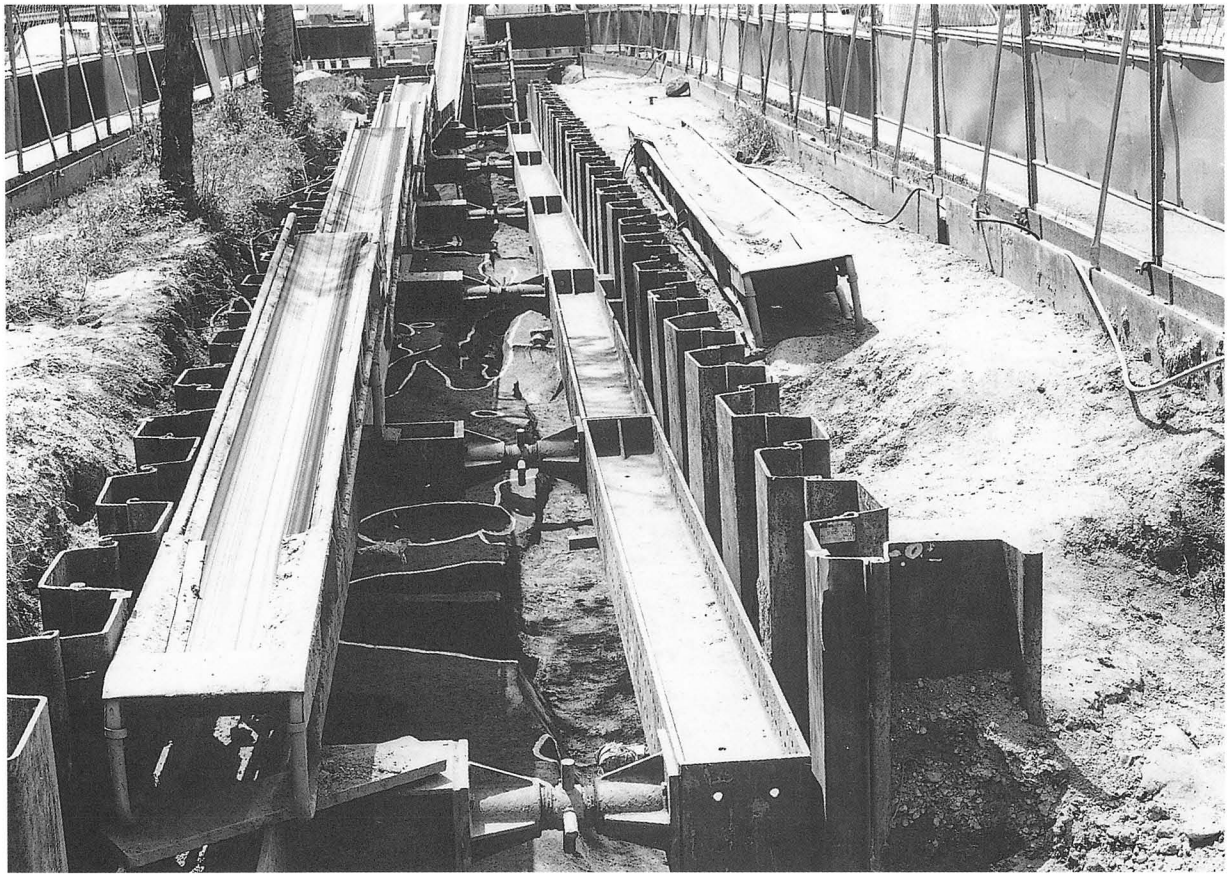
1.　Ⅱ工区溝14内弥生土器出土状況

2.　Ⅱ工区土坑11内弥生土器出土状況

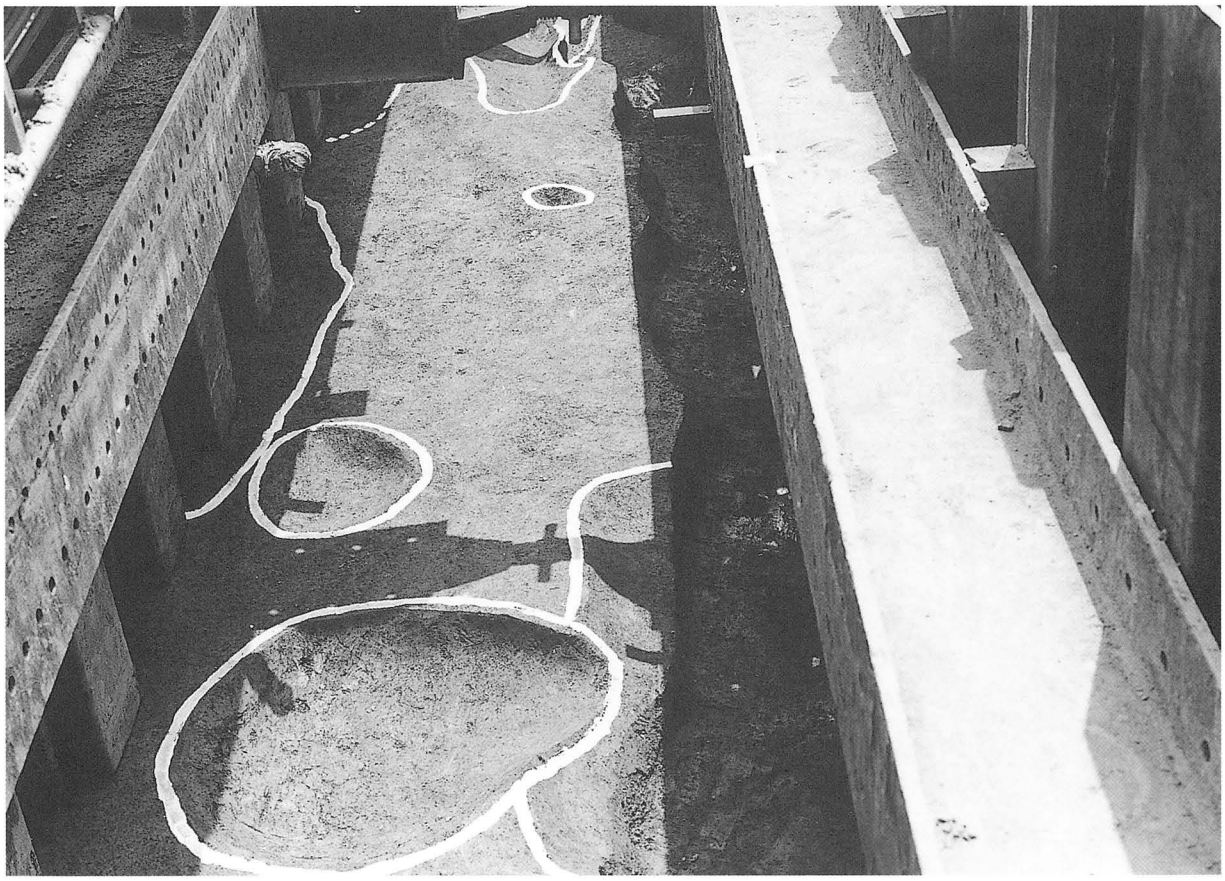
1. Ⅳ工区北壁断面（北端）

2. Ⅳ工区東壁断面（北部）

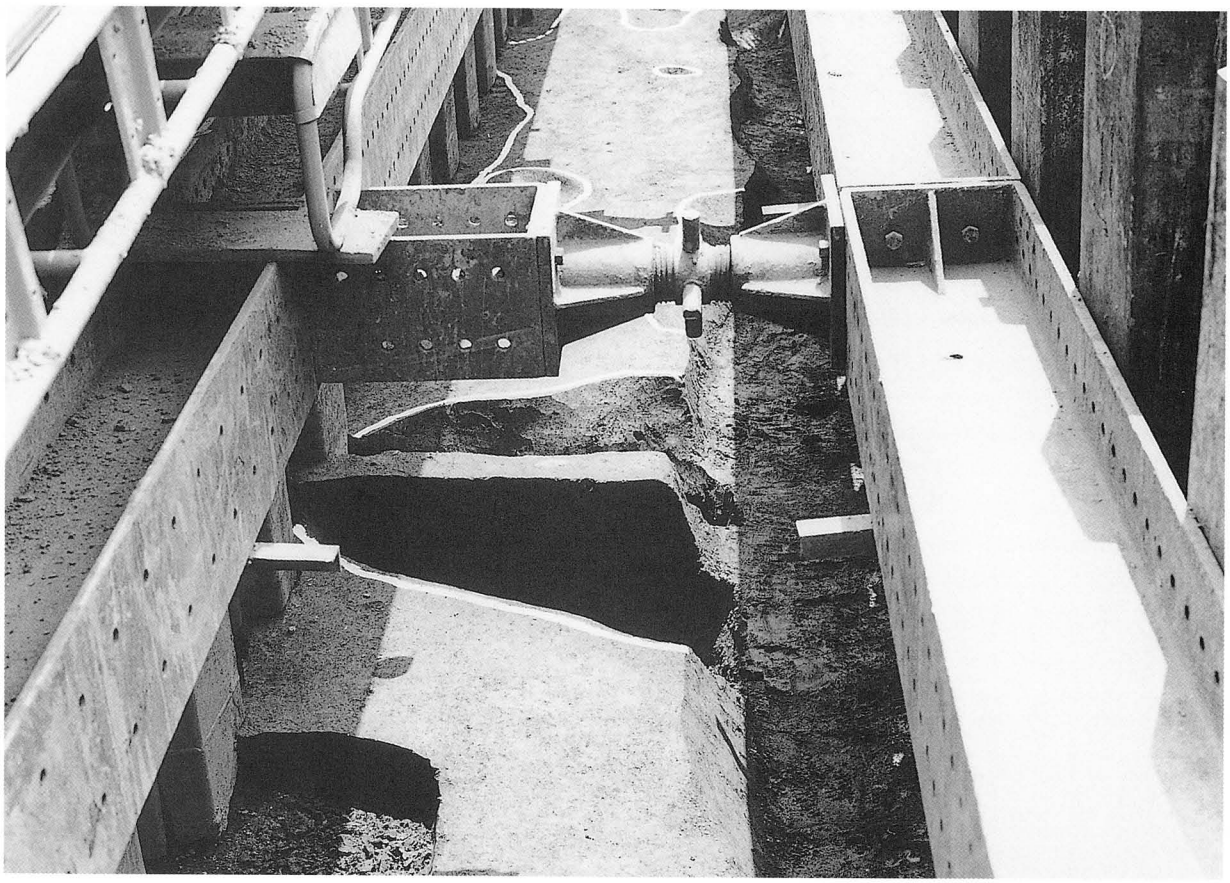
図版12　遺構



1. Ⅳ工区第４層上面遺構（北より）



2. Ⅳ工区中央部第４層上面遺構（北より）



1. Ⅳ工区北部第４層上面遺構（北より）

2. Ⅳ工区井戸１断面（南より）

図版14　遺構

1. Ⅳ工区井戸１内土師器出土状況

2. Ⅳ工区井戸１完掘状況

9

12

15

34

16

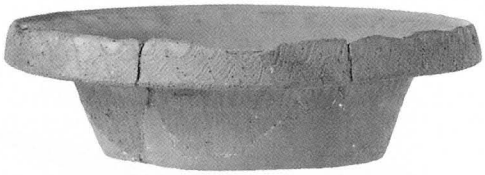
Ⅱ工区溝14出土弥生土器　水差形土器・高杯・甕

45

37

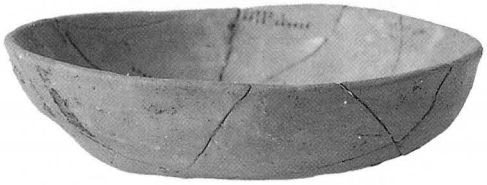
54

63



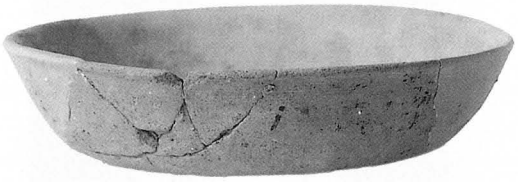
80

83



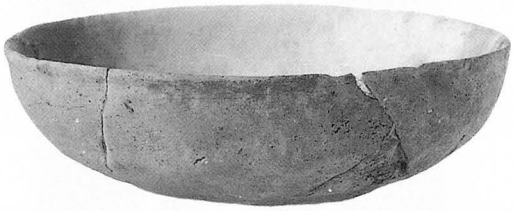
158

Ⅱ工区溝14・15、土坑15・17出土弥生土器　甕・高杯・台付鉢・壷、ピット15出土土師器　杯



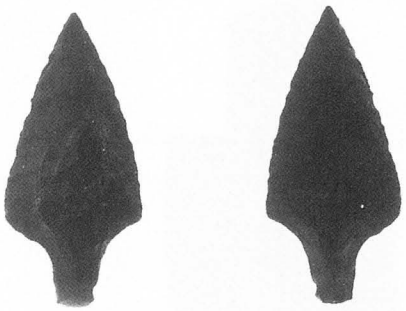
326

332



432

339



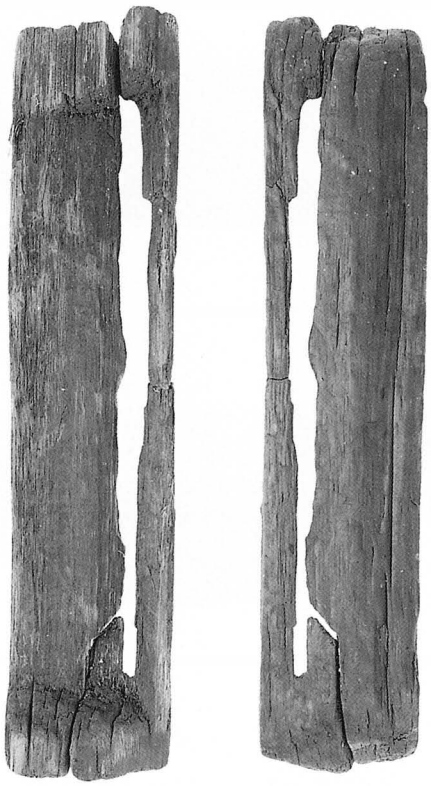
486

412

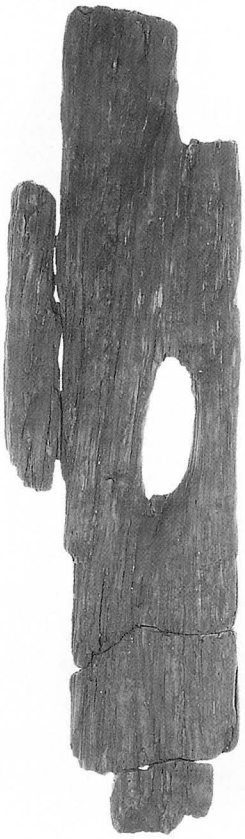
487

Ⅳ工区井戸１・第３層出土土師器　杯・椀・坩、須恵器　横瓶、石器、土製品

488



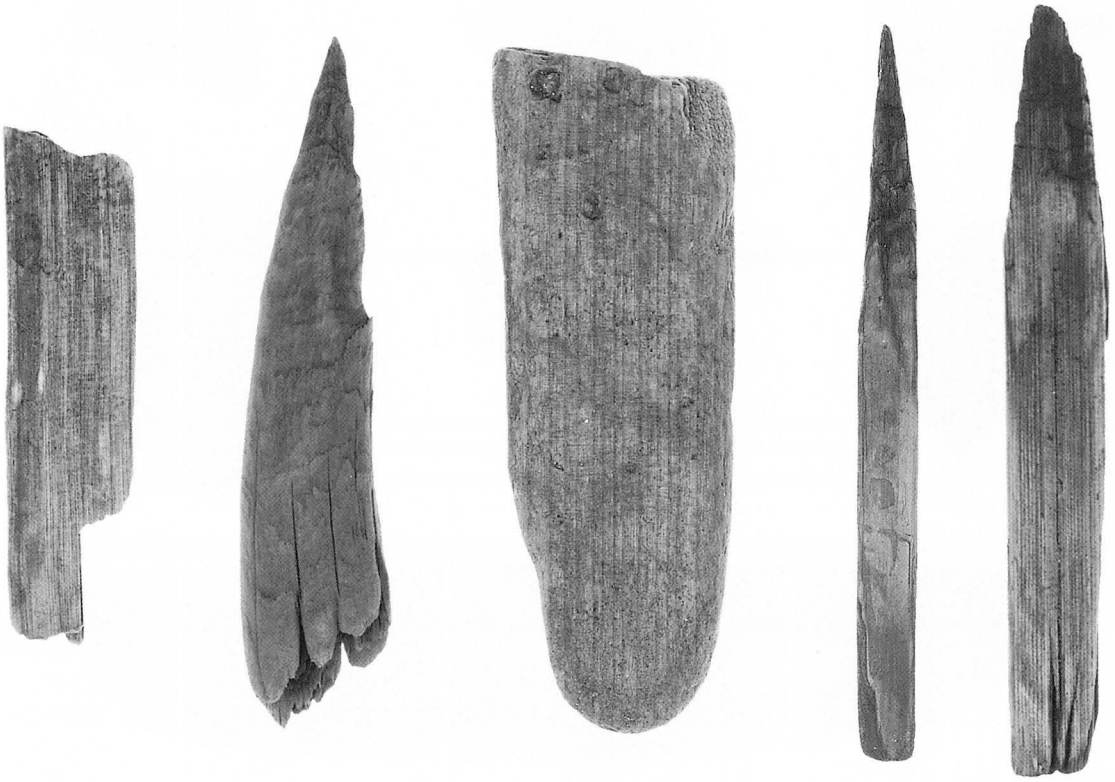
489



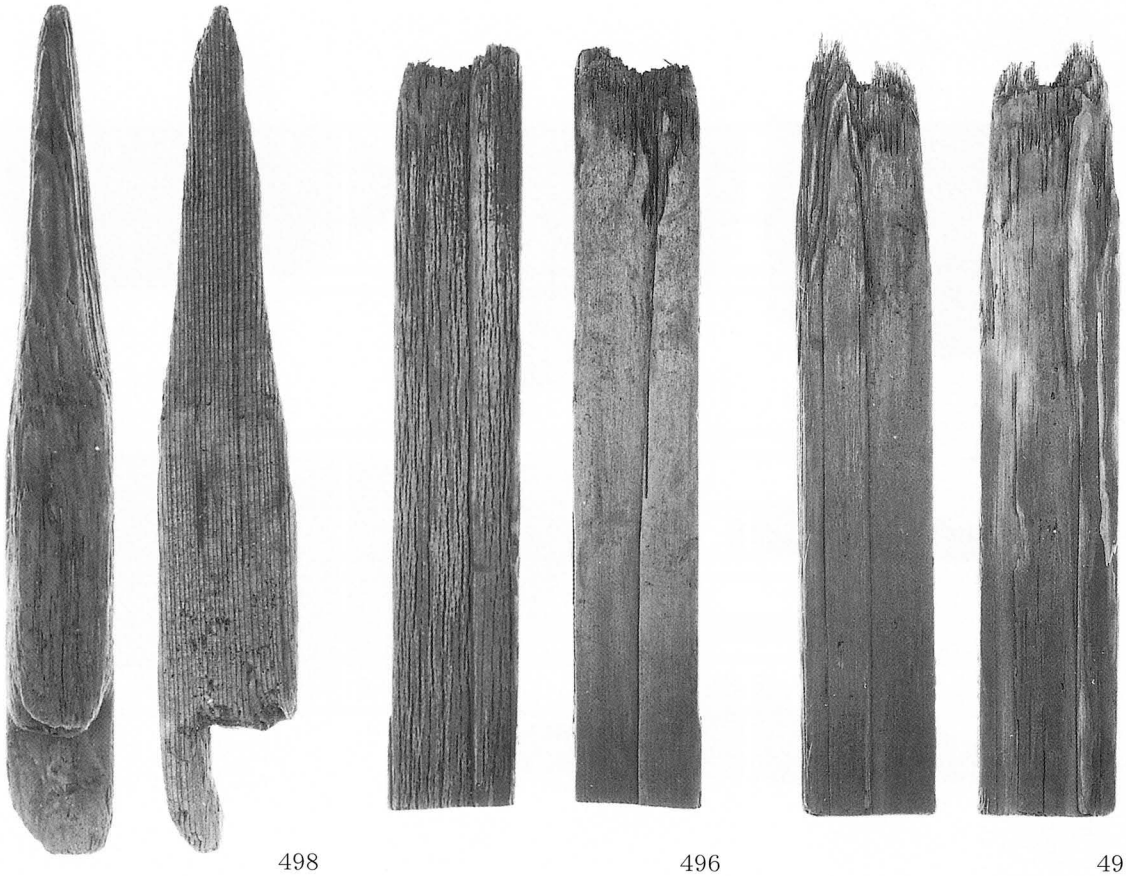
490

491

木製品

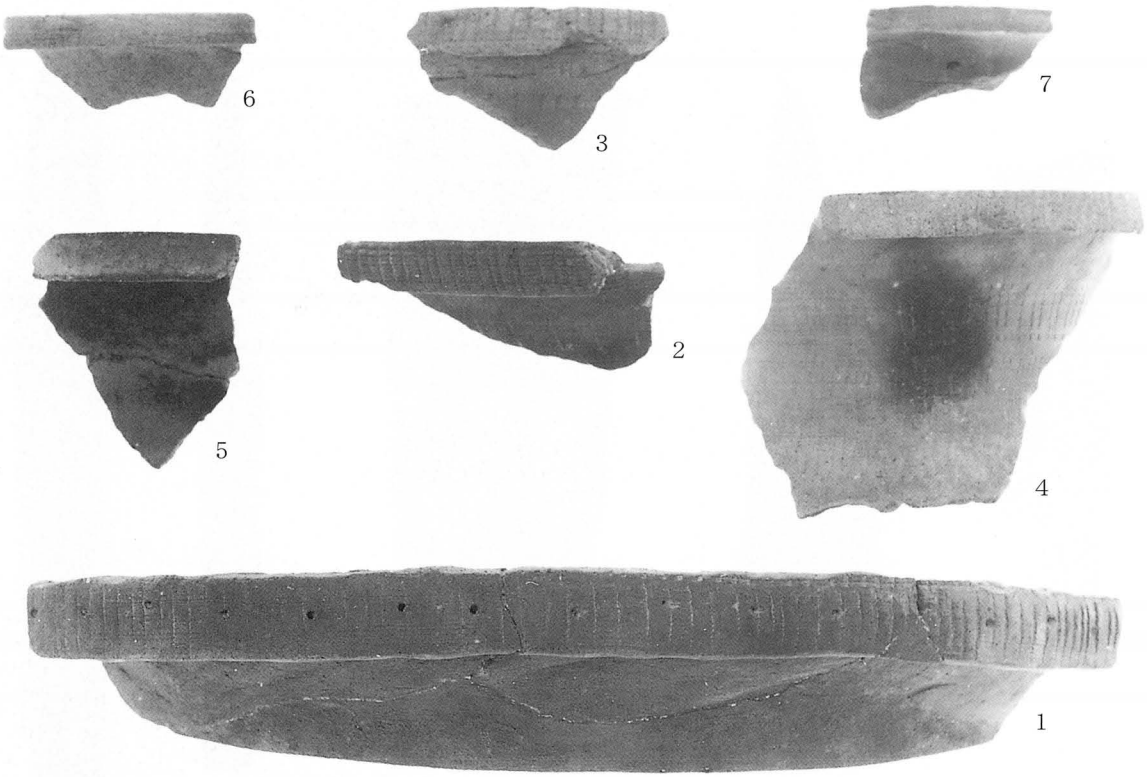


493 492 494 495

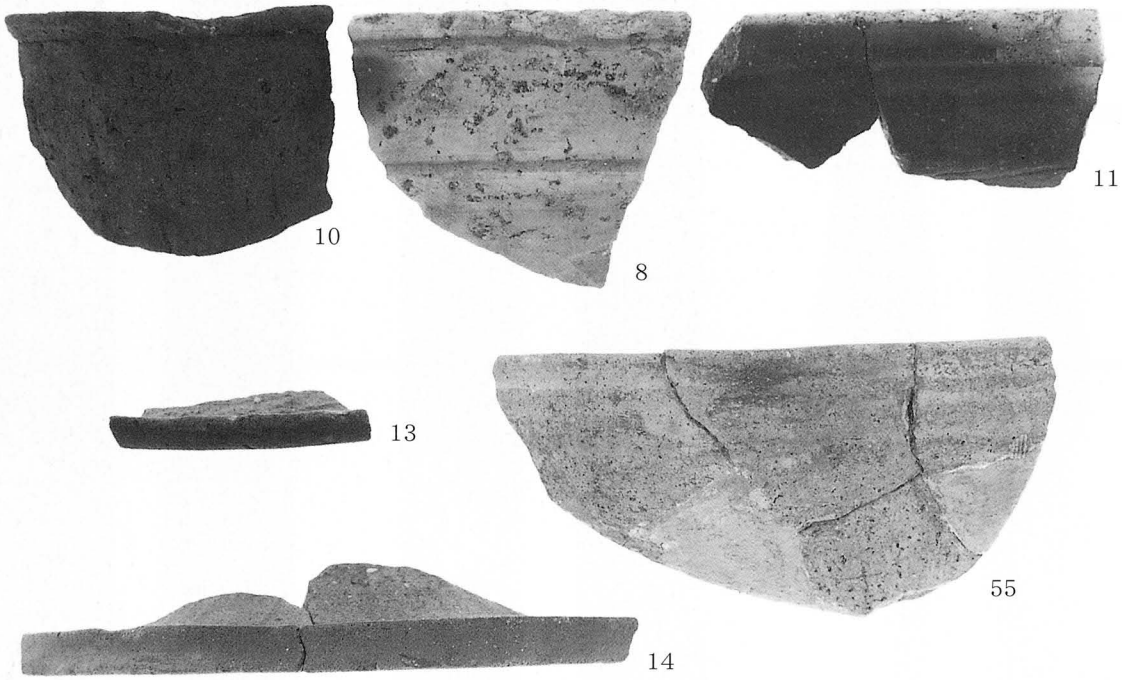


498 496 497

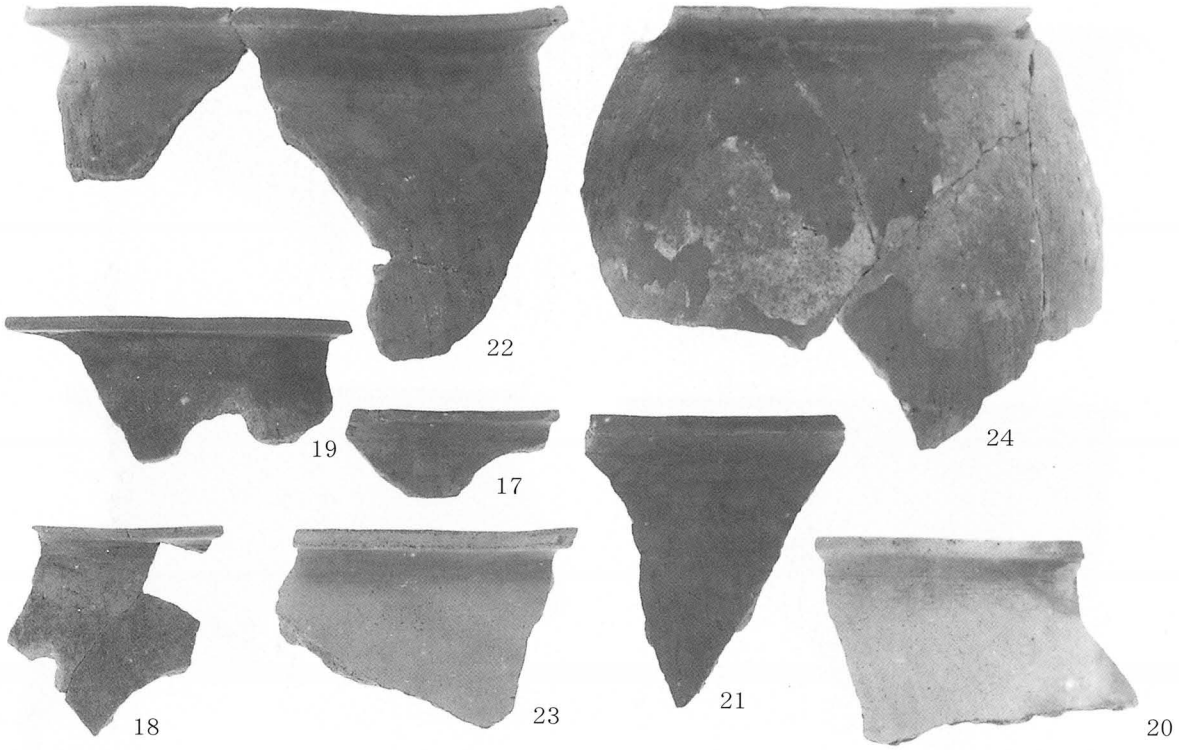
木製品



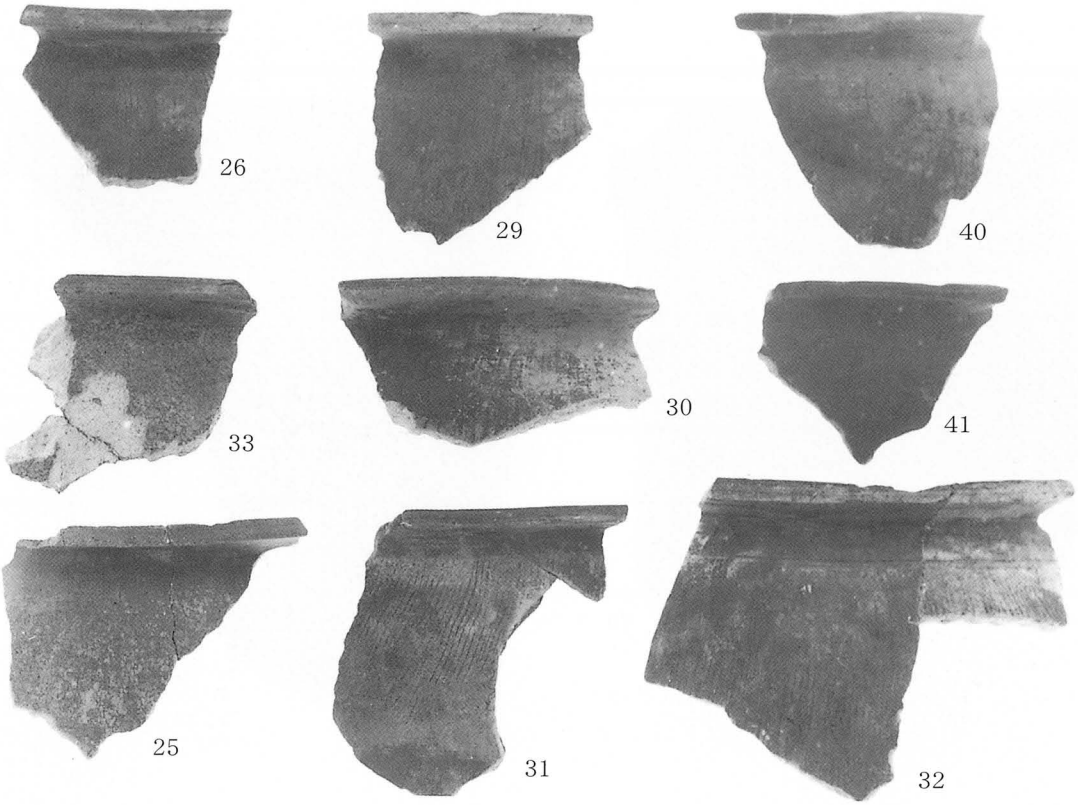
1. Ⅱ工区溝14出土弥生土器　壷



2. Ⅱ工区溝14出土弥生土器　壷・鉢・高杯・脚部

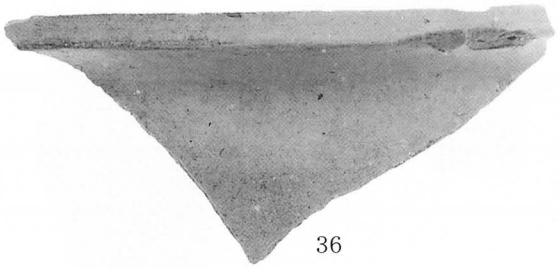


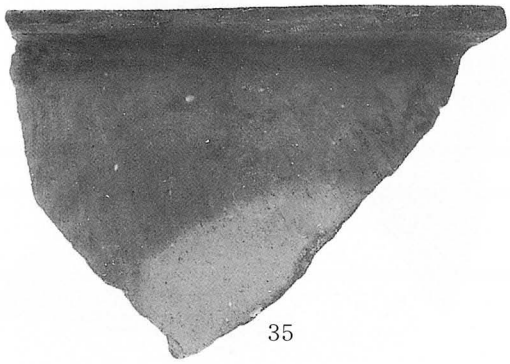
1. Ⅱ工区溝14出土弥生土器　甕

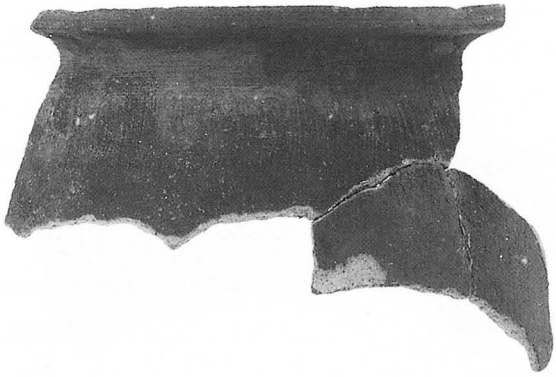


2. Ⅱ工区溝14出土弥生土器　甕

27

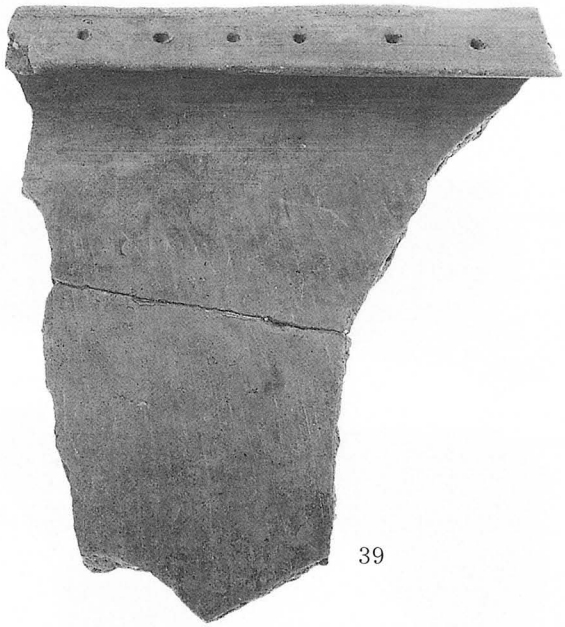

36


35

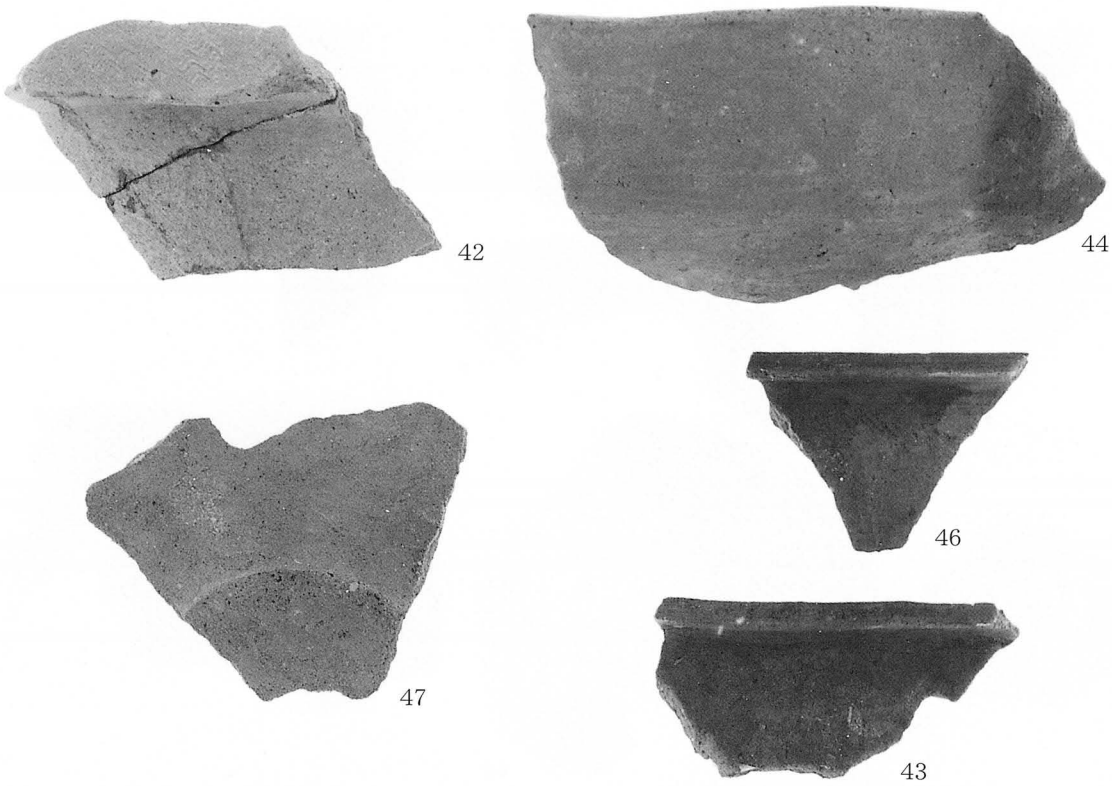

28

1. Ⅱ工区溝14出土弥生土器　甕

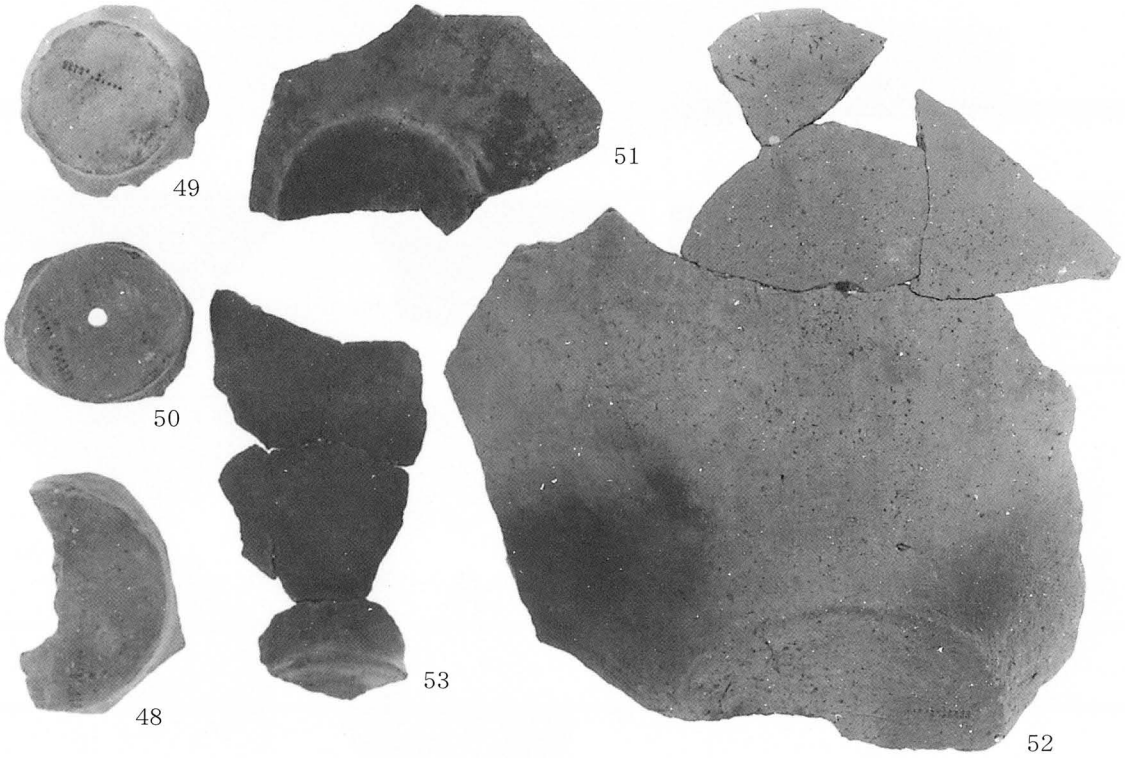
38


39

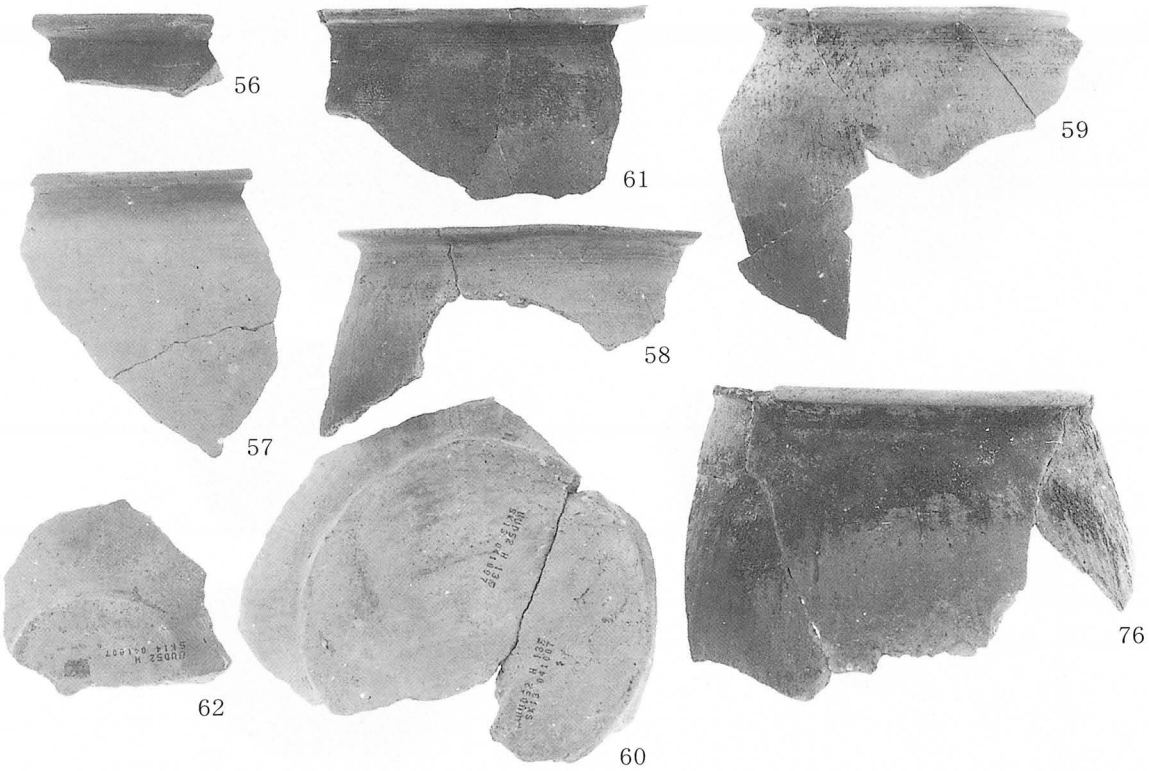
2. Ⅱ工区溝14出土弥生土器　甕



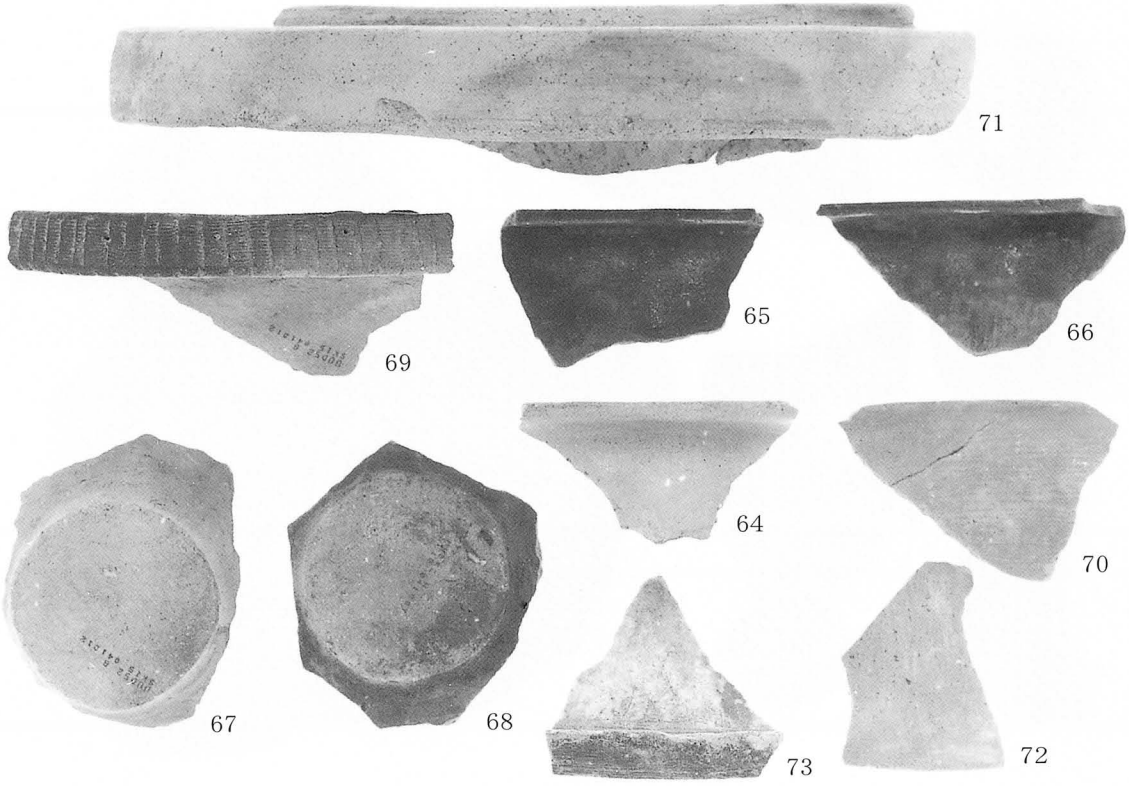
1. Ⅱ工区溝15・18出土弥生土器　壷・甕・高杯・底部



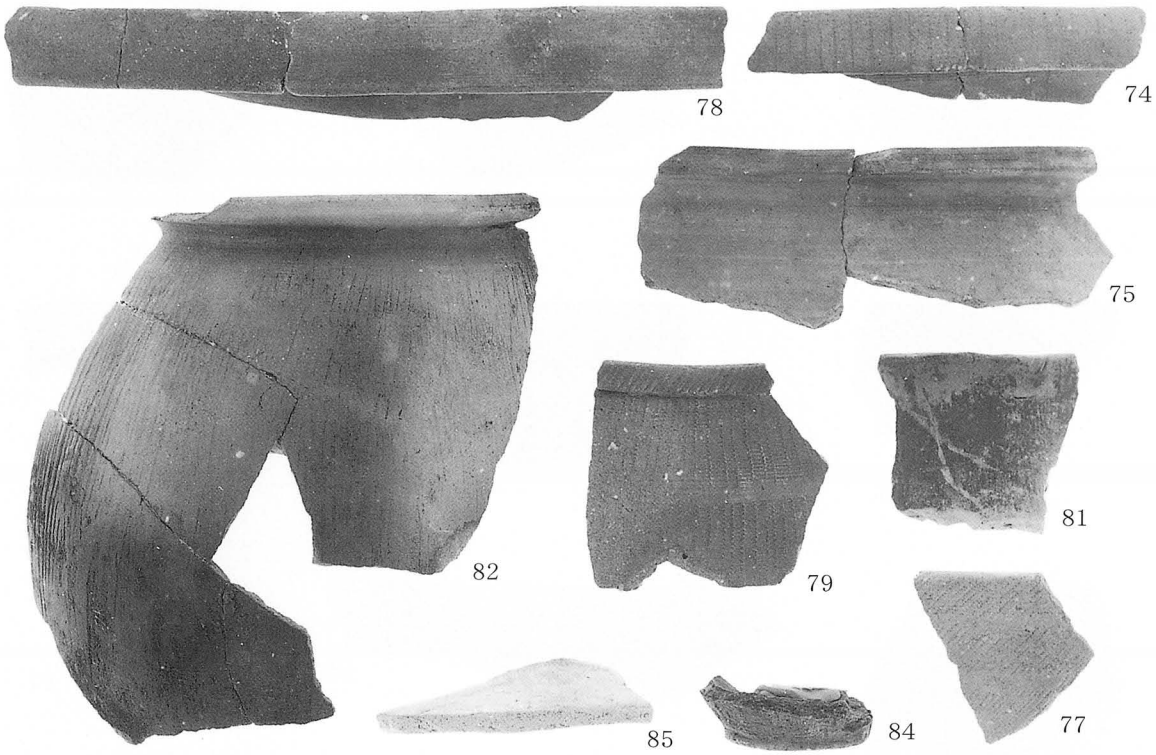
2. Ⅱ工区溝14出土弥生土器　底部



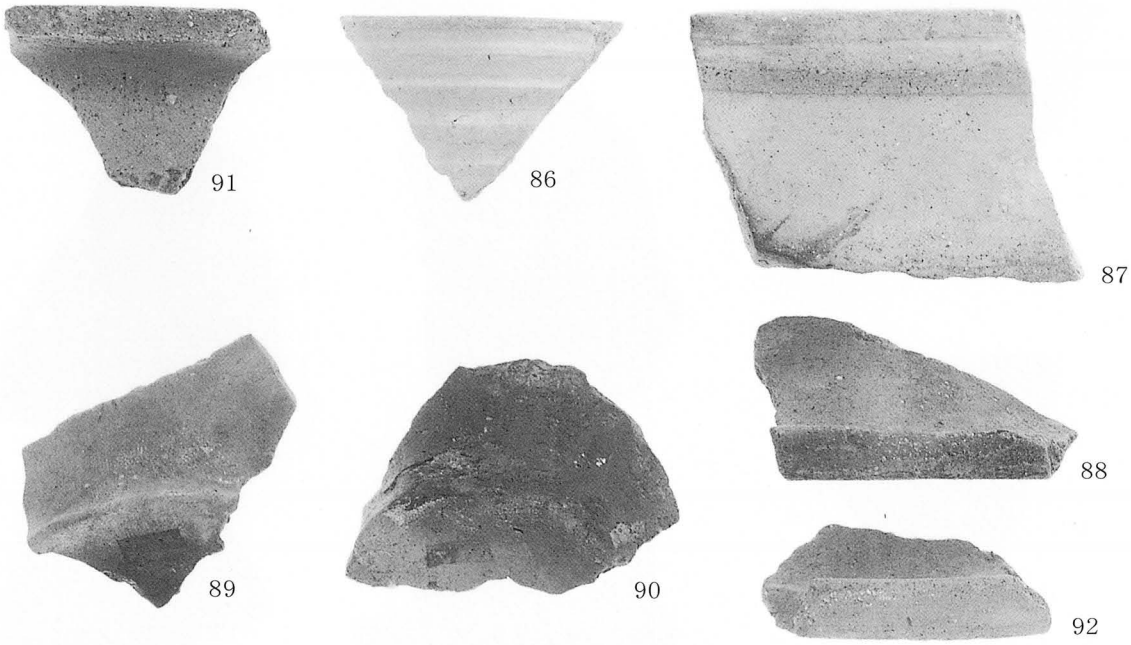
1. Ⅱ工区土坑11・13・14出土弥生土器　甕・底部



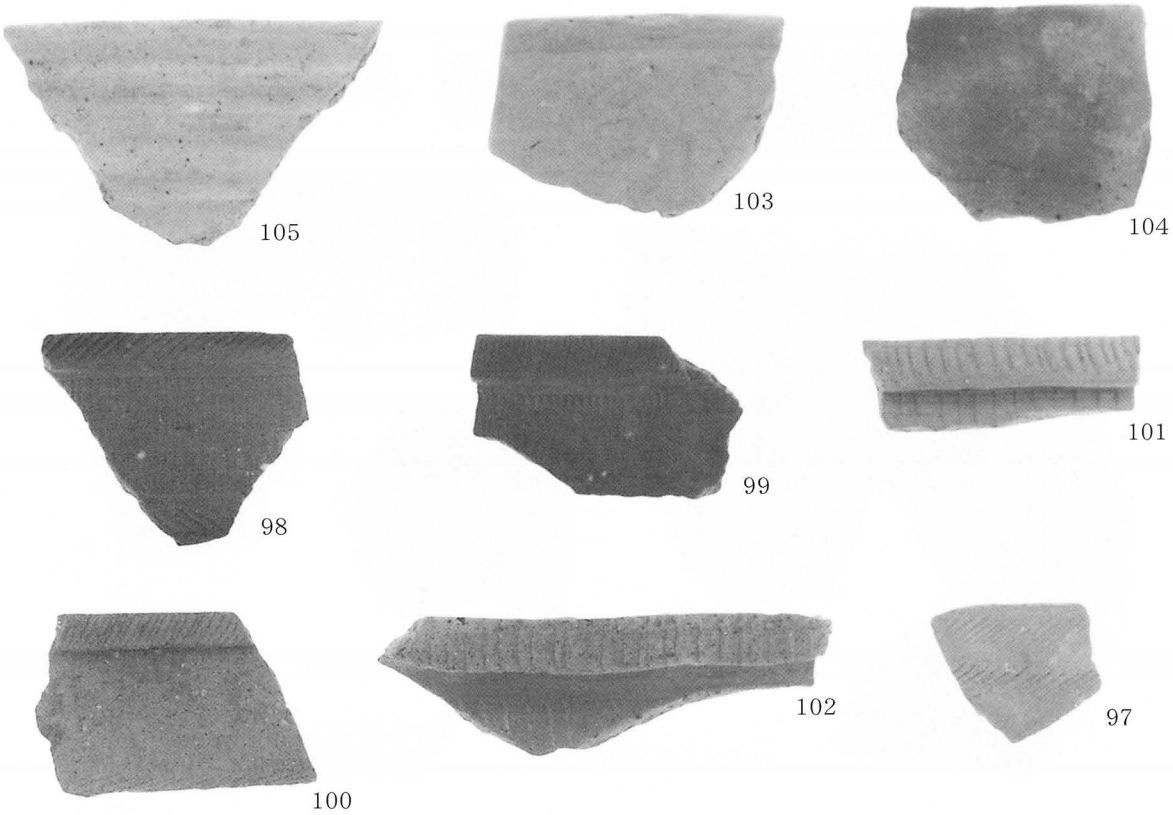
2. Ⅱ工区土坑15出土弥生土器　壷・甕・高杯・脚部・底部



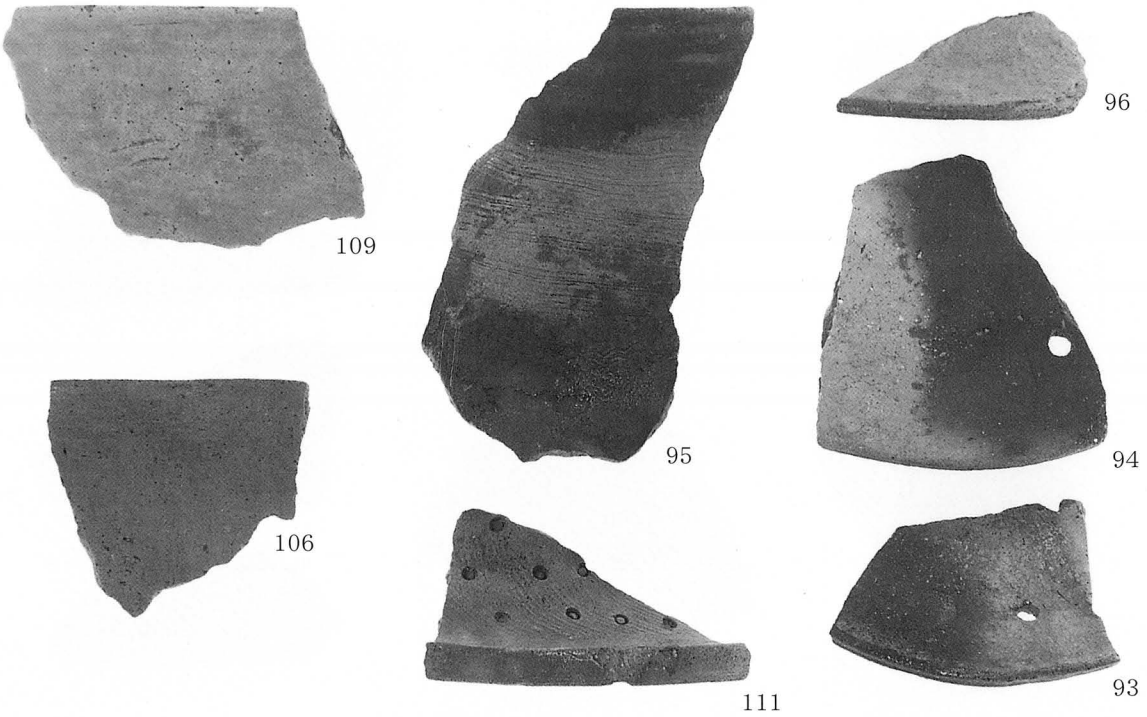
1. Ⅱ工区土坑17・18出土弥生土器　壷・甕・水差形土器・底部



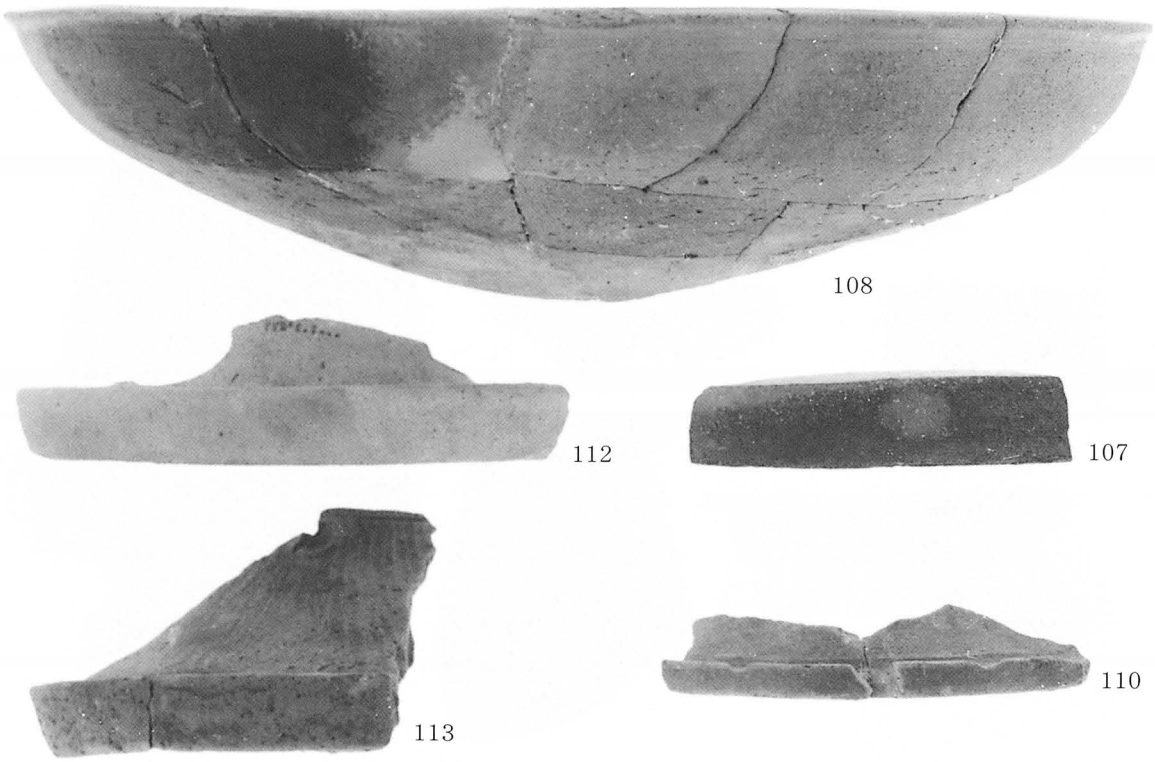
2. Ⅱ工区第11・12層出土弥生土器　壷・甕・脚部・底部



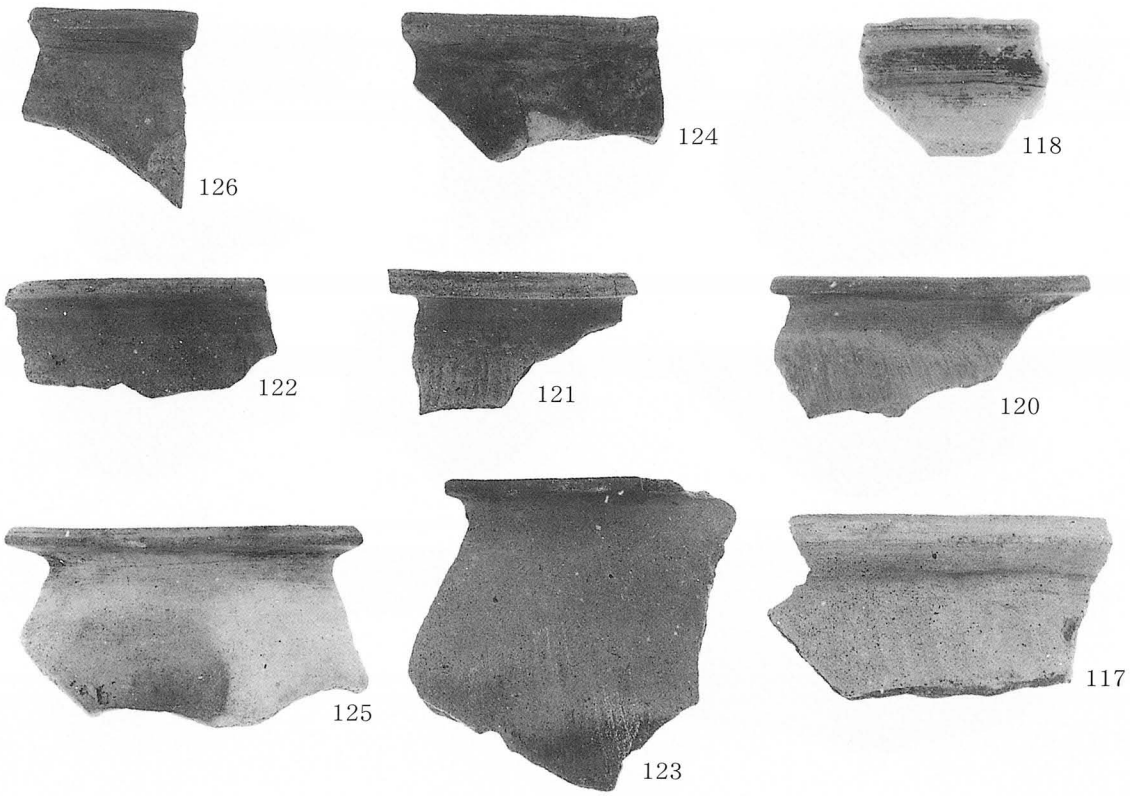
1. Ⅱ工区第13層出土弥生土器　水差形土器・鉢



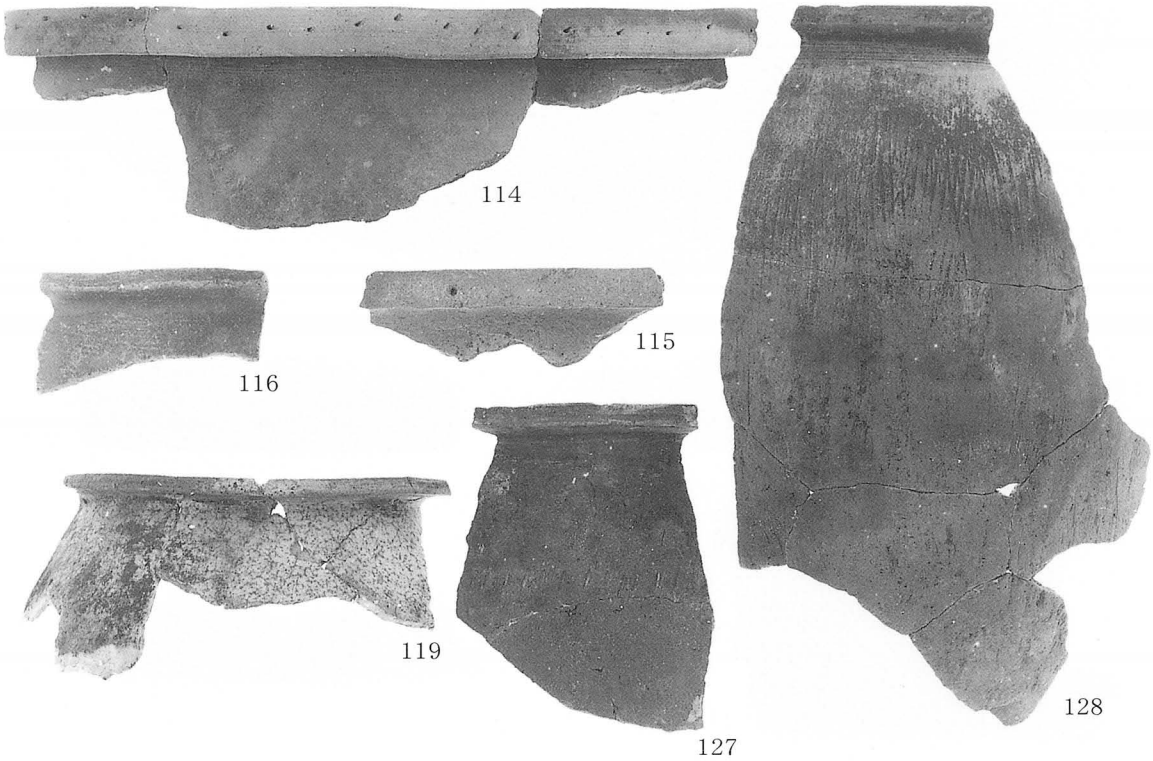
2. Ⅱ工区第13層出土弥生土器　水差形土器・壷蓋・高杯・脚部



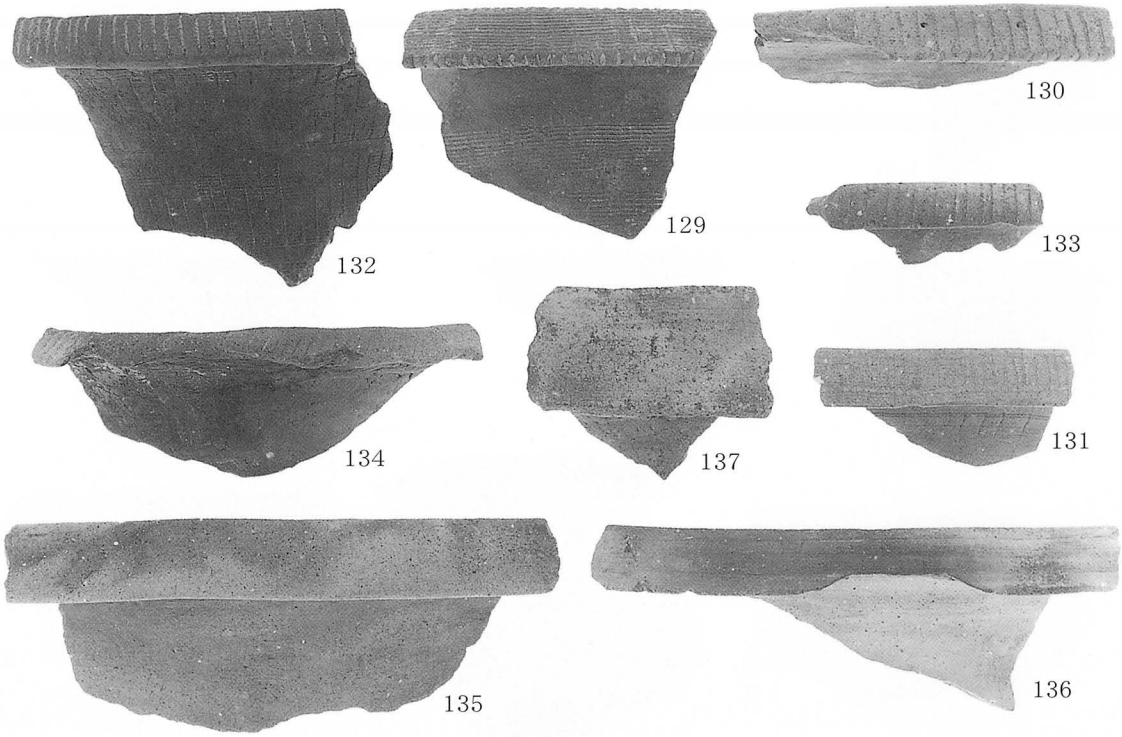
1. Ⅱ工区第13層出土弥生土器　高杯・脚部



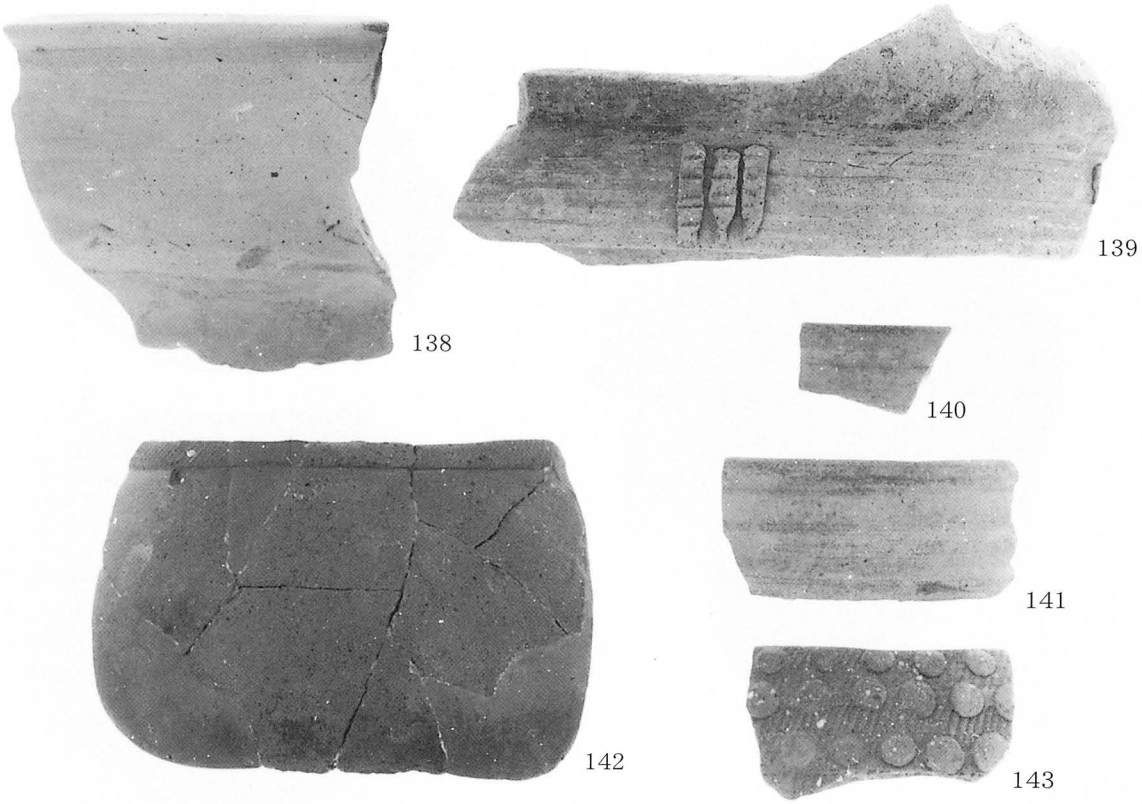
2. Ⅱ工区第13層出土弥生土器　甕



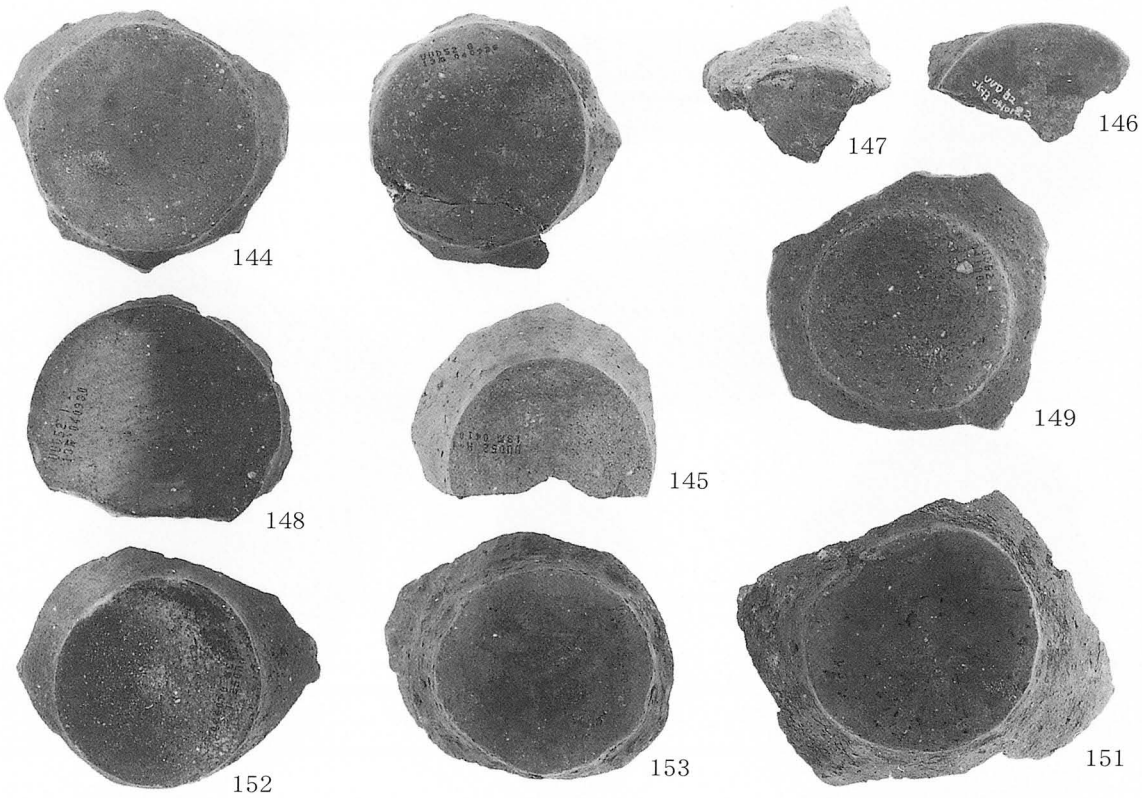
1. Ⅱ工区第13層出土弥生土器　甕



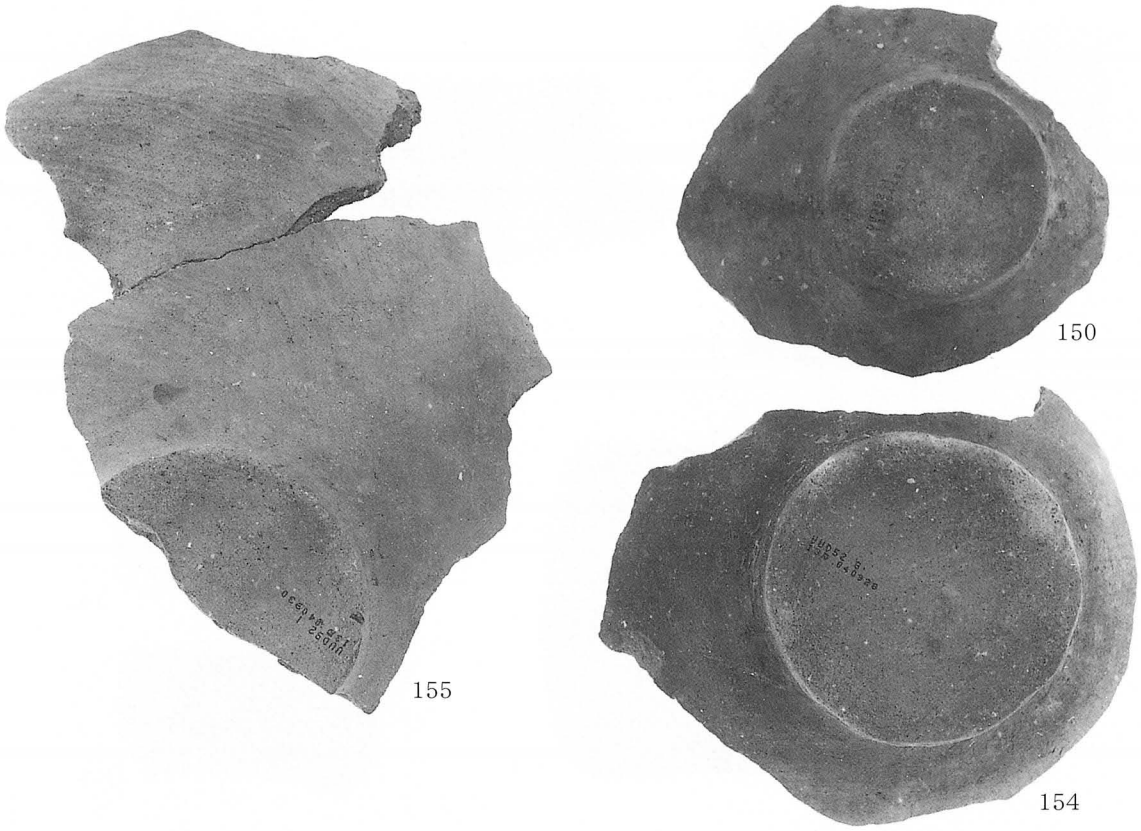
2. Ⅱ工区第13層出土弥生土器　壷



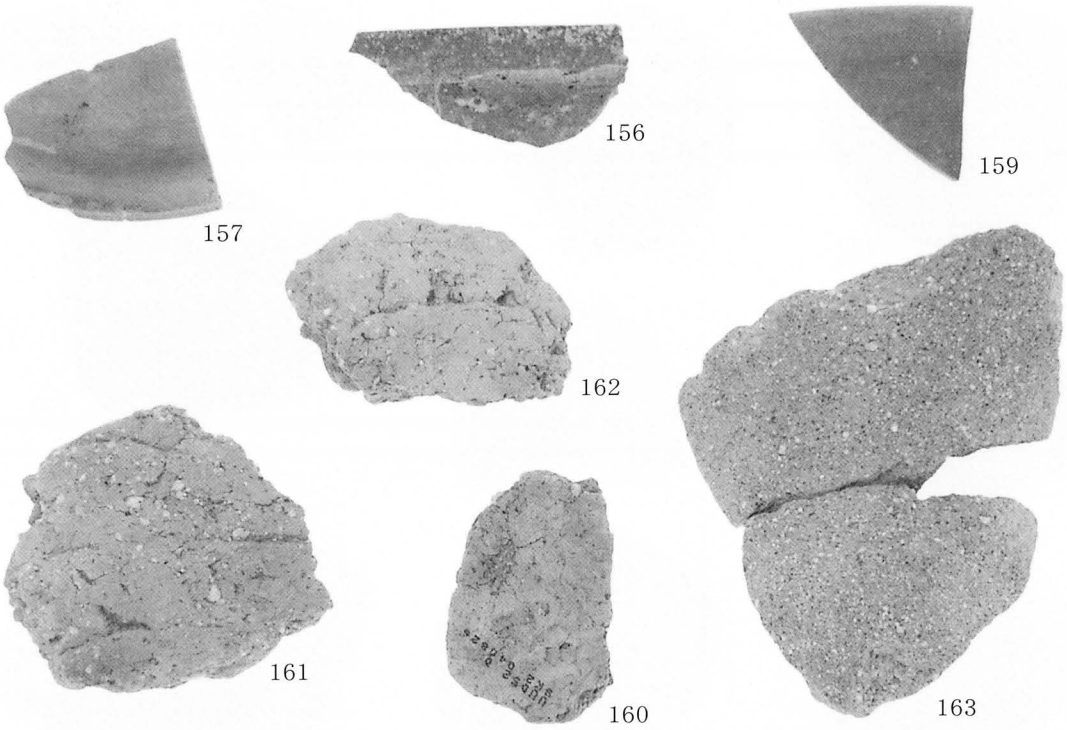
1. Ⅱ工区第13層出土弥生土器　壷・台付壷



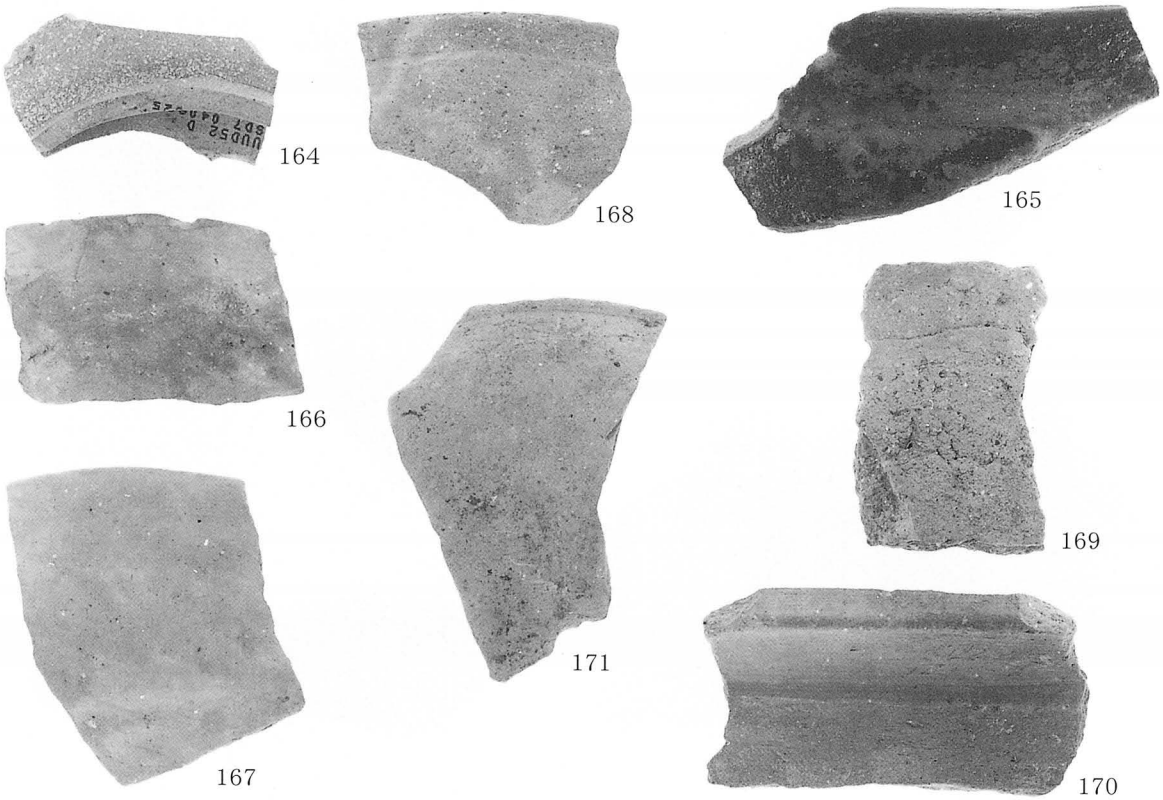
2. Ⅱ工区第13層出土弥生土器　底部



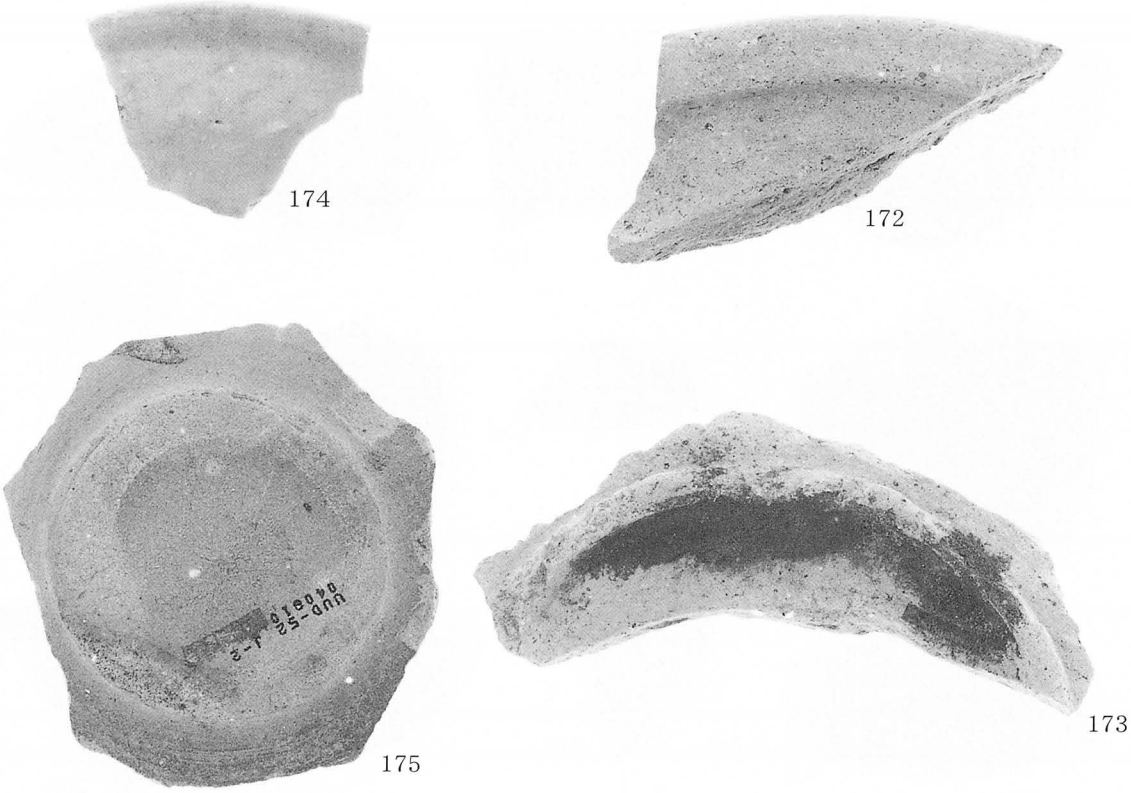
1. Ⅱ工区第13層出土弥生土器　底部



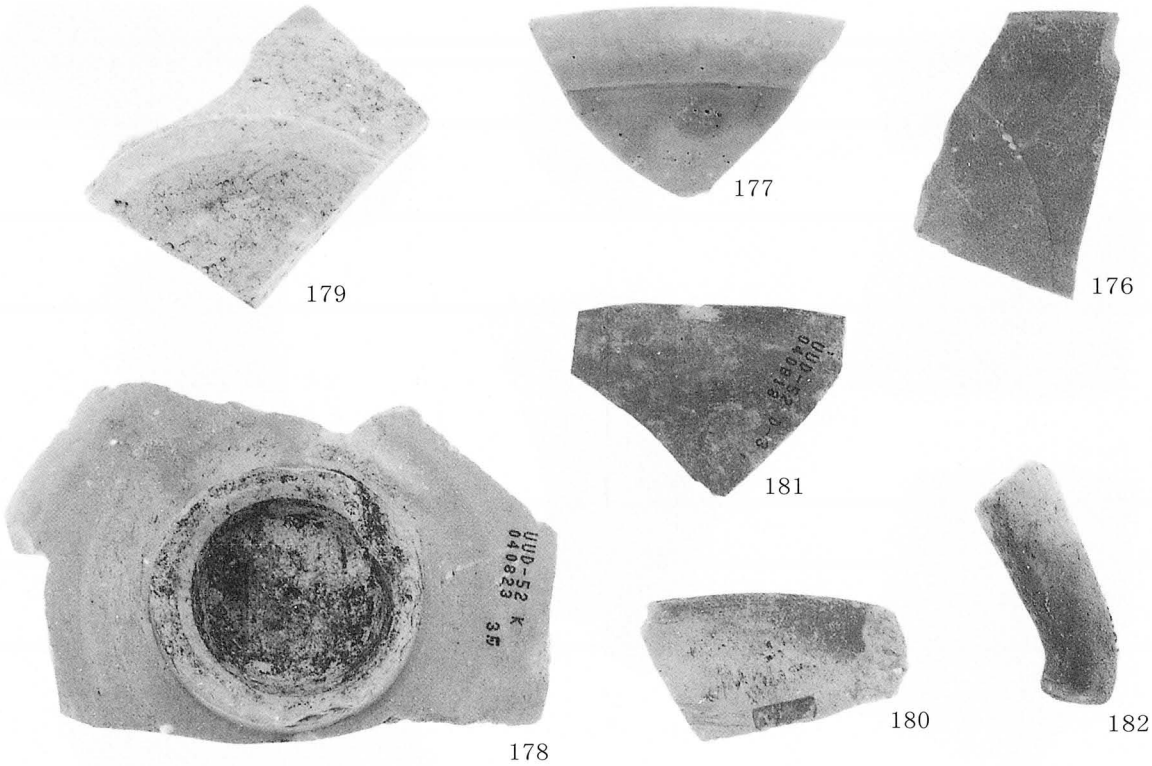
2. Ⅱ工区ピット6・15、土坑2出土須恵器　杯・蓋杯、製塩土器



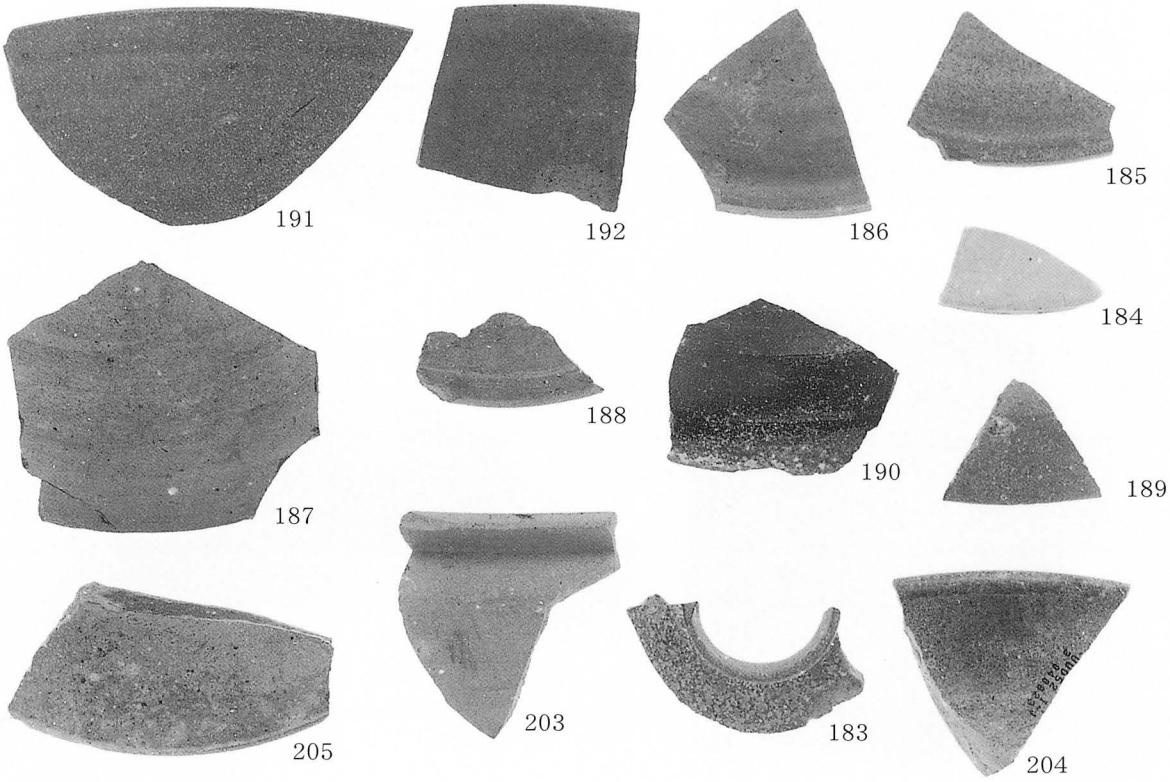
1. Ⅱ工区溝７～11出土土師器　甕・杯・皿、須恵器　底部、製塩土器



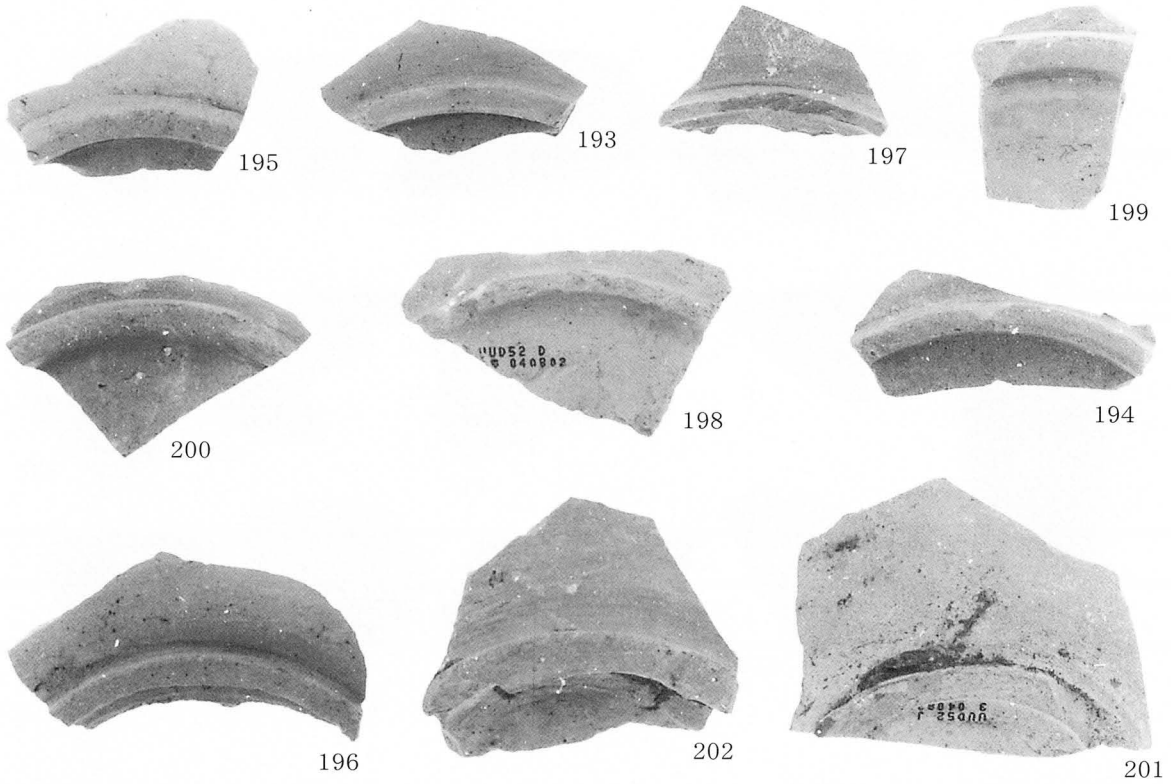
2. Ⅱ工区第２層出土須恵器　甕・底部、白磁　皿、陶器　底部



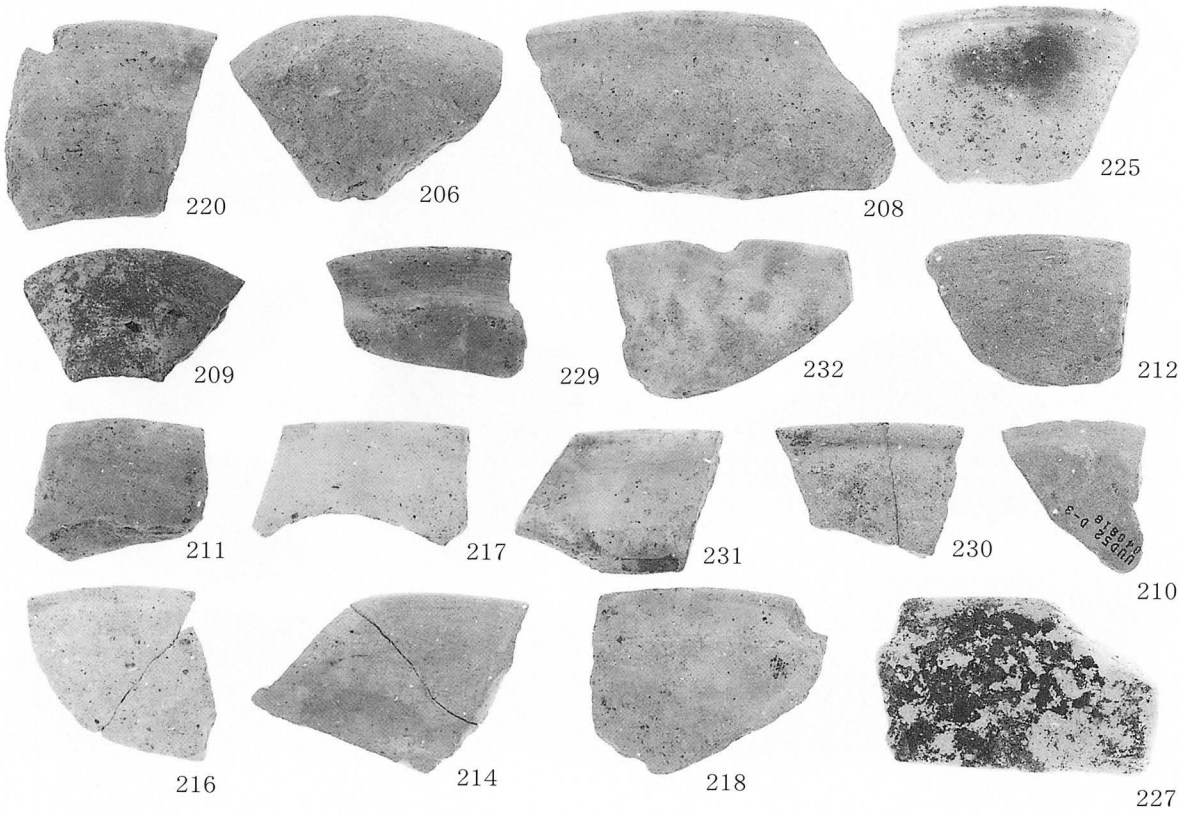
1. Ⅱ工区第３層出土青磁　椀、白磁　椀、瓦器　椀・羽釜



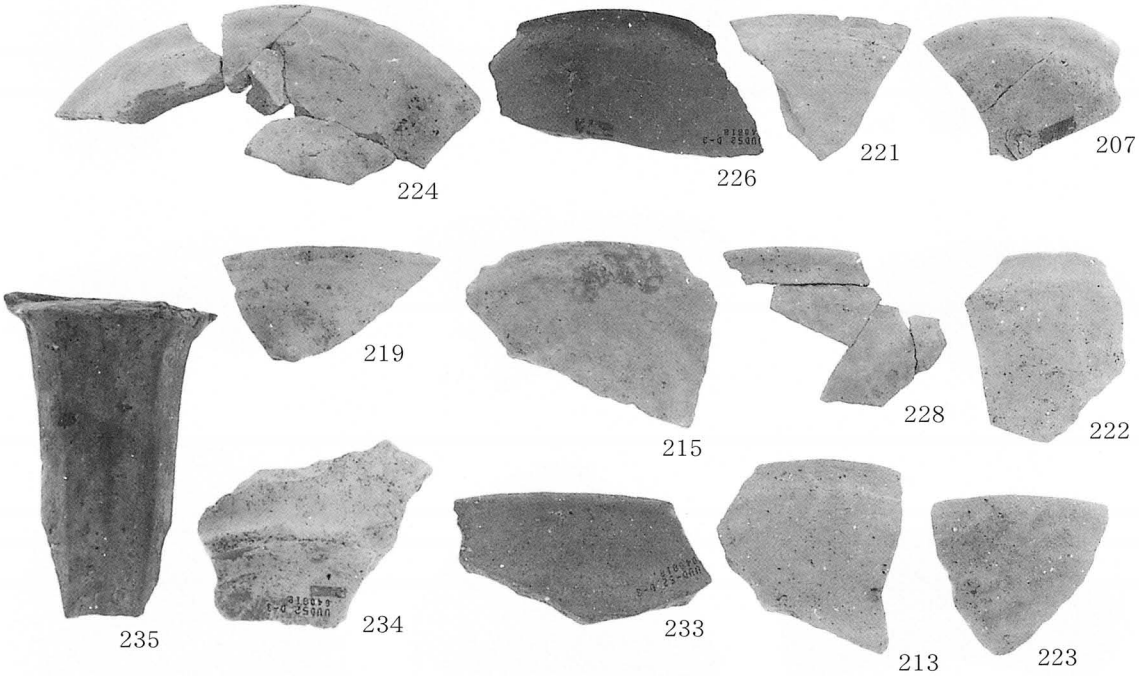
2. Ⅱ工区第３層出土須恵器　蓋杯・短頸壷・杯・壷・高杯



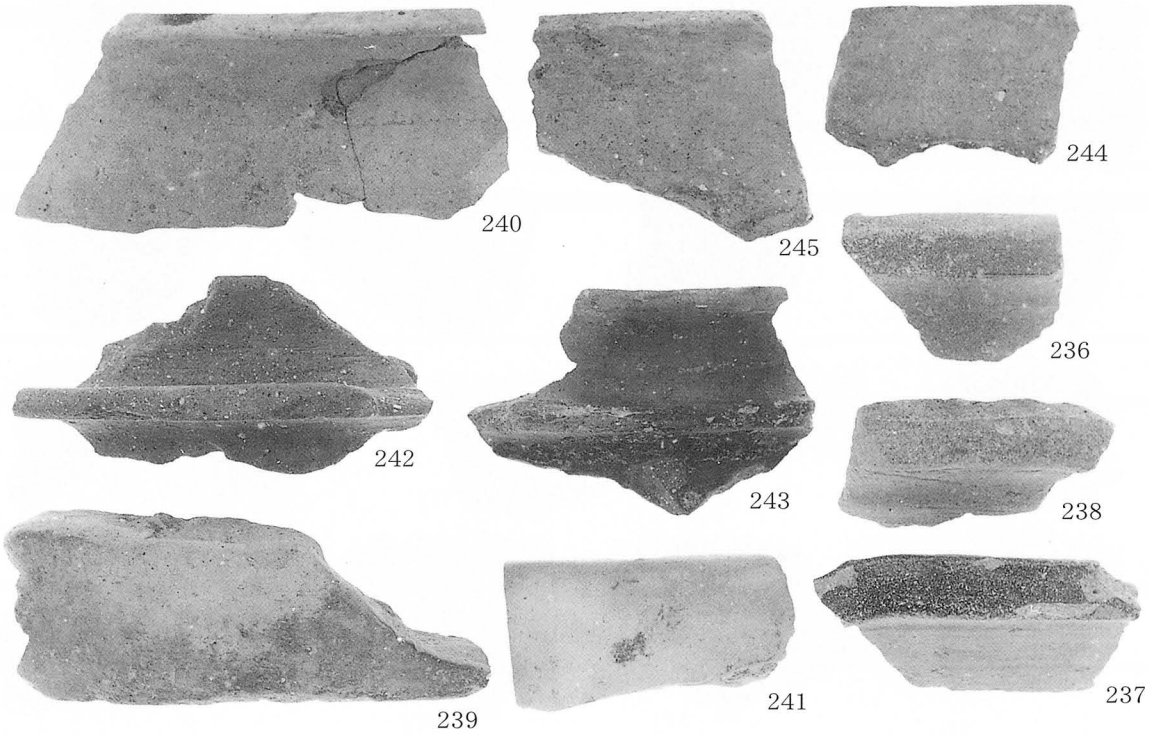
1. Ⅱ工区第３層出土須恵器　底部



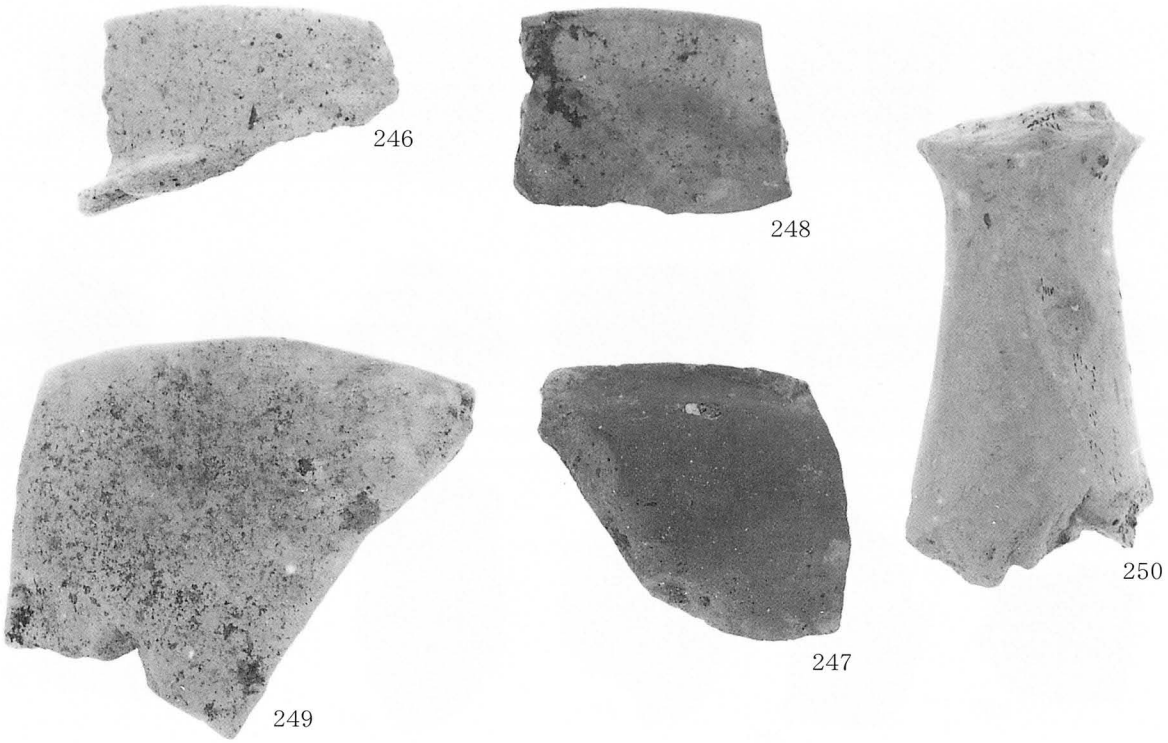
2. Ⅱ工区第３層出土土師器　皿・杯



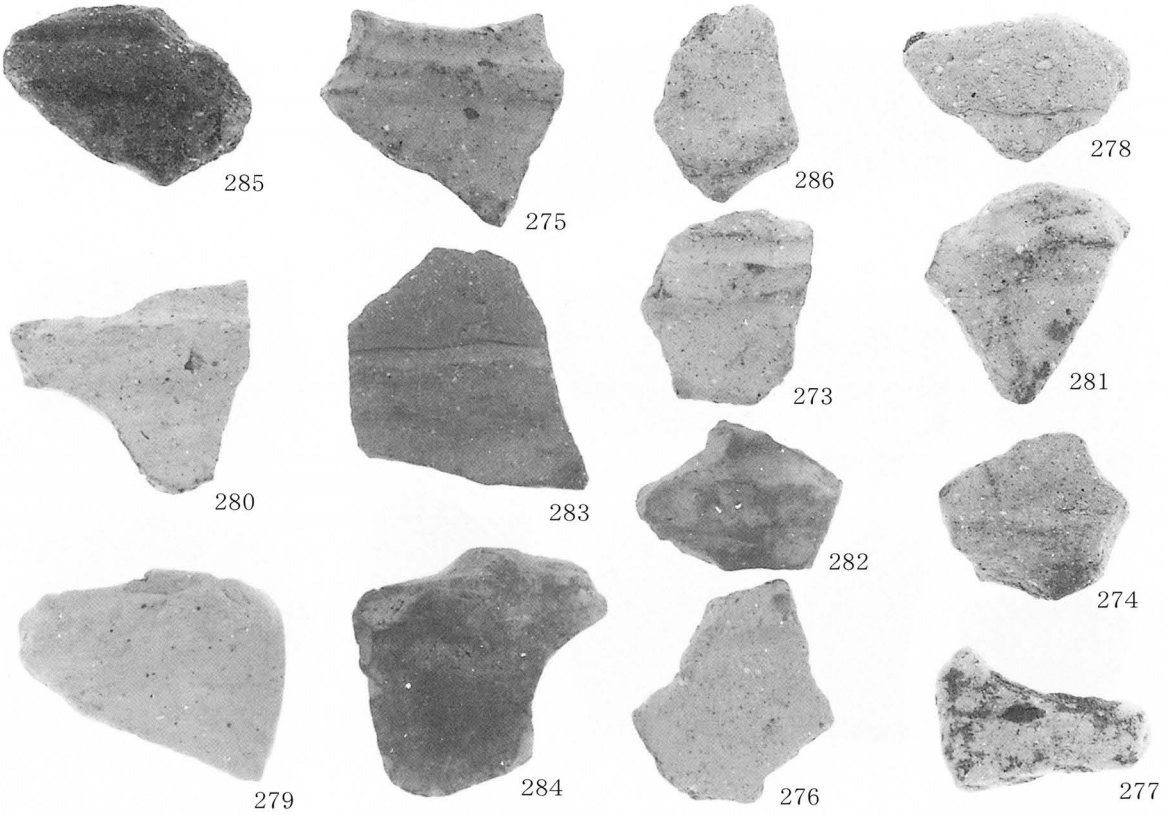
1.　Ⅱ工区第３層出土土師器　皿・杯・甕・高杯・底部



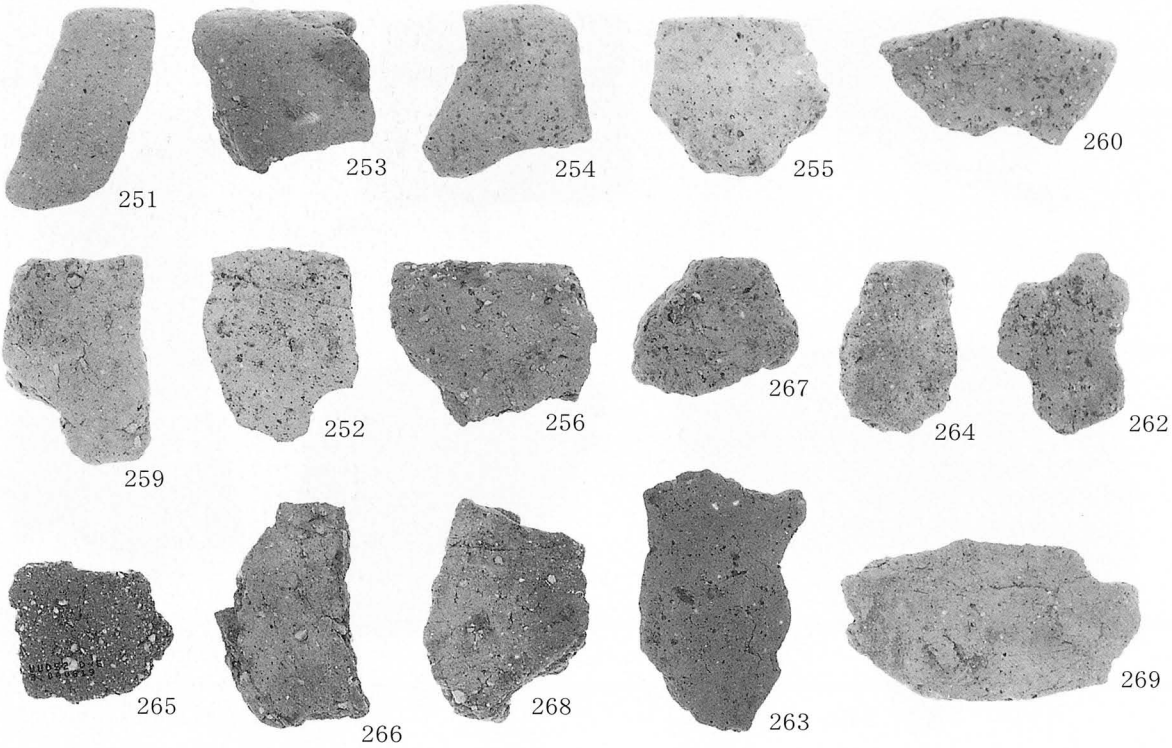
2.　Ⅱ工区第３層出土土師器　鍋・羽釜・竈・甑、須恵器　甕・捏鉢、瓦器　鉢



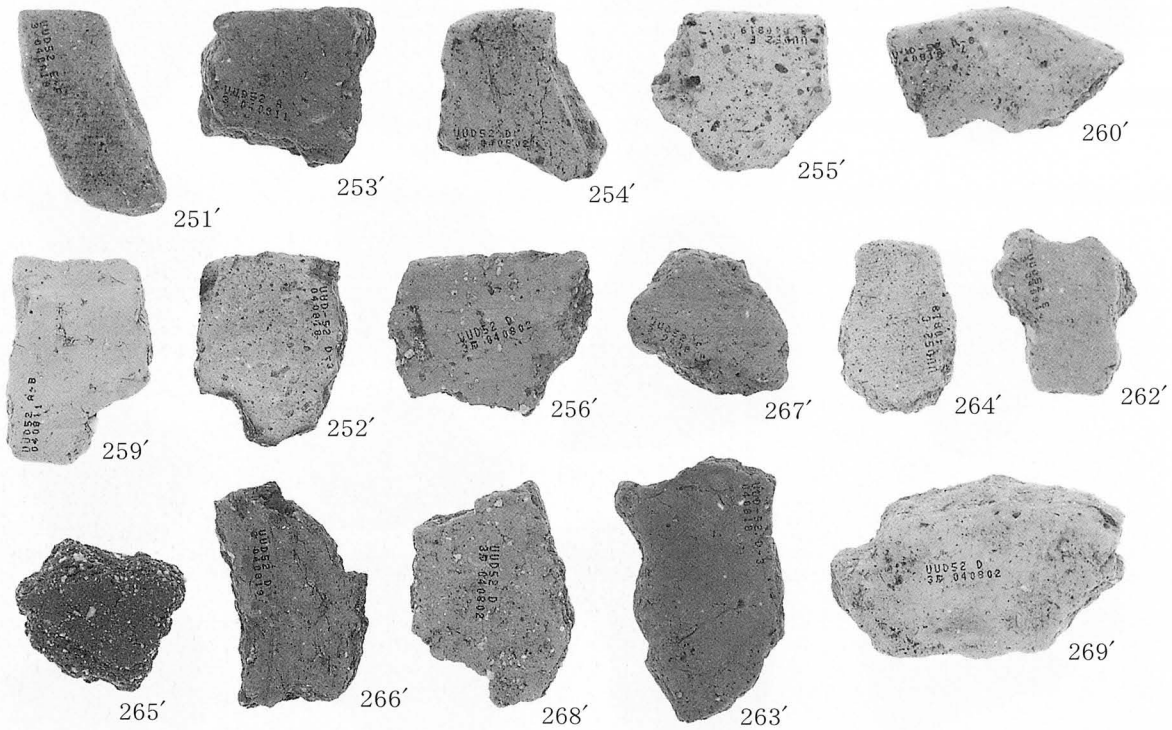
1. Ⅱ工区第４層出土土師器　甕・鉢・高杯



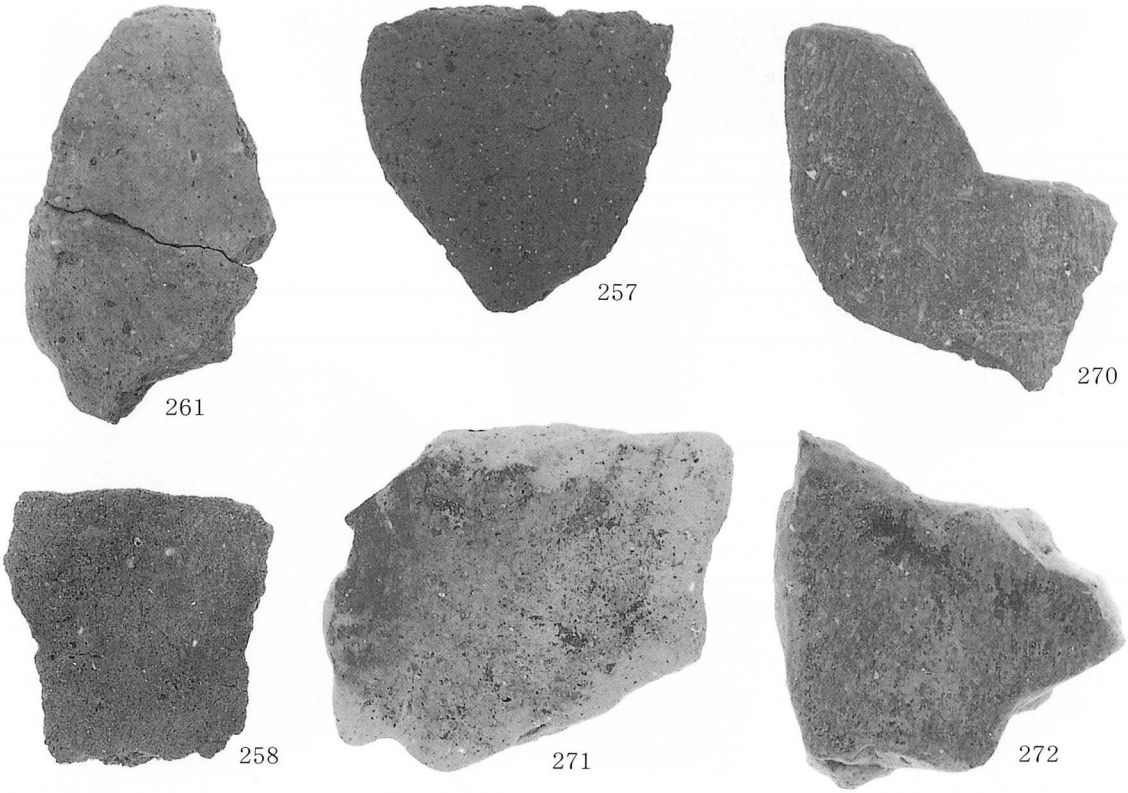
2. Ⅱ工区第３層出土円筒埴輪



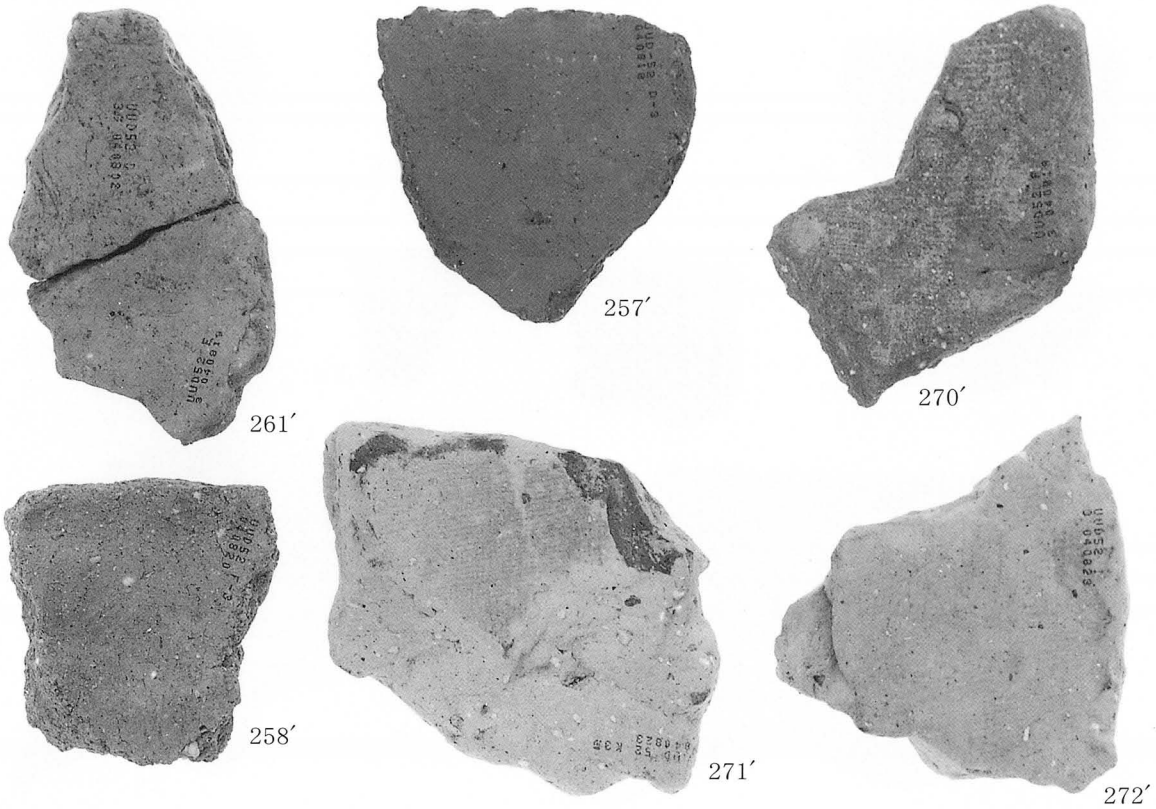
1. Ⅱ工区第３層出土製塩土器（表）



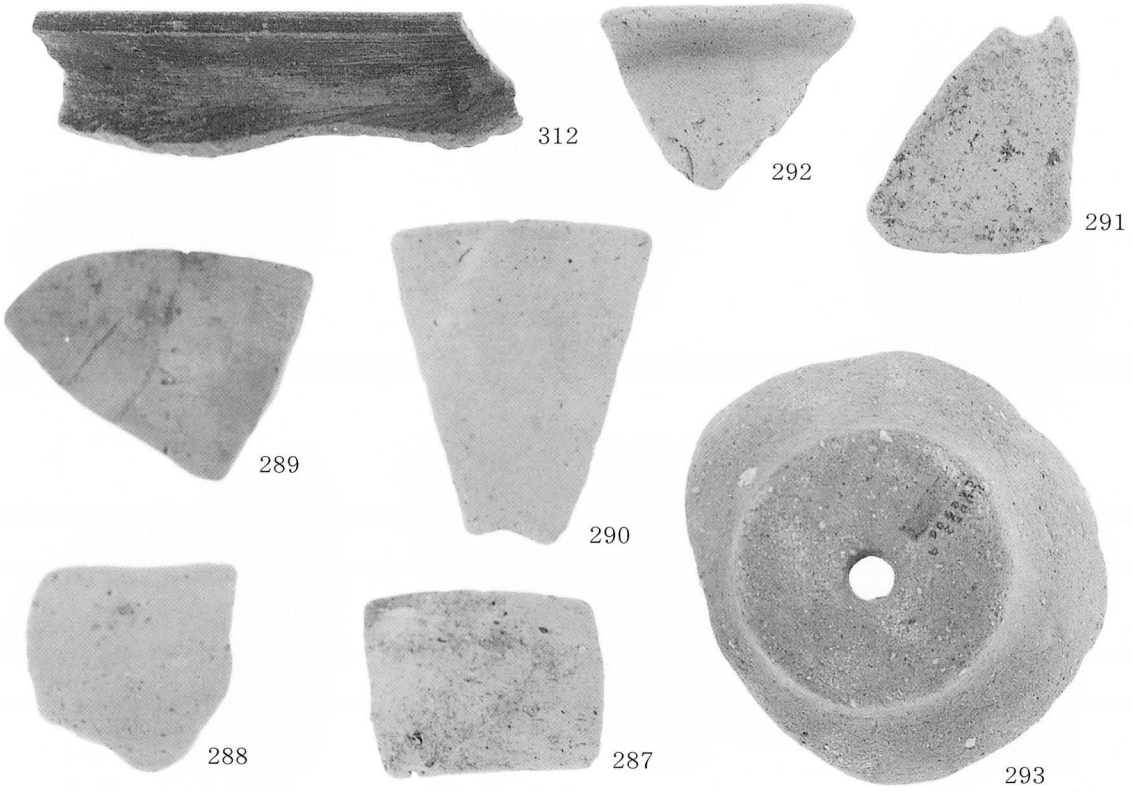
2. 同上（裏）



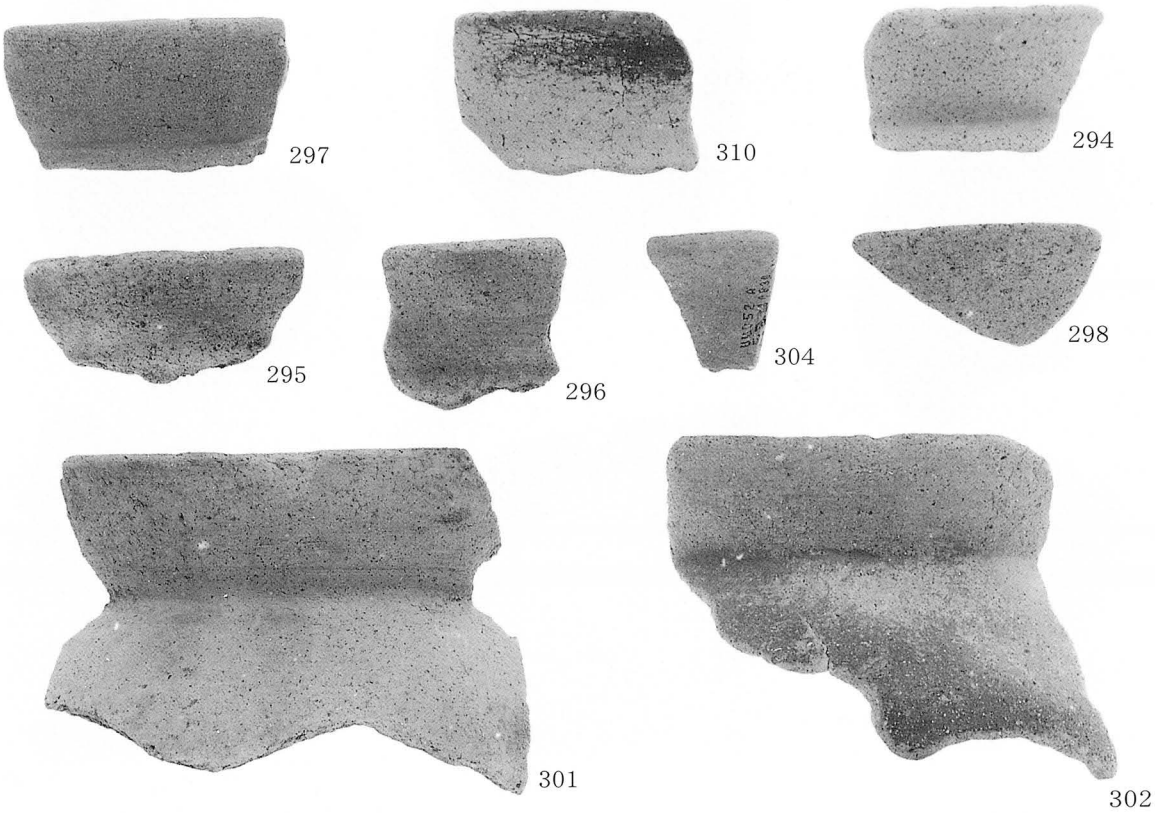
1. Ⅱ工区第３層出土製塩土器、丸瓦・平瓦（表）



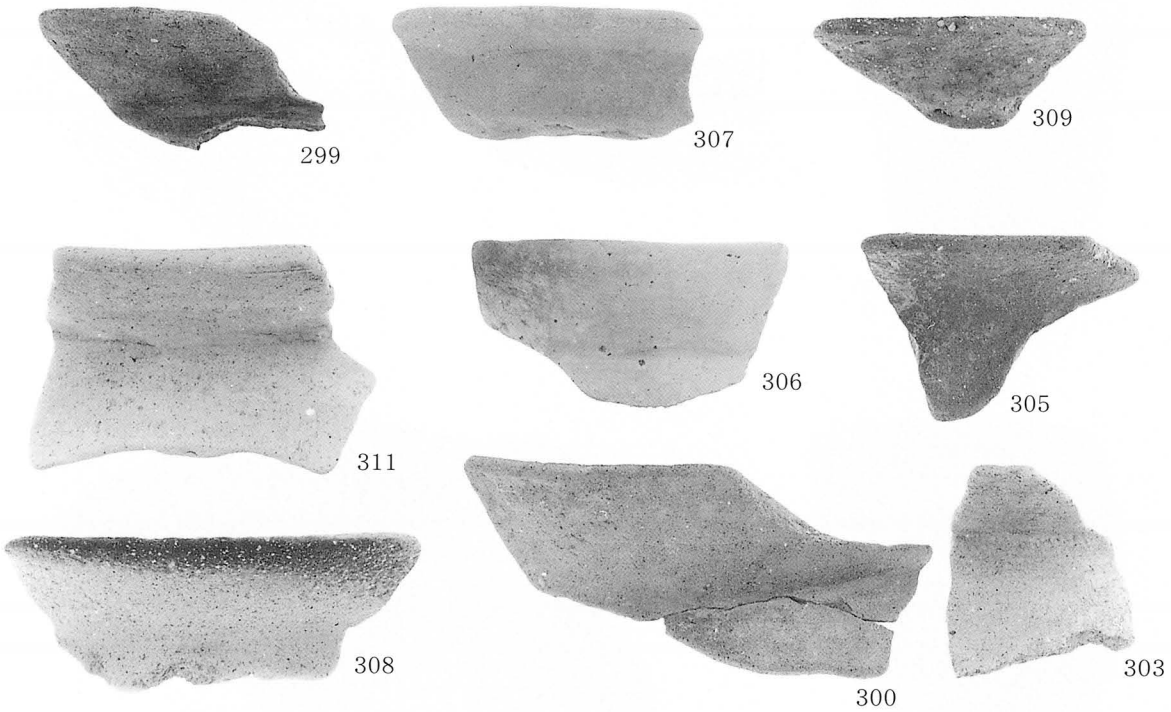
2. 同上（裏）



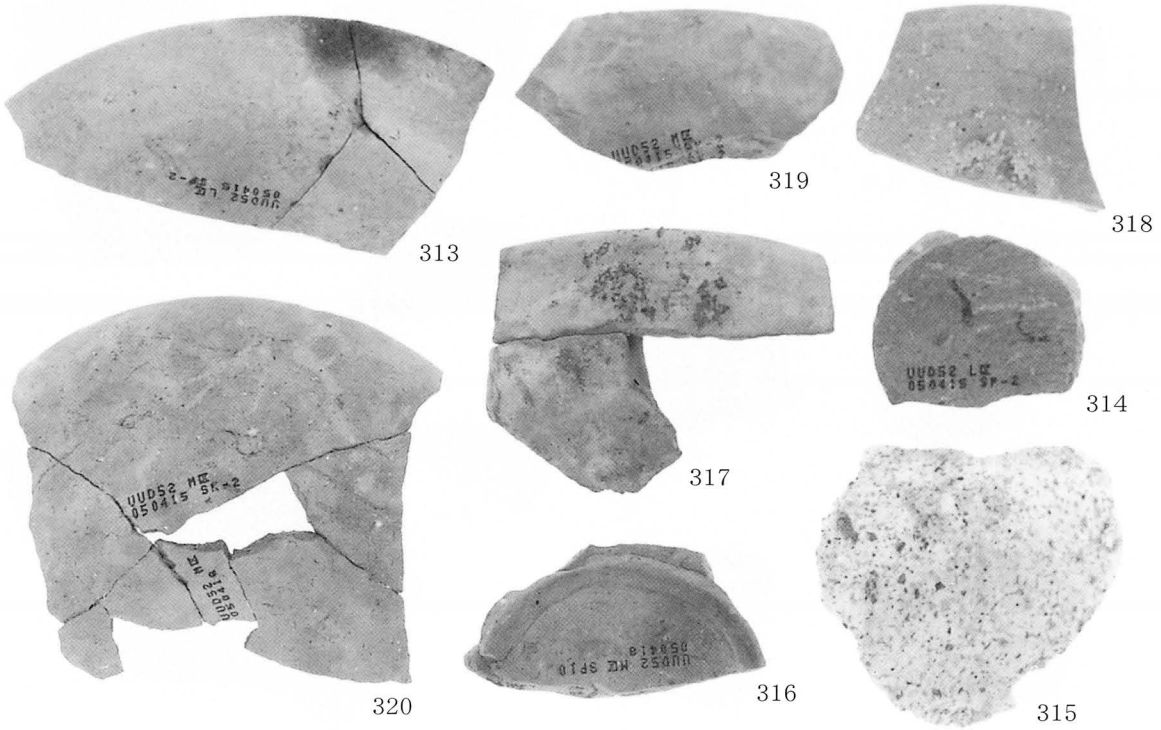
1. Ⅱ工区第５・８層出土土師器　鉢・高杯・壷・器台・甕・底部



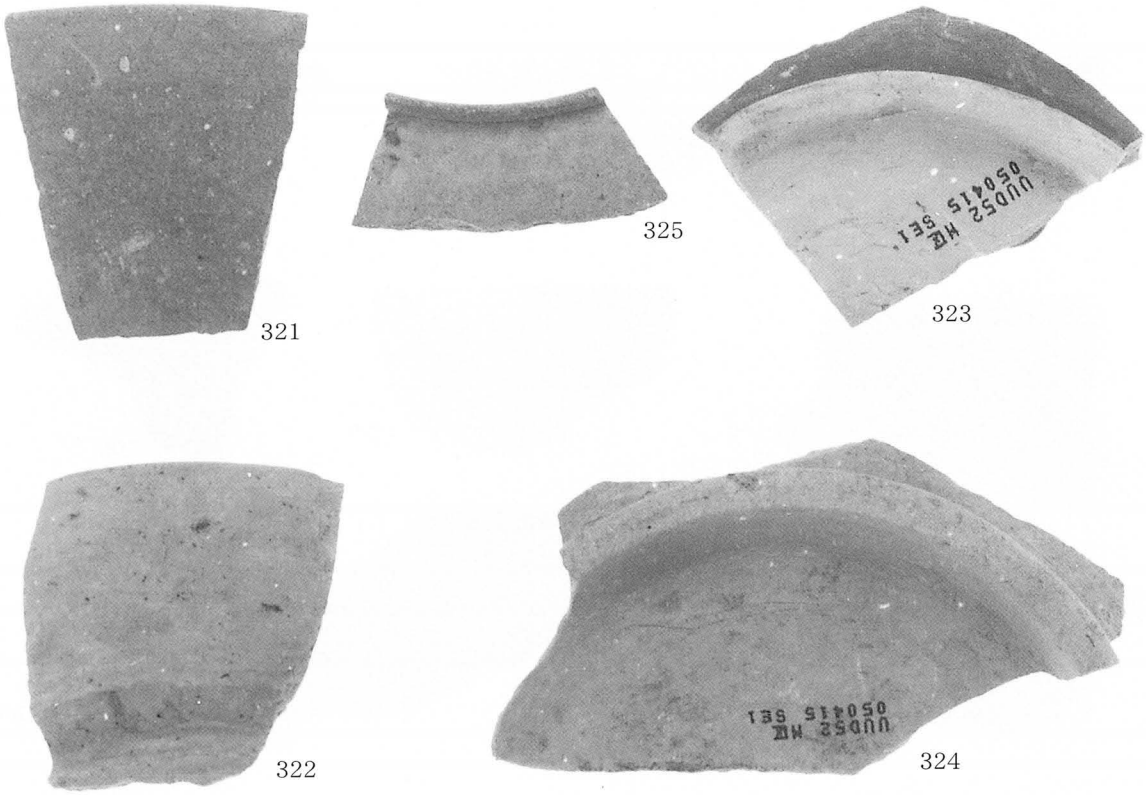
2. Ⅱ工区第５層出土土師器　甕



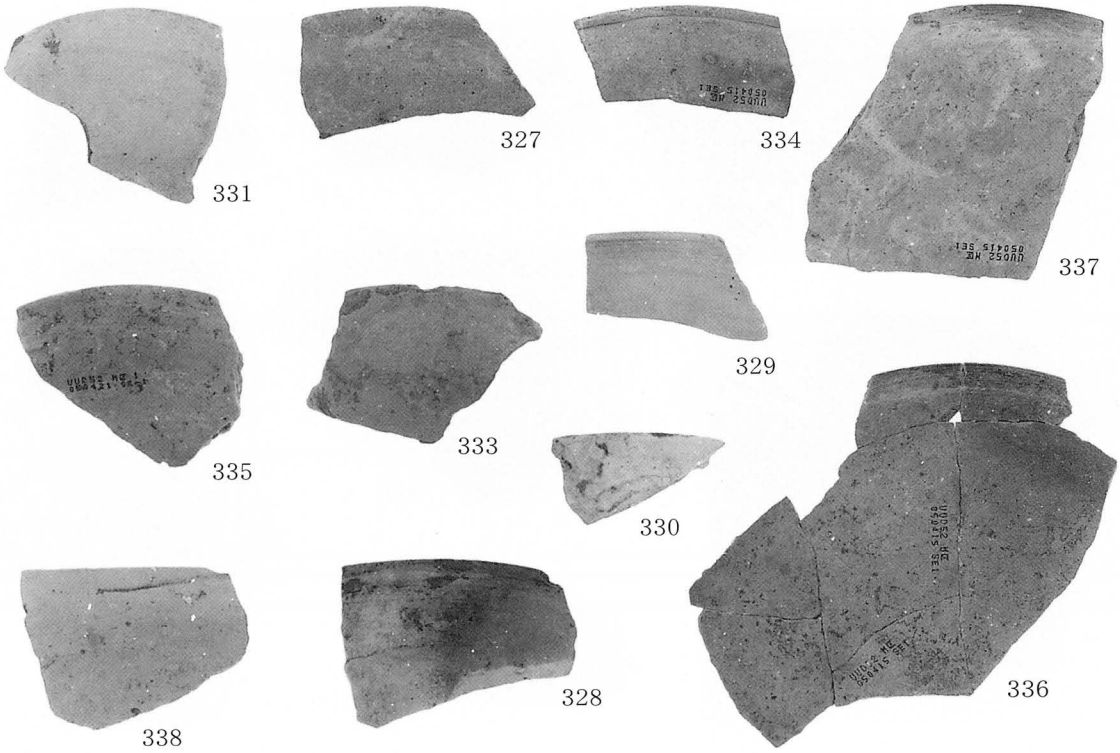
1. Ⅱ工区第５層出土土師器　甕



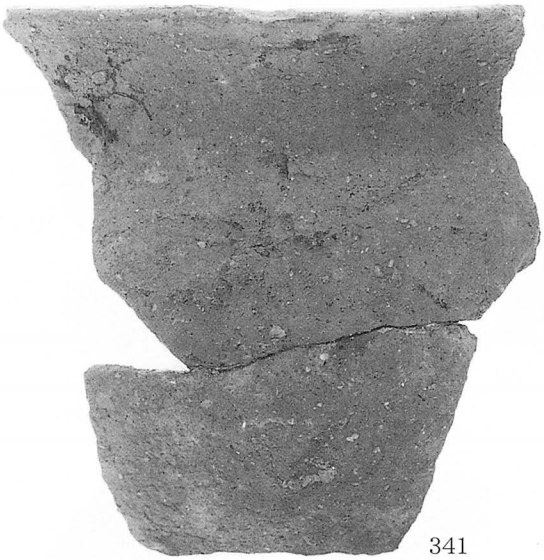
2. Ⅳ工区ピット２・７・10、溝１、土坑２出土土師器　杯・底部、須恵器　杯・底部、製塩土器

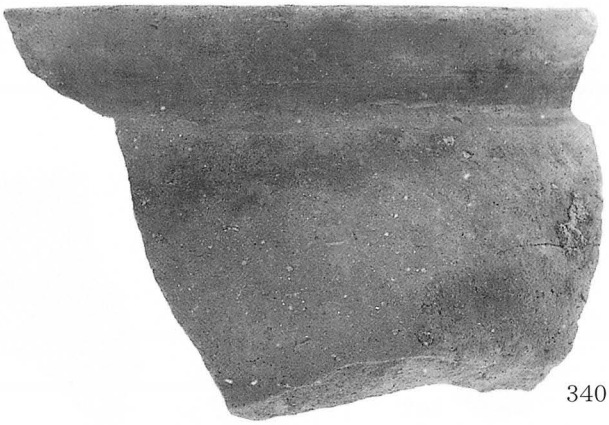


1. Ⅳ工区井戸１出土須恵器　杯・短頸壷・底部

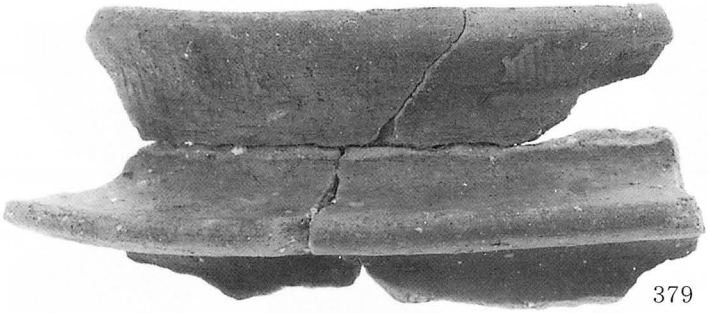


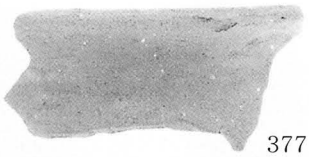
2. Ⅳ工区井戸１出土土師器　杯・皿


341


340

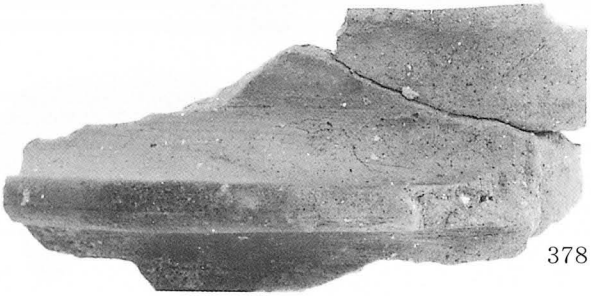
1. Ⅳ工区井戸１出土土師器　甕


379

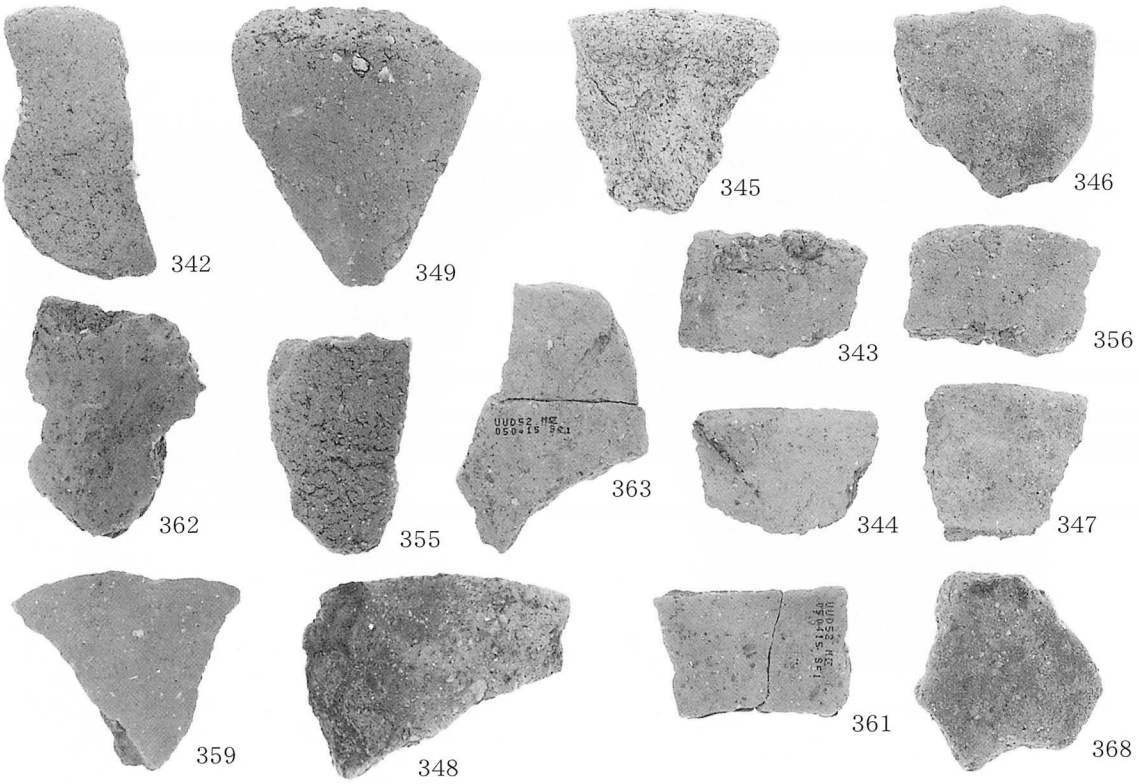

377

380

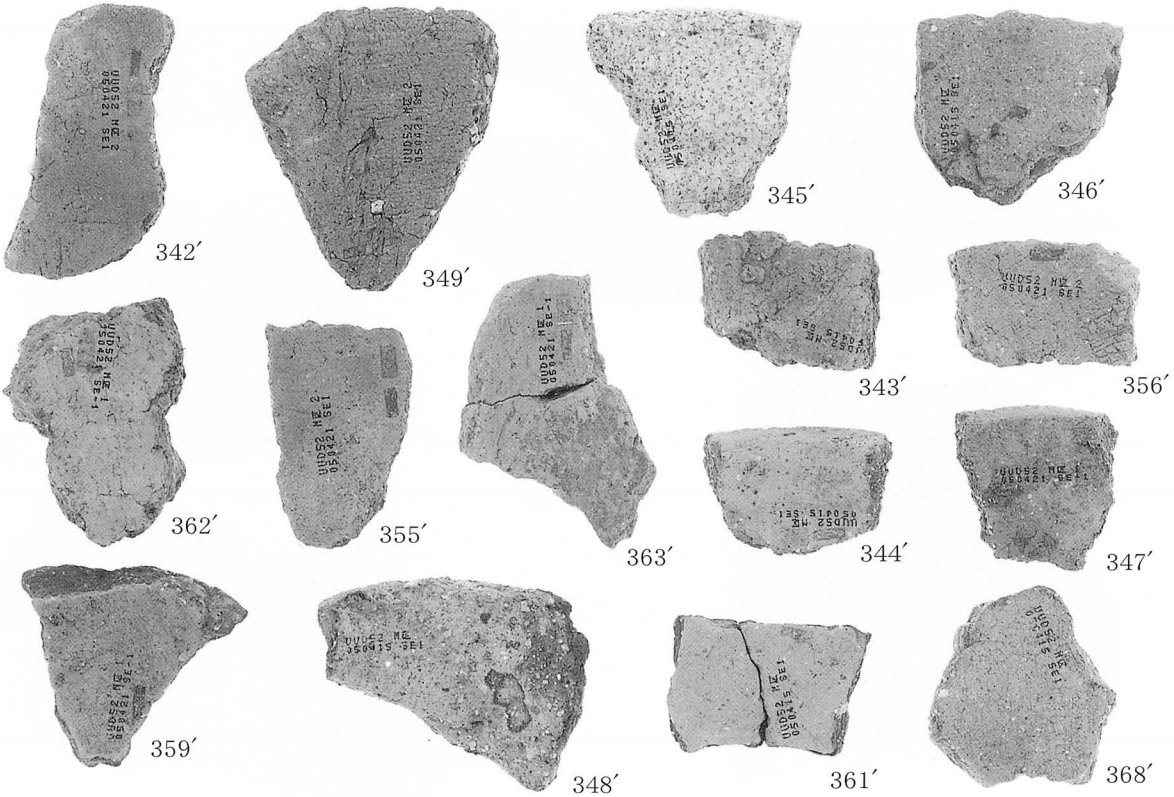
381


378

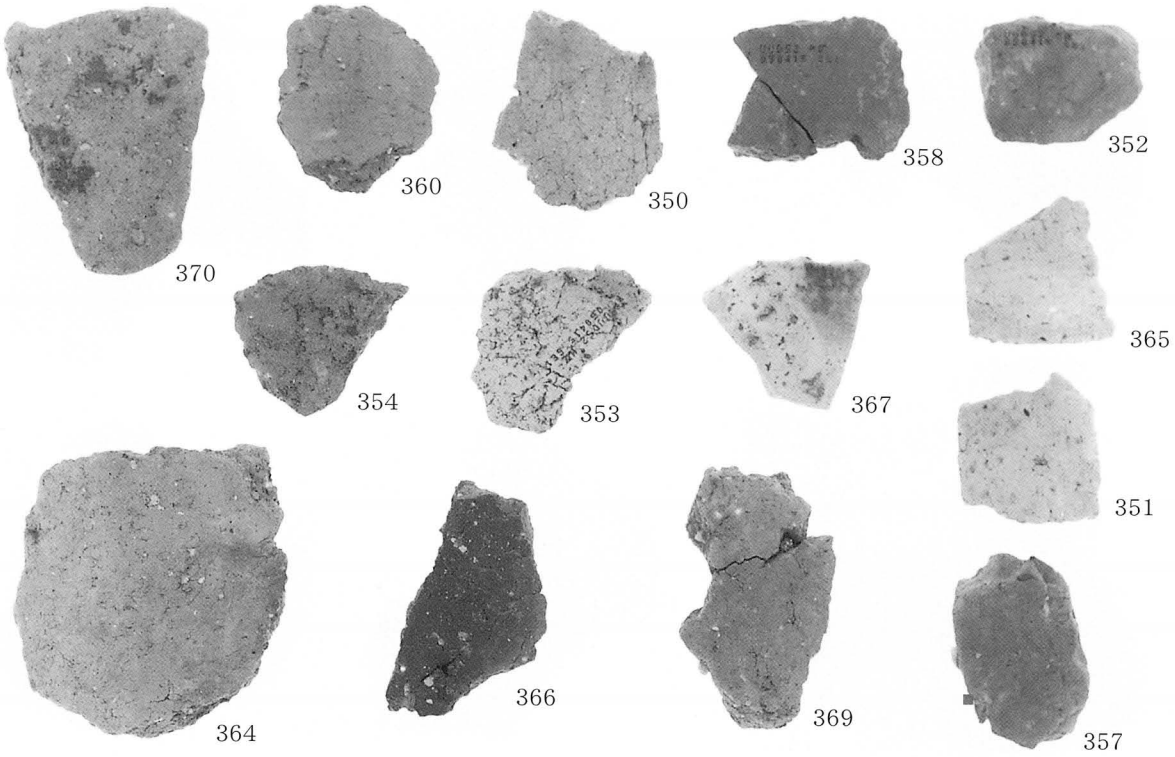
2. Ⅳ工区井戸１出土土師器　羽釜・竈



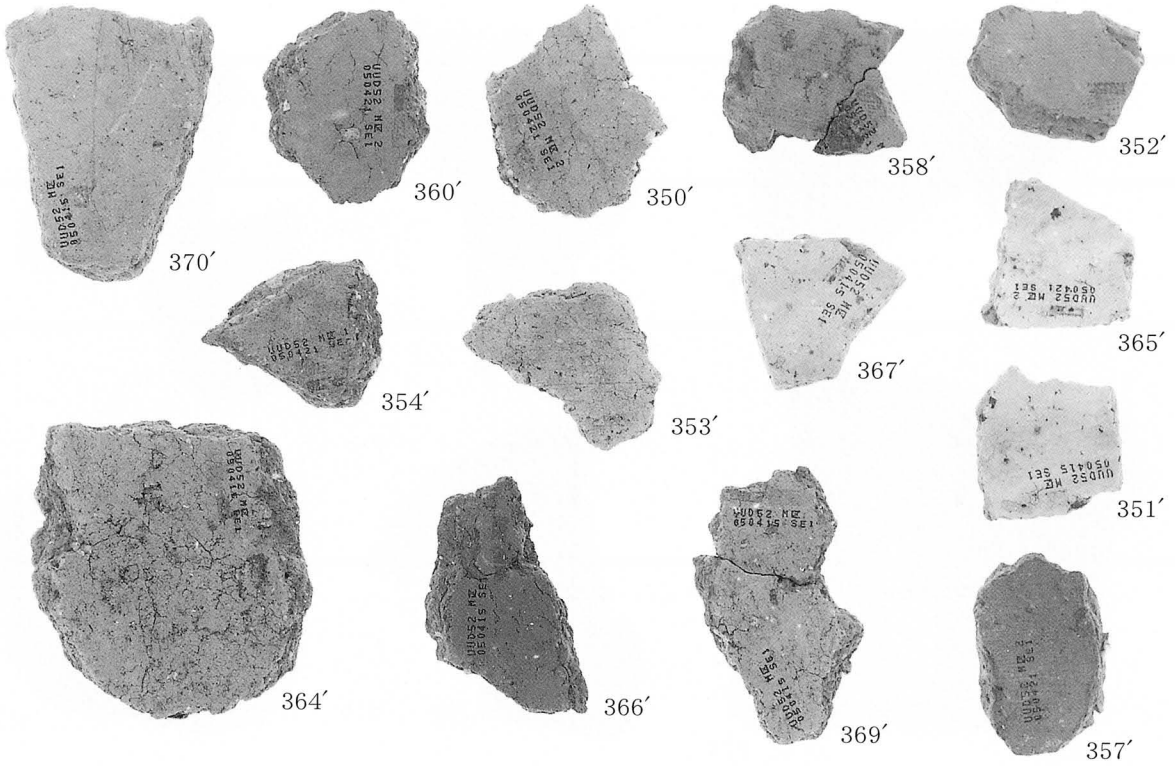
1. Ⅳ工区井戸１出土製塩土器（表）



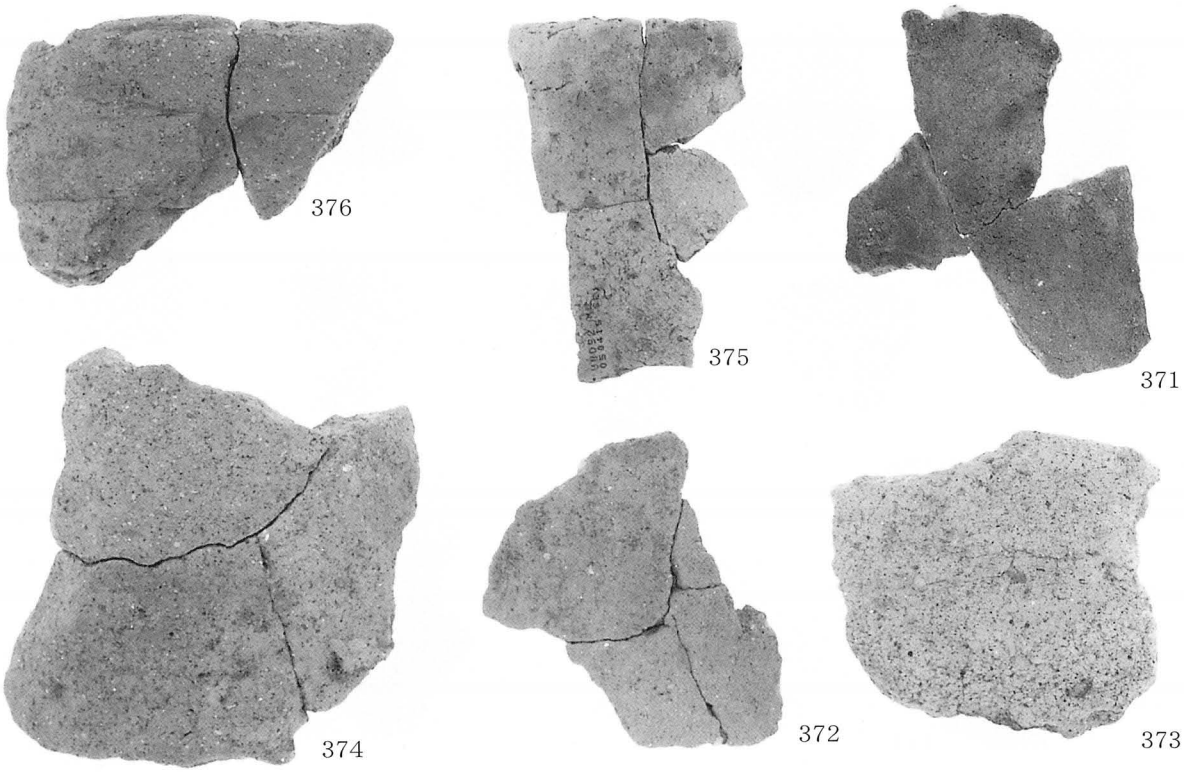
2. 同上（裏）



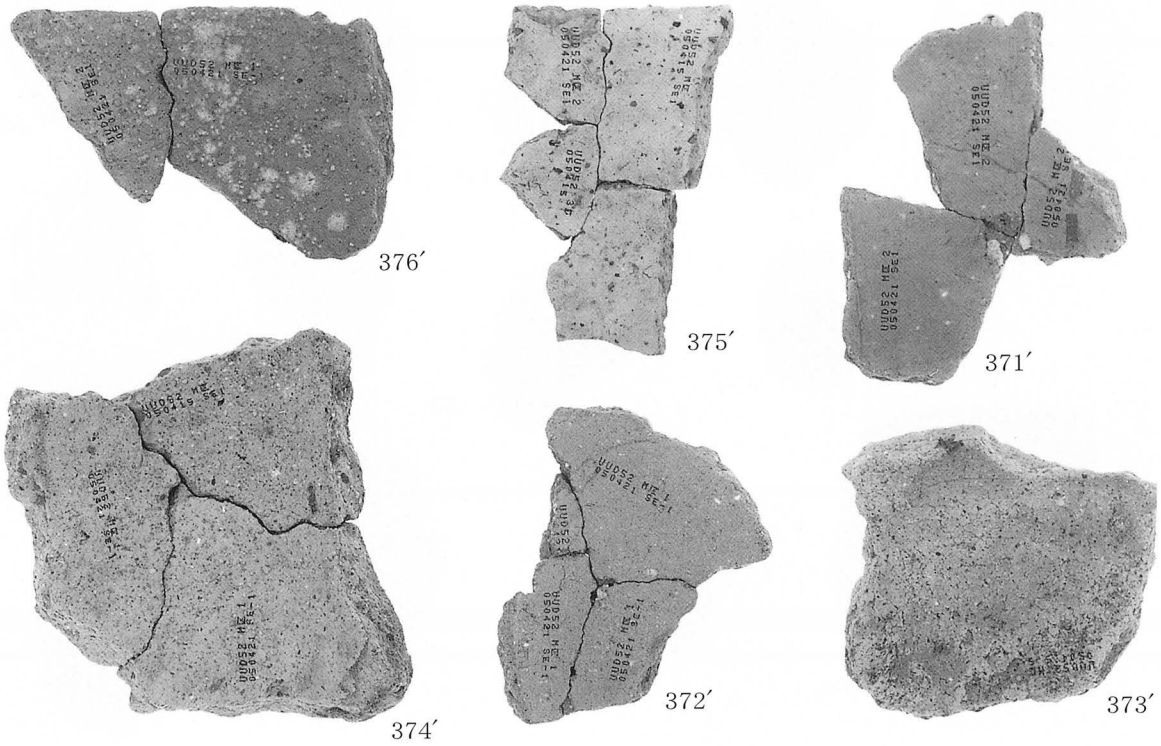
1. Ⅳ工区井戸１出土製塩土器（表）



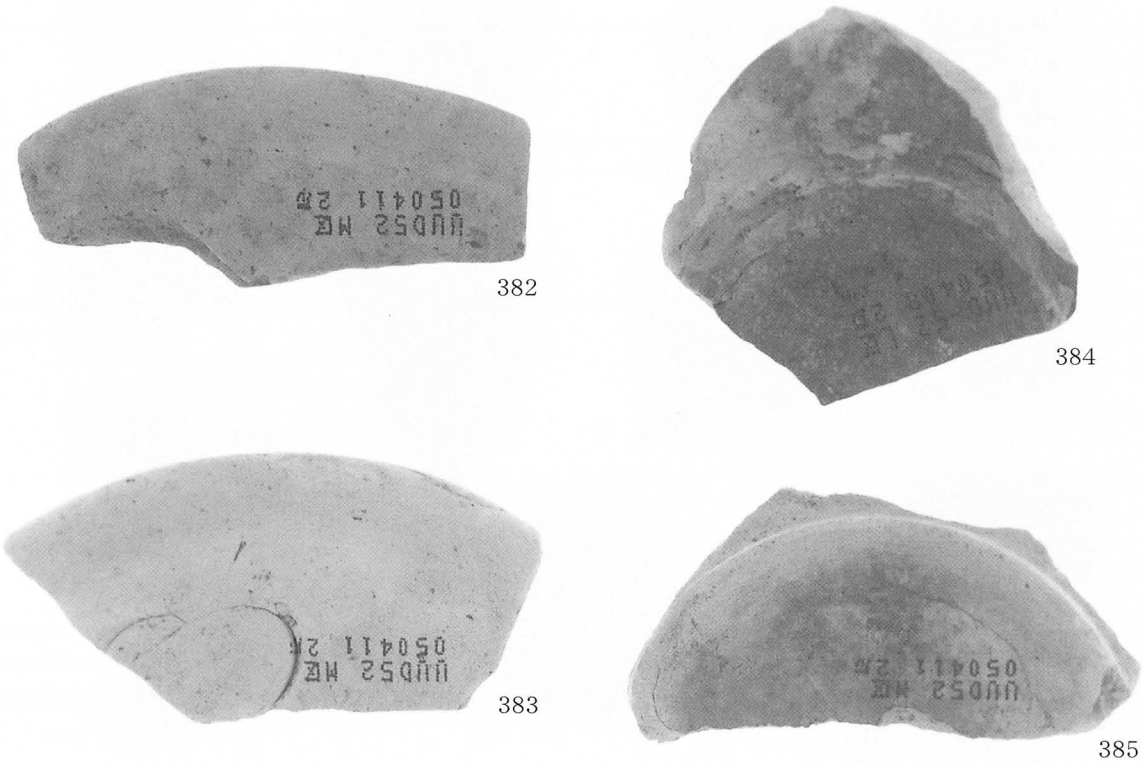
2. 同上（裏）



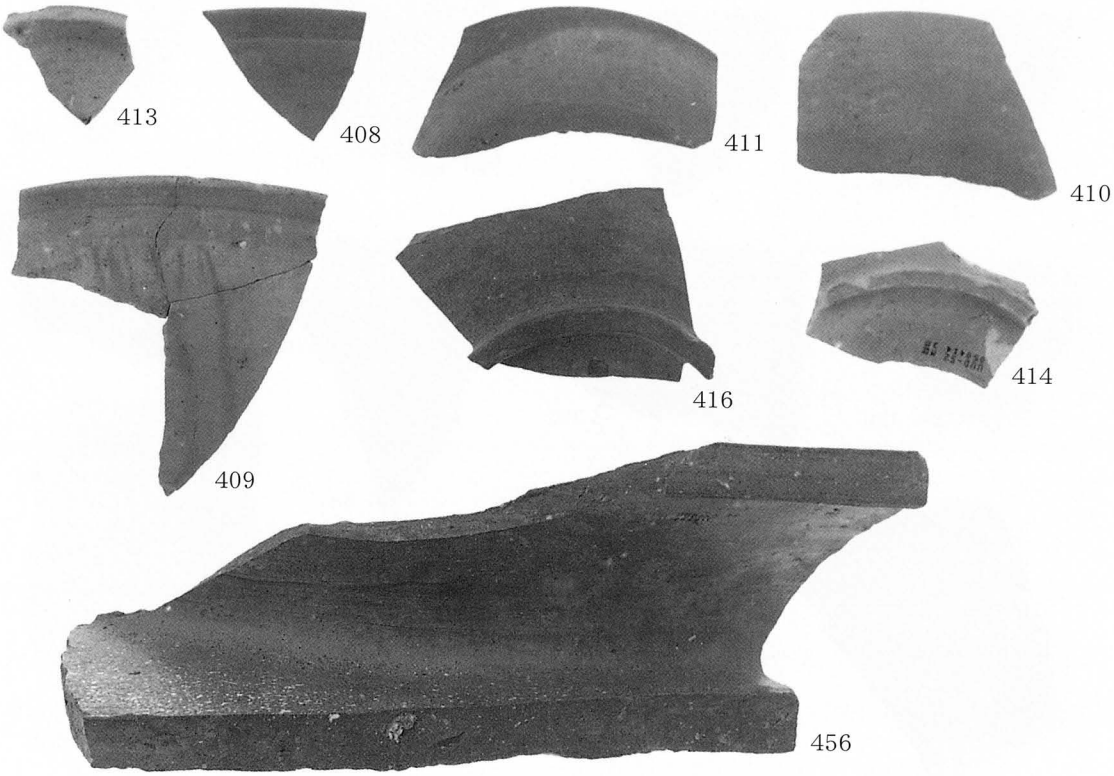
1. Ⅳ工区井戸１出土製塩土器（表）



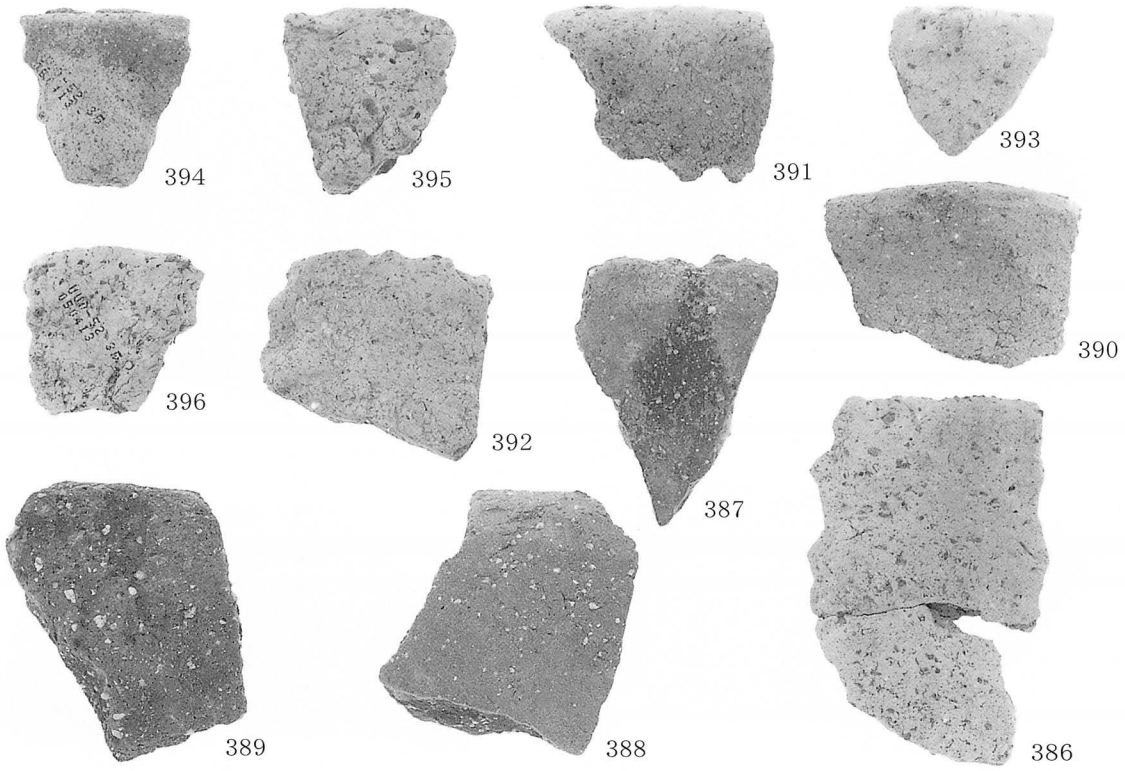
2. 同上（裏）



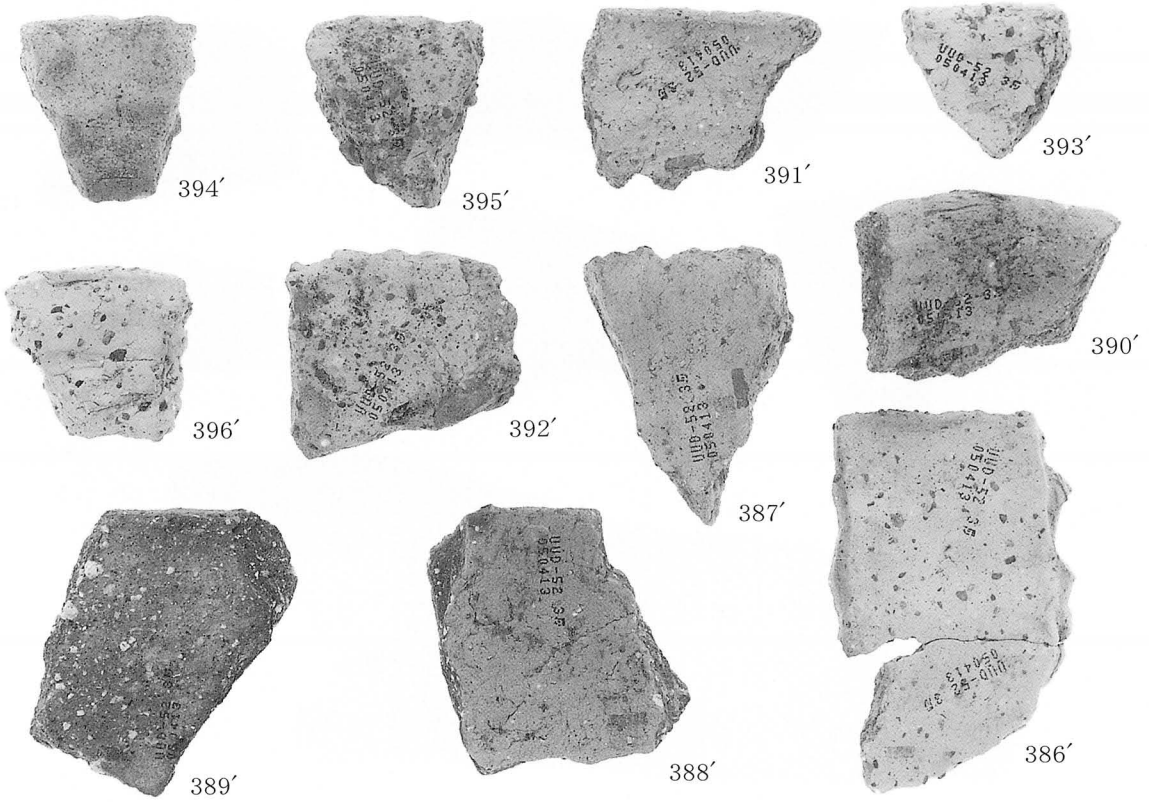
1. Ⅳ工区第２層出土土師器　皿、瓦器　椀



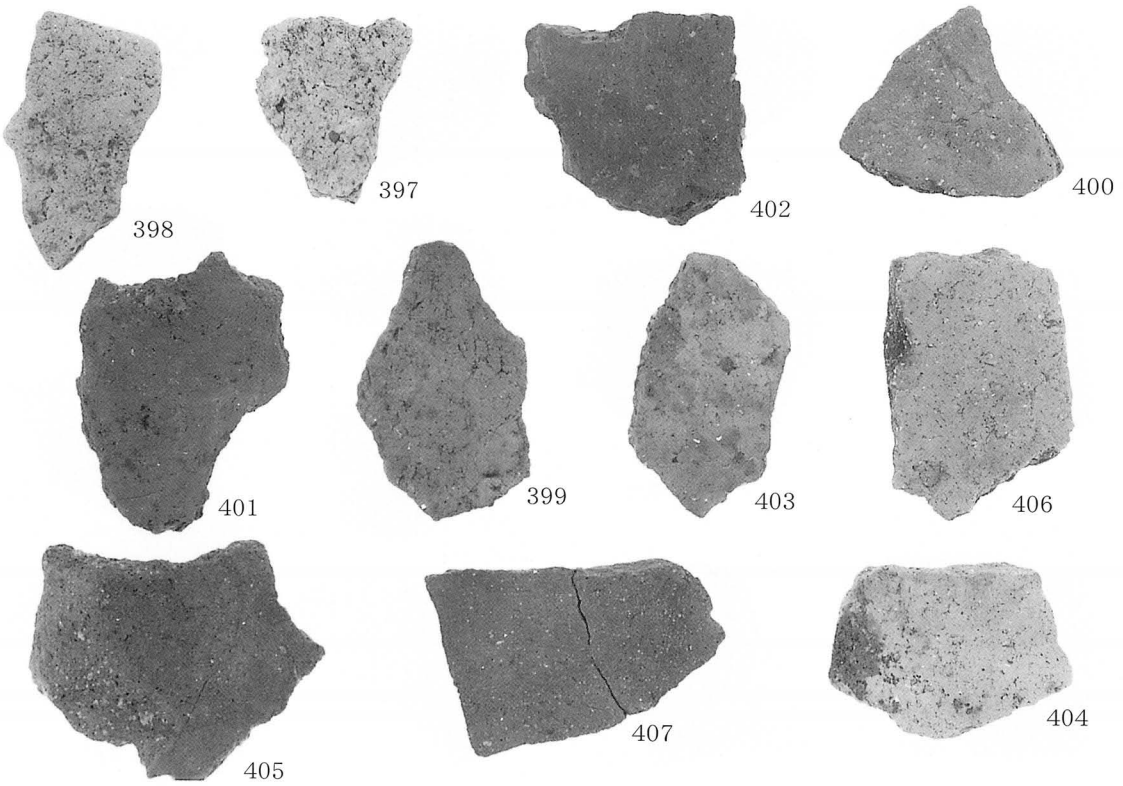
2. Ⅳ工区第３層出土須恵器　鉢・杯・壷・甕・底部



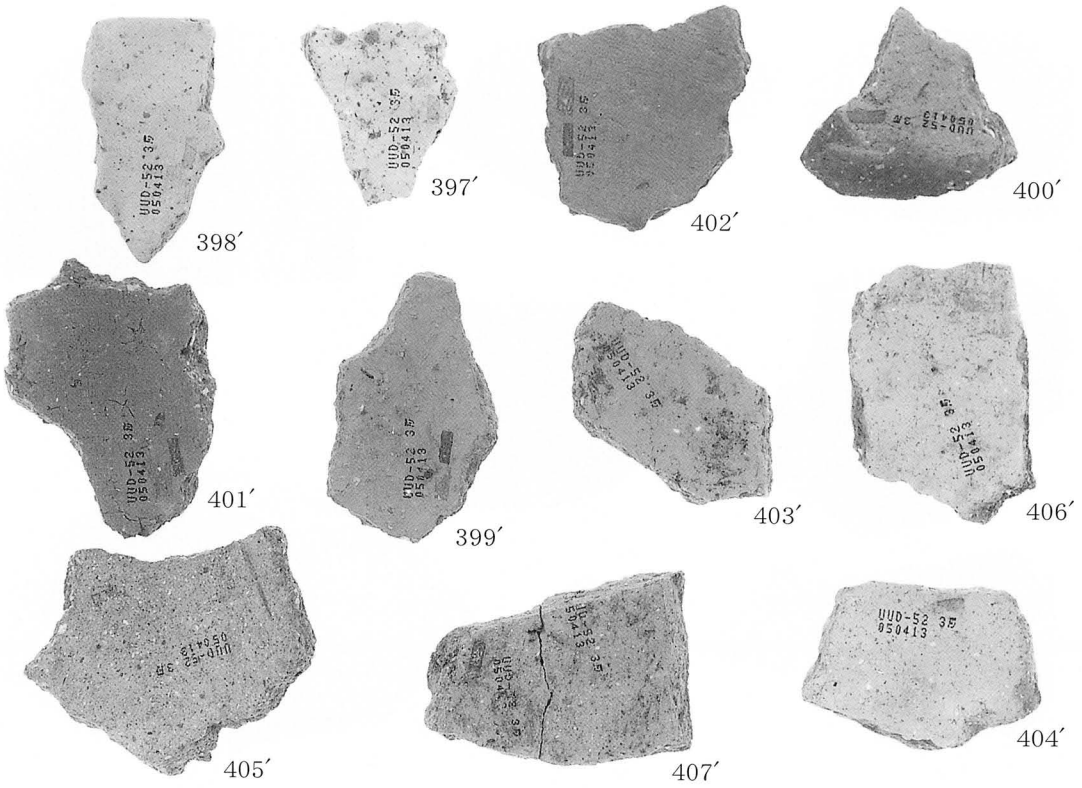
1. Ⅳ工区第３層出土製塩土器（表）



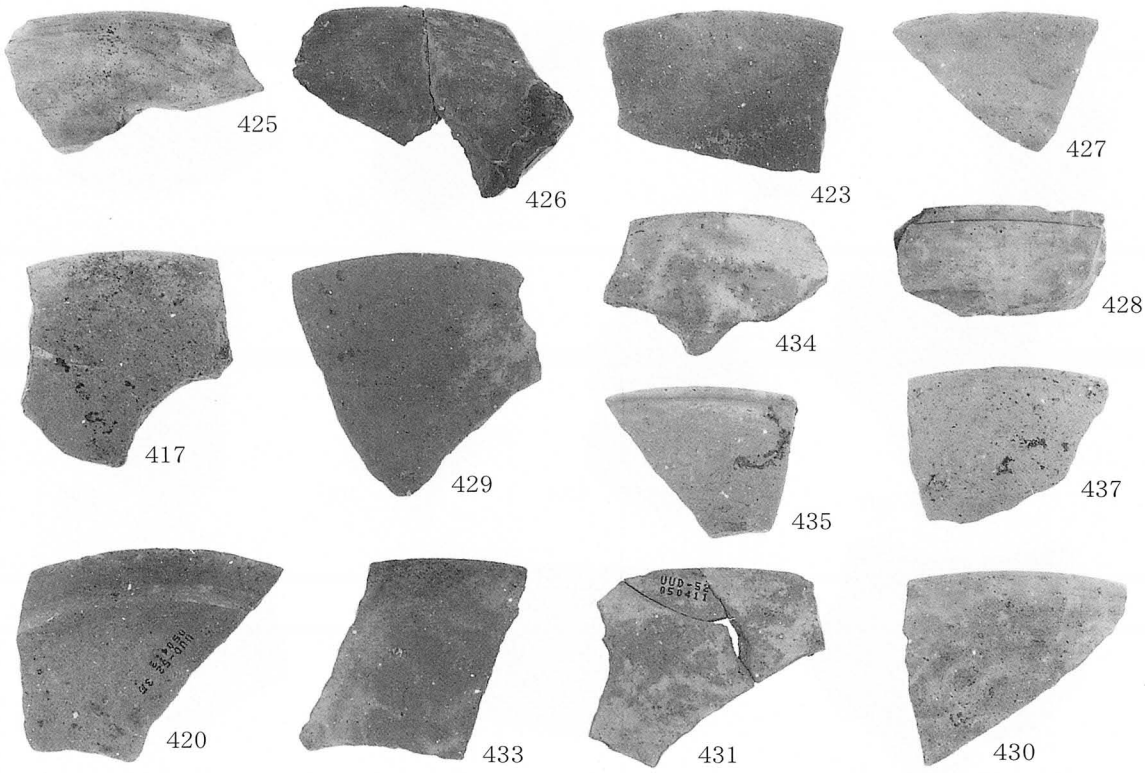
2. 同上（裏）



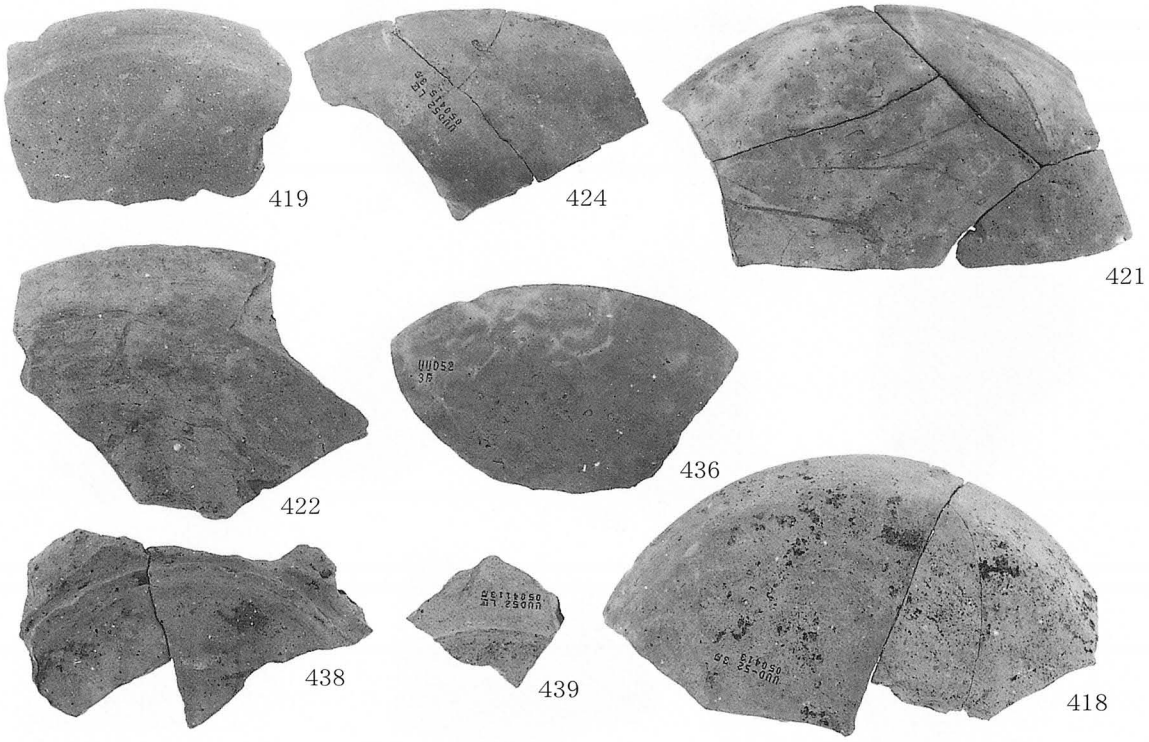
1. Ⅳ工区第３層出土製塩土器（表）



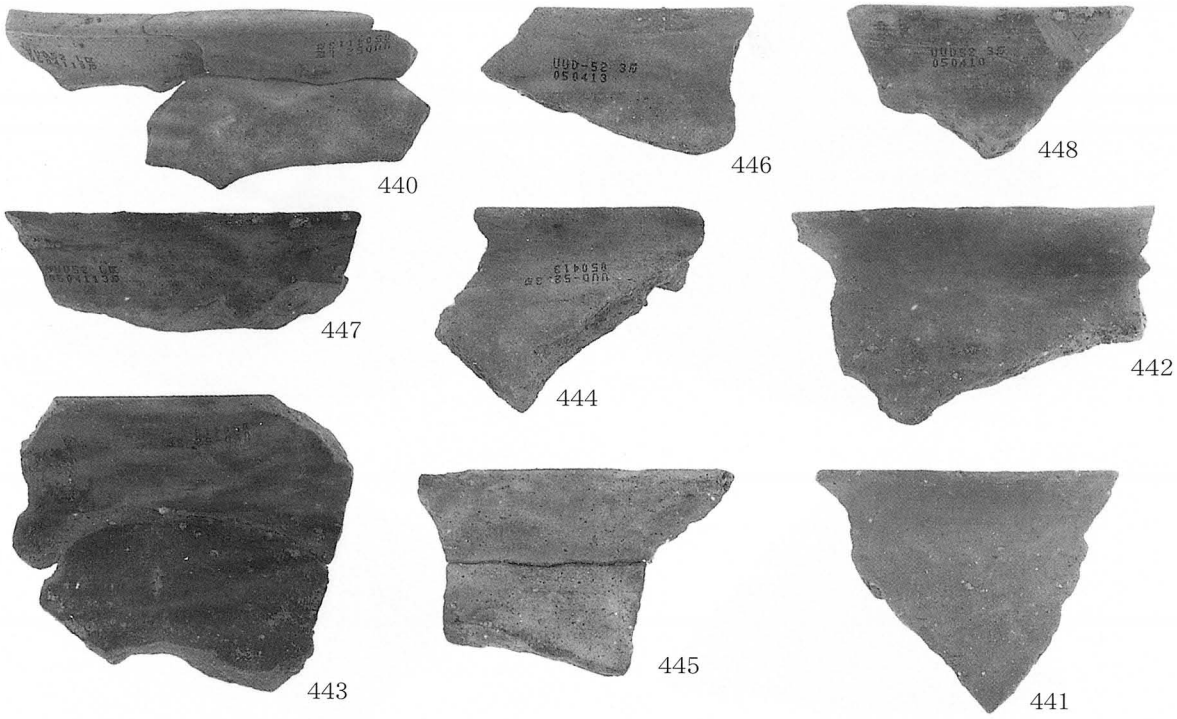
2. 同上（裏）



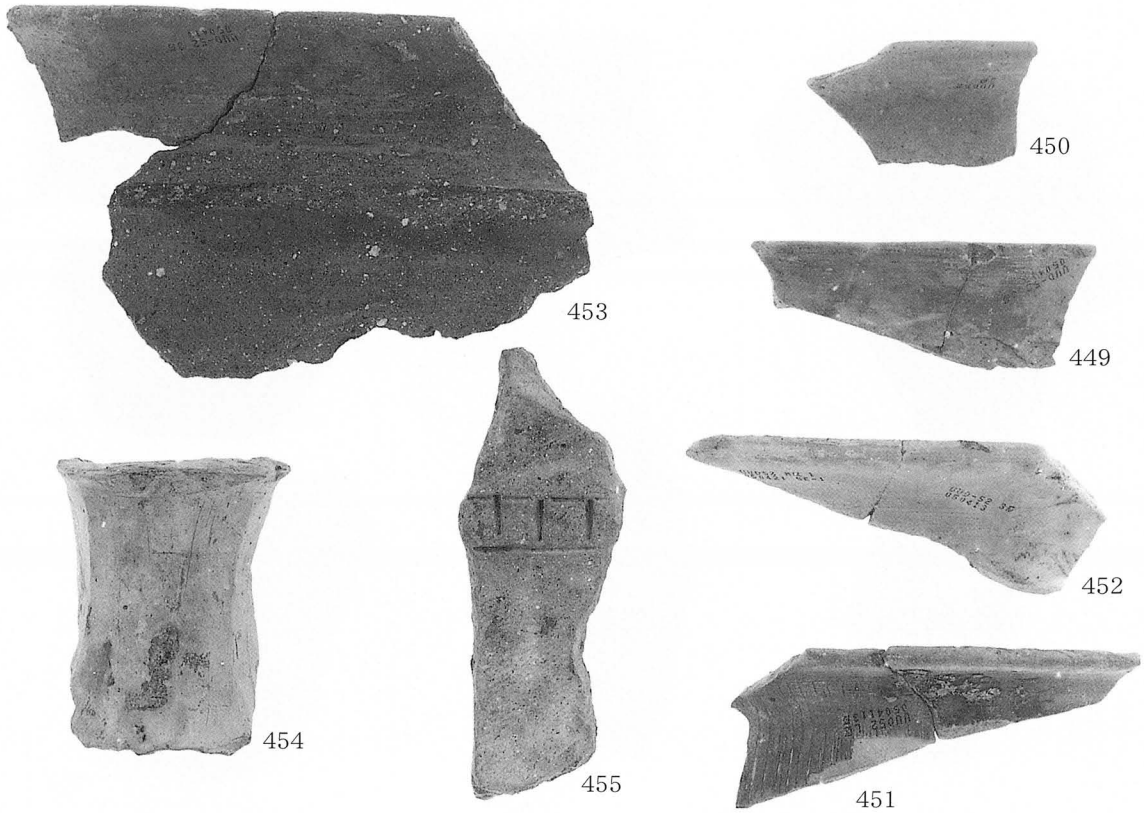
1. Ⅳ工区第３層出土土師器　皿・杯・椀



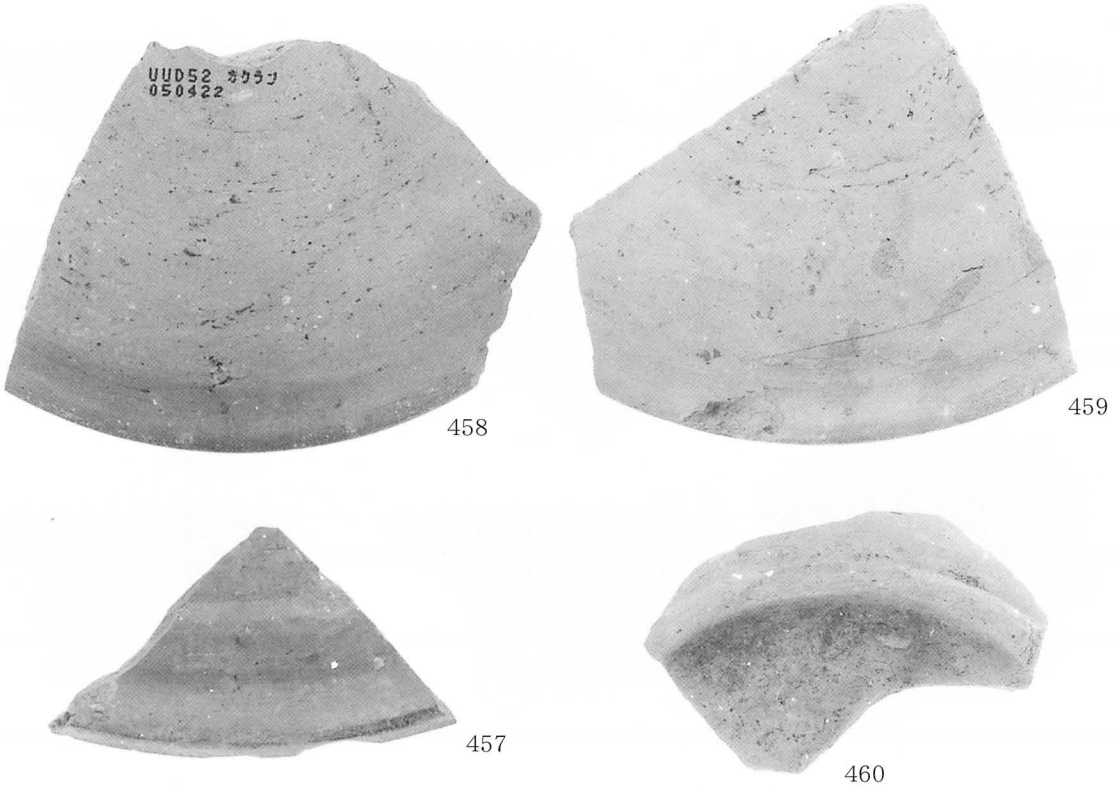
2. Ⅳ工区第３層出土土師器　皿・杯・底部、黒色土器　底部



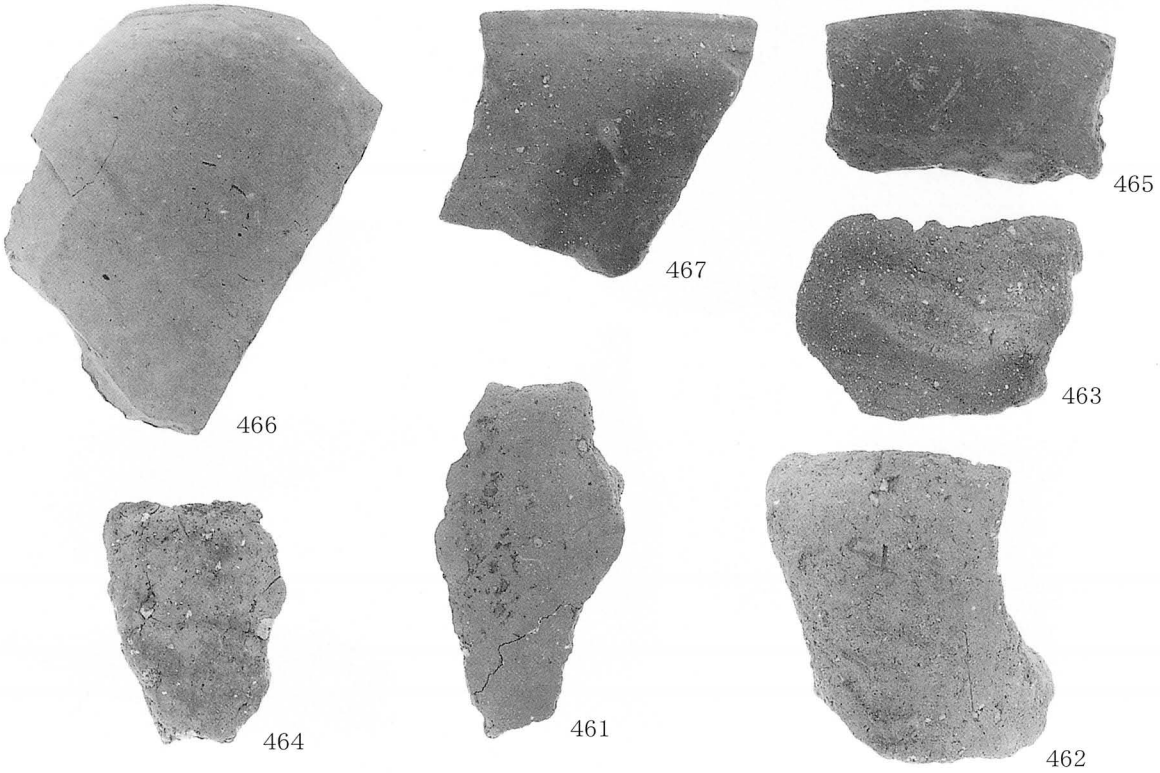
1. Ⅳ工区第３層出土土師器　甕



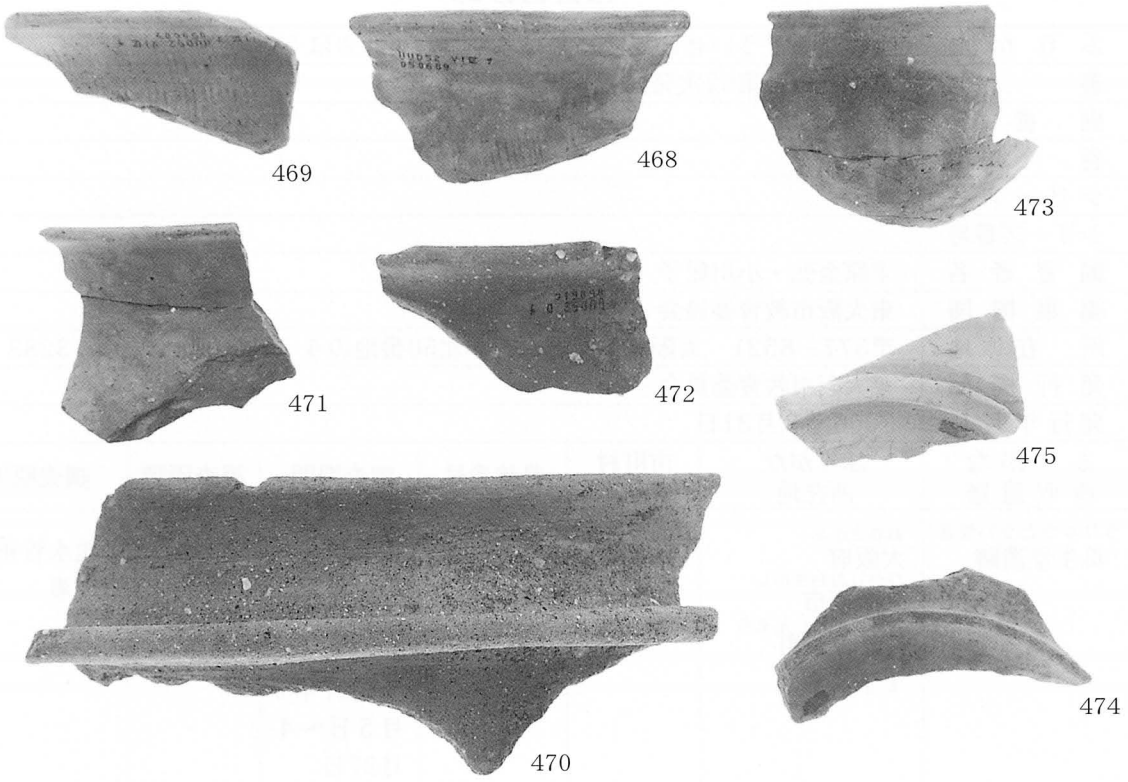
2. Ⅳ工区第３層出土土師器　甕・羽釜・高杯、形象埴輪



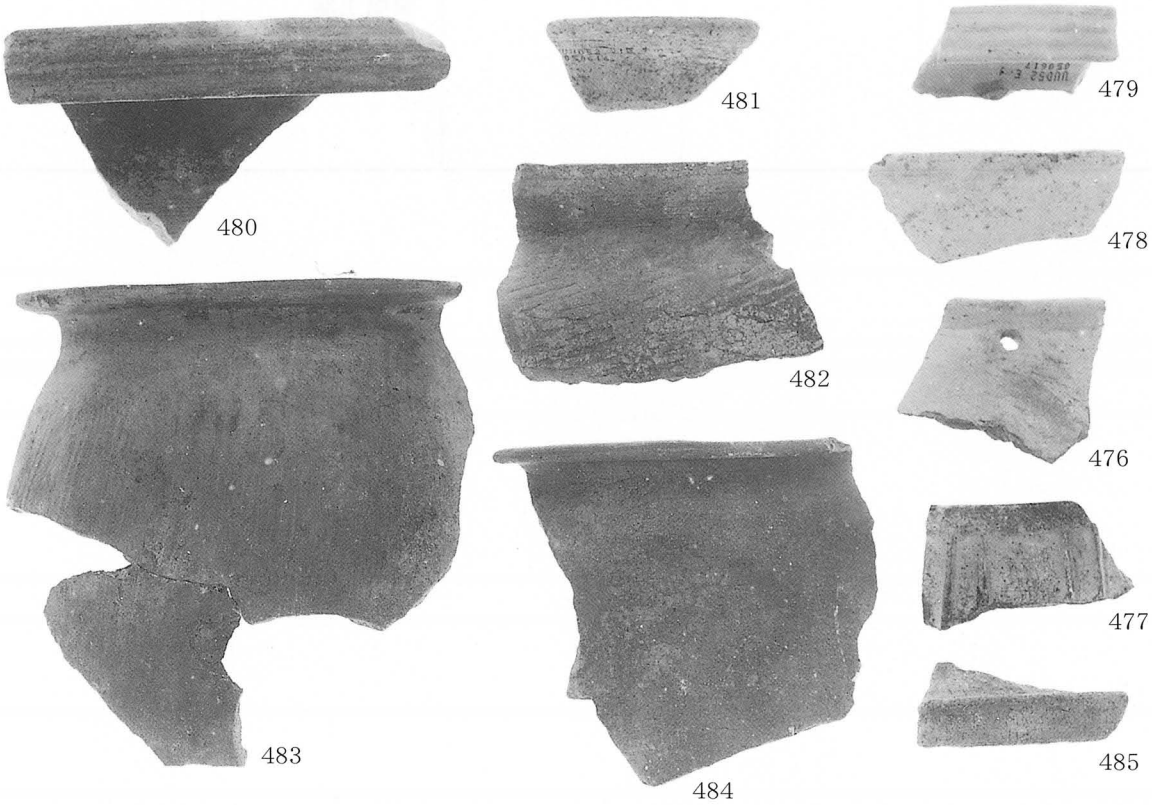
1. Ⅳ工区層位不明出土須恵器　蓋杯・底部



2. Ⅳ工区層位不明出土土師器　皿・杯・鉢、製塩土器



1. Ⅴ工区採集土師器　甕・羽釜・坩・底部、須恵器　底部



2. Ⅴ工区採集弥生土器　壷・鉢・甕・高杯、土師器　甕

報告書抄録

ふりがな	うりゅうどういせきだい52じはっくつちょうさほうこく
書名	瓜生堂遺跡第52次発掘調査報告
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	才原金弘・小川紀子
編集機関	東大阪市教育委員会
所在地	〒577－8521　大阪府東大阪市荒本北50番地の４　TEL06－4309－3283
発行機関	東大阪市教育委員会
発行年月日	2006年３月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	市町村 コード	遺跡番号	調査期間	調査面積	調査原因
うりゅうどういせき 瓜生堂遺跡	おおさかふ 大阪府 ひがしおおさかし 東大阪市 わかえにししんまち 若江西新町 １丁目地内	27227	95	平成16年８月２日～10月14日 ・ 平成17年４月５日～４月27日	292㎡	送水管布設工事

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
集落跡	弥生時代 奈良～平安時代	ピット・溝・土坑・井戸	弥生土器・土師器・須恵器・製塩土器	弥生時代中期の環状の溝

瓜生堂遺跡第52次発掘調査報告

平成18年３月31日

発行所　東大阪市教育委員会

印刷所　グランド印刷株式会社